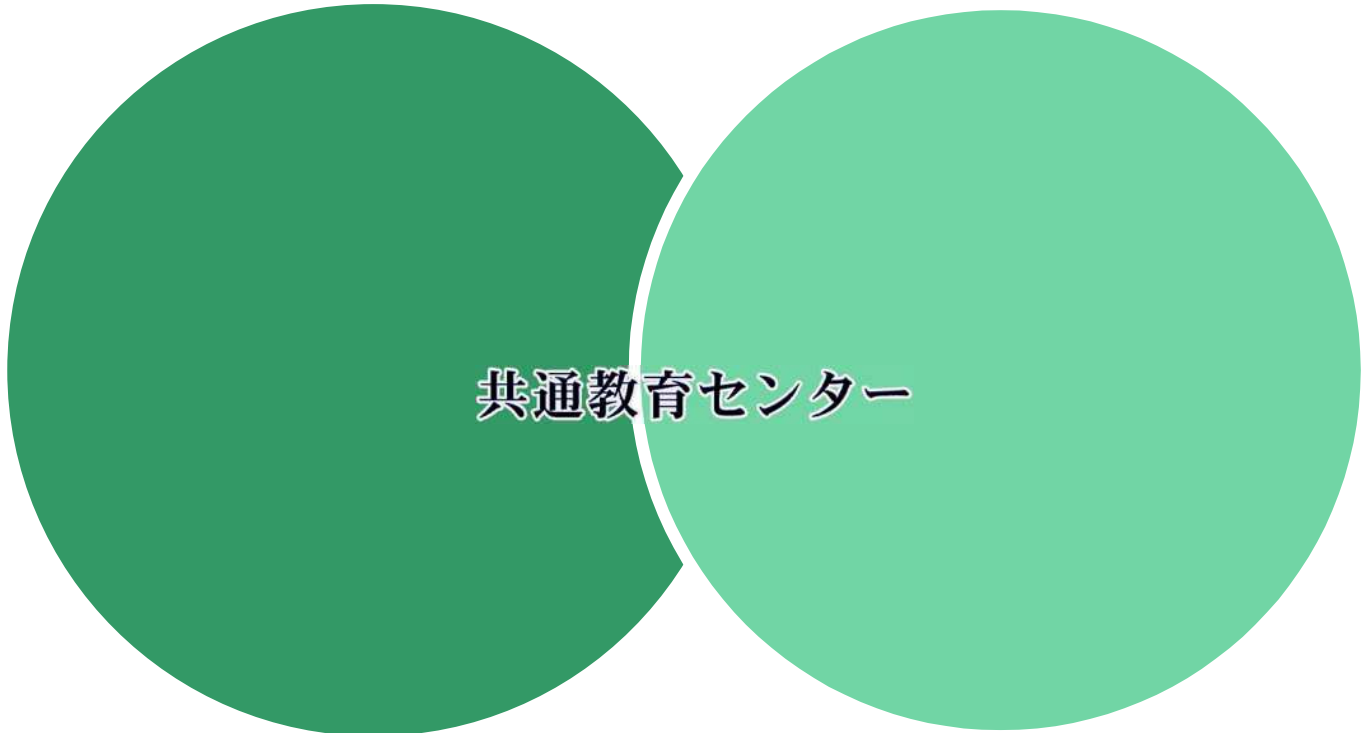


目次

■ 共通教育センター	1
■ 法文学部、人文社会科学研究科	15
■ 教育学部、教育学研究科	35
■ 理学部	57
■ 医学部医学科	73
■ 医学部保健学科、保健学研究科	85
■ 歯学部	103
■ 工学部	111
■ 農学部、農林水産学研究科	137
■ 水産学部	153
■ 共同獣医学部、共同獣医学研究科	181
■ 理工学研究科	203
■ 医歯学総合研究科	243
■ 臨床心理学研究科	253
■ 連合農学研究科	275



共通教育センター

令和2年度 共通教育センターFD 活動報告書

令和2年度に共通教育センター（以下「共教C」という。）が取り組んだファカルティディベロップメント(FD)の取り組みとその成果を、ここに報告する。共教C教員の多くが関わったが他の部局では報告されることがない総合教育機構内で取り組まれたFD活動についても、ここで合わせて報告する。

年度当初に4つの企画（1. 授業改善に資するアンケート、2. 共通教育懇談会、3. FD講演会、4. 外国語教育部門主催の教員ワークショップ）を提案していたが、これらを計画的に実行した。特に、全学初年次必修科目である「初年次セミナー」と「大学と地域」については、上記2の中で、前年度に引き続いて各ワーキンググループから授業内容と運用方法に関する改善に取り組み、FD活動からのフィードバックが進んでいることが報告された。

これらに加えて、5. キャリア形成支援センター主催企画にも多くの共通教育センター教員が参加した。また、6. 大学IRコンソーシアム学生調査結果に対して、今年度は初めて網羅的に結果を分析し、主要な問題点と改善案について提示した。

1. 「授業改善に資するアンケート」の実施と、「授業改善メモ」まとめのウェブ上公開

いわゆる授業アンケートを、前期は7月22日から8月20日まで、後期は1月12日から2月16日にかけて実施した（第1、第3クォーターのみ開講の科目は授業最終日以降より）。これら質問項目は、学生の授業履修態度や満足度、そして授業担当教員の授業運営についての資質を問うものになっている。これらの情報は、ベストティーチャー賞推薦者を選定する上で基礎データとなる。この後もこの部分の変更はないだろう。

以前「初年次セミナー」（I及びII）については、さらに独自の項目を追加していた。しかし、今年度の「初年次セミナーII」からこれらの項目を除外し、来年度以降「総合教育機構初年次セミナーWG」が主導で別途アンケートを実施することになった。既に別の全学初年次必修科目「異文化理解入門」でも独自にアンケートを実施しているので、このやり方に倣うことになる。

ところで、授業アンケートの実施方法や各教員の取り組みについて、幾つか問題提起がなされた。1つは、アンケート実施期間についてである。全ての講義や成績評価を終えた頃まで回答期間が設定されていることについてである。こうしてしまうと、授業運用法の改善とは関係のない、成績評価の結果に対する受講生の評価／感想までが、一部アンケート回答に盛り込まれてしまう恐れがある。既にその実例も存在する。今年度の後期はアンケートの設問の説明の変更で対応したが、経年統計データ取得の観点からアンケート内容（今回は設問文）の変更は避けるべきとの意見も出された。また、講義名が似ており（英語科目等）担当教員のみが異なる講義／クラスについては、クラスを誤って選択してアンケートに回答する事例も報告された。これらへの対応については、講義中におけるアンケートに関する情報の十分な周知及び回答時間の確保を徹底することが考えられる。

授業アンケートに関するもう1つの問題提起は、ウェブ上で公開される「授業改善メモ」の内容に関する、議論・合意形成に在り方についてである。授業改善メモは、授業アンケートの結果を受けて教員らが自らを振り返って作成する。しかし、改善メモが提出された割合が、前年度に比べて大幅に減少している。さらに改善メモについては、FD委員会により内容を整理してからウェブで公開されるが、ここで、個人的な意見をそのまま公開されるに過

ぎず、授業改善メモを提出した教員だけの意見が反映された公開内容になってしまうことについて、問題提起された。公開内容については、共教C運営委員会における審議内容とされているが、それ以前に教員グループ（各部門、科目分科会、等）の中でもその内容について意見交換をした上である程度の合意を経る手続きが必要なはずである。そこで、授業改善メモの整理を担当する各委員は、その内容について所属グループの意見を聞いた上でFD委員会にまとめた内容を提示する様に手はずを踏んで頂くことにした。意見を聞くグループについては、部門や科目分科会など選択肢が残されている面が残るが、各委員と直接関連するグループの事情を鑑みてグループ選択をすれば良いだろう。

授業改善メモまとめ URL: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/educenter/staffmember.html>

2. 共通教育懇談会の開催

8月11日14:30より共通教育棟1号館111号大教室にて、対面と遠隔(Zoom)参加を同時に可能とする複合形式にて開催した。前年度は、初年次必修科目等の大変更もあり、状況を静観するという意味で懇談会の開催を見送った。しかし今年度は、大変更の効果を見極めることも含めて、毎年実施してきた懇談会を復活させる必要があった。今年の懇談会は、その注目の的となる「初年次セミナー」及び「大学と地域」における授業改善にそれぞれ関わってこられた河邊弘太郎先生と伊藤昌和先生（副座長）から報告をして頂いた（下記）。その後、共通教育科目全般についての報告や意見交換が行われた。

2.1 「総合教育機構『初年次セミナー』ワーキンググループ」(初年次WG)の取り組み

本学の初年次教育の要となるこの科目について、前年度に引き続いて授業内容の改訂について検討を深め、適宜今年度講義に導入してきた。今年度は特に、「焦点化教育」のテーマとして新たに、キャリア・生活者教育、科学倫理教育、税とデモクラシー、社会倫理・人権・市民としての責任等について講義で取り扱った。来年度はこれら焦点化教育を「初年次セミナーI」（前期）で実施し、グループプレゼンテーションの題材として定着させ、「初年次セミナーII」（後期）でテクニカルライティングを扱う様に授業計画を変更することになっており、1年間通しての初年次セミナーの体裁が完成を迎えるはずである。

今年度はまた、COVID-19感染拡大防止に対応するべく、オンデマンド講義コンテンツの作成にも対応しなければならなかった。懇親会開催の時点では、遠隔授業の中で脱落してしまった学生の人数の把握や未入国留学生への対応の必要性についてについて指摘された。また今年度に限らず、課題の量や成績評価におけるクラス間の不公平感の解消の必要性が指摘されてきたが、到達度評価に基づく評価基準の統一化を図った。

なおこの懇親会の後日の事になるが、スクーリングの期間が設けられたものの対面授業の形式が著しく限定された後期の経験を踏まえて、教室の確保や前後に開講される講義の事情も考慮し、来年度はこの「初年次セミナー」の対面授業形式での開講を最優先することが、全学の方針として打ち出された。

2.2 「『大学と地域』授業運用ワーキンググループ」(大地 WG)の取り組み

地域貢献を目指す本学では「地域人材育成プラットフォーム」と呼ばれるカリキュラムを構築している。「大学と地域」は、その中で入口となる初年次必修科目である。今年度は前年度と大きく異なり、7つの大テーマを全クラスで共通に扱うこととし、全クラス統一した授業内容としている。COVID-19 感染拡大防止の観点で、予定していたポスター作成とポスタープレゼンテーションを遠隔グループ討論に切り替え、課題レポートへの授業担当教員によるフィードバックを強化する事になった。

「初年次セミナー」と同様懇談会の後日の話となるが、来年度の開講形式については、COVID-19 感染拡大防止と前述の「初年次セミナーI」対面講義形式実現を考慮に入れて、早々に完全オンデマンド形式の開講という方針が打ち出された。この条件において、11クラスにはほぼ共通の話題を提供することと、話題提供講師をできるだけ増やして話題の多様性を確保すること（火曜日と金曜日のクラスで、テーマは同じだが異なる講師が異なる話題を提供するという方式を採用）に留意した。

また、大学認証評価に対応して、成績評価項目や評価基準についても見直しを行った。この講義は、学士教育における社会や環境、地域の諸問題を深く掘り下げる取り組みの入口である。このことを鑑みて、地域に着目し貢献する人材として磨くべき視点や行動力に関する指針を、ルーブリック等で提示することにした。

こうした事の方で、当初考案してきたグループワークの形式は、本年度同様来年度もほとんど実施できないことになる。「初年次セミナー」で既に導入されている討論形式のグループワークに留まらず、ちょっとしたフィールドワークを導入してはどうか、等の新たなアイデアが浮上している。これらの実現が来年度以降の課題となるだろう。

2.3 共通教育科目全体を通しての振り返り

懇談会における意見交換では、以下の様な意見が上がった。

- ・対面授業と遠隔授業との学習効果の差、スキル修得の有無等をどのように把握するのか。これらは、学生の授業アンケートや成績を通して把握することができるのか。
- ・対面授業か遠隔授業かどちらが良いのかは、科目によっても違って来る。
- ・遠隔授業の方が、課題の提出状況が良い。
- ・対面授業になっても、遠隔授業で作ったコンテンツを活用することができる。
- ・Zoomのブレイクアウトセッションでは、教員が1つのグループを見ている間は他グループを見ることのできないので、そこをカバーするべくTAや特任助手の配置が必須である。
- ・学生4～5人のグループがZoom上で雑談をしても良いとしたところ、お互い会話する機会が制限されてしまった学生には好評だった。
- ・「異文化理解入門」では、1クラスで受講生200名のクラスを、教員一人で3クラス担当する状況で、Zoomでの実施は諦めた。
- ・対面授業に比べて遠隔授業は、リアリティが薄れ意見が聞けない状況になり、多様性や柔軟性が削がれてしまい、深い内容に入れない。
- ・遠隔授業はコミュニケーションの取り方が、課題となってくる。
- ・授業に脱落しそうな学生に対して、課題締切をかなり後ろに延ばす措置が必要となった。
- ・学生はいつもに増して課題に追われるが、昨今の状況では誰にも頼ることができない。
- ・Zoomでは画面越したが、学生との距離感を縮まり、例年よりも学生の熱量を感じた。

- ・遠隔ならば、世界中の講師に依頼できる、先輩学生にも授業に参加してもらいやすい。その代わりに、学生同士が語り合う機会がなくなる。それを補うべく、学生同士でレポートを読む合う工夫が必要である。
- ・リアルで会えないだけリアルで会える対面式授業の価値が高まったと言える。
- ・対面授業が可能になった時点でオンライン授業の価値を捨てるのはもったいない。遠隔授業を併用することも考えてはどうか（授業負担が大きくなるが）。

3. FD 講演会の開催

9月18日13:30から学習交流プラザ2階学習交流ホールにて、浦部美佐子先生（滋賀県立大学環境科学部・教授）をお招きし、表題「滋賀県立大学における研究倫理教育への取り組み」にてご講演を頂いた。当日は、COVID-19感染拡大防止策を考慮し、対面講義を基本としつつZoomオンライン講義配信も併用して講演会を開催した。共教C教員に留まらず全学からの教員も含めて45名が講演会に参加・視聴し、盛況となった。

講演の内容は、大学院生（＝若手研究者）の研究倫理に関するものであった。滋賀県立大学環境科学部では大学院科目「環境研究倫理特論」を開講し、その中で、研究不正の実態、実験ノートの保管、知的財産等、大学院生・ポストクの権利（アカデミックハラスメントへの対処等）、科学者の社会的責任（統計の誤用、疑似科学問題、軍学研究等）について取り上げている。この講義の特色は、研究倫理教育を「若手研究者が研究不正を犯さないための道徳教育」ではなく「若手研究者が研究不正に巻き込まれないための知識と技術の教育」と位置づけ、若手研究者のキャリアを守るという観点から実施されている点にある。当日の講演会においても、この最後の部分に力点が置かれたものであった。

当日回収した講演会参加アンケートの内容を咀嚼すると、以下の通りになるだろう。

- この講演の内容は大学院生向きであったが、学部生や教職員向けの内容についても聞くことができれば良かった。特に高校を卒業したばかりの大学1年生では、教員に対して反対意見を述べるのが良くないという意識が少なからずあるようだ。そのような意識を持った学生に、何が不正にあたるかを自分自身でよく考えて行動しなさいと言っても、なかなか難しいことがある。教育を受ける側のレベルに合わせた教育方法や指導方法についても、実例を交えて知りたい。また、逆ハラスメント（学生による教員へのハラスメント）についても聴きたかった。
- 研究倫理については「初年次セミナー」でも扱うが、この一科目では収まりきれないはず。各科目の授業の中でごく短時間でも研究倫理やハラスメントについて触れる時間をとる、manabaを利用した反転授業を通して授業時間外の学習で基礎的な知識を得させるなど、様々な取り組みを複合的にしていく必要があるのだろう。効果的な内容のリーフレット・パンフレットなどを作って学生・院生・教職員全員に配布する必要もあるだろう。
- 本学関係者による「収賄」に関わる報道を見聞するが、研究倫理教育が実施されるということそのものが研究不正に対する一つの牽制になっている点が興味深かった。本学でも教職員がハラスメント研修・人権研修を年1回は受講するルールが必要である（実際本年度より開始された、ただし、一番受けなければいけない人達が受けないというのが見られるかもしれないが）。
- ハラスメントを受けた時、研究に疑義を感じた時に信用して相談できる人を探すのが実に難しい。学生だけでなく常勤教員でさえも、その様な人を見つけるおくことは難し

い。その様な状況において第三者機関やNPOに照会する手があることを知ったのは、本当に良かった。

- 学生の「ただ働き問題」、論文の査読への貢献など、研究室や学会に存在する慣例への取り組みと、これらの活動を維持する仕組みとの間の矛盾も指摘されているが、謝金等を払う財源の問題もあり、これも難しい課題である。



図1: FD講演会(9/18開催)会場の様子

4. 共通教育センター外国語教育部門 第1回教員ワークショップ

A. 教員(FD)ワークショップ(既修外国語主催)

FDワークショップは、平成31年度より外国語教育部門(既修外国語・初修外国語)として行うことになり、既修外国語(英語)は本年度第1回目を担当した。本ワークショップでは、講師に共通教育センターの教員3名(金岡先生、ハムチュック先生、ブレイジア先生)及びEnglish Central社の小室さんをお招きし、令和2年8月24日(月)10:00~12:30に、「授業で使用するITツールとその活用方法」と題し、郡元キャンパス共通教育棟(1号館3階134/136号室)及びZoomによる遠隔会議にて開催した。参加対象者は、外国語教育に関わっている全教員(専任教員、非常勤講師)またその他、本ワークショップに関心のある方とした。

ワークショップでは、今年のコロナ禍の影響で遠隔授業を行わざるを得ない状況に直面した外国語教師は、どのようなツールを活用し、どのような教育方法を用いて授業を行ったかを参加者と共有し、議論することを目的とした。ワークショップは3つのプレゼンテーションとそれに関する質疑応答時間及び全体での議論時間に分かれ行われた。

当日の参加人数は合計41名(共通教育センター30名、法文学部2名、地域医療支援センター1名、グローバルセンター2名、その他6名 / 専任講師:26名、非常勤講師:13名、その他2名)だった。事後アンケート(回答者26名)によると、73%(19名)が「ワークショップは有意義だったと非常に思う」、15%(4名)が「少しそう思う」と回答した。ワークショップの感想として次のようなコメントがあった。

- ・「コロナ禍での遠隔授業は学期中の具体の情報交換が難しく、前期終了直後にこのような3人の先生方の取り組みをうかがえたことは大変良い機会でした。後期授業に向けて多くの考えるヒントを頂きました。」

- ・「英語教育の先生方が、どのように情報共有をされているのか垣間見れたことが、実は一番勉強になりました。語学科目であればシェアできるツールや情報の示し方があるなど、参考になりました。」
- ・「遠隔授業による英語教育の問題点や利点、また可能性を多面的に知ることができました。」
- ・「英語の online でのツールについて学ぶことができ、副教材としてのオプションが増えました。」

今後のワークショップの提案としては、教授法や評価方法についてもっと実例を出して深く学びたいという意見及び Zoom などを利用して遠隔で行われることによってより参加しやすかった、などの意見が寄せられた。また意見交換会をこれからもっと頻繁に行われると良いという提案もあった。

B. まとめと今後の課題

外国語教育部門(既修外国語)では、本 FD 教員ワークショップをとおして、より充実した共通教育の英語授業を目指し、シラバスの見直しを重ねながら学生のニーズに応えられるように授業内容の改善の糸口を模索してきた。今回のトピックは現在教員全員が直面している遠隔で授業を行うというトピックを取り上げたため、非常に関心のある話題であり、情報交換への意欲も高かった。今後の課題としては、ワークショップの開催方法が挙げられる(対面より遠隔の方が参加しやすかったようです)。また、より多くの教員が参加できるように使用言語を日本語・英語の両方にする方法も考慮しなければならない。今後も、本ワークショップを通して授業改善に役立つ学びの場を設けたい。

5. Project-based learning (PBL)研修会への参加

総合教育機構キャリア形成支援センターが、「タクナル」と呼ばれるプログラムに基づく PBL 研修会を 2/11 に開催した。この研修会は、地域人材育成プラットフォーム(キャリア教育プログラム)主催のファシリテーター向け研修会として企画されたものだが、FD 活動の一貫として、共通教育センターからも教員が多く参加した。従って、この場合を借りて報告しておく。

同研修会は 8 時間の長時間に及ぶもので、コンピテンシー(competency、高い成果に繋がる行動特性)の育成をめぐる有意義な議論がなされ、グループワークやアクティブラーニングをいかに有効なものとするかについての知見を深めることができた。

教材(討論するテーマ)を身近な現実や仮想的な状況から取り込んで設定し、コミュニケーションや課題解決に向けた手順を段階毎に実践・解説するという方式でプログラムが進んだ。教員向けの本研修では、本学学生の特徴に関する討論に始まり、研修参加者を交えて PBL 型授業を実演した。その中でケースメソッドの開発やデザイン思考メソッドについても触れた。最後に「タクナル」を受講する意義について意見交換を行った。その中で、半ば手探りで試行してきたアクティブラーニングの手法について実践的、理論的解説を教員(例えば「初年次セミナー」や「大学と地域」の授業ファシリテーターを担当することになる人員)が学ぶことが教員自身の成長/変化に繋がり、それが受講学生にも伝わるだろう、という感想が挙がったりもした。

6. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果(令和元年度実施分)の評価・分析について

令和元年(2019年)度実施分の「大学 IR (Institute Research) コンソーシアム学生調査」に対する評価・分析を行う上で、今年度は、指定された項目についての分析ではなく、全項目について目を通し着目すべき事項を最低3件挙げるようになった。共教CのFD委員会ではこの課題に対し、「大学生活に対する意識」、「大学での学びの実態」、「英語学習の実態」という3つの大項目に分け、その上で各大項目につき1つ以上の注目点について取り上げる事とした。以下では、その結果で得られた知見や知見に対する解釈についてまとめた。

●評価する点

【大学での学びの実態】

Q4E 学生自身が文献や資料を調べる：70% (2015年) から 89%(2019年)へ増加。

Q4H. 学生が自分の考えや研究を発表する：67%を占め、他国立大学(59%) より多い。

Q4I. 授業中に学生同士が議論をする：55%を占め、他国立大学36% よりも多い。

Q4J 授業で検討するテーマを学生が設定する：27% (2015) から 55%(2019)へ増加。

→学生自身でテーマを決め、調査し、考察し、議論する学修(授業)が経年上昇し、他大学と比較しても先行している。初年次セミナーの1年生に対する印象・効果の強さが伺える。

Q5A. 授業課題のために図書館の資料を利用した：他国立大学63% に対して76%。

Q5C インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした：34% (2015年)から61%(2018年)に急上昇、2019年もこの傾向が続く(59%)。

→資料調査・学修のために図書館を利用している割合は他国立大学に比較すれば高い。

→一方授業時間外の読書時間は経年変化ない(1時間未満が68%)ため、授業において図書館を積極的に活用していることが伺える。

【大学生活に対する意識】

本学学生は、1年生・上級生ともに「大学生活は充実している」者が8-9割であり、例年国公立大学平均よりかなり高い状況になっている。

大学への適応感の中でも、「G.他の学生と友情を深める」の項目について、1年生・上級生ともに高い。また、大学教育への満足度の中でも「H.他の学生と話をする機会」、「I.大学の中での学生同士の一体感」、「J.多様な考え方を認め合う雰囲気」、「K.大学での経験全般について」の項目が、1年生・上級生ともに例年高い。「E.将来の仕事と授業内容の結びつき」の項目も、1年生・上級生ともに高い。さらに、上級生のみであるが、卒業後に備えて大学在学中に経験したいことについて、全項目が高い。以上の状況から、学生交流や授業を中心とした大学生活の中で、未来を描けることに充実感を感じられていることだろう。

また、大学設備に関する満足度は、ほとんどの項目において、1年生・上級生ともに、国公立大学平均より高い状況である。特に、「A.図書館の設備」、「B.実験室の設備や器具」、「C.コンピュータの施設や設備」、「G.健康・保健サービス」、「H.レクリエーション施設」は高い状況であり、学生にとって利用しやすく快適な大学生活を提供できていると考える。

【英語学習の実態】

2019年度1年生の入学時と現在(2019年10月)における英語力(聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力)の熟達度について、学生は、入学時から調査実施時の10月まで全ての能力において伸びていると実感しているようだ。その中で、特に「表現力」の伸び率が一番大きい。聞く力・読む力・表現力・書く力において、現在のレベルがB1と回答した学生の割合が、入学時より多い。また、会話力・読む力は入学時のA1.2と比べ現在のレベルが

A2.1-A2.2 と回答した学生が多かった(この傾向は、2018 年度調査でも同様である)。表 1 に、これらについてまとめている。

学生は入学時において自分の英語力に自信がなかった可能性があるが、本学入学後に受講した共通教育の英語授業が良い成果をもたらしたという見方ができる。

表 1： 英語力に関するアンケート集計結果のまとめ

	1 年生入学時	1 年生現在 (10 月)	3 年生現在 (10 月)
聞く力 (A2-B1 以上)	59%	64%	54%
読む力 (B1 以上)	66%	70%	55%
会話力 (A1.2 以上)	66%	70%	63%
表現力 (B1 以上)	54%	62%	56%
書く力 (A2-B1 以上)	61%	62%	62%

※A2.1-A2.2 は英語学習者として初級-中級レベルの項目を意味する。

※B1 は英語学習者として中級レベルの項目を意味する。

●課題と考える点

【大学での学びの実態】

Q6B. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする：経年変化なし、他国立大学とも変わらず、週 5 時間以下が 64%を占める。

Q6C. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする：経年変化なし、他国立大学とも変わらず、1 時間未満が 62%を占める。

授業時間外学習時間が週 5 時間以下の学生が 6 割以上を占めていることは大きな課題であると考えられる。授業課題以外の学習時間に至っては 1 時間未満が 6 割以上であり、学生の自ら学ぼうとする意欲が希薄である。

多くの科目で多くの課題を課しているので、全ての課題を提出するだけで週 5 時間以上の学修を必要とするはずであるが、そうっていない。平日の学修時間が少ないのか、土日の学修時間が少ないのか、これら内訳のデータ取得が望まれる。

Q7A. 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。

一般的な教養： 2015 年には 81%を占めていたが、2018 年には 70%、2019 年では 53% に低下し、他国立大学の 65%と比べて低くなってしまった。

1 年生の能力の変化についての実感としても、「一般的な教養」が身についたと感じている学生が年々大きく減っている。他国立大学平均と比較しても低い。

教養科目再編による科目数減少が影響しているかもしれない。異文化理解や地域社会への理解は微増している。1 年生の科目の印象として、「初年次セミナー」、「異文化理解」、「大学と地域」が少なからず影響している一方、「一般的な教養」が身についたという印象が減少しているのだろう。

【大学生活に対する意識】

Q12A [一年生]共通教育あるいは教養教育の授業への満足度： 2015 年の 53%から 2019 年の 39%に低下し、他国立大学の 48%と比べて低くなってしまった。

Q12B [一年生]初年次生を対象とした教育プログラム内容（フレッシュマンセミナー、基礎ゼミなど）：2015 年の 31%から 2016 年の 18%へと大きく低下し、以後大きく変化なし（2019 年は 21%）。他国立大学の 41%と比べてずっと低い。

共通教育・教養科目への満足度は2015年から14%低下し、他国立大学と比較しても9%低い。初年次教育プログラムの満足度は2016年に大きく低下、以後回復せず、他国立大学の41%と比較しても満足度が低い。このプログラムに相当する「初年次セミナー」に学生が満足している状況とは言い難い。しかし評価する点で述べたように、初年次セミナーが要求する学修内容について学生は理解していると思われる。従って、教員が伸ばしたいと考える能力と学生が要求している学習内容に乖離があることが想定される。

「C. 授業の全体的な質」、「D. 日常生活と授業内容との関連」の項目も低いため、これらについても併せて検討する必要があること、また、「F. 教員と話をする機会」、「G. 学習支援や個別の学習指導」の項目が低いことから、教員の対応力の改善も必要だろう。

上級生においても、「B. 2年次生または3年次生を対象としたゼミ（演習）などの教育内容」の項目が低いまま推移しており、改善が必要だろう。

【英語学習の実態】

1. 2019年度上級生（2019年10月）における上級生の英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度を1年生（現在）と比較すると下がっている傾向が見られる。聞く力および読む力においてこの傾向が特に強い。上級生の英語レベルが下がった原因として挙げられるのは、2年次、3年次に英語を学ぶ機会が少ないことである。学部と連携した4年間もしくは6年間を通した英語教育を考える必要がある。
2. 1年生（現在）及び上級生における表現力の水準が低い傾向が見受けられる。（A. 1-A2. 2）英語の表現力はグローバルな社会づくりに欠かせないツールであり、英語の授業のみならず全教科に置いて重要視する必要がある。
3. 2019年度1年生と上級生（2019年10月）における英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度の結果は、あくまでも自己評価によるものであり、正確なレベル評価とは言えない。学生の自己評価も含め、別な方法で測る必要があるだろう。

●課題への具体的対応案

【大学での学びの実態】

学修時間の少なさは昨年度をはじめ例年課題として挙がっており、課題の増量など対策を行っているが、未だ大きな成果は見られない。この課題は一朝一夕に改善するものではなく、学生の大学における学修に対する意識改革から始まると考える。その点、評価する点で述べた「自身でテーマを決め、調査し、考察し、議論する学修」が意識改革へつながるものと考えられる。

強制的に1日1時間以上の学習せざるを得ない課題（提出期限を授業当日とする等）を与える、という方法も考えられるが、これには賛否があるだろう。また課題の内容についても改善の余地がある。インターネットで検索して10分で終わる課題や、他者のコピー（剽窃は言語道断だが単なるアイデアの受け売りに過ぎない内容）で済む課題内容を、資料調査および自らの考察に時間を要する課題内容に変更することが必要ではないか。

【大学生活に対する意識】

初年次プログラムへの満足度の低さについて、まずは学生が入学時に何を学ぶと望んでいるか、将来をどう考えているかを把握する必要がある。Q15 将来の見通しを持っていない・何をすべきかわからないと回答している学生が、1年生の54%、上級生（3年生）でも40%である。就職を考えている学生（Q14）は70%であるので、漠然としたイメージしかないことが伺える。そこに明確な目標を与え、その目標を達成するための能力開発へ自身の意識を変

えることが必要であろう。キャリアアップセミナーや社会人講演など教養科目の充実が、その対策となるのではないか。

以上を踏まえて、共通教育・初年次教育担当教員を中心とした、教育改革を継続し続ける必要がある。まず、学部を越えた1年生の統一科目である初年次セミナーの円滑な実施のため、令和元年度に再編成された「総合教育機構初年次セミナーWG」の取り組みを通して、講義の統一化に向けてさらに改善を図っていく。また教養教育科目の改善についても、科目の精査、理系科目の増設、評価基準の統一化、などを図っていく。共通教育・初年次教育担当教員のFD活動を活発にし、教育力や対応力の向上を図っていく必要もある。さらに、学部におけるゼミなどの個別・少人数指導に向けて、教養教育や初年次教育がこれら指導方式とのつながりを持つ様な教育改善が図られるよう提案していく必要がある。

【英語学習の実態】

1. 上級生の英語力の低下について

英語力が低下してしまうことが判明している上級生に関しては、学部での英語教育が鍵となり、4年間を通じた英語教育を考えるべきである。1つは、学部から英語の授業を提供することが考えられる。教員の授業負担増加が懸念されるというのであれば、少なくとも学部の各専門科目において授業中に英語力を持続・向上させる仕組みを導入するべきである。

2. 1年生（現在）及び上級生表現力や会話力の低下について

英語のクラスサイズは38-43人であり、毎回学生全員に発表の機会を与えることが難しいが、共通教育センターでは学生が表現力・会話力を磨けるプログラムを提供している。LOL外国語ラウンジやグローバル・ランゲージスペースでは学生が毎週英語を練習することができる。また、P-SEGの海外研修を通して、英語力をレベルアップすることができる。さらに、授業外学習の一環として、リスニングや発音を練習するためのアプリも共通教育の英語先生が自主的に授業に取り入れている。学生にこれらのプログラムの情報提供をより効果的に促す必要がある。

3. 英語力の熟達度の正確な測り方について

英語力の熟達度について、学生の自己評価だけで測るのではなく、例えば、外部試験の導入や授業の一環として行われている英語力テスト(EF SET)でより明確に英語レベルを測ることができる。また授業中でも、英語力のテストをすることによって、英語力がどのぐらい伸びたかを把握できる。また、これらの情報について相関を調べることにより、自己評価の実態や背景についての分析が進むと考えられる。

●昨年度挙げた改善・対応策の進捗状況

【大学での学びの実態・大学生活に対する意識】

時間外学習時間が少ない、初年次プログラムの満足度が低い問題については、昨年度も同様に挙げている。まだどちらも改善の兆しが見られないが、これらは一朝一夕に改善できる問題ではない。大学生活（サークルやアルバイト、人間関係、等々）とリンクした課題でもある。今後ともこれらについて常に注視し、上記対応案を見出して実施していく。

文献調査などの方法について読書時間についても改善されていないが、図書館利用率は他国立大学と比較して高くなっている。具体的対応案として上述した学生の意識改革と合わせれば、今後改善していくと思われる。

これらのことを成就する上で、教員と話をする機会が鍵となる。これについては改善していないが、まずは学生同士が議論する機会が増えていることは好材料である。今後それが教員との議論にまで発展することを期待する。

【英語学習の実態】

- 1) 定期的に、カリキュラムが学生のニーズに適合しているか検討し、また、学生が必要としている英語力を把握しながら、さらなる改善を図っている。
- 2) 習熟度別クラス編成によって、学生一人一人に合った英語教育を実施している。共通教育センターの履修案内では学生にも習熟度別クラス編成という制度を紹介している。
- 3) 1～2年次のカリキュラムは体系化され、英語教育に関することは全てエビデンスと実践で検証しながら、理想的な教育に向け進めている。
- 4) 教員は LOL 外国語ラウンジ、P-SEG やグローバル・ランゲージスペースと P-SEG の海外研修に対し積極的に支援し、取り組んでいる。

7. ベストティーチャー賞候補者の推薦にかかる取り組み

共教C FD委員会では、令和元年度ベストティーチャー賞に森 裕生 先生（高等教育研究開発センター・助教）を推薦した。森先生は同時に、ベストティーチャー最優秀賞を受賞された。ただし、森先生をお迎えした共教C独自のFD企画は今年度見送ることにした。これがなくとも森先生のFDに関する活動は目覚ましく、FDガイドの執筆に留まらず、オンライン講義コンテンツの作成や授業運用に関するアドバイスを提供する企画を次々とこなして頂いていたからである。

令和2年度のベストティーチャー賞には、トレマーコ・ジョン先生を推薦することにした。先生は、授業中にできるだけ多くの受講生を指名し、受講生全員に対して英語で発言を促すコミュニケーション及びグループワークを重要視した。英語に留まらず、大学での勉強の取り組み方も含めて様々なアドバイスを受講生に提示するなどして、授業を充実したものに努力が受講生から好感を受けた様である。2年連続で5名の推薦者の一人として選ばれるなど、長期的に好評価の講義を実施してきたことを鑑みて、FD委員会の中では最も強く推すべき先生として提言した。

なお、ベストティーチャー賞候補者の選考は今回で3回目になるが、選考の過程については毎年見直しが必要であるという考えに基づいて議論を重ねている。今年度の選考に先立ち、前年度における2回目の選考において議論した内容についてFD委員新メンバーも含めて周知し、その上で新たな観点や懸念について議論を行った。共教Cのベストティーチャー賞選考内規では5名の候補者を選考することになっているが、共教C長が最終選考することになっている最後の1名についてもFD委員会より提言することになっている（センター長がその提言通りに推薦しても良いし、それを覆して推薦しても良い）。この1名の提言は、授業アンケートの集計結果だけに頼らず、アンケートに寄せられた意見や過去の5名枠での推薦の経歴、さらに過去に推薦された教員の総合教育機構内の所属や教育分野の履歴なども考慮して慎重に検討することが必要であろう。

ともあれ、アンケートのコメントを重要視するという選考スタイルが定着しつつあるが、コメントの意味するところを深く考察しながら選考する重要性が増したと言える。単に「楽しかった」、「負担が少なくて良かった」という感情的な意見に流されることなく、授業を通して知識が定着したと言える根拠にもなる様な具体的なコメントも寄せられており、そういうものに注目すべきだろう。アンケート回答率によって評価の順位も大きく変わる中で、

効果的な授業を実践したとみなせる講義を見極めてベストティーチャー賞推薦者を決める上で、このようなコメントが決め手になるはずである。

8. FD 活動への教員参加実績

共教C教員のFD企画参加率は表2の通りである。共教C独自企画である共通教育懇談会とFD講演会の参加率がひとときわ高い。全学及び共教Cで企画された教員ワークショップへの参加も比較的高い。その一方で、授業改善メモの提出率が前年度よりも著しく低下した。オンデマンド・オンライン講義という特殊な事情があって授業改善の参考にはなり辛い、告知・呼びかけ不足、などの事情は否めない。ともあれ、合計参加率は、目標の75%を超えている。

なお、表2には載っていないが、前述の総合教育機構キャリア形成支援センター主催のPBL研修には、共教Cからの教員参加が少なくとも9名確認されている。

表2 各FD企画における専任教員参加率

合計参加率		89 % (専任教員 38 名中 34 名 参加)
企 画 別 参 加 率	評価に関するFD講演会	24 % (専任教員 38 名中 9 名 参加)
	第1回FD・SD合同フォーラム	8 % (専任教員 39 名中 3 名 参加)
	第2回FD・SD合同フォーラム	13 % (専任教員 39 名中 5 名 参加)
	FD連続セミナー	26 % (専任教員 38 名中 10 名 参加)
	共通教育懇談会	68 % (専任教員 38 名中 26 名 参加)
	教員ワークショップ	45 % (専任教員 38 名中 17 名 参加)
	共通教育センターFD講演会	53 % (専任教員 38 名中 20 名 参加)
	授業改善メモ	26 % (専任教員 38 名中 10 名 参加)
	学部FD講演会	5 % (専任教員 38 名中 2 名 参加)

9. まとめ

共教CにおけるFDの取り組みは、初年次教育・教養教育・体育／健康教育・外国語教育・情報教育という広い分野にわたりながらも、各分野間で互いに参考にできる内容について情報交換しながら繰り広げられているところに、大きな特徴がある。またどの分野においても、大学入学時の学生を相手に、その時々の入学生の特質や社会情勢を良く観察した上で、講義の内容や運用方法について柔軟に修正・発展させていくことが必要であろう。大きな時代のうねりに翻弄されながらも、学生を勇気付け、学問への動機を確立させて行き、大学生生活を有意義に過ごすのに必要なスキルを高めるのに、何をどうやって教授するのかについて、FD活動を通して探求する姿勢を持ち続けることが大切である。

令和2年度のFD活動は、COVID-19感染拡大防止への対応の一環で、オンライン・オンデマンド講義の実践法に関するものが多くなったと言える。また同時に、昨今の教員・受講生が置かれている制約が大きい状況の中で、授業への取り組みに関する意識も大きく変わったかもしれない。従来から指摘されてきたものの対面授業では看過されてきた課題が、オンラ

イン講義やオンデマンド講義の実施において顕在化する事例が生じた。そうした中で、それらを契機として授業改善が著しく図られたことも報告されている。

教員が減少する一方で社会からのニーズが顕在化しており、教員が多忙となる厳しい状況は益々進む状況にある。その中で教員の進化が進んだのかもしれない。次年度以降で、それらの効果が実際の授業でどの様に反映されていくのか、検証が必要となるであろう。



法文学部・
人文社会科学研究科

令和 2 年度 法文学部及び人文社会科学研究所

ファカルティ・デベロップメント活動報告書

令和 2 年度の鹿児島大学法文学部、大学院人文社会科学研究所のファカルティ・デベロップメント活動（以下、FD 活動と呼ぶ）の取り組みとその成果を、ここに報告する。

第 1 章 FD 活動への取り組み状況

令和 2 年度の FD 活動の取り組みは、基本的には前年度の取り組みを踏襲するかたちでおこなわれた。しかし、4 月以降本格化した新型コロナウイルスの流行により、一部の取り組みについては中止または見直さざるを得ない状況となった。令和 2 年度におこなった主な取り組みは以下のとおりである。

■定例委員会

5 月からほぼ毎月（8 月を除く）定例委員会を開催した。

■授業参観／視聴

前期は 7 月 17 日～8 月 14 日、後期は 1 月 28 日～1 月 31 日の期間でおこなった。前期は 15 の授業、後期は 12 の授業を視聴可能とし、教員には「授業参観報告フォーム」の提出を求めた。参観者数は前期 23、後期 12。

■FD 講演会

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

■授業アンケート&所感と対応

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

■授業実践発表会

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

■法文学部改組総括に関する学生アンケート調査

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

■教員 FD ワークショップ

→第 2 章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

■学生を交えたFD コミュニケーション・ワークショップ

→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

■エクセレント・レクチャーの選出と公表

鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項の一部改正に伴い、「エクセレント・レクチャー選考・表彰に関する申合せ」を一部改正した。エクセレント・レクチャーの選出基礎データの作成については基本的に前年度の算出手続きを踏襲した。計算シートを作成し、学生アンケートのデータが自動的に集計できる仕組みを作った。

鹿児島大学法文学部及び人文社会科学研究所エクセレント・レクチャー選考・表彰に関する申合せの一部改正新旧対照表(抜粋)(案)

について

1. 改正目的 鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項の一部改正に伴う所要の改正
2. 改正要旨 第3及び第6の改正
3. 新旧対照表(案)

新	旧
<p>鹿児島大学法文学部及び人文社会科学研究所エクセレント・レクチャー選考・表彰に関する申合せ 平成30年7月18日 教授会決定</p> <p>(趣旨) 第1 鹿児島大学法文学部及び人文社会科学研究所(以下「法文学部等」という。)教員の教育活動の活性化を目的として、最も優れた教育を行った教員を表彰するエクセレント・レクチャー表彰制度を設け、エクセレント・レクチャーの選考・表彰について、必要な事項を定める。 (対象者) 第2 エクセレント・レクチャー表彰の対象者は、原則として、<u>法文教育学域法文学系に所属する教員</u>とする。 (候補者の選考) 第3 学科長は、各学科に属する専任教員を対象に、<u>次の各号に規定する資料を含む選考時の資料を添付の上、法文学部等における</u>エクセレント・レクチャー候補者を3名程度選考し、当該年度の3月末までに学部長に報告する。ただし、<u>ベストティーチャー賞又はベストティーチャー最優秀賞を受賞した者</u>については、以後5年間は選考の対象から除かれる。 <u>(1) 学部における選考過程に関する説明資料</u> <u>(2) 授業資料(パワーポイント、配布資料等)</u> <u>(3) 授業アンケート結果、学生からのコメント等</u> なお、各学科における選考方法については、各学科において別途定める。 (選考、表彰及び副賞) 第4 学部長は、各学科の候補者からそれぞれ3名までを<u>法文学部等における</u>エクセレント・レクチャーとして選考し、教授会において表彰を実施する。</p>	<p>鹿児島大学法文学部エクセレント・レクチャー選考・表彰に関する申合せ 平成30年7月18日 教授会決定</p> <p>(趣旨) 第1 鹿児島大学法文学部教員の教育活動の活性化を目的として、最も優れた教育を行った教員を表彰するエクセレント・レクチャー表彰制度を設け、エクセレント・レクチャーの選考・表彰について、必要な事項を定める。 (対象者) 第2 エクセレント・レクチャー表彰の対象者は、<u>鹿児島大学法文学部を主として担当する専任教員</u>とする。 (候補者の選考) 第3 学科長は、各学科に属する専任教員を対象に、<u>当該年度の授業評価アンケート、他の教員や受講生による推薦、ファカルティ・デベロップメント活動への取組などの資料に基づき</u>、エクセレント・レクチャー候補者を3名程度選考し、当該年度の3月末までに<u>選考理由とプロフィールを合わせて</u>学部長に報告する。ただし、<u>選考された候補者</u>については、以後5年間は選考の対象から除かれる。 なお、各学科における選考方法については、各学科において別途定める。 (選考、表彰及び副賞) 第4 学部長は、各学科の候補者からそれぞれ3名までをエクセレント・レクチャーとして選考し、教授会において表彰を実施する。また、副賞として、1名につき5万円を当該教員の研究費に充当する。</p>
<p>また、副賞として、1名につき5万円を当該教員の研究費に充当する。 (学長推薦) 第5 学部長は、学長よりベスト・ティーチャーの推薦を求められたとき、エクセレント・レクチャーからベスト・ティーチャーを選出して、学長に推薦する。 (公表) 第6 エクセレント・レクチャーについては、法文学部ホームページに、氏名、職名、所属学科、表彰理由を公表する。</p> <p>附 則 この申合せは、平成30年7月18日から施行する。</p> <p>附 則 この申合せは、令和元年9月18日から施行する。 なお、この申合せ第3の候補者の選考については、令和元年度に限り、平成30年度後期も含めて選考することとする。</p> <p>附 則 <u>この申合せは、令和3年 月 日から実施する。</u></p>	<p>(学長推薦) 第5 学部長は、学長よりベスト・ティーチャーの推薦を求められたとき、エクセレント・レクチャーからベスト・ティーチャーを選出して、学長に推薦する。 (公表) 第6 エクセレント・レクチャーについては、法文学部ホームページに、氏名、職名、所属学科、表彰理由、<u>プロフィール</u>を公表する。</p> <p>附 則 この申合せは、平成30年7月18日から施行する。</p> <p>附 則 この申合せは、令和元年9月18日から施行する。 なお、この申合せ第3の候補者の選考については、令和元年度に限り、平成30年度後期も含めて選考することとする。</p>

■成績分布の確認

認証評価対応として今年度後期から実施。成績分布の「偏り」の基準と「報告書」の書式を定め、基準を超える成績評価をした教員には報告書の提出を求めた。

■教員対象 FD アンケート

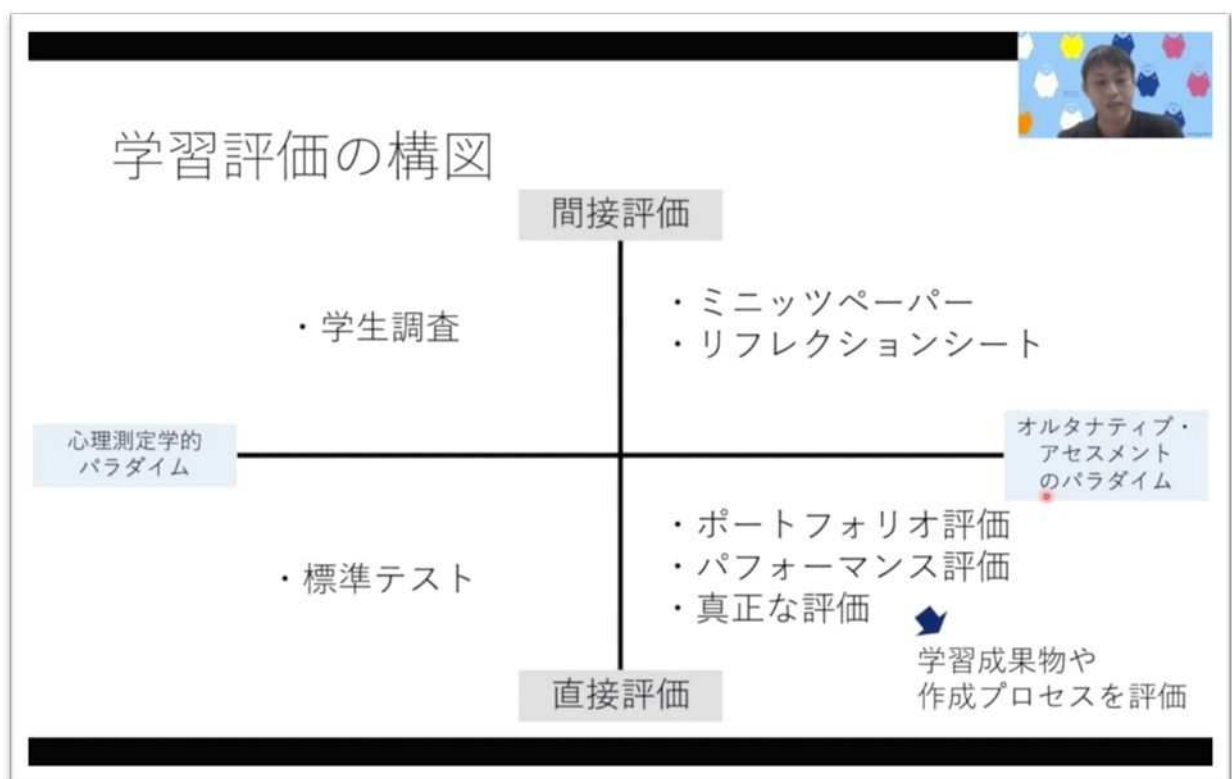
→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

第2章 FD活動の特筆すべき取り組みについて

以下、令和2年度のFD活動の特筆すべき取り組みについて紹介する。

■FD講演会

2020年度前期「遠隔授業に関するアンケート」（法文学部1年生～4年生）の結果をもとに、遠隔授業の課題について検討し、それを踏まえて後期の授業をいかにデザインするかを考える「法文学部教員向けFDセミナー」を開催した。講師：森裕生先生（高等教育研究開発センター）、日時：2020年9月23日（水）15:00-16:00、実施方法：オンラインセミナー（Zoom）。32名の参加があった。



■授業アンケート&所感と対応

前期は7月20日～8月11日、後期は1月20日～2月10日の期間でおこなった。質問内容は基本的に前年度のものを引き継いだ。今年度は遠隔授業に関する質問項目を追加した。教員には授業アンケートに対する所感（気づきや感想）と対応（今後の授業に向けての取り組みや抱負）等について報告を求めた。報告者数は、前期51、後期37。

2020年度前期 授業アンケート 集計結果

回答機会単位

提出の有無	割合	集計
回答あり	32.7%	4266
回答なし	67.3%	8768
総計	100.0%	13034

学生単位

提出の有無	割合	学生数（人）
回答学生数	46.7%	811
回答なし	53.3%	927
総計	100.0%	1738

2. この授業の内容は、この科目のシラバスに書かれた「授業概要」を反映したものになりましたか。

# 回答1.2	演習	講義	実験	実習	総計
1. 十分になっていた	68.8%	60.9%	0.0%	66.0%	62.4%
2. だいたいになっていた	29.5%	36.7%	100.0%	32.0%	35.3%
3. あまりになっていなかった	1.4%	1.7%	0.0%	0.7%	1.6%
4. 全くになっていなかった	0.3%	0.8%	0.0%	1.4%	0.7%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3. この授業の内容は、この科目のシラバスに書かれた「学修目標」を達成することを目指した内容になっていましたか。

# 回答1.3	演習	講義	実験	実習	総計
1. 十分になっていた	67.4%	59.0%	0.0%	66.0%	60.6%
2. だいたいになっていた	30.4%	37.9%	100.0%	32.0%	36.4%
3. あまりになっていなかった	1.8%	2.3%	0.0%	0.7%	2.1%
4. 全くになっていなかった	0.4%	0.8%	0.0%	1.4%	0.8%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

4. この科目の成績評価方法は、シラバスに書かれた「学修目標」の到達度を確認するために適切であると思いますか。

# 回答1.4	演習	講義	実験	実習	総計
1. 十分適切である	67.4%	56.1%	0.0%	59.2%	58.1%
2. おおよそ適切である	31.1%	40.5%	100.0%	36.7%	38.8%
3. あまり適切でない	1.4%	2.6%	0.0%	2.7%	2.4%
4. 全く適切でない	0.1%	0.9%	0.0%	1.4%	0.8%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

5. この授業を通じて、この科目のシラバスに書かれた「学修目標」をどの程度達成できたと感じますか。

# 回答1.5	演習	講義	実験	実習	総計
1. 十分達成できた	48.1%	39.0%	0.0%	40.8%	40.6%
2. ある程度達成できた	47.6%	54.3%	100.0%	54.4%	53.2%
3. あまり達成できなかった	3.8%	5.8%	0.0%	3.4%	5.3%
4. 全くできなかった	0.6%	0.9%	0.0%	1.4%	0.9%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

6. 法文学部の教育目標をまとめて言うと、みなさんが「社会科学あるいは人文科学に関する基礎的体系的な知識を修得し、社会や人間についての理解を深め、情報化・国際化・多様化・複雑化等に伴う社会的諸問題や地域の問題の発見と課題解決に役立つ知見やスキルを得る」ことです。この科目を受講したことは、みなさんがこの教育目標のいずれかを達成することにどの程度貢献していますか。

# 回答1.6	演習	講義	実験	実習	総計
1. 十分貢献している	64.6%	53.1%	0.0%	49.0%	54.9%
2. まあまあ貢献している	32.6%	43.0%	100.0%	42.9%	41.2%
3. あまり貢献していない	2.1%	2.9%	0.0%	6.1%	2.9%
4. 全く貢献していない	0.7%	1.0%	0.0%	2.0%	1.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

2020年度後期 授業アンケート 集計結果

回答機会単位

提出の有無	割合	回答機会科目数
回答あり	15.3%	2552
回答なし	84.7%	14100
総計	100.0%	16652

学生単位

提出の有無	割合	学生数(人)
回答学生数	32.1%	567
回答なし学生数	67.9%	1198
総計	100.0%	1765

2. この授業の内容は、この科目のシラバスに書かれた「授業概要」を反映したものでなっていましたか。

# 回答1.2	演習	講義	実習	総計
1. 十分になっていた	74.5%	66.8%	77.8%	68.7%
2. だいたいになっていた	23.8%	31.7%	21.8%	29.9%
3. あまりになっていなかった	1.0%	1.2%	0.4%	1.1%
4. 全くになっていなかった	0.7%	0.2%	0.0%	0.3%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3. この授業の内容は、この科目のシラバスに書かれた「学修目標」を達成することを指した内容になっていましたか。

# 回答1.3	演習	講義	実習	総計
1. 十分になっていた	70.8%	62.5%	71.6%	64.3%
2. だいたいになっていた	27.5%	35.6%	28.0%	34.0%
3. あまりになっていなかった	1.0%	1.7%	0.4%	1.5%
4. 全くになっていなかった	0.7%	0.2%	0.0%	0.2%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

4. この授業の成績評価方法は、シラバスに書かれた「学修目標」の到達度を確認するために適切だと思いますか。

# 回答1.4	演習	講義	実習	総計
1. 十分適切である	69.8%	58.5%	71.1%	60.9%
2. だいたい適切である	29.2%	39.4%	28.4%	37.2%
3. あまり適切でない	0.3%	2.0%	0.4%	1.7%
4. 全く適切でない	0.7%	0.1%	0.0%	0.2%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

5. この授業を通じて、この科目のシラバスに書かれた「学修目標」をどの程度達成できたと感じますか。

# 回答1.5	演習	講義	実習	総計
1. 十分達成できた	53.4%	41.4%	55.1%	44.0%
2. ある程度達成できた	43.3%	54.2%	43.1%	51.9%
3. あまり達成できなかった	2.7%	4.0%	1.3%	3.6%
4. 全くできなかった	0.7%	0.4%	0.4%	0.5%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

6. 法文学部の教育目標をまとめて言うと、みなさんが「社会科学あるいは人文科学に関する

# 回答1.6	演習	講義	実習	総計
1. 十分貢献している	65.1%	56.5%	64.9%	58.2%
2. まあまあ貢献している	32.2%	40.7%	34.2%	39.1%
3. あまり貢献していない	1.7%	2.7%	0.9%	2.4%
4. 全く貢献していない	1.0%	0.1%	0.0%	0.2%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

■授業実践発表会

秋季法文学部オープンキャンパスの期間（11月9日～23日）に合わせて法文学部のホームページにゼミ活動およびコース紹介ポスターを14点掲載した。



■法文学部改組総括に関する学生アンケート調査

法文学部の学生の学習成果や満足度を把握し、カリキュラム改善に役立てることを目的としてアンケート調査を実施した。実施期間：10月2日～15日、調査対象者：法文学部2年生～4年生。アンケート結果は11月16日開催の法文学部外部評価委員会で報告した。

法文学部改組総括に関する学生アンケート調査（2～4年生対象）

I 調査概要

1. 調査目的

鹿児島大学法文学部の学生の学習成果や満足度を把握し、カリキュラム改善に役立てることを目的とする。

2. 実施概要

(1) 実施主体

法文学部 FD 委員会

(2) 実施期間

2020年10月2日（金）～15日（木）の2週間

(3) 調査対象者

法文学部2年生～4年生（旧カリ除く・編入学生含む）

(4) 実施方法

manaba を利用

(5) 調査項目

カリキュラムに対する満足度（問1）、教育内容に対する満足度（問2）、現時点の能力水準（問3）、教育プログラムの効果（問4）、カリキュラムの評価できる点・できない点（問5）

-
- ・問1および問2は「2019年度鹿児島大学卒業予定者アンケート」（以下「卒業予定者アンケート」）の問2および問3を参考にした。
 - ・問3は「卒業予定者アンケート」の問1を参考にし、各コースのディプロマポリシーを卒業時までに身につけるべき能力や知識の基準とした。
 - ・問4は「卒業予定者アンケート」の問4を参考にし、学部ディプロマポリシーを達成するうえで学部の特徴ある教育プログラムがどの程度効果があったかを尋ねた。「法文チャレンジ・プログラム」については申請者が少なく、その理由を探るために自由記述とした。

【参考】法文チャレンジ・プログラム申請者

4年生 2名（異文化体験2名）

3年生 3名（司法、異文化体験、心理学 各1名）

2年生 2名（司法、心理学 各1名）

計 7名（司法2名、異文化体験3名、心理学各2名）

- ・問5は自由記述。個別の授業ではなく、カリキュラムの評価できる点・できない点について尋ねた。

3 回答数および回答率

	法学	地域社会	経済	多元地域文化	心理学	全体
2年生	29/91=32%	42/57=74%	41/103=40%	72/131=55%	22/39=56%	207/421=49%
3年生	24/93=26%	15/51=29%	30/114=26%	43/129=33%	20/44=45%	132/431=31%
4年生	22/96=23%	22/52=42%	26/111=23%	50/132=38%	23/43=53%	142/434=33%

■教員 FD ワークショップ

12月から2月にかけて各コースで実施。実施形態はコースによって異なるが、おもに「法文学部改組総括に関する学生アンケート調査」の結果をもとにカリキュラムの改善等について意見交換をおこなった。

コース名：法学コース

報告者氏名：齋藤善人

実施日時：2020年12月23日（水）11時00分～12時15分

開催場所：遠隔方式 = Zoom を使用

参加人数：5名

実施概要：

2020年10月に実施された「法学部改組総括に関する学生アンケート調査」の結果に基づいて、学生の大まかな傾向を把握したうえで、それを踏まえて、今後の課題、改善の方向性などについて、参加の先生方にフリーディスカッションして頂いた。ただ、アンケートの項目は多岐に亘り、反面、時間的制約もあることから、予めアンケート項目の幾つかに絞って、議論することとした。全体的には、4年・3年・2年と学年が下がるごとに、肯定的・積極的評価の割合が低くなる傾向が見受けられ（ただし、カリキュラムの構成上、修学の中途の段階にある下級生の回答がどちらでもないや、わからないとなることは、ある程度やむを得ない面がある）、その意味で、完成年度を迎えた4年生を含めて、否定的な傾向の強い項目をピックアップした。なお、いずれの学年も、サンプル数が少ない点に留意する必要がある。

具体的には、アンケート項目の問1（カリキュラムの満足度）で1.2、1.3、1.4、1.5を主に採り上げた。なお、問3（能力・知識の修得度合いについての自己診断）で1.14、1.15、1.16も肯定的評価の割合が低かったが、問2（教育内容・授業の満足度）については、概ね肯定的評価が多くを占める傾向にあることに鑑み、提供される授業については、それなりの満足度を享受しているが、その結果、自己が習得できたと感じる納得度が相応でないということであり、授業の成果の反映という点では検討を要するものであるべきだが、ここでの議論の対象にはできなかった。

ディスカッションにおいて、とりわけ議論がなされたのは、1.2（学びたい科目が十分とれる）と1.5（履修指導（ガイダンス等）が行き届いている）であった。前者については、法学系の科目が時間割上重複していて、事実上履修しにくいとの指摘が（各学年とも）自由記述欄にあった。できるだけ法学系の科目の履修を促すようにしたいとの考えを活かすべく、調整を試みたいが、物理的に難しい現状ではないかとの意見、また、他コース開講科目との時間割上の調整も難しく、課題は残るとの意見が大勢か。後者については、履修指導・履修ガイダンスの充実を考えたいとの方向性は一にした。現状、1年生には、入学時のガイダンスおよびクラス担任制での対応があり、3年生以上は、各演習担当教員による対応が予定されている。が、2年生については、1年次のクラス担任が持ち上がるだけである。1年生の段階では、たとえば、各クラス担任による「社会科学基礎演習」の授業があるなど、ある程度緊密な指導が可能な体制が設けられているが、2年生には、そういった制度設計がなく、いわば指導の空白域ともいえる状況になっている。この点を是正・充実する取組みを考えたく、たとえば、2年生の前期の開始にあたり、何か試行すべきではないかといった提案など意見交換がなされた。

なお、関連して、問4の1.21（チャレンジ・プログラム）について、学生の認知度が著しく低い結果だが、司法チャレンジ・プログラムは、2年生以上の配当科目が主となっているにもかかわらず、2年

生になった時点で、まったく指導や働きかけの機会がないことも一因ではないかとの指摘があり、改善・見直しを検討したいとの見解で一致した。

コース名：地域社会コース

報告者氏名：酒井佑輔

実施日時：2021年2月3日 15時00分～17時00分

開催場所：Zoom

参加人数：9名

実施概要：

1. プログラム内容

- 1) チェック・イン（簡単な近況報告や参加にあたっての意気込み etc）（20m）
- 2) 意見交換①（学生アンケート結果について感じ考えたこととその整理）①(40m)
- 3) 意見交換②（意見交換①の内容を踏まえたうえで、学科やコース、カリキュラム、授業の改善のために我々地域社会コース教員が具体的にできること）（30m）
- 4) グループワークの成果発表（10m）
- 5) チェック・イン（参加した感想 etc）

2. 議論結果並びに改善案（以下、順不同）

	意見	改善案 etc
1	地域社会コースが提供する授業は比較的高評価だった。	現状維持・向上につとめる（例：グループワーク等の高評価だった授業方法を継続・向上する）。
2	コースによって違いはあるが、学生の不満は履修上の <u>テクニカル</u> の部分の問題が大きい（例：単位の計算の仕方がわかりづらい。卒業に必要な単位など。教務委員が1年の時に説明するのみ。）	個々の教員がいくら良い授業を行っても、テクニカルな部分が改善されないと評価があがらない。システム上、自分がどの程度とれているのかというのが、わかる仕組みをつくる必要がある。個人やFD委員の努力ではなく、 <u>学部予算で対応する</u> 。教員の努力の相乗効果で評価があがることが期待できる。
3	word 操作に不慣れな学生が多く、卒業論文執筆に支障をきたしている。	ある程度共通教育(初年次セミナーetc)の内容を把握しながら、必要であれば要望を伝えてお互いの授業内容の改善につなげる、論文執筆に向けた授業の開設も今後検討する。
4	授業時間が重なっていて希望する科目を受講することができない。	授業時間割を作成する際に教員間で調整し授業が重ならないように努める。
5	授業科目数が少ない。	新規開設も検討する。
6	自由科目を卒業要件に増やしてほしい。	将来計画委員で議論した後に教務委員や学科会議で調整する。

その他：

- ・これまでコースで定期的実施していた教員と学生による交流会を再開し、教員と学生の相互理解を進め両者の誤解を防ぐ。また学生側に教員の実情（就労環境のブラック化 etc）等も理解してもらう。
- ・教員も疲弊しているのでしっかり休む。

3. 参加者の反応

- ・参加できてよかった、意見交換できてよかったとの前向きな意見が多くあげられた。
- ・新型コロナ感染拡大により教員同士でもコミュニケーション不足による誤解が生じているので、学生と教員とのあいだではなおさら。したがってもっとコミュニケーションをとる対話の場を作る必要がある、との指摘が目立った。

コース名：経済コース

報告者氏名：西村知

実施日時：2020年12月23日～2021年1月12日

開催場所：電子メールを利用

参加人数：15名

実施概要：

<総評>

現コースのカリキュラムについて、学生から多くの問題が指摘されている。しかし、少数ではあるが、評価する意見もあったことも事実である。以下は、コース教員の、学生の意見に基づいた現カリキュラムの改善点および具体的な対策案である。

<改善点>

多くの学生から提案された指摘は、科目数（特に専門科目）が不足していること、カリキュラム（卒業要件単位）が複雑であること、チャレンジ・プログラムが魅力的でないということである。これらの問題に関して、以下のような改善案が出された。

1. 開講科目（特に経営学系、数理系など）が不足しているとの意見がある。

→教員の負担増を考えると、科目数を増やすのは難しい。教員の補充、非常勤枠の有効利用が必要である。

→教員の補充、非常勤枠の利用に際しては、経営学系、数理系の科目の充実を念頭に入れるべきである。

→科目数を増やさずに、時間割の調整により、学生が履修できる科目を増やすことができる。

→毎年開講でない科目を事前に示し、学生の計画的履修を促すことも必要である。

2. 卒業要件単位数、カリキュラムがわかりにくいという意見が多い。

→カリキュラムの一部見直し、教務委員や指導教員による丁寧な説明が必要である。

3. チャレンジ・プログラムについて知らない、興味がないという意見が多い。

→教員としても、その目的、運用に関してわかりにくい。廃止すべきである。

4. 演習は必修科目とすべきではないという意見があった（少数）。

→現在、コース会議で進められている議論に基づいて必要に応じて改革が必要である。

5. シラバスの内容があいまいという意見があった（少数）。

→記載内容の見直し、教員の努力が必要である。

<今後も継続し拡充すべき点（学生の評価が高い点）>

多数ではないものの、経済コースのカリキュラムに関して、以下の点において、学生が高く評価することも明らかになった。グループ・ワーク、アンケート調査、ゲストスピーカーの話題提供を含む授業は、学生にとって有意義であることがわかった。アドバンスド科目については、否定的な意見は皆無であり、少数ながら高評価もあった。以下は、学生の回答の要約である。学生の評価の高い授業や教授法は、引き続き継続すべきであろう。

1. グループワーク、アンケート調査を盛り込んだ授業は意義がある。
2. アドバンスド科目は興味のあるものが多い。
3. ゲストスピーカーの話しを聞いて勉強になった。

コース名：多元地域文化コース

報告者氏名：金井静香

実施日時：2020年12月23日13時30分～15時15分

開催場所：Web開催（発信場所 法文学部1号館2階201講義室）

参加人数：9名（全員zoomを使用）

実施概要：

「エクセレント・レクチャラーに聞く」というテーマを設定し、実際にエクセレント・レクチャラーに選ばれたことのある二人の先生に授業方法や授業での工夫などについてお話しいただき、その発表内容に関してワークショップ参加者との間で質疑応答を行った。概要は次の通りである。

【竹内勝徳先生】

竹内先生は、「授業におけるこれまでの取り組み」と題して、授業において工夫していることを、新型コロナウィルスの流行以前とそれ以後に分けて説明された。コロナ以前の取り組みについては、講義科目「アメリカ文学概説」において行われているグループ・アクティビティやポイント制などについて説明があった。それにより、一方通行になりがちな講義科目で対話性を重視した授業を行うための諸々の工夫が具体的に提示された。コロナ後の取り組みについては、COIL（Collaborative Online Internet Learning）の授業科目の一つである「英語圏比較文化論」を例に説明された。竹内先生は、2010年からサンノゼ州立大学と協定を結び「アメリカ文学演習1」の授業を行われていたが、今年は「英語圏比較文化論」がCOILの授業に追加された。アメリカとは時差があるため、「英語圏比較文化論」は、リアルタイムのCOILではなく、発表動画をLINEに投稿する形で行われた。その具体的な手順を細部までご紹介いただいた。発表の最後に竹内先生からは、今回紹介したのはいずれもルーブリック的な絶対評価を元にした授業であり、飛び抜けて頑張った受講生にのみ「秀」を与えるための授業形態や評価方法を来年度以降考えなければならないことや、絶対評価と相対評価のバランスをどうするかが問題となることなどが述べられた。ワークショップ参加者からは、「アメリカ文学概説」の毎学期の授業内容（非常に教員が手間と時間をかける必要がある授業構成であることから）や、成績評価において議論されている「秀」

15%の設定についての見解、COIL と learning system (manaba など) との関係などについて質問があった。

【柴田健志先生】

柴田先生の発表は、授業におけるシラバスの重要性に関するものであった。その前提として指摘されたのは、教員が開講している授業の一つ一つは、学生にとってはその学習過程のなかのパーツでしかないということである。学生は、それぞれに授業履修の計画を立ててそれを実施していくのであり、その計画立案のためにシラバスを参照している。言い換えれば、教員がシラバスに書かれていない内容の授業を実施すると、学生の授業履修計画が狂ってしまうことになる。それゆえ、教員はシラバスが重要であることを再認識し、シラバスに書いてある通りのこと（どういう授業なのか、何回目にどういう授業内容を実施するのか、など）を行わなければならない。こうした考え方に基づき、柴田先生は授業の最初の回において、シラバスの内容を分かりやすく書き直したものを学生たちに提示されており、今回の FD ワークショップでは「哲学演習 A1」のそれに基づき、実際の授業の方法について説明された。学生たちによる授業履修計画の立案に関連して、柴田先生からは、知識を得ることに関して学生が有している自由についても説明があった。学生たちは、いつ何を勉強し、どの単位を修得するのかなどを、自分で計画することができる。学生が自らをコントロールし、自分で計画を立てて学習するためには、シラバスにおいて誰もが納得できる内容の授業を約束し、且つ教員はその約束を守っているということを学生に信じてもらうことが重要である。そうした考え方から柴田先生はシラバスを重視されているということであった。ワークショップ参加者からは、柴田先生が提示された資料に関して、レポートの評価基準、コロナの影響、授業において学生に提示する情報の量などについて質問があった。

【おわりに】

お二人の先生による発表と質疑応答を通して、授業において評価の客観性、透明性をきちんと示すことが重要であると改めて確認された。一方で、自分の授業履修計画は自分で立てるという大学での自由な学び方に馴染まない学生や、教員が提示したシラバスの内容に対応できない学生も一定数存在するという現実も指摘された。こうした学生にどう対処していくかは難しい問題であるが、そうした学生には少し基準を弱めて対応するという方法も提案された。

コース名：心理学コース

報告者氏名：菅野康太

実施日時：2021年1月6日 10時30分～12時00分

開催場所：Zoomを使用

参加人数：9名

実施概要：

当日は、以下の内容に関するワークショップを行った。コース教員10名の内9名が参加し、欠席者も事前に配布した資料に対し予めコメントを寄せ、それを叩き台に議論を行った。取り上げたい内容は以下の通り。

- (1) 「法文学部改組総括に関する学生アンケート調査結果」を基にした4年間の振り返り
 - ・FD委員の菅野が、心理学コースに特化した要約資料などを事前に配布(12月)
 - ・それを基に、学生からの意見を教員間で把握し議論

(2) 今後のカリキュラム改革の案に向けた話し合い

- ・前項(1)の資料を基に、コースの教育の改善点を考える

この内容に対し、以下のように話し合いが進んだ。

- ・教員間での資料共有方法の改善

→OneDrive にゼミ決めや卒論関連行事の資料を置いて共有したい

その他、毎年ある報告業務の役割分担や業務フローの資料なども共有したい

(以下の項目については、次ページに詳細)

- ・科目間の関係性の明確化、より一層の相乗効果を狙う
- ・積み上げ式教育のブラッシュアップ(統計関連科目、論文の書き方など)
- ・開講期(開講学年)の再検討
- ・教育効果と効率化を両立する今後のカリキュラム案(今後の教員減もかんがみつつ)

(1) コース基礎・統計関連科目を中心としたカリキュラム変更案

	前期	後期
1年		心理学研究法(2年前期から移動)
2年	心理統計法(1年後期から移動) コース基礎Ⅰ(後半から群間の統計) 心理学実験実習(課題出題要検討)	コース基礎Ⅱ(前半に多変量、後半に文献読み込み) 心理アセスメント実習(科目を無くしたい)
3年		多変量データ解析演習

変更の趣旨や留意点など

- ・心理学研究法と心理統計法の履修年限移動

心理学の研究とはどういうものか?ということを早い段階で教えていた方が、統計にしても実験計画にしても各手法が学生に伝わりやすい。そこで、心理学研究法を1年後期に移動し、実験群の作り方や用語の使い方のイメージを掴んだ後、2年前期に心理統計法を履修する。また、心理統計法の教科書にコース基礎Ⅰと同じ『ピンク本』を指定し、詳細な計算式などは補足資料として配布する(教科書の共有によりコース基礎との連携を図る)。

- ・コース基礎Ⅰ・Ⅱの内容

心理統計法が2年前期に移動すると、同じく2年前期にコース基礎Ⅰで行っていたHADによる統計解析の演習が教えづらくなる(基本用語は理解していることを前提にソフトウェアの使用に特化した演習であるため)。また、ソフトウェアの使用法を習得していないと、心理学実験実習でのレポート課題が出題しづらいという問題点もある。そこで、コース基礎全体を「心理学に必要な研究・調査の技法を実践しながら習得する授業」と位置づけ、前期後期の枠にとらわれずフレキシブルに再構成し、他の授業との連携を狙う。具値的には、

コース基礎Ⅰ

前半9回:論文というものの説明、文献取得方法や読み方、書き方の説明

後半 6 回：群間の比較を HAD で解析（菅野が担当、2 群比較から ANOVA まで）

コース基礎 II

前半 9 回：多変量を HAD で解析（大藪先生が担当、相関、因子分析、重回帰）

後半 6 回：卒論やゼミ選択に向けて、自身の興味がある分野の論文を読んで発表

といった構成とする。これにより、心理統計法で t 検定を習ったのちに、HAD でそれらを実践することになる。

・心理学実験実習

これまでは、各担当者の実習が終了した直後にレポートを課していたが、コース基礎 I で検定法を習得するタイミングが遅れるため、出題のタイミングを再考しなければならない。例えば、菅野担当の実習などを最初に持ってきて、実験を体験し、例年出題している神経科学の手法などの小テストで前半は乗り切り、後半に統計が必要な課題を出すなど。今後、要検討。

・心理アセスメント実習

公認心理師関連科目に集中するためにも、科目を取り消したい。認定心理士取得のために残している面があるが、今後は公認心理師や臨床心理士のみへの対応で十分ではないか（認定心理士を諦めるならば、やめても問題はない）。

(2) その他の検討事項

・「公認心理師の職責」が現在 2 つの科目に分かれている

地域心理支援論に一本化する（コース基礎 II の内容を再検討）

※アドバンスト科目になっている点をどうするか、検討が必要

・コミュニティ心理・産業心理の実習 2 科目を必修から外そう

実践科目から外す方向で調整するが（実践科目は卒業研究のみ）、文科省から実践的な科目が重視されたことにより設置したものなので、難点があるのかもしれない。

・質的研究を扱う機会がもっとあっても良いのではないか

本気でやると科目を増やすことにもなってしまうが、重要な方法論だし卒論で取り組むことを望む学生も実際におり、どこかで機会を増やせると良い。例えば、コース基礎の再編に際して数回取り上げるなど。

・教職関連科目をどうするか

少なくともゼミに該当する科目は教職から外したほうが良い（他コースの公民関連科目の状況も注視する必要がある）

・2 年生の担任をどうするか

行きがかり上、コース基礎 I 担当者の菅野か、前年度の人文科学基礎担当者に事務から連絡が来る状態。その学年の卒論関連行事担当者など、明確に役割を決めた方が良いだろう。一方で、授業で顔を合わせる教員が担当した方が楽な場合もある。今後検討。

・卒論のあり方（文献研究を認めるか否か）

心身に不調をきたした学生への対応など、文献調査研究も認める方向で考えてはどうか？（おそらく、発表会での発表も厳しい状態の学生もいるだろう）→ 認めて良いのでは？

・心理の学生が多元の学生と交わる機会があった方が良い？（人文科学基礎の工夫）

40人という少人数で、指導が行き届きやすかったり、学生にまとまりがあるという良い点もあるが、内に籠るという傾向もある。学生アンケートの結果でも「他コースの授業も学べて良かった・もっと学びたい」という意見と「自由科目よりも専門に集中したい」という両方の意見がある。せめて、人文学科の科目間の有機的な関係性くらいは味わってもらえるようにした方が有益かもしれない。また、他コースの学生との交流が、学問面でも人生の面でもプラスに働くこともあろう。

→人文科学基礎のあり方含め、中長期的に模索するのが良いか（多元との調整）

以上の内容を基に、今後コース内にカリキュラムの改善に関するワーキンググループを分野ごとに設け、さらなる改善案の検討、改善方法（カリキュラム再編）の学術論的実現可能性などを検討することとなった。これらカリキュラムは全て、卒業研究に向けて学生自身がスキルを身につけるためのものであるが、同時に、世界的な研究の潮流の中で、研究者としての教員も研究スキルの向上が常に求められるわけでもあり、そのための勉強会の開催の重要性も指摘された。実際、これまでに、統計関連の勉強会をコースの教員有志で行ってきた経緯があり、それを今後も継続・発展させる機運が高まった。

■学生を交えたFDコミュニケーション・ワークショップ

「オンラインワークショップ 教員と学生の対話を通じて考える新型コロナ禍での学び」、2021年3月18日（木）13:00-15:00にZoomで実施。

【概要】

授業アンケート等を通じて教員が学生の意見を聞く場面は多々あるが、それに対し教員がどう考えているのか、学生から出された授業改善案に対してどのように対応したのか（授業改善を行ったのかないしは行うのか）等を学生が知る機会や、それ自体を両者が話しあう対話の場も欠如している。このような場の欠如が両者の認識のズレや誤解を生じさせ、ひいては学生の不満を高める要因の1つになっている可能性がある。そこで、（1）学生のカリキュラム理解や履修動機などの把握を通じて、授業改善や履修指導に関する情報を得ること、（2）教員と学生が授業のアンケート結果を踏まえて対話し授業改善について考えることで、教員と学生の相互理解の場を醸成すること、等を目的として、3月18日（木）13:00-15:00にFDオンラインワークショップ「教員と学生の対話を通じて考える新型コロナ禍での学び」を実施した。当日は教員10名、学生18名が参加した。

ワークショップでは、まず2020後期授業アンケート並びに教職員組合が実施した労働実態・教育研究状況アンケート結果の共有を行った。次に、法経社会学科の石塚教授及び酒井准教授が、担当している授業の概要説明、アンケート結果並びに授業課題を公表した。続いて、Zoomのブレイクアウトセッション機能を用いて2つのグループに分かれ、参加教員と学生で①授業の課題点の可視化と共有、②授業改善に向けてできること、の2点について議論した。

ワークショップの最後には、石塚・酒井両者から議論内容を踏まえた授業改善に関する宣言が行われた。

参加した教員並びに学生からは以下のような意見が出された（一部抜粋）。

・充実したグループディスカッションとはを考えたが、充実したグループディスカッションとはまず何か。そして、教員側が求める良いディスカッションと生徒側が求める良いディスカッションをすり合わせていく時間が大切であると感じた。全体を通して、和気あいあいとした雰囲気の中で楽しく議論できた。

・教員も会議だと心に鎧を来ている部分があるので、学生も交え、謎のあだ名で呼び合うことで、ほっとしながら話すことができ非常に良い時間でした。授業それ自体は全く嫌じゃないし、研究(含 卒論)も好きだが、カリキュラム改革みたいなお仕事の話になるととたんにイヤイヤ期が自身に込み上げてくるので、学生たちと教員たち(双方ともに多様)と一緒に作っていくものが大学の教育・研究であるということを改めて認識できました。このような時間を作ってください、ありがとうございました。学生さんにも超絶感謝です。

・参加するまで正直面倒だったけど最終的にいい時間になったと思うので来年以降も続けてほしいです。FBはどうしても教授側が時間と手間がかかってしまうのが難しいように感じました。

・技術的などころを早くクリアしたいです。今日は、遅れてすみません。 ブリ王

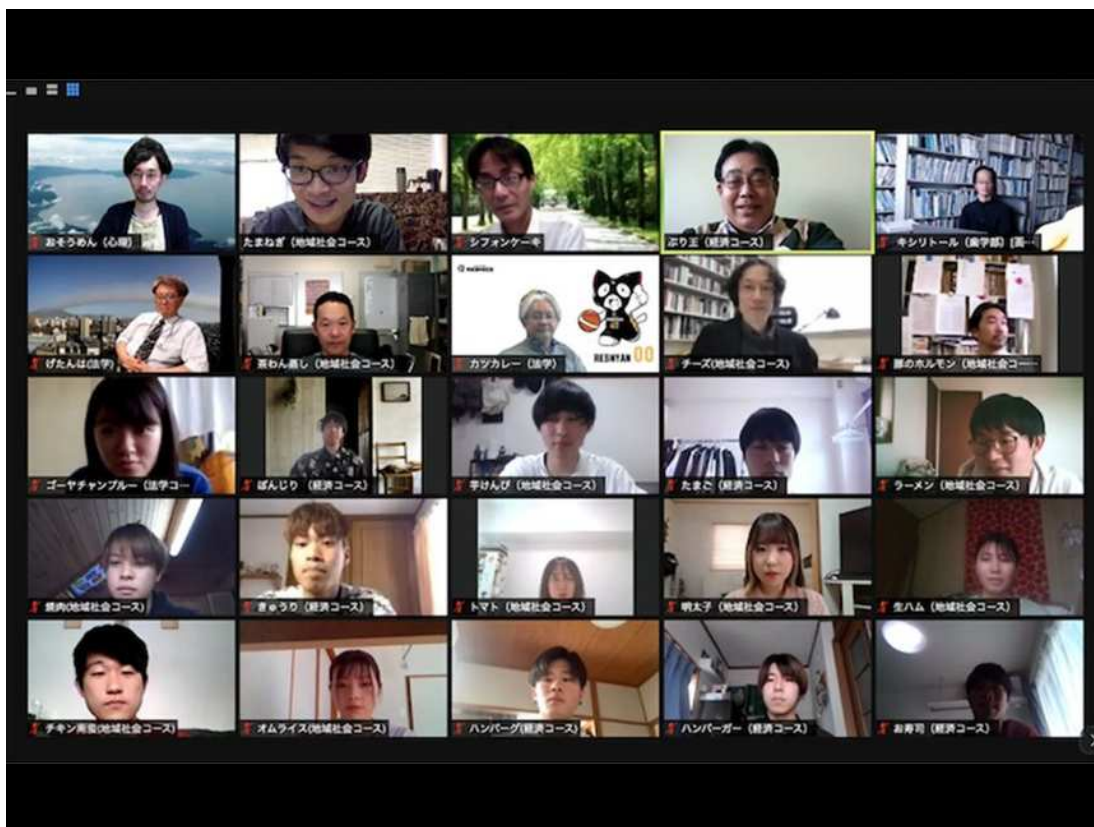
・先生方の苦勞も理解でき、先生と学生の相互理解のために課題や発言に対して素直な姿勢で取り組むべきだと思いました！

・いまの試案では「リアクション」ボタンの「ぴえん」で「なんかわかってません」くらいのアピールにならないか考えてますけどどうでしょう？

・先生方と近い距離で議論をできてすごく良い体験でした！

・グループワークが思ったより白熱していたので、もう少し長めに時間が取れたら良かったと思った。

・先生方もいろいろ考えてくださっていることを知ってより意見を言うようにしようと思えた。



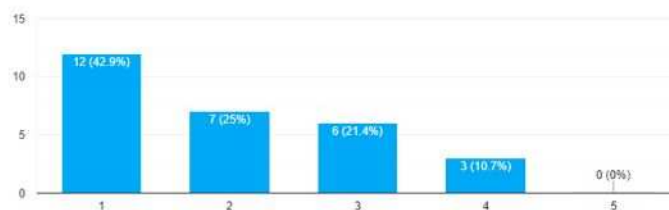
■教員対象 FD アンケート

令和2年度法文学部FD活動を評価し、成果や改善点を把握する目的で3月5日～12日の期間で実施。FD委員会で実施した7項目について「均等目盛」を用いて「高く評価できる」「全く評価できない」を尋ねたほか、他部局や他大学のFD活動に参加した実績、令和2年度エクセレント・レクチャラーの推薦、令和2年度法文学部FD活動全般についての意見や次年度の活動についての要望について尋ねた。

高く評価できる 1 2 3 4 5 全く評価できない

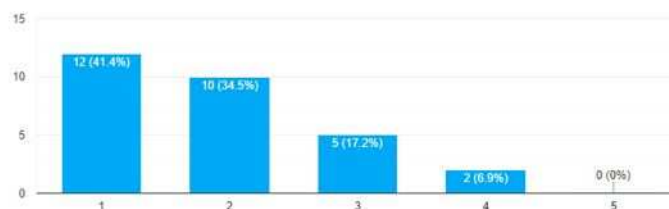
【授業参観／視聴】前期は7月17日～8月14日、後期は1月28日～1月31日の期間でおこなった。前期は15の授業、後期は12の授業を視聴可能とし、教員には「授業参観報告フォーム」の提出を求めた。参観者数は前期23、後期12。

28件の回答



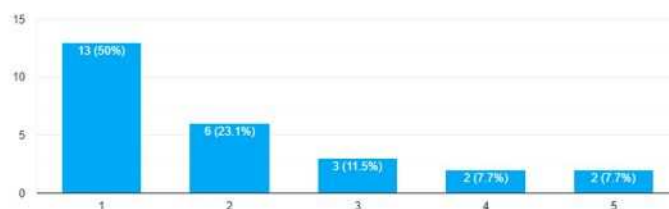
【授業アンケート＆所感と対応】前期は7月20日～8月11日、後期は1月20日～2月10日の期間でおこなった。質問内容は基本的に前年度のものを引き継いだ。今年度は遠隔授業に関する質問項目を追加した。教員には授業アンケートに対する所感（気づきや感想）と対応（今後の授業に向けての取り組みや抱負）等について報告を求めた。報告者数は、前期51、後期37。

29件の回答



【FD講演会】2020年度前期「遠隔授業に関するアンケート」（法文学部1年生～4年生）の結果をもとに、遠隔授業の課題について検討し、それを踏まえて後期の授業をいかにデザインするかを考える「法文学部教員向けFDセミナー」を開催した。講師：森裕生先生（高等教育研究開発センター）、日時：2020年9月23日（水）15:00-16:00、実施方法：オンラインセミナー（Zoom）。32名の参加があった。

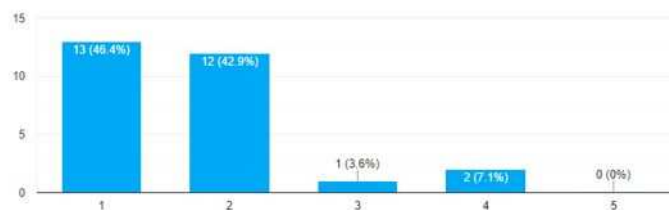
26件の回答



高く評価できる 1 2 3 4 5 全く評価できない

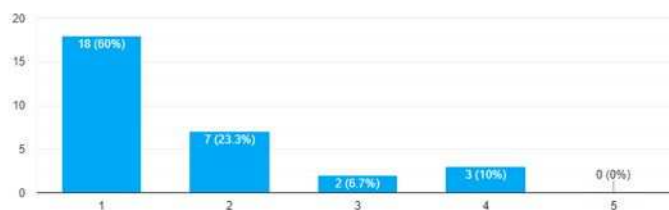
【授業実践発表会】 秋季法文学部オープンキャンパスの期間（11月9日～23日）に合わせて法文学部のホームページにゼミ活動およびコース紹介ポスターを14点掲載した。

28 件の回答



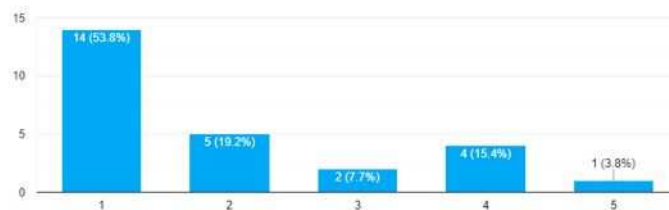
【法文学部改組総括に関する学生アンケート調査】 法文学部の学生の学習成果や満足度を把握し、カリキュラム改善に役立てることを目的としてアンケート調査を実施した。実施期間：10月2日～15日、調査対象者：法文学部2年生～4年生。アンケート結果は11月16日開催の法文学部外部評価委員会で報告した。

30 件の回答



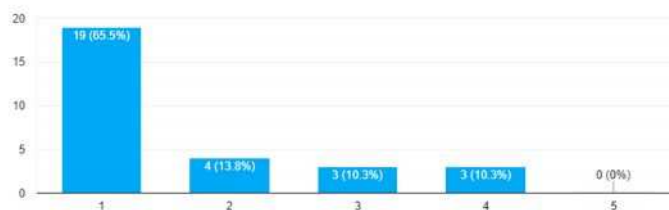
【教員FDワークショップ】 12月から2月にかけて各コースで実施。実施形態はコースによって異なるが、おもに「法文学部改組総括に関する学生アンケート調査」の結果をもとにカリキュラムの改善等について意見交換をおこなった。

26 件の回答



【学生を交えたFDワークショップ】 「オンラインワークショップ 教員と学生の対話を通じて考える新型コロナ禍での学び」、2021年3月18日（木）13:00-15:00にZoomで実施予定。 ※Zoom URLは後日MLにてお知らせします。ぜひご参加ください。

29 件の回答



令和2年度法文学部 FD 活動全般についてのご意見、次年度の活動についてのご要望がありましたらお書きください。

FD 委員会が実施している内容や目標は、非常に高く評価できるし、必要な活動です。一方で、委員の業務負担の割には、教員の積極的な参加は低く、委員会の活動が学部の向上にうまく活かされていないように感じます。積極的に参加くださる先生は、FD 活動の機会をうまく活かし、学生へのFBがうまくいっているようにも思いますので、参加を促すことができれば、学部全体のFDが進むと予想できます。みなさん、お忙しいので、様々な業務と抱き合わせで効率的な活用が必要に感じます。似たようなアンケート、書類、業務が多いため、事務方とも協力し合理化を謀り、コストパフォーマンスを上げるべきと思っています。

コロナ禍で例年以上の、また例年とは異なる対応をいただき、感謝しております。

授業公開の実施時期についてですが、期末ではなく、期の中間だとベターではないかと思えます。期末はバタバタするので、避けていただけると助かります。

コロナ禍で大変な中、授業参観やワークショップなどを企画していただきありがとうございました。

コースをまたいだワークショップがあってもいいのかもと思います。

毎年なんとか公開授業に参加し、報告書も提出してきました。しかし、今年は遠隔疲れのため他の教員の授業に参加する気に全くなりませんでした。PCを通じた参観は脳への負荷が大きく、ちょっと辛かったです。また研修をやることはいいのですが、個人的にはレクチャーの内容が「すでにやっていること」に過ぎずちょっとどうかなと思いました。とはいえ役立った先生もいらっしゃったと思うので一概に否定すべきものではないと思っています。最後に、なんといっても教員のオンライン疲れのケアは誰が担うのかという大問題があると思います。来年度もオンラインFDがつづくちょっと辛いです。

学生の授業アンケートについては教員のメンタルに配慮した工夫をして欲しい。

第3章 令和2年度FD活動のまとめ

法文学部でのFD活動は、令和元年度までにさまざまな取り組みが確立されており、コロナ禍で実施できなかった活動はあるものの、基本的には今年度の活動も前年度の取り組みに基づいておこなわれた。最も重要かつ基本的な取り組みは「授業アンケート&所感と対応」であろう。教員には毎期ごとに学生の声に真摯に耳を傾け、授業改善に取り組むことが求められている。今後も学生のアンケートの回答率を上げることと、教員の報告書提出数を増やすことが重要である。しかしながら、前者については学生のアンケート疲れの問題があり、後者については教員のメンタルケアの問題がある点も念頭に置いておきた

い。「学生を交えたFDコミュニケーション・ワークショップ」を開催することで、教員が学生からのアンケート結果をどのように受け止め、授業改善に役立っているかを学生と共有できたことは良い試みだった。また、「授業参観／視聴」も重要かつ基本的な取り組みである。優れた授業実践については、期間限定で共有するだけでなく、アーカイブ化なども視野に入れて共有を進めていきたい。

令和2年度前期はコロナ禍において、全面的な遠隔授業実施というこれまで経験したことがなかった授業運営が求められた。法文学部では前FD委員長を座長に授業遠隔化ワーキンググループが組織され、「授業遠隔化マニュアル」が作成・共有された。法文学部において4月下旬から遠隔授業がスムーズに実施できたのは、授業遠隔化ワーキンググループの迅速な対応のおかげである。しかし、遠隔授業の実効性や有効性、学生が抱えるトラブル等について把握するためには、全学的に実施された前期の「遠隔授業に関するアンケート」の結果を待たねばならなかった。このアンケート結果をもとに、遠隔授業の課題について検討し、後期の授業をいかにデザインするかを考える「法文学部教員向けFDセミナー」を実施できたのは法文学部にとって大変貴重な機会だった。講師を務めてくださった森裕生先生（高等教育研究開発センター）にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

令和2年度は、法文学部が改組をおこなって4年目の完成年度を迎えたことから、法文学部の学生の学習成果や満足度を把握し、カリキュラム改善に役立てることを目的として10月に「法文学部改組総括に関する学生アンケート調査」を実施した。このアンケート結果によって、カリキュラムの評価できる点やあまり評価できない点などが浮き彫りになった。法文学部の教育の特色である「広く学ぶ（総合性）、深く学ぶ（専門性）、学びを活かす（活用性）」といった点は高い評価を得ていることが確認できたが、一方で、単位計算の仕方がわかりにくい、卒業に必要な単位がわかりづらいなど、テクニカルな面での改善を求める声が多く寄せられた。個々の教員が良い授業をしても、こうした面が改善されないかぎり学部全体の評価が上がっていかないと思われるので、今後、学部全体の取り組みとして改善を計っていきたい。

「法文学部改組総括に関する学生アンケート調査」の結果は、令和2年11月16日開催の法文学部外部評価委員会で報告しただけでなく、教員FDワークショップを通じて教員間でも共有し、カリキュラム改善のための資料とした。

令和2年度の専任教員のFD活動参加率は以下のとおりだった。

令和2年度専任教員のFD参加率(回答様式)

部局名(法文学部)

合計参加率		80.5 % (専任教員 82 名中 66 名 参加)
企画別参加率	授業参観／視聴	46.3 % (専任教員 82 名中 38 名 参加)
	授業アンケート(所感と対応)	68.3 % (専任教員 82 名中 56 名 参加)
	FDセミナー	32.9 % (専任教員 82 名中 27 名 参加)
	授業実践発表会	45.1 % (専任教員 82 名中 37 名 参加)
	教員対象FDアンケート	36.6 % (専任教員 82 名中 30 名 参加)



教育学部・
教育学研究科

はじめに

本年度、本学部では4月に遠隔授業推進委員会が学部に設置され、教育改善委員会も参画しました。そして、遠隔授業の導入を「FD活動の一環」として捉え、その観点から本委員会の活動計画の見直しを行いました。それは、以下に示すように、活動の全体に及ぶことになりました。

「授業アンケート」はmanabaを活用し、学生とのコミュニケーションの一環と捉え、調査後に科目毎の集計と教員のコメントを学生にフィードバックしました。「教員FD活動」としては、従来の授業公開が行えなかったことから、代わって授業紹介を行いました。各教員が従来の対面授業をどのように遠隔授業として実施したのか、その際の工夫や困難さ、実施後の成果についてまとめ、教授会で共有しました。「学生FD活動」では、制限下でもZoom等を用いて継続的に行われました。12月のシンポジウムもまたZoom開催となりましたが、本年度の授業や学生生活についての意見交換や、次年度に向けた改善策、新入生へのピアサポートのあり方などが論議されました。「教育学部FD講演会」は、7月にラーニング・アナリティクスについてのZoom講演会を実施し、他学部からの多くの参加者を得ました。学習者の学習プロセスをデータとして蓄積し、教育改善に活かすラーニング・アナリティクスは、授業形態に関わらず、学習者の学習行動に目を向けさせるものであり、興味深いものでした。最後に、「教育学研究科教育実践総合専攻懇談会」を対面で実施し、本年度の研究上の問題や要望について聞く機会を持ちました。院生の抱える課題として、調査等の難しさから当初の研究計画を変更せざるを得ないことや、孤立しがちな状況にあることが明らかとなりました。

以上が本年度のFD活動の主なものです。これらは従来の計画を変更しながら実施したものであり、不十分なところもあったかと思えます。特に、2つの点を課題として挙げておきたいと思えます。1つは、FD活動を有意義なものにする上での教員と学生の相互理解の重要性です。教育は教員と学生の非対称な関係の上に営まれるものであるがゆえに、対面が制限される中ではFD活動が双方にとって負担となり得ます。しかし、同時に、通常の対話が難しい時こそFD活動がお互いを知る有効なツールとなることもあり、この一年は、FD活動のこの両面を実感することになりました。2つは、FD活動において教員と学生だけでなく、職員の存在が大きいということが挙げられます。遠隔授業の導入はそのことを強く認識させられました。現在も職員がFD活動に関わっていますが、その役割の評価は潜在的なものに止まっています。今後は、教員-職員-学生の三者が参加するFD活動を全体として構想していくことが重要です。

最後に、ベストティーチャー賞最優秀賞を本学部教員の山口武志氏が受賞されました。数学教育の魅力と同時に卒業後の就業に誘う仕掛けや、形成的評価を駆使して個別の支援とグループ活動の活性化に活かす工夫など、教育学部における魅力的な授業のかたちを示していただきました。

合計参加率		100 % (専任教員 82名中 82名参加)
全山部参加率	前期授業アンケート	100.0 % (専任教員 82名中 83名参加)
	後期授業アンケート	92.7 % (専任教員 82名中 76名参加)
	第一回授業紹介	33.7 % (専任教員 83名中 28名参加)
	第二回授業紹介	13.4 % (専任教員 82名中 11名参加)
	教育学部FD講演会	44.6 % (専任教員 83名中 37名参加)
	学生FD委員会FDシンポジウム	7.2 % (専任教員 83名中 6名参加)
	教育学研究科教育実践総合専攻「院生・教職員懇談会」	7.3 % (専任教員 82名中 6名参加)
	第1回FD・SD合同フォーラム	1.2 % (専任教員 82名中 1名参加)
	第2回FD・SD合同フォーラム	3.7 % (専任教員 82名中 3名参加)
	遠隔授業に関するFD連続セミナー	2.4 % (専任教員 82名中 2名参加)
	評価に関するFD講演会	26.5 % (専任教員 83名中 22名参加)

教育学部専任教員のFD活動参加率

目次

- 1章 授業アンケート回答の分析
- 2章 令和2年度教育学部授業紹介報告
- 3章 教育学部学生FD委員会の活動
- 4章 令和2年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会FD講演会
- 5章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査
- 6章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「院生・教職員懇談会」

1章 授業アンケート回答の分析

1. 実施方法

令和2年度の授業アンケートは、学習管理システム manaba を利用して実施した。対象科目は、教育学系に所属する各教員が教育学部で開講する科目から1つ（希望があれば2つ以上も可）を事前に申請することで設定した。なお、事前の申請がない場合には、教育改善委員会の判断により、履修者が多い科目を1つ設定した。

アンケートの実施期間は、前期：7月13日（月）から8月11日（火）、後期：1月18日（月）から2月12日（金）とし、それぞれ各曜日に複数回の授業期間の幅を設けて設定した。

アンケートの実施後、教員は manaba 上で、アンケート結果に対するフィードバックを記載し、履修者に当該科目の集計値とともに公表した。

質問項目については、2018年度、2019年度のものに基づきながら、遠隔授業の導入による影響を鑑みて、一部の項目を改訂した。具体的な変更点としては、授業について尋ねる文言を、「授業（課題）」のような表記に改めたこと、授業形態に関する項目を設けたこと、内容が他と重複していたり、冗長であったりするものを整理したことなどが挙げられる。具体的な質問項目は下記の通り。最後に任意回答として自由記述欄を設けた。

Q1 この授業はどのような形態で行われましたか。複数の組み合わせを用いた授業の場合には、最もよく使ったものを選んでください。

- (1) 遠隔ライブ (Zoom 等) (2) 遠隔オンデマンド (YouTube 等)
(3) 資料配布と課題レポートのみ (4) 対面授業

Q2 この授業に関して、あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習、講義動画の視聴、復習課題、掲示板を読むなど、すべてを合わせた時間で回答してください。

- (1) 5時間以上 (2) 4時間から5時間程度 (3) 3時間から4時間程度
(4) 2時間から3時間程度 (5) 1時間から2時間程度 (6) 1時間以下

Q3 あなたはこの授業（課題）に主体的に取り組むことができましたか。

- (1) そう思う (2) だいたいそう思う (3) あまりそう思わない (4) そうは思わない（選択肢は以下 Q4 から Q11 まで同じ）

Q4 あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。

Q5 授業（課題）はシラバスの内容に沿ったものでしたか。

Q6 シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。

Q7 教師の説明は分かりやすかったですか。

Q8 この授業（課題）は、あなたの興味・関心を高めるものでしたか。
 Q9 資料（板書、スライド、講義動画、配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。
 Q10 この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールや manaba 上での質問等を含む）。
 Q11 この授業は全般的にみて満足するものでしたか。

2. 実施状況

前期の実施科目数は 99 科目（うち 9 科目は入学年度によって名称が違うなどの実質的な同一科目であるため、実際には 90 科目で実施された）、そのうち回答者がゼロであったものはない。のべ履修者数 3,490 名のうち、有効回答件数は 1,825 件（無回答 1,665 件）であり、回答率は 52.29%であった。

後期の実施科目数は 86 科目（うち 5 科目は実施的な同一科目があるため、実際には 81 科目で実施された）、そのうち回答者がゼロであったものはない。のべ履修者数 2,955 名のうち、有効回答件数は 1,180 件（無回答 1,775 件）であり、回答率は 39.93%であった。

3. 結果

（1）前期の全体像と授業形態別のスコア

前期アンケートの結果を表 1 に、授業形態別のスコアを表 2 に示す。令和 2 年度前期は、新型コロナウイルス感染症対策のため、対面授業が制限されたことに伴い、Zoom 等を利用した遠隔ライブ型の講義が多く開講されたようであった（65.04%）。いずれの授業形態においても、学習時間はやや不足気味であり、特に 1 時間以下の学生数（354 名、19.40%）がやや多いようであった。

授業形態別にみると、ほぼすべての項目で「対面型」の数値が低く（＝評価がよい）、「資料提示型」の数値が高い（＝評価がよくない）。ただし「対面型」の平均学習時間は最も短い。なお、「資料提示型」は、解答のばらつきが相対的に大きいようであった。

表 1 前期アンケートの結果

	M	SD	回答件数					
			遠隔ライブ	オンデマ ンド	資料配布	対面		
Q1 授業形態	--	--	1187	201	315	122		
			5:00+	5:00- 4:00	4:00- 3:00	3:00- 2:00	2:00- 1:00	1:00 -
Q2 学習時間	--	--	61	60	149	430	771	354
			そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わ ない	そうは 思わない		
Q3 主体性	1.62	0.69	883	786	127	29		
Q4 理解度	1.80	0.69	624	980	186	35		
Q5 シラバス内容	1.56	0.62	906	836	64	19		
Q6 シラバス目標	1.82	0.66	558	1063	174	30		
Q7 説明	1.59	0.77	1004	620	141	60		
Q8 興味関心	1.66	0.78	905	686	176	58		
Q9 資料	1.55	0.71	1021	644	120	40		
Q10 質問	1.77	0.84	825	661	268	71		
Q11 満足度	1.63	0.74	921	712	146	46		

注. 平均値、標準偏差は、そう思う = 1、だいたいそう思う = 2、あまりそうは思わない = 3、そうは思わない = 4 として算出した。

表2 授業形態ごとのスコア（前期）

	遠隔ライブ		オンデマンド		資料配布		対面	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q2 学習時間	4.63	1.22	3.97	1.17	4.45	0.98	5.20	0.81
Q3 主体性	1.60	0.67	1.60	0.62	1.81	0.80	1.36	0.53
Q4 理解度	1.76	0.67	1.77	0.62	2.07	0.78	1.47	0.56
Q5 シラバス内容	1.53	0.60	1.51	0.56	1.73	0.71	1.51	0.58
Q6 シラバス目標	1.79	0.65	1.82	0.58	2.05	0.74	1.58	0.56
Q7 説明	1.49	0.70	1.53	0.65	2.06	0.96	1.46	0.65
Q8 興味関心	1.60	0.73	1.63	0.76	2.00	0.93	1.47	0.67
Q9 資料	1.49	0.66	1.47	0.60	1.83	0.90	1.54	0.68
Q10 質問	1.67	0.79	1.98	0.91	2.10	0.93	1.53	0.68
Q11 満足度	1.54	0.68	1.62	0.67	2.03	0.89	1.43	0.60

（2）後期の全体像と授業形態別のスコア

後期アンケートの結果を表3に、授業形態別のスコアを表4に示す。令和2年度後期は、対面授業が一部で再開され、オンデマンド型、資料配布型の講義が減少した。前期と同様にいずれの授業形態においても学習時間はやや不足気味であり、特に1時間以下の学生数（317名、26.86%）が多い。

前期と同様に、授業形態別にみると、ほぼすべての項目で「対面型」の数値が低い（＝評価がよい）が、「遠隔ライブ型」および「オンデマンド型」とはそれほど遜色がない。「資料提示型」の数値は相対的にやや高い（＝評価がよくない）ようであった。

表3 後期アンケートの結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	回答件数					
			遠隔ライブ	オンデマンド	資料配布	対面		
Q1 授業形態	--	--	731	75	35	339		
Q2 学習時間	--	--	5:00+	5:00- 4:00	4:00- 3:00	3:00- 2:00	2:00- 1:00	1:00-
			37	27	95	262	442	317
			そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わ ない	そうは 思わない		
Q3 主体性	1.65	0.70	545	515	103	317		
Q4 理解度	1.82	0.71	398	624	132	26		
Q5 シラバス内容	1.43	0.57	709	436	28	7		
Q6 シラバス目標	1.80	0.66	385	663	117	15		
Q7 説明	1.58	0.76	656	395	95	34		

Q8 興味関心	1.65	0.78	601	432	106	41
Q9 資料	1.52	0.70	683	412	57	28
Q10 質問	1.72	0.83	575	413	57	28
Q11 満足度	1.62	0.73	600	459	92	29

表4 授業形態ごとのスコア（後期）

	遠隔ライブ		オンデマンド		資料配布		対面	
	<i>n</i> = 731		<i>n</i> = 75		<i>n</i> = 35		<i>n</i> = 339	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Q2 学習時間	4.71	1.19	4.36	1.12	4.37	1.40	4.76	1.19
Q3 主体性	1.69	0.70	1.67	0.68	2.00	0.77	1.53	0.67
Q4 理解度	1.85	0.71	1.85	0.61	2.31	0.76	1.70	0.71
Q5 シラバス内容	1.43	0.57	1.51	0.60	1.80	0.72	1.40	0.55
Q6 シラバス目標	1.81	0.64	1.84	0.68	2.11	0.58	1.73	0.70
Q7 説明	1.59	0.76	1.59	0.62	2.54	0.98	1.46	0.70
Q8 興味関心	1.68	0.79	1.72	0.67	2.26	0.92	1.50	0.74
Q9 資料	1.52	0.69	1.55	0.64	1.94	0.94	1.46	0.68
Q10 質問	1.69	0.81	1.81	0.80	2.29	1.02	1.71	0.86
Q11 満足度	1.63	0.74	1.69	0.64	2.26	0.89	1.51	0.70

（3）過年度との比較

過去2年間のスコアの推移を表5に示す。なお、実施方法や質問項目は年度によって多少異なるため、おおよそ類似の内容を問うているものを令和2年度のものに並べている。すべての項目について、H30年度、R1年度からの推移はほとんどない（せいぜい0.1ポイント減）であるため、コロナ禍への対応の中、ある程度十分な学習機会を与えることができたと言ってよいだろう。

表5 過去3年間の各項目スコアの推移

	R2 後期		R2 前期		R1 後	R1 前	H30 後	H30 前
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>M</i>	<i>M</i>
Q3 主体性	1.65	0.70	1.62	0.69	1.56	1.56	1.67	1.64
Q4 理解度	1.82	0.71	1.80	0.69	1.74/1.71	1.56/1.27	1.72/1.71	1.72/1.70
Q5 シラバス内容	1.43	0.57	1.56	0.62	1.56	1.56	1.43	1.59
Q6 シラバス目標	1.80	0.66	1.82	0.66	1.98	1.98	1.79	2.03
Q7 説明	1.58	0.76	1.59	0.77	1.48	1.48	1.62	1.57
Q8 興味関心	1.65	0.78	1.66	0.78	1.57	1.59	1.60	1.58
Q9 資料	1.52	0.70	1.55	0.71	1.48	1.51	1.57	1.54
Q10 質問	1.72	0.83	1.77	0.84	1.72	1.76	2.02	2.04
Q11 満足度	1.62	0.73	1.63	0.74	1.52	1.54	1.60	1.57

注. R1, H30 は理解度に関する項目が2つあったため併記している。過去のスコアの標準偏差は報告書に記載されていない。

(4) 満足度との関係

最後に、Q11 の総合的な満足度と、各項目の相関を表6に示す。Q11は教育学部のベストティーチャー賞候補者の選定にかかる評価項目の1つである。表6から、前期・後期ともに、満足度は学習時間との相関がほとんどないが、それ以外の項目との間には比較的強い ($r = .54 \sim .76$) 正の相関がみられた。また、学習時間以外の項目間についても、およそ中程度の正の相関がみられた。

表6 満足度 (Q11) と各項目の相関 (前期/後期)

	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
Q11 満足度	.01/.03	.57/.59	.63/.64	.54/.57	.62/.57	.74/.76	.73/.74	.66/.65	.57/.58
Q2 学習時間	--	.16/.26	.02/.11	.09/.15	.02/.08	.01/.00	.05/.08	.01/.09	.06/.03
Q3 主体性		--	.61/.62	.43/.45	.56/.53	.48/.48	.56/.54	.48/.42	.39/.40
Q4 理解度			--	.46/.51	.66/.66	.60/.63	.60/.63	.53/.54	.41/.44
Q5 シラバス内容				--	.57/.55	.50/.54	.47/.54	.49/.50	.38/.46
Q6 シラバス目標					--	.56/.54	.55/.55	.50/.45	.41/.41
Q7 説明						--	.69/.71	.70/.66	.52/.59
Q8 興味関心							--	.63/.63	.47/.52
Q9 資料								--	.47/.48
Q10 質問									--

4. 総括

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、前期・後期ともに、遠隔授業を中心とした授業実施となった。その中で、各教員が、それぞれの科目の特性に応じた授業形態を採りながら、様々な工夫を凝らした授業を開講した。その結果、学生の満足度や理解度等のスコアが示すように、昨年度までと同様の、あるいはそれ以上の学びを提供したといえることができるだろう。

一方で、授業内外での学生の学修時間をどのように確保するかという点は、今後の課題でとなる。とりわけ遠隔ライブ型や対面授業においては、授業内で学修がある程度完結してしまうような様子も見られる。manabaなどのLMS(学習管理システム)を活用するなどして、授業外での学修機会についても、十分に担保するような授業運営が求められるだろう。

また、課題提示型の授業形態は、それ以外の形態に比べると、スコアがやや悪いことにも留意されたい。必ずしもライブ型の講義が優れているわけではないが、オンライン上で課題を与える際には、対面やリアルタイムでの指示や説明よりも、より詳細かつ明確に行う必要がある。また、場合によっては、オフィスアワーを活用してオンライン上でリアルタイムでの質問を受け付けたり、講義の一部を対面授業としたりするなど、双方向的でやり取りを伴う授業形態を取り入れることも検討されたい。

2章 令和2年度教育学部授業紹介報告

1. 授業紹介の実施計画

(1) 授業紹介の目的と枠組み

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針にある FD の定義には「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組」とあり、各教員が自発的に自身の教育方法を向上・改善させることが求められている。本学部の教育改善委員会においては、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指すことを目的とし、例年「授業参観」を行ってきたが、新型コロナウイルス感染拡大により実施困難となったため、本年度は代替として「授業紹介」を実施した。

(2) 授業紹介の実施

事前に教授会で実施手順について説明したのち、前期については7月31日(金)～8月26日(水)、後期については第2回として主に前期未提出者を対象とし1月20日(水)～2月3日(水)の期間に実施した。教育学部専任・特任教員が担当する教育学部開講の授業科目および教育学研究科・教職大学院の授業科目から担当科目1科目を選び、① 授業準備、② 授業運営、③ 成績評価および④ 授業時間外学習の支援 について実施方法、工夫、課題等の記入を求めた。授業参観では報告書は、メール添付、紙媒体のいずれかによる提出であったが、今年度は Google フォームによる回答も加えた。

2. 授業紹介の実施状況

2回の授業紹介の回答数は延べで39件(前期28件、後期11件)であった。昨年の前後期の「授業公開・授業参観」の参加者数の倍にのぼり、直近10年では最多となった(図1)。

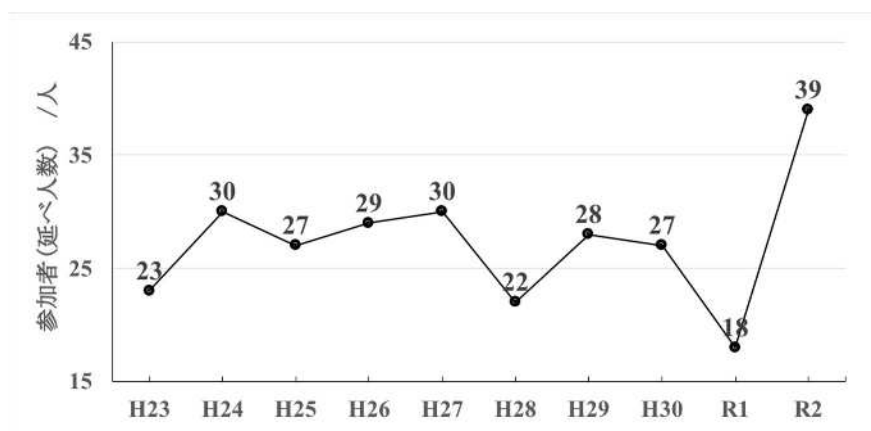


図1 授業参観(令和元年まで)および授業紹介参加者数の推移

3. 授業紹介における記述

前期実施の第1回授業紹介で寄せられた回答の8割以上が「遠隔ライブ Zoom等」またはこれに他の媒体を組み合わせた授業によるものであった。そこで、ここではその回答の一部を抜粋、要約して紹介する。その他の授業形態に関する回答や第2回の回答など、本報告書で紹介できなかったものについては、9月および2月教授会資料も参照されたい。

(1) 授業準備

- Zoom と manaba を併用し、授業資料の事前配布、事前の課題の告知、成果物の共有を行った。
- PowerPoint 等を、PC 画面での見やすさに配慮して修正した。
- Zoom の視聴特性を考慮し、授業で扱う内容を精選した。授業提示資料の配付を検討したが、視

聴時間が長くなりすぎると考えた。

- データの配布では授業に支障をきたすため、紙媒体を学生の自宅に郵送した。
- 各回の授業担当学生との打ち合わせを Zoom で実施した。
- 対面実施時以上に授業中の指示の明確化と視覚化を事前に行った。
- 授業で使用するスライドと関係する図表類をまとめた資料を作成し、毎回 manaba で公開した。
- 教科書のコピーを資料として受講生に提供する必要があるため、一度、対面授業を実施し、資料の提供とともに、補足説明を行った。

(2) 授業運営

- ブレイクアウトルームに個別に教員を配置し、少人数による討議を重ねた。
- グループセッションで映像オンにしない学生がいたが、慣れてきたという感想が寄せられた。
- 遅延やデータ容量等の観点から、manaba や Zoom から YouTube へ変更した。
- 動画の視聴だけでなく、発問や受講生同士の話し合いを設定した。
- 対面授業の制限が緩和されて以降、受講生の人数を調整して模擬授業を実施し、その様子を manaba で動画配信した。
- 対面ではアンケートを紙媒体で行っていたが、google フォームを使用して行わせた。
- 質問については、チャット機能を用いて随時提出してもらい、その都度対応した。
- 授業後に提出してもらおう「振り返り」に目を通し、次回授業の開始時に紹介した。
- 授業の理解度、満足度、興味、意欲を7段階で評定してもらい、学生の理解度や動機づけの変化に注意しながら、次回の授業準備の参考にした。
- さまざまなメディアを自宅で視聴させたことで、板書のための講義内容よりも幅が出た。

(3) 成績評価

(i) レポート

- 対面と同様の評価方法としたが、とくに問題なかった。
- 期末レポート評価のルーブリックを提示した。
- 遠隔課題の適切な分量・回数を目安が測りづらかった。

(ii) 試験

- 授業中に課題を出して、60分解答させ、授業後、その日の23時55分までに manaba で提出する最終試験を実施した。
- 対面型の確認試験。
- Zoom を用いて試験を実施。

(iii) プレゼンテーション

- 個々人の学びの成果をプレゼン形式で発表させた。

(iv) 総合的評価

- 授業ごとに課した課題、模擬授業、最終レポート課題を総合的に判断して、成績評価とした。
- Zoom のブレイクアウトルームを使用した議論は、各グループでの議論への貢献姿勢や発言している内容を対面実施時以上に正確に把握・聴き取ることが可能となったため、対面実施時以上に成績評価につながる情報が得やすかった。

(4) 授業時間外学習の支援

- manaba で提出されたレポートへのコメントや質疑などを通して支援した。
- 授業後にミーティング・ルームに残って質問できるようにした。
- オンラインで利用可能な大型辞書や文献データベース等を紹介して利用を促した。

- 毎回課題のワークシートを用意して manaba で提出させた。
- 学生が作成したアンケートを manaba にアップさせて、学生同士指摘し合わせた。
- 授業終了後にスライドを manaba で公開した。
- 電子メールや manaba (「レポート」のコメント機能) で質問を受け付けた。

(5) その他、課題など

(i) 授業について

- Zoom、manaba、YouTube、respon とたくさんのページを行き来することが学生の負担になる。
- 画面遷移と説明のタイミングが同期できていなかった可能性がある。
- オンライン上で使用できない映像資料等の代替手段・教材の用意が困難。
- 板書を中心とする対面授業と比べて進度が速くなりすぎる。
- 受講生の顔を確認しながら授業を進行するように工夫していきたい。
- Zoom を活用したことで、多くのゲストティーチャーの招聘が可能になった。
- 遠隔授業では情報・意見のやり取りが一方向的になったので、小テストなどを適宜取り入れて受講生が能動的に授業に参加できるようにしていきたい。
- 知識伝達型授業の場合、必ずしも Zoom によるリアルタイム授業でなくても良いかも知れない。
- 受講生同士のグループ活動、グループ協議を遠隔授業では十分に行うことができなかった。

(ii) 学生について

- グループ討議はメンバー構成によって学修の成果や満足感にかなりの差が生じていた。
- 「対面」では質問が全く無かったが、メールや Zoom の chat による質問が多かった。
- ツールの問題よりも、当該学生の対話力によるところの方が大きかった。
- 他者の意見との関連性を自ら見出したり、出されている意見を構造化してまとめたり、新たな問いを発したりする頻度は、対面実施時よりも高かった。
- 例年よりも、理論面における院生の理解は深かったため、むしろ内容が濃くなり発展的内容まで扱うことが出来た。

4. まとめ

例年「授業公開・授業参観」では参加率の低さが課題とされ、様々な工夫が試みられてきたものの、十分な改善には至らなかった。授業紹介は今年度はじめての試みであり、さらにコロナ対応や管理棟・理系研究棟の改修などに伴う教員の業務増加など今年度特有の困難な要因が多分にあったにもかかわらず、参加者数が最近10年で最多となったことは、特筆すべき点である。また、数のみならず、寄せられた回答は有益なものが多く、教授会や報告書などを通して、遠隔授業のアイデアや諸課題を早期に情報共有できたことは意義深い。また、寄せられた回答のなかには、ご本人から直接詳細を説明して頂きたいと思うものも多々あった。次年度以降も授業紹介を実施する場合、そのような機会を設けてもよいかもしれない。

3章 教育学部学生FD委員会の活動

1. 学生FD委員会の概要

学生FD委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的としてFD活動を担う学生主体の組織で、各専修2名の委員から構成されている。FD委員会の具体的な活動内容として全国学生FDサミットへの参加や学部・大学院合同シンポジウムの企画・実施、ソフトボール大会の運営、履修支援等のピ

アサポート活動などを行っている。

今年度のFD委員会は、新型コロナウイルスの影響もあり、全国学生FDサミットの中止や大学祭中止に伴うソフトボール大会の中止などと活動内容が制限されている中での活動となった。そのため、学生・教員間で授業について話し合う機会である「FDシンポジウム」と学生の履修登録などのサポートを行う「ピアサポート」の2つの活動を班分けはせず、学生FD委員長と副委員長を中心に活動を行った。

2. 各活動についてと振り返り

(1) FDシンポジウム

今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、特に前期では鹿児島大学全体で遠隔授業が実施され、新しい授業形態へと切り替わるなど学生・教員ともに手探りの状況での授業となった。このことから、今年度のFDシンポジウムでは「コロナ禍における授業のあり方」というテーマを設定し、コロナ禍における本学部の教育活動について学生がどのように感じているか、どのような点に不満や不便さを感じ改善を求めているかについて、教員と学生が対等な立場で意見交換を行い改善に向けてことを目的として開催するに至った。

シンポジウムの開催に向け、学生FD委員会でも話し合いを重ねてきた。このテーマに対し、特に今年度入学の1年生は、入学と同時に遠隔授業が始まったことで大学での授業や人間関係で不安や問題を抱えているのではないかという予想を立てた。そこで、実態調査として1年生にアンケートを行うこととし、FD委員会の話し合いの中で1年生の不安や問題点として考えられる項目を挙げ、アンケートの質問項目を考えた。アンケートは、鹿児島大学教育学部の学生に対して各学科のSNSを通じて行った。全部で42名からの回答が得られ、多くの1年生が授業への不安だけでなく、実生活における心理的な不安やストレスについても回答してくれた。

実際のFDシンポジウムでは、「コロナ禍における授業のあり方」という大きなテーマについて①授業のあり方(対面授業と遠隔授業の混在と、オンデマンド型や資料配付型授業について)、②レポートや課題の作成および試験について、③1年生へのサポート、④今後の学生間の交流のあり方の4つのトピックを設け、アンケート結果も踏まえながら、学生・教員を交えた4～5名ずつでのグループディスカッション形式で進めた。

①授業のあり方については、対面授業と遠隔授業が同日にある時に大変さを感じることに、遠隔授業におけるグループディスカッションでは初対面同士でもあることに加え、ビデオをオフにしたままの学生もいるということでコミュニケーションの取りづらさがあると分かった。また、授業によっては、資料を配付されるだけの講義もあり、授業の質と変わらない授業料との差に疑問を感じるという声も上がった。一方で、遠隔授業ならではのメリットとして、移動時間がかからないため時間の有効活用ができるという意見もあった。

②レポートや課題の作成および試験については、1年生の立場を踏まえた意見が多く挙がった。縦のつながりが希薄化している1年生にとって、レポート課題や試験の概要に関する情報提示の仕方や、課題提出後のフィードバックにはより配慮が必要であるだろう。また、全学年で共通する意見としては、課題が多すぎるという意見が挙がった。対面による試験の実施が厳しい状況の中でレポートでの評価は仕方ない部分もあるため、学生と教員が互いに納得のいく方法が見つかるまでは、学生が一つ一つの課題をコツコツ取り組む姿勢や教員のレポート課題を提示する際の配慮が不可欠であるように思う。

③1年生へのサポートにおいては、アンケート結果も踏まえ多くの困難について共有された。特

に縦のつながりだけでなく、1年生同士の横のつながりもないことから、1年生が一人で悩みや不安を抱えてしまう状況がある。そのため、manaba 上で匿名での質問ができるようにすることや、Zoomなどのweb会議システムを利用した親睦会、また、ボランティア活動、レクリエーション、スポーツ大会などの開催により、コミュニケーションの場やきっかけを作ることが必要だという意見があった。実際に対面での活動となれば感染症対策などの検討が必要であるが、今後コロナ禍が継続する可能性があることを考えると、その検討は大いに意義があるものであると考える。

④今後の学生間の交流としては、学科内での交流としてボランティアの実施や、SNSを活用した交流の場を設けるといった方法が挙げられた。一方で、この状況を踏まえ、遠隔であったとしてもコミュニケーションを取る方法として活用できるのではないかという肯定的な意見もあったことから、今年度に導入した遠隔システム等をより活用して、今できる方法で交流していくことも必要だ。

今回のシンポジウムは、それぞれの立場で意見交換を行うことで、互いに見えていなかった思いや意図を知ることができたという点では大いに意義があったのではないだろうか。一方、遠隔授業が学生・教員ともに手探りの状態で始まったこともあり、具体的かつ効果的な対策などが挙げられにくいと感じた。次年度の1年生が同じような悩みを抱えないようにするためにも、特に1年生へのサポートについての対策は早急に行う必要があると感じた。また、課題としては、話し合うトピックが多く、一つ一つに対して十分な話し合いができなかったこと、シンポジウムの参加者が学生・教員ともに少なかったこと、web会議システムZoomによる開催の中で学生と教員で初対面での話し合いだったということもあり、グループによっては活発な話し合いがしばらくという状況があったことが挙げられる。FDシンポジウムだけでなく、FD委員会という存在をもっと多くの学生・教員に知ってもらい、気軽に頼ってもらえるような存在にできればと思う。そのためにも、まずは今回アンケートに協力してくれた1年生へよい形で知ってもらえるようにしなければならない。

(2) ピアサポート

ピアサポートでは、昨年の『履修登録のすすめ』が多く活用されたことから、今年度は2021年度版を作成することにした。このパンフレットを用いて、学生が自分の履修状況を確認したり授業をうまく組み合わせたりすることで大学生活をより充実したものにする、また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、各領域で縦のつながりが希薄化しているという現状があるため、新入生や、第2免許を取得予定の学生にも履修のサポートとなることを目的としている。

2021年度版『履修登録のすすめ』は、①履修登録に関する日程一覧、②履修登録に必要なもの、③『教育課程』の見かた、④各課程・コースにおける履修登録の注意点、⑤こまったときは、⑥(付録)時間割書き込み用ワークシートの6つの項目で構成されている。③『教育課程』の見かたでは、今年度の1年生から教育課程が新しく改訂されたことを踏まえ、新・教育課程を参考に初等教育コース、中等教育コース、特別支援教育コースそれぞれの学生が一目で分かるように表にまとめた。また、④各課程・コースにおける履修登録の注意点では、FD委員会に各領域の学生が所属することから、領域ごとに履修登録上の注意点やアドバイス等をまとめたものを一覧にして紹介している。

今後の課題としては、ピアサポートの進め方と内容の検討の2つが挙げられる。進め方については、今回はコロナ禍において集まるのが難しいという点を踏まえ、委員長・副委員長を中心として行ったため、他のFD委員が作成に関わる機会が④のみと限定されてしまい、多くの意見を踏まえた上での作成につなげられなかった。そのため、活動開始時に具体的な見通しを立て、担当箇所を振り分けるなどして全員が協力して作成することで達成感を共有し、活動への意欲につながるよ

うにしていきたい。また、内容の検討については、今年度は主に1年生（次年度の2年生）に向けてという意識が強くなってしまい、特に③では、新・教育課程しか取り上げていない。そのため、幅広く活用してもらえよう、旧・教育課程にも触れるなど、内容の充実させるための検討が必要である。

今後としては、2021年度前期の履修申請期間が始まるまでに設置させてもらい、多くの学生に活用してもらいたい。

3. 今年度の成果と今後の課題

今年度はコロナ禍において活動自体に制限もあったが、web会議システム Zoom を利用した委員会活動や FD シンポジウムの開催、新しい教育課程に対応した『履修登録のすすめ』の作成を無事に進めることができた。また、昨年度の反省を踏まえ、FD 委員同士がコミュニケーションを取りやすくするために学生同士でのグループディスカッションを積極的に取り入れたり、毎回の活動を報告したりすることで、参加しやすいような雰囲気作りにも取り組んだ。

一方で、各領域で参加する学生にばらつきがあり、対面及びオンラインでの委員会活動の参加者が少なかったという実態より、FD 委員会の活動のあり方については検討する必要があるのではないだろうか。昨年度も報告があったように、この教育学部学生 FD 委員会は、自主的に集まって構成されているわけではないため、学生の責任意識にも差があるように感じられる。今後も各領域から数名を選出するという方法で FD 委員会を構成していくのであれば、まずは FD 委員会自体を教育学部内の学生及び教員に知ってもらうことが必要である。そのためにも、我々が作成した『履修登録のすすめ』を広く活用することや、次年度への引き継ぎを十分に行うことを通して、よりよい大学生活の支援のための積極的な参加を促すことができるようにしていきたい。

4 章 令和2年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会

1. 講演会について

開催目的 (1) 遠隔授業の導入による新たな授業の在り方について考える。

(2) 教育データを通して学生の学習プロセスについての理解を深める。

テーマ 「コロナ禍を機に考える ICT でできる授業改善：ラーニングアナリティクスからのアプローチ」

講演者 九州大学基幹教育院 ラーニング・アナリティクスセンター 山田政寛准教授

開催日時 2020年7月30日 13:30 - 14:30

会場 教育実践総合センター1階多目的室 および Zoom によるリモート開催

出席者 63名（うち教育学部40名、附属中学校3名含む）

会の流れ あいさつ（教育学部長 有倉巳幸先生）

講演

質疑応答

まとめと閉会のあいさつ（武隈晃教育担当理事兼全学 FD 委員）

2. 学部長からの挨拶

本日は、教育学部 FD 講演会にご参加くださりありがとうございました。今回の講演会ですが、当初は対面を想定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止を受けて、オンライン開催となり

ました。今年度は、およそほとんどの先生方がはじめて遠隔授業を経験され、試行錯誤の中でなんとか前期末にこぎ着けたといったところだと思います。しかし、この状況は逆の見方をすれば、授業改善について改めて考える機会を提供してくれたともいえます。対面ができない中で、単位の質及び、学生の学修をどのように保証するか、対面授業ができないからこそ、それに代わる十分な学修時間と環境を工夫し提供することで、学習者目線にたった授業改善を図る機会になったと考えています。

今回、教育改善委員会、教務委員会の合同企画によりご講演いただく九州大学基幹教育院自然科学理論系部門ラーニングアナリティクスセンター准教授の山田政寛先生には、この機会だからこそそのテーマをいただきました。ありがとうございます。

なお、全学にも広報したところ、教育学部以外からも（理事をはじめ）多くの先生方にご参加いただきました。ご参加いただきました先生方に感謝をし、ごあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

3. 講演概要（*スライドと講演をもとにメモをとったものに、一部加筆修正を行っている）

（1）はじめに（自己紹介）

教育工学を専門とし、「あなたの存在感」の学習効果、コミュニケーションにおける社会的存在感の効果等について研究している。

（2）新型コロナ禍における教育の変化

現在、新型コロナ禍における教育の変化が生じており、各大学は、オンライン学習を進めることを推奨されている。これに対して初等中等教育では、自治体の指針に従い、ある一定期間対面授業を中止し、その後分散登校や分散授業の実施で対応している。文部科学省から GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想が打ち出されているが、この教育をうけた学生が将来大学に入ってくることを見越しておく必要がある。現在、教科書や紙の教材を活用した家庭学習は100%であるが、動画教材は10%、同時双方向のオンライン指導に至っては5%にすぎない。

（3）オンライン学習はパンドラの箱？

こうした背景を受けて、現在実施しているオンライン学習から、平時における授業の形を見直すことを提案している。実際、LMS（ラーニングマネジメントシステムズ）で出席をとるように促したりしているが、九州大学においても課題提出程度使用していてもすべての教員が使っているわけではない現状がある。熊本大学の鈴木克明先生は、NII シンポジウムにて「無理はしないで同じ形を目指さないこと。平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン」ということをおっしゃっている。また、九州大学のアンケートでもオンラインで一部授業を行ってほしいという要望は6割強である。そこで、オンライン学習を経験することで「オンラインでできることなら集まる必要がない」と考える教員や学生が増えることを前提に、平時における ICT 活用型授業の本格化を検討することを目的として研究を行うこととした。

まずは、ICT を活用した授業改善を考えてみる機会としてラーニングアナリティクス（LA）を行った。

（4）LA とは

LA とは、情報技術を用いて学生からどのような情報を獲得し、どのように分析・FB すればどのような学習効果・FB が促進されるかを考える分野のことである。具体的には、ICT 利用を前提とする学習ログをフルに活用し分析することとなる。

また、LA を使えば可能となる授業改善サイクルには、シラバス作成や教材改善の提案、学習ログ

分析などが考えられる。学習ログ分析では、大学院生などのラーニングアドバイザーを活用し、授業中に学生があるスライドで止まっているから資料の順番を変えたほうがいいのかなど提案することが可能となる。こうした分析は、授業期間後のワークショップにおいて生かしやすいが授業前中後を通してリアルタイム分析やドロップアウト等の傾向を提示することも可能である。

そもそも九州大学は、2016年2月に日本の大学初の専門センターとして学習データの分析をはじめ、2018年には研究チームとして学部横断的にデータ分析を行うようになった。そして現在M2B（ミツバ）と呼ばれる、Moodle、Mahara、BookRoll（デジタル教科書配信システム）を活用している。

（5）BookRollとは

BookRollは、画面のカスタマイズのみならず、わかった・わからないという意思表示も可能となっている。また組み込み型評価（ステルス評価）として、優良な推薦情報をつけたりすることも可能（自動的につけることも可）である。さらに、受講者によるBookRoll上の教材閲覧状況をリアルタイムで可視化することにより、受講者の状況に合わせて授業進行を調整・即時的な授業改善が期待できるものである。たとえばマーカー解析を用いれば、学生が「どこに」「よく」マーカーを引いているのかがわかり、学生の注目度や理解度を知ることができる（数値化も可能である）。色分けすることにより、言葉の関連付けを可視化できたり、メモの内容を含めた知識マップの作成により個人やクラス全体でどのように理解を深めているか教員も学生も客観的に学びを振り返ることができる。

（6）3つの事例

ここで、「事例1：学習ダッシュボードを使った事例」、「事例2：中学校合同証明問題」「事例3：高校1年生80名に対する数学・英語の6週間のデータ分析」の3つの事例を提示する。事例の取り扱い上、内容については端的に扱うのみとする。

事例1は学習支援システム等に残る学習に関する行動データを可視化し教員や学生へ提示するものであるが、どこがわかってどこがわからないか直観的、視覚的に学生に伝わるような評価を行うことで、自己の学習を客観的に評価できたり、他の学生の様子が伝わるなど、学生からも高評価を得ていた。また、レクチャースタイルを主とする授業でも受講者の理解に寄り添うことで効果的な授業進行・改善が可能となることが示された。最近では、レクチャースタイルを批判する風潮があるが、そういう問題ではなく、できることはもっとあるからそれをやることに目を向けるべきではないか。事例2では、LAを活用し、見通しをたてて自分なりの証明問題への取り組み方を考えさせる授業を展開した事例である。教員が生徒の間違いや時間のかかり方に注目し、生徒が主体的に学べるようグループ検討をいれるなど授業改善に用いられた事例である。事例3は、授業外学習で難しいところには黄色いマーカーを引き、わかったらマーカーを消すということを基本に毎週教員に分析結果をフィードバックしたところ、学習者のマーカーの引き方から成績との関連の有無などわかった事例である。

（7）LAによってできる授業改善

ここまでLAを用いた事例を伝えたが、LA使ったからと言って授業を行うことが楽になるわけではなく、学習者の理解に寄り添う意識が求められる。これは、オンライン授業だけでなく対面授業でも意識すべきことであるが、LAを用いることで、対面では見えない様々な学習者の様相がみえてくる。そこで見えてくる学習者の「わからないところ」を少しでも拾い上げることが大切で、それをもって授業のリデザインへとつながるのである。

また、「授業は対面で行うべき」という教育に対する信念があるかもしれないが、オンライン学習環境の特徴をとらえ、できることはオンラインで行うことへと変化を遂げている途上にある。同様

に教育や授業についても変化の時を迎えているが、それは反転授業の充実化であったり、評価についての考え方にも表れていたりする。たとえば「テストは知識の再生を測るべき」といった考えから学習対象を身に着けるプロセスを評価する視点（マスタリーラーニング）への変化である。こうした学習のプロセスをみることは重要であり、テストで剽窃するのではないかという最近の懸念を払しょくし、わからないことを自分で調べてやっていくことが、求められるスキルとなる。そこでは何を見て（どのような文献を用いて）回答したのかまで求めることになることから教育関係者の教育データリテラシーが問われることとなる。現在 UNESCO や EDU SUMMIT で求められているのは、データを見た時に何をすべきかを考える力であり、ここでは分析ツールが必要になるし、データに基づくインストラクションデザインも必要である。そもそも教育データリテラシーとは、論理的にデータを解釈することであることから、データを見て教師自身の、学習者自身の経験と突き合わせて論理的な解釈をすることが求められる。

このような、データを読み取って授業設計や学習支援に生かす観点を見出す力は、教員養成でも求められるのではないかと考えており、現にコロンビア大学 Teachers' college では、理工系ではなく人社系で世界初の LA の専門科目が登場している。もちろん、大学の FD としても活用できるし、教員の授業データを共有することもおもしろいのではないかと考える。

（8）教育データリテラシーを高めるためには

最後に、教育データリテラシーを高めるためには、LA の日常化が必須であり、効果を高めるポイントはどこにあるのか、エビデンスを普段から蓄積しないことには何もできないと思う。そこで、TA の机間巡視や質問応答状況、トラブル対応などの状況とデータを突き合わせることで改善すべき点がみえてくると考え、九州大学では、TA の育成にも力を注いでいる。ちなみに九州大学では、コースを受けた者のみが TA になることができ、そのコースを受ければ学部3年生からもなれる仕組みとなっている。さらに科目を履修すれば Teaching fellow（授業担当可）になることも可能である。

4. まとめにかえて（武隈教育担当理事兼全学 FD 委員）

今回の講演で、オンラインの一步先に何があるかについても聞いた。特に今後対面授業をどうよりよくするかという話もあったが、現在のところまだそこまで見られていない状況である。しかし With コロナと Post コロナの準備をどうすればいいのか考えさせられる内容であった。また最後にポストフェローの話にも触れられたが、鹿児島大学では大学院の FD が遅れているので参考になった。今回は他学部の先生や附属学校からも参加されておりそれぞれの立場で学ぶことができたと思う。評価の在り方など今後、様々な取り入れ方考えていく必要あると感じた。今年は教員も今までやったことがないくらい授業改善をしたという声もあるが、目下、学生にアンケートを実施しているところでもありこれからの FD の参考になったと思う。ご講演ありがとうございました。

5章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査

1. はじめに

教育学研究科教育実践総合専攻（以下、本専攻と略記）では、例年後期の12月に教育改善に係る学生アンケートを実施してきた。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況に在って、学生の学修・研究上或いは生活上の困難等、早急に対応が求められる事態の把握に努めるべく前期の7月から9月にかけて実施した。なお、後期には次章に報告する通り、アンケートに代

えて院生・教職員懇談会を実施した。

2. 調査の実施方法

令和2年度の調査方法は以下の通り。

- ・実施時期 2020年7月14日（火）から9月10日（木）まで
- ・対象者 本専攻在籍学生
- ・調査手段 Google フォームを用いた web 方式（匿名）
- ・周知方法 担当係である総務係を介し教務係より一斉メールを送信
- ・質問項目 令和元年度の調査項目に準じる（章末にアンケート様式を附載）

3. 結果及び教育改善委員会の分析や対応

1年生5名、2年生8名の合計13名より回答を得た。回答者数は、例年同様（前年度13名、前々年度10名）であった。以下、質問項目ごとに回答を示し、本委員会としての分析や対応を附記する。なお、記述回答の本文は、基本的に回答者入力のままとする。

（1）「教育実践総合専攻共通科目」「学修コース共通科目」の授業について

【満足している点】

- ①グループで考えをまとめるところが他で味わえないので良いと思います。
- ②Zoomが多い。
- ③専門としている分野以外の教育に関する知見を深めることができる。
- ④自分では選択して勉強しないだろうが、必要であろう知識を教えてもらうことができる。
- ⑤意見交換が多く、視野が広げられる。
- ⑥自分の専門的に学んでいる分野以外も知ることができ、知識を増やすことができる点
- ⑦学校現場の深い部分まで学べる。

【改善して欲しい点】

①専攻共通科目で、グループでの共同レポートの際に、それぞれの貢献度に関わらずグループ全員が同じ評価をされるということをすぐに改善し、評価方法の見直しをしてほしい。大学院に通う学生の中には、金銭面で非常に苦勞しながらも、学びたい一心で覚悟を決めて通っている人がいる。私はその中の1人である。こうした人たちは、安心して学びに向かうことができるように、奨学金返還免除や授業料免除を検討したりしながらできるだけお金のやりくりを自分の力でできるように日々学びだけではなく、アルバイトなどにも励みながら頑張っている。奨学金返還免除や授業料免除にあたっては、日々の学びに対する先生方からの評価が関わってくる。そうした背景をもつ学生がいるのに、グループでの共同レポートが課された際の評価が、レポートが書かれる過程を踏まえずして、グループのメンバーで同じ評価である。グループ活動では、共同といって協力し合っているにもかかわらずどうしても貢献度や負担感に偏りが出てきてしまうのが現実である。それぞれ学生は中でもグループのメンバーと共に頑張ろうとしている。そして、先ほど述べたような背景をもつ学生は特に力を入れて人一倍頑張ろうとしている。グループ内での貢献度や負担感に差があるにも関わらず（そして、いつも同じ人だけが負担を負っている場合もある）グループメンバー全員が同じ評価であり、そうした評価により金銭面で苦勞している学生の将来の進路や今後の学びに大きな影響を与えてしまうことに、納得がいかないし、それで本当に自分の学びや将来への道に影響が出て、道が閉ざされるようなことがあれば、私は大学院に通う自分

を後悔してしまうと思う。共同レポートに取り組むことは、とてもよい学びになると感じているが、それと評価は別物にしてほしい。覚悟を決めて大学院に学びにきている学生のためにも、評価は個人についての評価にして、その人の頑張りをちゃんと見てほしい。

②中国の留学生の方々是非常に一生懸命学習していらっしゃいますが、同じ読み物を読むことは酷なのではと感じました。

③話し合い活動のやり方

④学修コース共通科目については、学生につけたい力や内容が定まっていないように感じる部分もあった。

⑤現職の方や年上の方が多くいるので、いろいろな方の話を聞きたいので、固定の班にするのではなく流動的な班構成が良い。

【本委員会の分析や対応】

両科目ともに、学生に学びの幅や視野が広がる実感を持たせられており、教育課程上の科目設定のねらいは概ね達成されていると見受けられる。個別の授業の進め方や評価方法について、不満を示す意見が認められたため、研究科委員会に於いて報告し、改善或いは誤解を生じさせない丁寧な説明等を求めた。

(2) 「学修コース専門科目」の授業について

【満足している点】

①教科以外の先生方から学べる機会は自分の幅が広がるようで良いと思います。

②一対一の遠隔

③疑問をとことん追求できる。

④専門性をさらに深めることができるほか、他の芸術系の分野に触れることで、専門に活かせる知見を得ることができる。

⑤専門知識や技術を、少ない人数(受講生)で丁寧に教えてもらえる。

⑥人数が少ないので気兼ねなく気になったところを授業を止めて聞くことができる。

⑦自分の知りたいと思っていることを選択し、主体的に学べるから。

⑧疑問をとことん追求できる。

【改善して欲しい点】

①修士論文の作成につながるような内容を扱ってほしい。

【本委員会の分析や対応】

学生自身の専門分野や近接領域について、内容及び授業形式の両面で充実した学びの機会を提供できているものと判断される。自身の修士論文作成と直結した内容を求める意見が一件寄せられたが、授業科目「課題研究Ⅰ・Ⅱ」を充実させると同時に、それ以外の授業については学生に対し学修の意義を明らかにする工夫も必要であると考えられる。

(3) 研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について

【満足している点】

①ほとんどリモートで登校していないので現段階ではお答えできません。

②Wi-Fi環境がある。

③個々に集中できる学習スペースがある。

④サポートしてくれる先生と、いつでも研究を進めることができる環境がある点

⑤研究を進めるに当たっての設備がしっかりとある。

【改善して欲しい点】

- ①自由に使えるプリンタがほしい（紙やインクは自分で補充するでもよい）。
- ②トイレを綺麗にして欲しいです。

【本委員会の分析や対応】

寄せられた意見について、総務係・会計係及び研究科執行部に報告し、善処を依頼した。

（４）研究成果の口頭発表（但し、修士論文発表会を除く）に係る指導や支援について

【満足している点】

- ①日々励ましていただいています。
- ②充実したゼミ
- ③指導教員が親身になって御指導してくださっている。
- ④色々研究や抄録に助言をいただけている点
- ⑤自分が納得するまで話し合うことができている。

【改善して欲しい点】

- ①改善指導が曖昧
- ②場当たりのように感じる。修士論文の作成に向けて系統立てて研究できるように補助してほしい。

【本委員会の分析や対応】

概ね良好な指導がなされていると言える。寄せられた改善点については、研究科委員会で報告し、改善或いは誤解を生じさせない丁寧な指導を求めた。

（５）研究成果に関する論文執筆（但し、修士論文を除く）に係る指導や支援について

【満足している点】

- ①添削
- ②指導教員が親身になって指導してくださる。
- ③迅速に対応してくださる点

【改善して欲しい点】

- ①改善指導点が曖昧
- ②必要な情報を提供してほしい（実践の方法、分析の仕方など）。

【本委員会の対応】

概ね良好な指導がなされていると言える。寄せられた改善点については、前項同様、研究科委員会で報告し、改善或いは誤解を生じさせない丁寧な指導を求めた。

（６）研究成果としての作品創作・演奏・競技等に係る指導や支援について

※【満足している点】・【改善して欲しい点】ともに記入なし。

（７）その他、大学院での学修や生活全般についての意見や要望

・奨学金がいつ出るかの連絡がまったくないなど、日々経済面で緊張した生活をしているため、経済支援についての情報や対応、せめて情報解禁だけでも、できるだけ早くしてもらえるととても助かるし、心構えができる。

【本委員会の分析や対応】

学生係に意見を報告し、対応を依頼した。

4. おわりに

アンケート回答率の向上が例年の課題でありながら、今年度も目立った改善をなし得なかった点は反省したい。新型コロナウイルス感染症が終息し、恒常的な対面授業実施に復した際には、授業時に回答時間を確保することも一案かと考える。

本章冒頭に述べた通り、今回のアンケートは感染症対策下の学修という特殊状況を考慮し、学生の困難等を把握すべく前倒して実施された。結果的には、種々の制約下にも関わらず、概ね例年同様の学修を行なっている様子が窺われた。これには、本専攻に関わる教職員及び学生それぞれに試行錯誤があり、尽力した結果であろうかと思われる。一方で、困難に直面した学生の声を拾い切れていない懸念もあり、後期に於いては例年のアンケート調査に代えて「院生・教職員懇談会」を設定する運びとなった。次章に報告したい。

6章 令和2年度教育学研究科教育実践総合専攻「院生・教職員懇談会」

1. はじめに

前章「4. おわりに」で述べた通り、今年度は学生の声をより丹念に拾い上げる必要を考え、「院生・教職員懇談会」（以下、懇談会と略記）の場を設けることとした。

2. 懇談会実施の概要

日 時：令和2年11月16日（月） 10時30分～11時40分

場 所：第2講義棟3階 講義室C

周知方法：manabaでコースニュースを配信、ポスター掲示

出席者：

（教員）：濱崎専攻長、前田（晶）委員長、石原委員、大淵委員、片岡委員、日隈委員

（事務職員）：田邊総務係員、清水学生係員

（院生）：学校臨床系1名、人間発達系2名、生活・健康系1名、言語・社会系1名 ※参加学生のうち2名は留学生

次 第：

1. 趣旨説明
2. 教育改善委員会委員長の挨拶
3. 出席者の自己紹介
4. 全体による意見交換 ※当初設定した個別相談の希望者なし。
5. 本日の総括

3. 院生より出された意見及び教職員による回答・助言（「→」以下が回答・助言）

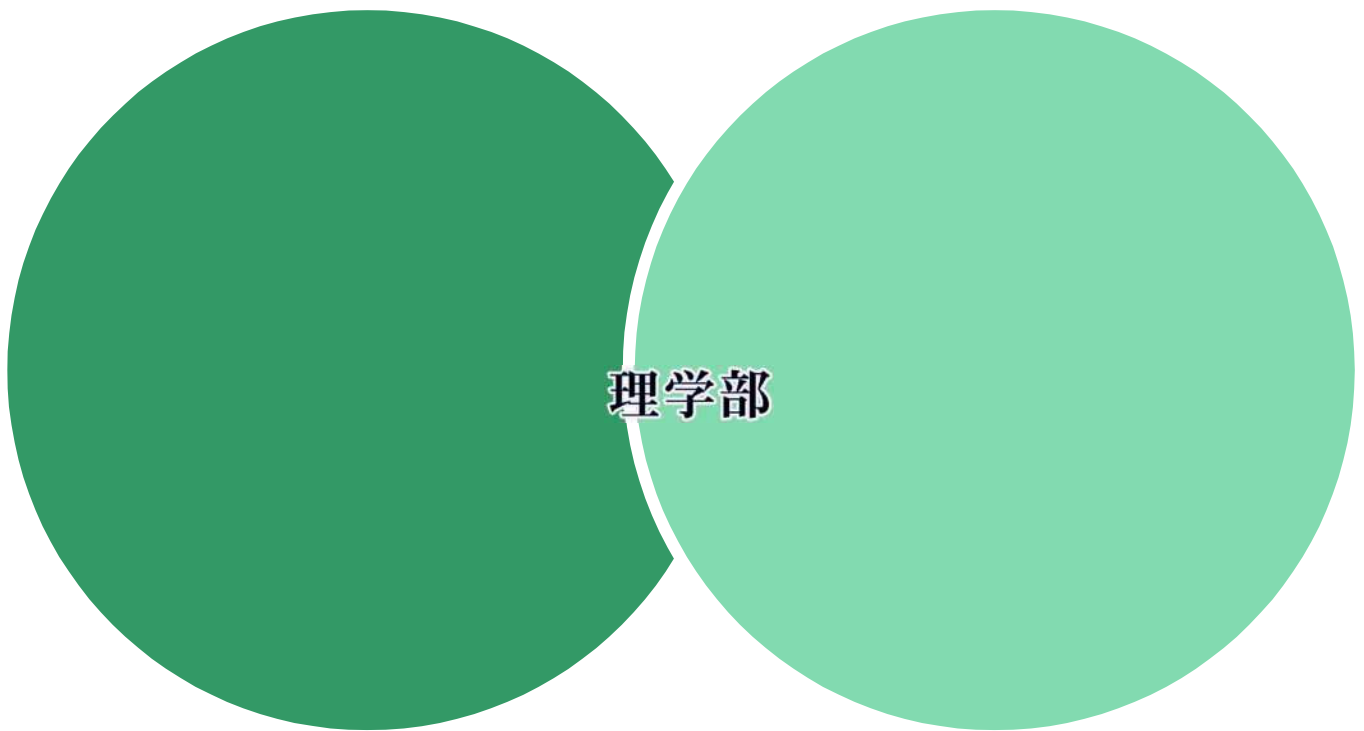
1. 学内で市価（10円/枚）より安価にコピーやプリントアウトができるよう工夫して欲しい。研究に使用する資料や講義資料のコピー、プリントアウトに伴う出費に負担感がある。



- 研究科長及び事務部と相談し、必要に応じて研究科委員会で対応を協議する。
2. 奨学金を始めとした学生支援の情報提供を充実させて欲しい。
- 大学ホームページの「学生生活」を開くと、各種情報が掲載されているので随時確認するよう勧める。
- 一斉メールで情報提供されるので遺漏なく確認して欲しい。
- 日本人学生は学生係、留学生は教務係で相談を随時受け付けている。
- 各種奨学金の応募書類作成についての助言、採択率等の情報提供が可能となるよう検討を進めたい。
3. 中国の学校等で実地調査を行うに当たり、研究科より紹介状を発行して欲しい。学生個人でアンケートへの協力依頼を出したが、門前払いにあうことが続いたため。
- 研究科長と相談し、必要に応じて研究科委員会で対応を協議する。
4. 年度（学期）当初に行う manaba を始めとした各種ツールのガイダンスを充実して欲しい。特に学部が鹿大以外の場合、各種ツールに慣れておらず、学期当初に戸惑いがあった。
- 来年度以降の改善に繋げたい。
5. 日本の先行研究の調べ方、文献の入手方法に困難を感じる。
- 附属図書館のレファレンスコーナーの活用も一案であることを伝える。
6. 研究上の支援能力のあるチューターをつけて欲しい。生活面での支援は不要でも、論文執筆時のネイティブチェック等を依頼できるチューターが必要。
- 次の学期に向けて準備したい。但し、人材の確保が問題となる可能性がある。
7. 教員より修士論文作成に係る研究の現況（主にハード面での不自由の有無）について質問し、参加学生より概ね問題無いとの回答を得る。但し、オンライン講義の副作用として学生同士の繋がりが希薄であり、支援が必要であることを確認した。

4. おわりに

学生の人数5名は、決して多いとは言えないものの、各学修系及び留学生の参加を得られたことは、意見聴取対象の多様性確保の点で良かった。また、教職員、学生の双方にとって実に有意義な取り組みとなった。教職員としては、記述式アンケートよりも、より多方面にわたる詳細な意見を寄せてもらうことができたし、学生としては幾つかの問題点についてその場で解決やその糸口を得られる利点があった。本専攻は、基本的にはあと1年の設置期間を残すのみである。来年度も懇談会を実施し、学生の学修をより充実したものとできるよう関係各位の協力を仰ぎたい。



理学部

令和2年度理学部 FD 活動報告書

理学部 FD 委員会委員長 内海 俊樹

令和2年度に理学部で実施した FD 活動の概要と課題点などについて、次の順で報告する。

1. 学生による Web 授業評価アンケート（期末:7月、1月）
2. FD 講演会(令和2年12月、令和3年2月)
3. 学生・教職員の FD 活動への参加状況
4. その他 FD 委員会での取り組み

尚、令和2年度は、以下の計6回の理学部 FD 委員会を開催し、各プログラムを担当する FD 委員の協力のもと、理学部教員による FD 活動を実施した。教員の皆様のご協力と、Web アンケート処理などに対応して下さった事務職員の皆様に心より感謝してお礼の言葉としたい。

理学部 FD 委員会会議開催状況

- 第1回 令和2年5月8日～令和2年5月12日（メール会議）
- 第2回 令和2年5月25日～令和2年5月27日（メール会議）
- 第3回 令和2年6月26日（対面開催）
- 第4回 令和2年9月2日～令和2年9月7日（メール会議）
- 第5回 令和2年1月7日～令和3年1月15日（メール会議）
- 第6回 令和2年3月23日（対面開催）

令和2年度 鹿児島大学理学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長 内海 俊樹

委員 近藤 剛史 数理情報プログラム

委員 野澤 和生 物理・宇宙プログラム

委員 児玉谷 仁 化学プログラム

委員 上野 大輔 生物学プログラム

委員 北村 有迅 地球科学プログラム

理工学研究科及び理学部の改組に伴い、令和2年度より研究科は1専攻5プログラム、学部は1学科5プログラム体制へと移行した。FD委員は各プログラムの学務委員が担当し、理学科長がFD委員会委員長を務めることとなった。従って、改組後の理学部FD委員会の構成員数は、6名となった。また、令和2年度は改組初年度ということもあり、理学部長補佐・宮本句子教授がFD委員会にオブザーバーとして参加した。

1. 学生による授業評価アンケート

理学部における授業評価アンケートの目的は、学生による授業評価を通じて、授業担当の各教員が自らの授業の改善の手がかりとすること、さらに、その活動を通し学科のカリキュラム等教育システムの改善につなげることにある。受講学生の率直な声を担当教員にフィードバックすることで、個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものにすることができれば、理学部での教育をより充実したものへと改善することができる。

令和2年度も前年度に引き続き、manabaを利用した授業アンケートを実施した。manaba授業アンケート項目は、昨年度から一部変更して13項目とし、以下に示すような内容とした。

授業のわかりやすさについて

1. 1先生の説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。

1. わかりやすかった
2. わりとわかりやすかった
3. ややわかりにくかった
4. わかりにくかった

1. 2先生の声は聞き取りやすかったですか。

1. 聞き取りやすかった
2. わりと聞き取りやすかった
3. あまり聞き取りやすくなかった
4. 聞き取りやすくなかった

1. 3総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。

1. わかりやすかった
2. わりとわかりやすかった
3. ややわかりにくかった
4. わかりにくかった

授業運営について

1. 4シラバス（講義要項）に即した内容の授業が行われていたと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない

1. 5授業の開始時間、終了時間は守られていたと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない

1. 6総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。

1. よかった
2. わりとよかった
3. あまりよくなかった
4. よくなかった

学習成果について

1. 7あなたは講義中に熱心に受講したと思いますか。

1. そう思う
2. わりとそう思う
3. あまりそう思わない
4. そう思わない

1. 8 受講の結果、新しい知識を得ることができましたか。

1. できた
2. わりとできた
3. あまりできなかった
4. できなかった

1. 9 受講の結果、新しいものの見方や考え方を得ることができましたか。

1. できた
2. わりとできた
3. あまりできなかった
4. できなかった

1. 10 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。

1. よかった
2. わりとよかった
3. あまりよくなかった
4. よくなかった

授業の難易度と進度について

1. 11 授業の難易度はあなたにとって適切でしたか。

1. 適切であった
2. わりと適切であった
3. あまり適切ではなかった
4. 適切ではなかった

1. 12 授業の進み方のペースは、あなたにとって適切でしたか。

1. 適切であった
2. わりと適切であった
3. あまり適切ではなかった
4. 適切ではなかった

1. 13 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。

1. 適切であった
2. わりと適切であった
3. あまり適切ではなかった
4. 適切ではなかった

令和元年度に引き続き、令和2年度の授業アンケートは、一部の不定期実施科目、集中講義を除いて、教職専門科目、非常勤講師担当科目を含むほぼすべての科目を対象として、manaba を使用した Webアンケートで実施した。アンケートの設問は、先に示したとおりである。このアンケートは、前期、後期の期末に、10 日から14 日程度の期間をとって実施した。いくつかの設問については、遠隔授業を対象とした設問としてはそぐわないと考えられるものもあったが、遠隔授業と対面授業が混在して実施されたことを考慮して、削除することなく、そのまま実施した。したがって、学生にとっては、回答しにくかった科目・設問もあったかもしれない。担当教員の任

意で、中間期でのアンケートも実施された。あるいは、小テストに自由記入欄を設けて、授業に関するリクエストやコメントを記入してもらうなど、随時、受講学生の意見に対応できるような工夫もあった。中間アンケートについては、共通フォーマットを準備してはどうかとの提案も寄せられたが、科目ごと・教員ごとに自由に設問を設定できるように、また、アンケートの結果をタイムリーに授業に反映することができるように、学部共通のフォーマットを準備することは見送ることにした。通常の授業アンケートは、授業終了後に集計して情報を提供するため、次期あるいは次年度の授業改善に資することはできても、アンケートに答えた受講生自身がそのメリットを享受して、アンケートの意義を実感することはない。一方、中間アンケートについては、授業担当教員が、アンケートに対する対応を実践することにより、受講生自身が、アンケートに回答したメリットを授業を通して享受することができるし、アンケートの重要性を容易に理解できる。アンケートに回答することの重要性を認識することにより、各種実施されるアンケートへの回答率の向上にも繋がるのが期待できる。しかし、中間アンケートを実施している教員は、そう多くはないと予想される。今後の期末授業アンケートをはじめとする各種アンケートの回収率の向上を図るためには、中間アンケートの実施率を増やし、その結果を、リアルタイムで授業に反映させることは重要な取り組みとなる可能性がある。

manaba 上で回答された期末授業アンケートは、それぞれの教員が、当該年度のみならず、年度を遡って確認できるようになっており、担当している授業アンケート結果を複数年に渡って参照しつつ自己分析を行うことが可能である。理学部としては、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部およびプログラム・学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。また、ベストティーチャー賞候補者選出のための参考資料として利用することも可能である。ただし、令和2年度については、遠隔授業に関する設問としてはそぐわないと思われる設問（例えば、1.2や1.5など）は、参考としないこととした。

理学部では、平成13年度より授業評価アンケートを実施しているが、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことと決めている。これは、授業改善以外の目的にアンケートを転用することは、授業改善の面では逆効果であるという専門家の意見とも一致している。

表 1 令和2年度期末授業アンケート状況

	前期	後期	通年
科目数（科目）	102	116	218
延べ受講人数（人）	5230	5279	10509
延べ回答総数（人）	2171	1746	3917
回答率（%）	41.5	33.1	37.3

令和2年度の期末授業アンケートの回答状況を「表1 令和2年度期末授業アンケート状況」にまとめた。アンケート回答数は、前期2171件、後期1746件だった。昨年度は、それぞれ1526件及び1771件だったことから、前期は、昨年度の142%、後期は、昨年度の99%、通年では昨年度の120%と、高い水準ではないものの向上が見られた。しかし、一昨年度と比較すると、通年でも一昨年度の76%と、低い水準であることに変わりはない。回答率をみると、昨年度は、前期14.9%、後期22.1%とであったのに対し、令和2年度は前期41.4%、後期33.1%と改善が見られた。しかし、後期の回答率が低下していることについては、注意を払う必要がある。アンケート疲れの兆候かもしれないので、令和3年度の前期アンケートの回答率が低下することのないように、理学部教員、及び、学生への協力依頼を徹底する必要がある。

一昨年度から、紙媒体によるアンケートからWebアンケートへと変更になった。一昨年度のFD報告書によると、「Webアンケートでは大きく回答率が低下することが危惧されていた。」との記載がある。また、昨年度の報告書では、

- ・委員長の途中交代などによる継続した働きかけの不足
- ・複数のアンケートによるアンケート疲れ
- ・授業ごとのアンケートの取り方の違いによって生じる回答率のバラツキ

が回答率に大きく影響した可能性がある」と分析している。授業時間中にアンケート回答のための時間を確保し、回答を促すことができれば、回答率の改善は大いに期待できる。これまで、そのような方法でアンケートを実施した科目は、回答率が高いのが事実である。しかし、令和2年度は、多くの授業が遠隔授業となり、これまでとは大きく事情が異なった。Zoomでのオンライン授業では、授業中に時間をとってmanabaにアクセスさせるのは、ネットワークトラブルなどの懸念や（スマートフォンで授業を受けている場合は）操作性の問題などから実施をみあわせたり、あるいは、オンデマンドの授業の場合は、学生にアンケートへの回答を呼びかけても、なかなか回答に結びつかないなどで、アンケートの回答率の向上に結びつかなかったのではないかと推測できる。IRコンソーシアムの回答率についても、3年生は昨年度の50%と比較すると令和2年度は3年生が40.4%と低かった。これには、令和2年度は、多くが遠隔授業となった事が強く影響したと考えられる。例年、当該学年のほぼ全員が受講する授業などを利用して回答の時間を設けたり、対面で回答を呼びかけたりするが、令和2年度は、そのような機会を設けることが出来なかった。しかし、高いアンケート回答率の学部もあることから、理学部での実施方法については、検討の余地があるものと考えられる。IRコンソーシアムの認知度はどの程度であろうか？認知度の低さが、学生の関心が低いことのひとつの要因かもしれない。

令和元年度から、アンケートの設問は、「授業のわかりやすさについて」、「授業運営について」、「学習成果について」、「授業の難易度と進捗について」の大きく4つのカテゴリーを設けて実施している。それぞれの項目のまとめに該当する設問は、次のとおりである。

1. 3 総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。

1. 6 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。
1. 10 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。
1. 13 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。

令和2年度のアンケートの結果をもとに、これらの設問に対する回答を「表2 各項目まとめの問いに対する回答割合」にまとめた。設問に対する回答は「1」から「4」の4段階評価としており、「1」が評価が最も高く、数値が大きくなる程、評価が低いことを示している。

表2 各項目まとめの問いに対する回答割合

設問		前期（回答数：2171人）				後期（回答数：1746人）			
		1	2	3	4	1	2	3	4
1. 3	回答数（人）	850	926	311	84	894	663	134	55
	回答割合（％）	39.2	42.7	14.3	3.9	51.2	38.0	7.7	3.2
1. 6	回答数（人）	1132	811	179	49	1090	526	96	34
	回答割合（％）	52.1	37.4	8.2	2.3	62.4	30.1	5.5	1.9
1. 10	回答数（人）	867	1062	211	31	799	777	133	37
	回答割合（％）	39.9	48.9	9.7	1.4	45.8	44.5	7.6	2.1
1. 13	回答数（人）	901	992	210	68	915	667	119	45
	回答割合（％）	41.5	45.7	9.7	3.1	52.4	38.2	6.8	2.6

いずれの設問に対しても回答「1」と「2」で80%以上を占めており、回答を「4」とした学生は多くても4%に達することはないと判断することができる。令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の措置として、多くの授業で遠隔授業が実施された。特に年度始めは、遠隔授業に対応するための授業の運営・計画の大幅な変更、授業資料の準備などに多くの教員が時間を費やし、また、学生と教員の双方とも不慣れた遠隔授業で戸惑う事も多かったと推察される。さらに令和2年度は、理学部の改組後初めての学生を受け入れ、新しいカリキュラムがスタートした年であり、旧課程のカリキュラムとの同時進行であるので、予想外の混乱が発生することもあるという懸念もあった。しかし、授業アンケートの結果を見る限りは、多くの教員の努力により、例年と変わらない教育効果をあげることができたのではないかと考えられる。設問1.3「総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。」に対する回答を前年度と比較してみよう。「3」または「4」と回答した（より低い評価をした）学生の割合は、令和元年度は、前期19.1%、後期20.2%であったのに対し、令和2年度は、前期18.2%、後期10.9%であった。このことは、科目によっては、遠隔授業の方がむしろ教育効果を高める可能性があることを示しているのかもしれない。また、後期の方がより低い値を示しており、教員が遠隔授業に慣れてきたことと、遠隔授業についての実施法や教授法に関する情報が蓄積したこと、あるいは、情報交換が活発に行われた結果を反映しているのかもしれない。設問1.6の授業の運営に関しては、例年と大差ない割合となっており、遠隔授業が概ね混乱なく実施された事を反映しているものと理解できる。続いて、設問1.10「この授業へのあなた自身の取り組み、この授

業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうか。」について比較してみる。「1」または「2」と回答した（より高い評価をした）学生の割合は、令和元年度は、前期85.7%、後期86.6%であったのに対し、令和2年度は、前期88.8%、後期90.3%であった。これは、多くの授業が遠隔で開講され、レポートなどの課題提出やこまめな小テストの実施などにより、例年よりも多くの学生が、勉学に対する充実感・満足感を得たからかもしれない。設問1.13「総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。」については、「3」または「4」と回答した（より低い評価をした）学生の割合は、令和元年度は、前期14.2%、後期14.4%であったのに対し、令和2年度は、前期12.8%、後期9.4%であり、不満を感じた学生の割合は例年より低かった。これは、学生自身の都合に合わせて授業の動画・資料を繰り返し閲覧したりするなど、オンデマンド授業の特性が発揮された効果のひとつではないかと捉えることができる。今後もしばらくの間は、対面授業と遠隔授業が混在することが予想される。全学的に実施された遠隔授業に関するアンケート、あるいは、理学部授業アンケートに書き込まれた学生のコメントなども丹念に拾い上げ、今後の授業展開に反映させることが重要であろう。

アンケートの回答結果を示すレーダーチャートを作成して教員へ返却することは、令和元年度より行わなくなった。これにあわせて、令和2年度からは、授業担当教員が自身で授業アンケートを集計することとした。このことにより、アンケートの内容を担当教員が詳細に分析するきっかけとなれば良いが、授業改善の作業、特に、授業改善報告書（理学部では「授業アンケートの自己分析と今後の対応」）の提出がなおざりになることが予想された。そこで、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出状況を平成30年度（レーダーチャート配布）と令和2年度（レーダーチャート配布なし）で比較し、その結果を「表3 『授業アンケートの自己分析と今後の対応』の提出状況」にまとめた。

表3「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出状況

	平成30年度			令和2年度		
	前期	後期	計	前期	後期	総計
提出科目数	28	27	55	29	34	63
提出教員数	19	18	37	19	16	35

令和2年度の提出教員数は、平成30年度と比較すると2名減となっているが、これは、退職した教員数を考慮すると、ほぼ同数と見て良いであろう。提出された授業科目数は、55科目から63科目へと増えている。このことから、レーダーチャートを作成して教員へ返却しなくとも、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出に影響はないと考えられる。ただし、開講科目数や教員数を考えると、提出科目数、提出教員数ともに少なく、まだまだ改善の余地はある。「授業アンケートの自己分析と今後の対応」のフォーマットの見直しなども必要であろう。

2. FD 講演会

令和元年度の理学部 FD 講演会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、令和 2 年 3 月にまで開催を先送りして開催の機会を窺っていたが、ついにはやむを得ず開催中止となった。そのような事態も考慮し、令和 2 年度の FD 講演会は、当初よりオンライン、あるいは、ハイブリッド方式での開催を視野に入れて計画し、予定通り開催することができた。

(1) 理工学研究科・理学部・工学部合同 FD 講演会

令和 2 年度の理工学研究科・理学部・工学部合同 FD 講演会は、理学系委員が世話係となって、令和 2 年 12 月 16 日（水）13 時 30 分～14 時 30 分に開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から 3 会場に分かれ、各会場を Zoom で結んだリアルタイムオンライン形式で実施した。講師として、広島大学准教授 高大接続・入学センター 副センター長の竹内正興氏をお招きした。講演題目は、「大学入学者選抜方法の検証・改善と学生確保に係る広報活動」であった。

本理工学研究科、理学部、工学部は改組を終え、令和 2 年度に新体制での最初となる学生を迎え入れたばかりである。新学習指導要領での入試となる 2025 年度入試に向けた入試改革、あるいは、令和 2 年度学部入試や大学院への進学状況などを鑑みると、選抜方法の改善や改組後の学部・研究科についての広報活動などが特に重要な課題と考えられる。一方、令和 2 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大という、これまでに我々が経験したことのない状況下におかれ、オープンキャンパスをはじめとする広報活動は、軒並みオンライン開催となった。オンライン開催は、遠方の高校生にとっては参加しやすいなどのメリットもある反面、大学・受験生の双方にとって不慣れな環境での情報収集となり、入試に関する広報についても制約を余儀なくされた。本講演会は、このような理工学研究科、理学部、工学部が共通して抱える課題の解決に資することを目的として企画した。講師の広島大学・竹内准教授は、2014 年 10 月から 2020 年 3 月まで、鹿児島大学アドミッションセンター専任の准教授として、鹿児島大学の入試広報・入試改革を担当されたご経験もあり、本学の事情にも通じておられることから講演をお願いした。

講演は、数値データと詳細な解析に基づいた説得力のある内容であり、質問に対しても非常に丁寧に回答いただいた。時間の都合上、当日の会場にて受付けることができなかった質問については、取りまとめて竹内准教授に回答をお願いし、後日、質問と回答を全教員にメールで配信するという形式をとった。講演内容については、本報告書の理工学研究科のページを参照されたいが、多くの重要なお示唆を頂いた非常に有益な講演会であった。



講演会当日は都合がつかない教員がいることも予想されたため、講演は録画し、manaba を利用してオンデマンド視聴も可能とした。また、学内の他部局にも開催案内を通知し、事前申し込みにより当日の視聴を可能とした。本講演会の参加者は、理学系教員 43 名、工学系教員 90 名、その他（他部局教員、及び、事務職員）20 名の合計 153 名であった。

（２）理学部 FD 講演会

令和 2 年度の理学部 FD 講演会は、令和 3 年 2 月 19 日（金）13:30～15:00 にオンライン形式で開催した。講師には、授業改善について様々な取り組みを試行しておられる本学総合教育機構・共通教育センター助教の大野裕史氏を迎え、授業形態や単位評価について議論した。また、本講演会は令和 2 年度の授業の振り返りを目的として、聴講者とのディスカッションの時間を多く取り、講演会自体がアクティブラーニング形式となるように企画・実施した。

令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行によって、社会の様々な枠組みが大きく転換し、大学の授業のあり方も大きく変わった 1 年であった。中でも対面によらない授業への転換は、大学にとって全く新しい挑戦となった。全ての大学教員は、かつてないほどに授業形式や内容に関して考えさせられ、各教員が試行錯誤しながら対応して最適な授業を模索し続けた。本講演会では、教員の試行錯誤の個別事例を集積して共有することで、コロナ 2 年度目に向けたよりよいソリューションの形成に繋げることを目的として、令和 2 年度の総括となるような講演会を意識して実施した。このような社会情勢において、FD 活動は従来以上に実質的な役割を担い、アフターコロナの新しい大学のあり方を形成していくための一助になることが期待されている。また、改組 1 年目の理学部にとっては、初年度の授業を振り返る機会としての意味も大きい。

大野助教の講演は「オンライン授業の 1 年を振り返り」と題され、今年度を含めたこれまでのご自身の取り組みが紹介された。まず、2015 年に数学の授業にアクティブラーニングとして取り入れた「反転授業」についてお話いただいた。学生は、事前に講義内容の動画を視聴するという形式で、講義の時間には「話を聞くということから解放され、応用や演習、ディスカッションに集中する」というメリットがあるとされた。動画のプラットフォームには YouTube を用い、動画作成のポイントとして、一つのトピックについて短い動画を複数用意することが効果的であると紹介された。授業時間には演習やミニテスト、学生同士で教えあうことを実践したという。また、授業支援ボックスについて紹介があった。特に大人数の授業の場合、大量のテスト答案などを OCR で読み込んで manaba に反映させるシステムがあるということが紹介された。さらに、オンラインでの実験の試みについても紹介された。実験に関する基本的解説などを動画で解説する、あるいは、実験自体をヘッドカメラで撮るなどの方法が紹介された。大野助教の問題意識として、授業を工夫すると学生からの授業評価は高くなるが、それが学生のためになっているかどうかとは別問題であるという。また、「対面＋オンライン＋オンデマンドの全てを盛り込んだ授業」の試行と

その結果は、興味深いものであった。どの形式でも出席可としたところ、対面またはオンラインで受講する学生が半分程度で、試験の結果は不合格が多くなったという。

令和2年度を振り返って、出席についてこれまで以上に敏感になったという指摘があった。すなわち、学生のオンライン授業の出席率が高く、教員側も出席に関する質問が多くなった。授業の実質として、「知的情報の提供」についてはICTによってかなりのことが可能である。その一方で、オンラインで実施できないのは、実験・実習やゼミがあげられる。教育の「育」の部分、つまり、直接コミュニケーションによる部分が欠けている。令和2年度の授業のオンライン化は、教員・学生・執行部など大学の構成員の全てが、大学の教育を見つめ直す機会となった。

発表後の質疑応答の時間は30分程度しかとれなかったものの、複数の教員からオンライン授業の取り組みで感じた問題点について率直な意見が出た。従来型の授業でも教員の裁量や個性による多様な授業のあり方が存在していたのであるから、新しい形態になっても特定の正解があるわけではなく、多様なあり方があってよいと考えることが一つのヒントになりえる。学生、教員、大学執行部や監督官庁など、それぞれの立場から様々な指向の考え方が入り乱れる中で、徐々に最適化をはかることが肝要である。教員の立場では、manabaなどの授業支援システムやオンライン配信アプリケーションの多彩な機能について知ること、自分の思い描く授業により近づくことが可能な場合がある。このような新しいノウハウを共有することにより、各教員が裁量・技量を発揮して、授業の質の向上に集中できる余裕が生まれる。この部分をサポートする本企画のようなFD活動が、今後も引き続き重要であると思われる。

本講演会は学内の他部局にも開催案内を通知し、事前申し込みにより当日の視聴を可能とした。本講演会の参加者は、理学部教員31名、その他（他部局教員、及び、事務職員）9名の合計40名であった。（報告：北村 有迅）

3. 学生・教職員のFD活動への参加状況

学生・教職員ワークショップへの参加を含め、各部局のFD講演会や学内・学外の教育関連の講演会への参加は、教員の教育スキルの向上だけでなく、FD活動に対する意識の啓発においても重要である。

令和2年度の常勤教員のFD活動参加率を「表4 令和2年度専任教員のFD参加率」にまとめた。58名の常勤教員のうち51名が何らかのFD活動に参加しており、FD参加率は、FD参加達成目標75%を超える88%であった。この値は、令和元年度の参加率93%には及ばなかったものの、平成30年度の87%と同程度であった。一人で4回以上のFD活動に参加した教員は8名、1回は15名であり、平均は2回であった。残念なことに、いずれのFD活動にも参加しなかった教員は7名であり、プログラムでの偏りも見られた。

表4 令和2年度専任教員のFD参加率

合計参加率		88 % (専任教員 58 名中 51 名参加)
企画別 参加率	理学部FD講演会	52 % (専任教員 58 名中 30 名参加)
	理工合同FD講演会	76 % (専任教員 58 名中 44 名参加)
	授業計画改善	40 % (専任教員 58 名中 23 名参加)
	授業公開・授業参観	2 % (専任教員 58 名中 1 名参加)
	第1回FD・SD合同フォーラム	2 % (専任教員 58 名中 1 名参加)
	第2回FD・SD合同フォーラム	7 % (専任教員 58 名中 4 名参加)
	FD連続セミナー	5 % (専任教員 58 名中 3 名参加)

令和2年度は、理工研及び工学部との合同講演会と学部単独の講演会の二つを開催した。それぞれ参加者数は、44名(76%)、30名(52%)と良好であった。合同講演会は、教授会に先立って開催したため、教授会構成員にとっては時間の都合をつけやすいこともあり、参加者数が多かったと考えられる。教授会構成員以外の教員や部局外の教員のZoomでのオンライン参加もあったことは、講演内容に関する関心が高かったことを示しており、高い参加率の要因のひとつとなった。理学部FD講演会は、2月の平日の午後という多忙な時期・時間帯の開催であったにもかかわらず、30名(52%)の参加があった。これまでの理学部FD講演会への理学部教員の参加率は、高くても35%程度であったことを考慮すると、遠隔授業に関する講演ということで、関心が高かったものと思われる。Zoomでのリアルタイムオンライン配信としたので、自室から聴講できるという気軽さも手伝った可能性もある。開催日は、期末試験、卒論・修論発表会などがひと段落し、大学入試までの間隙をついて設定したため、多忙な中にも、聴講しやすい時間設定だったのかもしれない。また、本講演会は、令和2年度の授業の振り返りを目的として企画し、聴講者とのディスカッションの時間を多く取って講演会自体がアクティブラーニング形式となるように実施した。このような実施形態は、オンラインでの講演会としては初めての試みであったが、非常に活発に意見交換・情報交換がなされ、理学部教員の問題意識の高さや関心の強さが現れた講演会であった。全学的にも遠隔授業に関する内容のFD連続セミナー、あるいは、FD・SD合同フォーラムが開催されていたが、残念ながら、これらの企画への参加率は高くても7%と、予想外に低かった。内容は遠隔授業に関するものなど、コロナ禍という異常事態において関心が持たれるようなタイムリーなものが多かったが、授業時間帯と重なったりするなど、理学部の多くの教員にとっては、聴講を見送らざるを得ない時間帯であったのかもしれない。

授業計画改善は、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出という方法で実施している。令和2年度は23名の教員から提出があった。授業公開・授業参観は、1名というこれまでにない低い参加であった。しかし、これらの数値は、理学部の教員が授業の改善に対する関心が低いことを表している訳では決してないと考えている。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止

のための措置に対応するために、授業の実施形態、内容ともに短時間で検討して実施せざるを得ない状態が継続し、大きな困難を強いられた。また、成績の評価についても、これまでにない分量のレポートを評価するなど、多大な時間を必要とした。成績や授業アンケートの結果を分析し、今後の授業に活かす方策などを検討しなかったとは考えにくく、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」を作成して提出するまでには至らなかった教員が多かったのではなかろうかと想像する。成績評価の分布についても検討し授業改善に活用するとなれば、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出依頼・提出締切の時期についても検討の余地がありそうだ。授業公開・授業参観についても、教員の意欲が低下したとは考えにくい。例えば、遠隔授業については、授業の実施や評価方法などについて、日常的に情報交換が行われていた。対面で開講せざるを得ない実習などについては、三密を避けながらの実施方法について、事前にアイデアを出し合ったり、あるいは、開講中の実験室で現状を見ながら改善点について意見交換が行われたりしていた。このような授業改善に繋がる地道な活動は、報告書の提出には至らなかったものの、むしろ例年より頻繁に実施されていたのではないだろうか。

4. その他 FD 委員会での取り組み

先に述べたとおり、理学部は改組に伴って体制が大きく変化した。また、「鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項」の一部改正もあった。理学部 FD 委員会では、「鹿児島大学理学部ファカルティ・ディベロップメント委員会規則」、及び、「鹿児島大学理学部におけるベストティーチャー賞の実施に関する申合せ」を見直して、これらの変化と齟齬が生じないように、それぞれの一部を改正した。

理学部 FD 委員会では、内部質保証システムを構成する一つの要素として、成績評価の分布に関する情報を教員全員で共有し、それぞれの自己点検評価や授業改善に活用するための手順を検討した。まず、成績評価の分布表を全教員に配布し、プログラム会議にて閲覧・確認することとした。各プログラムの FD 委員は、FD 委員会にてプログラム会議の結果を報告し、その内容を FD 委員で相互に確認することとした。さらに、FD 委員会議の結果を教授会にて報告・確認することとした。各教員は、成績評価の分布を確認するにとどまらず、自己点検評価や授業計画改善に活用することが重要である。理学部では、授業計画改善書に対応するものとして「授業アンケートの自己分析と今後の対応」というフォーマットを準備しており、これを期末試験終了後の一定期間内に提出するようにしている。令和 2 年度は、このフォーマットの自由記述欄に「成績評価の分布」についても記述できるようにした。今後、このフォーマットについても検討の余地があると考えている。

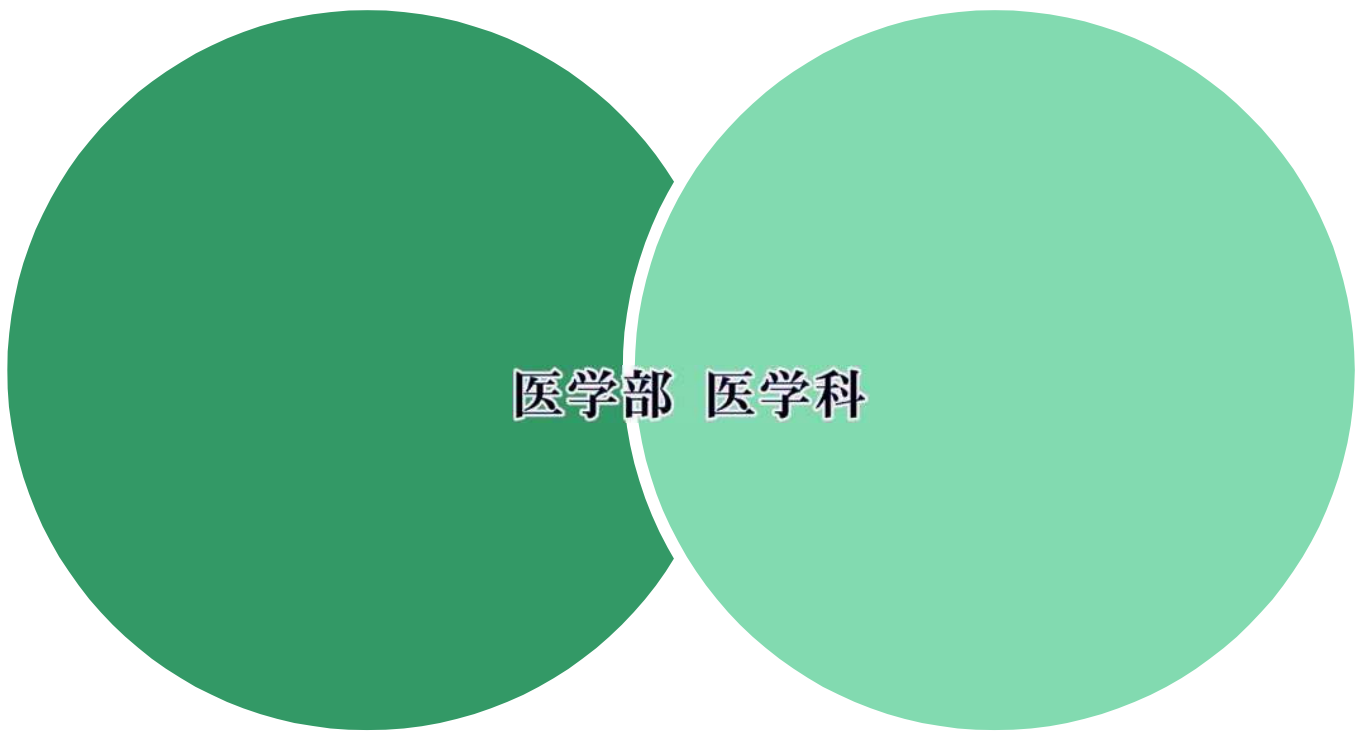
大学 IR コンソーシアム・アンケート令和元年度実施分の結果について、分析・評価した。課題として挙げた点など、簡単にまとめた表を次ページ以降に記し、令和 2 年度理学部 FD 活動報告とする。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和元年度実施分）の分析について

理学部

<p>評価する点</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実験室の設備や器具、コンピュータの施設や設備に満足している学生が多い。 2. 授業課題のために図書館の資料を利用した学生が多い。 3. 異文化の人々と協力する能力、地域社会が直面する問題を理解する能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、時間を効果的に利用する能力が向上したと感じる学生が増えている。 4. 卒業後に就職するための準備の度合いが、上級生は大きく増えている。 5. 高校3年生当時の学習経験として、「H. 授業以外に興味のあることを自分で勉強した」と回答した学生の割合は、全国や本学の平均値から 10%以上高い。この傾向は、安定して続いている。
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 上級生で将来の見通しを持っていない、あるいは、見通しはあるものの何をすべきかわからない学生の割合が漸増傾向にある。 2. 新生の7割以上が授業をつまらなく感じている。 3. 一般的な教養や分析力・問題化帰結能力専門分野の知識、批判的に考える能力が低下したと感じている学生が増えている。 4. 教員との面談時間がほとんどない学生が、上級生でも6割以上と多い。 5. インターネットの使いやすさには不満を持つ学生が20%と比較的多い。
<p>課題への 具体的な対応案</p>	<p>課題1は、進学が漸増傾向にあることとリンクしているかを把握する必要がある。課題2と3がリンクしているかどうかも重要である。課題2は、授業する側と受ける側の意識・感覚の乖離が原因である可能性もある。課題4も教員との意識の乖離が原因なのか、あるいは、学生側が相談する術を知らないのか、不明である。いずれにしても課題1～4はコンソーシアムに共通した課題であり、重要な問題を孕んでいる。原因を探るアンケートなど、踏み込んだ調査が必要なのではなかろうか。学部のホームページに相談窓口を設定し、ネットで簡単に面談の申し込みができるような体制を整えるなどしてもいいかもしれない。課題5は、接続スポットの増設などが必要であり、対応は進行中と理解している。入学前に新生のネット環境を把握し、遠隔授業に対応可能な環境整備をサポートする体制の準備も重要であろう。</p>

<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p>「評価する点」の5については、昨年度「自主的に学ぶ姿勢を大学の教育体制の中で、伸ばす取り組みができているのか検証が必要」との提言があったが、具体的には進んでいない。「課題と考える点」の2については、昨年度も課題とされており、対応案で述べたように原因を探る必要があるが、対応は進んでいない。理学部では、委員の途中交代もあり、引き継ぎがうまくできていなかったことも対応が進まなかった要因の一つである。</p>
------------------------------------	---



令和2年度医学部医学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学部医学科では、1)『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』、2)『学内講師による医学教育講演会及び研修会』を実施した。2)ではとくに、一般社団法人日本医学教育評価機構（以下、JACME）による医学教育分野別評価受審の結果を受けて、今後の医学教育の改善に資するために、改善指摘事項に挙げられた「診療参加型臨床実習」に関連する医学教育研修会を実施した。上記2つの活動計画に基づき、中期目標及び年度計画に掲げられた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」の達成を目標に定め、令和2年度のFD活動を行ったので報告する。

2-1. 学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目（実習を含む）を対象とした学生による授業評価アンケートを平成23年度から実施しており、令和2年度も同様に実施した。まず1年生から4年生までの専門教育科目48科目（1科目の中で複数回アンケートを行っている科目あり）については、学習と授業に対するアンケート用紙を学務課医学教務係から科目責任者に配布し、科目責任者が試験時（試験を実施しない科目については授業最終日）にアンケートを実施した。

なお、授業評価アンケートの実施方法について医学部FD委員会医学科部会において検討を行った。紙媒体による実施だけではなく、学習管理システム「manaba」を利用して実施することができるように整備を行い、令和3年度から運用する予定である。

1年生から4年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価（4項目）、科目について（8項目）、講師の指導について（5項目）、全体評価（1項目）の各項目について5段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。また、令和2年度は遠隔授業に関する評価項目（3項目）を新たに設けた。

なお、結果は医学教務係が速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者とコースコーディネーターに報告した。

次に5年生の臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケートの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの臨床実習ユニット（診療科をグループに分けたもの）での実習について、実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、6年次 OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは、自身の学習に対する評価（6項目）、実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）の各項目について3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、アンケート用紙は記名式で、学生の記載後は学生自身によって学務課医学教務係に届けられ、教員や指導医の目に触れることが無い状況で実施した。

2-2. アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部 FD 委員会医学科部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1年生から4年生までの専門教育科目全48科目中41科目（内、アンケートを2回実施した科目が1科目、3回実施した科目が1科目、計44回実施）から計3337枚（平均76枚/科目）、5年生の臨床実習では前期（3月下旬から9月中旬）376枚、後期（9月下旬から翌3月上旬）286枚の計662枚（平均83枚/臨床実習ユニット）、6年生の選択実習では324枚の回答が得られた。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1年生から4年生までの専門教育科目（【別表1】参照）においては、令和元年度の評価平均が3.68～3.96であったのに対し、令和2年度は3.83～3.98となっている。5年生の臨床実習（【別表2】参照）では令和元年度の評価平均が4.04～4.22であったのに対し、令和2年度は4.14～4.35、6年生の選択実習（【別表3】参照）では令和元年度の評価平均が4.20～4.33であったのに対し、令和2年度は4.08～4.31となっており、低学年のうちは自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況ではあるが、学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。

また、全体的に見ると、令和2年度は令和元年度と比較して自己評価が高くなっている。

なお、臨床実習においては診療参加型実習の比率を増やしていくことが求められている中、学生の回答における診療参加型の割合は5年生の臨床実習では令和元年度が36.1%に対して令和2年度は39.9%と増加したが、6年生の選択実習では令和元年度の44.0%に対して令和2年度は37.1%と減少した。選択実習の見学・講義型の割合は、令和元年度が35.9%だったのに対して令和2年度は54.1%と大幅に増加している。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、多くの診療科が見学・講義型の実習を実施したことによるものと考えられる。引き続き、診療参加型実習推進のための取り組みが重要と考える。

【別表1】授業評価アンケート集計結果(1年生～4年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	該当なし	評価平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	0.2	2.9	21.2	49.5	26.2		3.89	0.73
教科書や参考文献で広く、深く学習した	1.0	4.2	24.7	45.7	24.3		3.88	0.79
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	0.2	2.4	22.1	49.3	25.8		3.98	0.75
グループ学習ではグループのために貢献した	0.9	1.7	19.9	31.7	20.4	25.4	3.83	0.83
科目について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	0.4	1.9	27.3	45.1	25.3		3.93	0.78
学習内容は有用である	0.5	2.7	15.7	45.0	36.1		4.17	0.74
効果的な学習方法が用いられた	1.4	3.4	20.3	46.7	28.1		3.97	0.81
他の授業との関連や発展がよく理解できた	0.7	3.1	18.4	47.3	30.5		4.03	0.78
科目の教育目標に沿った評価(範囲、内容、レベル)だった	0.6	2.5	19.6	47.9	29.4		4.02	0.77
学習した領域への興味、関心が高まった	0.8	2.7	16.4	46.4	33.7		4.08	0.79
難易度は	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい	該当なし	評価平均	SD
	7.9	19.2	58.3	10.6	4.1		2.83	0.78
時間数は	1 長い	2	3 適切	4	5 短い	該当なし	評価平均	SD
	2.1	5.3	76.5	13.2	2.9		3.09	0.58
講師の指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
講義・実習等がよく準備されていた	1.4	5.0	18.2	43.0	32.4		3.99	0.85
理解を促すための工夫がされていた	1.8	4.0	19.0	43.9	31.2		3.98	0.85
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	1.9	3.6	21.3	40.8	32.4		3.97	0.85
学習領域の講師として適切であった	1.3	2.2	17.8	43.4	35.3		4.11	0.79
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	1.5	3.2	19.8	38.6	30.6	6.3	3.98	0.86
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	該当なし	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	1.2	2.7	19.7	41.3	35.0		4.04	0.83

【別表2】授業評価アンケート集計結果(5年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	1.5%	8.0%	52.1%	38.4%		4.27	0.67
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.8%	10.7%	51.2%	37.3%		4.25	0.67
診療のルールに従って行動した	0.2%	0.5%	9.4%	45.7%	44.3%		4.34	0.68
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.8%	8.2%	46.2%	44.9%		4.35	0.66
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.0%	0.9%	15.6%	52.4%	31.1%		4.14	0.70
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							39.9%	2.08
模擬診療型							20.8%	1.33
見学・講義							39.4%	2.07
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.3%	0.8%	5.3%	35.2%	58.5%		4.51	0.66
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.4%	0.8%	8.5%	32.3%	58.0%		4.46	0.75

【別表3】授業評価アンケート集計結果(6年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.3%	0.6%	15.1%	43.5%	40.4%		4.23	0.74
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.0%	12.7%	43.2%	44.1%		4.31	0.68
診療のルールに従って行動した	0.6%	0.0%	13.0%	41.2%	45.2%		4.30	0.74
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.9%	0.0%	13.6%	39.6%	45.8%		4.29	0.77
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.9%	0.3%	24.2%	38.8%	35.7%		4.08	0.83
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							37.1%	3.45
模擬診療型							12.2%	1.82
見学・講義							54.1%	3.61
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	0.0%	6.5%	24.5%	68.9%		4.62	0.60
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	0.6%	5.3%	25.9%	68.2%		4.62	0.62

2-3. アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集

以前から授業(実習)評価アンケートの結果を各担当教員にフィードバックしていたが、平成28年度からそのアンケート結果等に対する各担当教員からの意見収集を開始した。

実施方法については、授業(実習)評価アンケート結果とともに意見収集のための様式をメールで送付し、各科目の責任者及びコースコーディネーターが担当教員の意見を取りまとめた上で、様式に記入し、学務課医学教務係に提出するという形で行った。

様式については、授業評価アンケート集計結果にみられる学生の要望・傾向等の分析及び評価について、学生の要望・傾向等に対する授業科目への反映について、その他(授業評価アンケートに対するご意見など)という3項目を用意し、それぞれに対する意見を記入してもらった。

意見収集の結果として、32科目延べ68名の教員から回答が得られた。学生の意見等を今後の授業に反映させる必要があるという意見が大多数であり、PDCAサイクルの活性化という当初の目的が十分に達成されたと考えられる。教員からの意見を踏まえ、必要とされる教育的素養について議論を行い、それらを改善できるようなFD研修会の開催を今後も継続して検討していく予定である。

3. 学内講師による医学教育講演会及び研修会

3-1 『Zoom 利用講習会』

日 時：令和2年4月16日（木）16：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：共通教育棟6階インテリジェント講義室

講 師：森 裕生

（鹿児島大学 総合教育機構高等教育研究開発センター 助教）

対象者：教職員

参加者：48名

目 標：Zoom を実際に利用しながら説明してもらうことで、Zoom 利用に対する理解を深め、円滑な遠隔授業実施への応用を図る。

総 評：Zoom の利用方法を学んだ。今後の遠隔授業を円滑に実施するうえで重要な機会であり、大変有意義な講習会となった。



3-2 『医学科新任教員 FD 研修会』

日 時：令和2年12月15日（火）15：00～16：45

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：基礎講義実習棟 第1講義室

講 師：河野 嘉文（医学部長）

橋口 照人（医学部教務委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

西 順一郎（FD 委員会医学科部会長）

対象者：医学部医学科の教職員

参加者：16名

目 標：鹿児島大学医学部医学科の教育目標、教育理念、カリキュラムを理解し、本学の教員として求められる教育への関わり、責務を認識する。

総 評：令和元年度11月以降・令和2年度に医学科教員として採用された教員を対象に教育理念やカリキュラム、鹿児島大学の医学教育の特色と課題について講話をおこなった。また、グループワークを実施し、自由に意見交換することで、上記目標の達成に大変有意義であった。



3-3 『入学試験面接評価者講習会』

日時：令和3年1月19日（火）15：00～16：50

主催：医学部FD委員会医学科部会、医学部入試委員会医学科部会

会場：基礎講義実習棟 第1講義室

講師：河野 嘉文（医学部長）

柴田 昌宏（入試委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

対象者：医学科入学試験面接担当予定教員

参加者：40名

目標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法について、講義やグループワークで習得する。

総評：面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められている。今回の講習会は、医師としての適正のある受験生の資質・能力を明らかにするためにはどのように質問の工夫を行えばよいかを考えるディスカッション形式の講習会を行った。次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましい。



3-4 『ベストティーチャー最優秀賞受賞者、FD 研修会参加者による講演会』

日 時：令和3年2月17日（月）16：00～16：40

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：Zoom によるオンライン講演

講 師：奥野 浩行（生化学・分子生物学分野 教授）

瀬戸山 仁（医歯学教育開発センター 助教）

対象者：教職員

参加者：37名

目 標：講義における具体的な工夫内容や進め方について、知識を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総 評：令和元年度の医学科ベストティーチャー最優秀賞受賞者である奥野教授に「私の授業の工夫 ～一年次教育：高校の授業から大学の講義への移行のために～」との演題で、授業で実践している工夫について講演してもらい、授業参加誘導等の実践方法を学んだ。その後、医歯学教育開発センターの瀬戸山助教に「Institutional Research (IR) について」との演題で、IR の概要について講演してもらい、学内の情報（データ）を収集・分析・報告することにより学内機能の改善・向上を促し、最終的に教育改善につなげることが重要であることを学んだ。今後の講義内容等を考えるうえで大変有意義であった。

4. おわりに

令和2年度は前述の2つの活動計画に基づいて本学科のFD活動を行ったが、最終的な専任教員の参加率は78.2%（医学科所属教員数142人中111人参加）となり、目標に定めた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」は達成された。令和3年度に向けてはJACMEによる医学教育分野別評価の評価を受けて、引き続き医学教育の体制を見直し、教育体制をより充実させるようなFD活動を行っていくことが、本学科の今後の発展に非常に重要である。

なお、令和2年度においては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、当初実施予定であった「医学教育や診療参加型実習に関する教職員の国内研修」、「医学教育や診療参加型実習についての学外講師による講演会」を実施できなかった。一方で、2月には初めての試みとして、リアルタイム動画配信サービスを利用し、学内講師による講演会を遠隔形式で実施した。この経験を活かし、令和3年度は遠隔形式の講演会の開催も検討しているところである。

また、本学科の教育が卒業後の学習等にどのような影響を与えているかを考察し、カリキュラム改善の一助となるよう卒業3年目と10年目の卒業生に対し、卒業生アンケートを実施している。卒業生の現状や意見等をより考察しやすくなるようにアンケート内容の修正を行う等改善を進めたが、回収率は3割程度に止まっているため、データ収集方法についても引き続き検討する必要がある。

今後もFD活動を通じて、本学科の大学教育及び医学教育の現状を分析し、継続的な改良につなげていくことで学生の教育環境改善に貢献していく予定である。



医学部 保健学科・
保健学研究科

令和2年度 医学部保健学科・保健学研究科 FD 活動報告

医学部保健学科 FD 活動

はじめに

令和2年度医学部 FD 委員会保健学科部会の活動として以下を実施した。

1. 学生による授業評価アンケート及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート
2. 遠隔授業に関するアンケート
3. FD 研修会の実施
 - a) 鹿児島大学でできる Web 講義の準備と運用に関する研修会
 - b) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（理学療法学専攻）
 - c) 大学・大学院における英語教育の課題と今後に関する研修会
4. ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケートおよび各専攻ベストティーチャー賞の選考
5. 教務委員会との連携による授業参観の実施
6. FD 活動への教員参加状況の把握

以下にその概略を述べる。

1. 学生による授業評価及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート

1)方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を実施した。学生による授業評価は各授業の最終講義後に学生に周知し、manaba で回答してもらった。アンケート結果は、学務課で取りまとめることとし、回答学生が教員には特定されないことを十分に周知したうえで実施した。授業評価のアンケート項目以下の通りである(表 1)。

2)授業評価アンケートの回収状況

<令和元年度>

- ・前期授業:授業評価アンケート回収率:45%(全科目平均)
教員フィードバックアンケートの科目回収率:61%
- ・後期授業:授業評価アンケート回収率:35%(全科目平均)
教員フィードバックアンケートの科目回収率:31%

<令和2年度>

- ・前期授業:授業評価アンケート回収率:52%(全科目平均)
教員フィードバックアンケートの科目回収率:80%
- ・後期授業:授業評価アンケート回収率:20%(全科目平均)
教員フィードバックアンケートの科目回収率:65%

表1. 令和2年度授業評価アンケート

質問内容	5	4	3	2	1
出席状況は良好だった。	非常に 良好だった	かなり 良好だった	良好だった	良くなかった	非常に 良くなかった
授業に意欲的に取り組む努力をした。	非常に努力した	かなり努力した	努力した	あまり 努力しなかった	努力しなかった
授業の予習あるいは復習をした。	非常に 予習復習をした	かなり 予習復習をした	予習復習を した	あまり 予習復習を しなかった	予習復習を しなかった
授業科目にふさわしい内容であった。	非常に ふさわしかった	かなり ふさわしかった	ふさわしかった	あまり ふさわしく なかった	ふさわしく なかった
シラバスの内容は明確であった。	非常に 明確であった	かなり 明確であった	明確であった	あまり 明確でなかった	明確でなかった
授業内容はシラバスに沿ったものであった。	非常に 沿っていた	かなり 沿っていた	沿っていた	あまり 沿って いなかった	沿って いなかった
授業の難易度は以下の通りであった。	丁度よかった	やや 簡単であった	簡単であった	かなり 難しかった	非常に 難しかった
この授業を他の学生にも勧めたいと思う。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
この授業は自分にとって価値があった。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
授業が一方的な知識の伝達だけでなく、双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
シラバスに記載されていた学習目標を達成できましたか	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない

3) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は71科目、後期開講分は66科目からアンケートを回収した。前期開講、後期開講別にアンケートの中の各項目について評価点(1～5)の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。前期開講科目と後期開講科目のそれぞれについて、令和元年度と令和2年度との比較を表2、3に示す。

表2. 学生による授業評価の前期開講科目の令和元年度と令和2年度との比較(平均点)

質問項目	令和元年度 (70科目)		令和2年度 (71科目)	
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
出席状況は良好だった。	4.68	0.22	4.52	0.22
授業に意欲的に取り組む努力をした。	4.15	0.28	3.95	0.25
授業の予習あるいは復習をした。	3.31	0.50	3.23	0.47
授業科目にふさわしい内容であった。	4.25	0.32	4.07	0.32
シラバスの内容は明確であった。	4.08	0.34	3.92	0.30
授業内容はシラバスに沿ったものであった。	4.07	0.34	3.91	0.28
授業の難易度は以下の通りであった。	4.27	0.49	4.30	0.45
この授業を他の学生にも勧めたいと思う。	4.01	0.43	3.88	0.34
この授業は自分にとって価値があった。	4.16	0.35	4.04	0.36
授業が一方的な知識の伝達だけでなく、 双方向(アクティブ・ラーニングの導入など)に行われた。	3.91	0.41	3.79	0.41
シラバスに記載されていた学習目標を達成できましたか	3.83	0.29	3.67	0.25

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

表3. 学生による授業評価の後期開講科目の令和元年度と令和2年度との比較(平均点)

質問項目	令和元年度 (65科目)		令和2年度 (66科目)	
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
出席状況は良好だった。	4.67	0.22	4.52	0.34
授業に意欲的に取り組む努力をした。	4.16	0.36	4.00	0.48

授業の予習あるいは復習をした。	3.12	0.62	3.22	0.62
授業科目にふさわしい内容であった。	4.35	0.36	4.19	0.46
シラバスの内容は明確であった。	4.25	0.34	4.08	0.46
授業内容はシラバスに沿ったものであった。	4.25	0.37	4.11	0.43
授業の難易度は以下の通りであった。	4.27	0.56	4.21	0.69
この授業を他の学生にも勧めたいと思う。	4.18	0.45	3.98	0.46
この授業は自分にとって価値があった。	4.28	0.40	4.18	0.45
授業が一方的な知識の伝達だけでなく、 双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われ た。	3.79	0.52	3.83	0.49
シラバスに記載されていた学習目標を達成できましたか	3.95	0.34	3.83	0.47

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

4) 結果の解釈

① 学生自身の自己評価

授業への出席状況は、前期・後期ともに4.5点以上であり、良好であったものと考え、令和元年度に比べると低下の傾向であった。同じく、意欲的に取り組む努力についても、令和元年度よりも低下の傾向であり、多くの科目で遠隔授業での実施を余儀なくされ、学生自身の意欲にも多少の影響が生じたことも考えられる。

② 授業に関する評価

授業科目の内容に関する項目として、「授業科目にふさわしい内容であった」、「この授業は自分にとって価値があった」については、4点以上の評価であり、一定の授業の質が確保されていると考えられたが、いずれも令和元年度に比べて低下の傾向であった。

③ アクティブ・ラーニングに関する評価

授業が一方的な知識の伝達だけでなく、双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた」という項目に関しては、前期(3.79点)、後期(3.83点)であり、令和元年度とほぼ同等の結果であった。アクティブ・ラーニングの導入が積極ではない科目も伺われるが、コロナ禍で遠隔での授業が余儀なくされるなか、工夫して積極的なアクティブ・ラーニングを導入している科目もあり、対面および非対面の授業におけるアクティブ・ラーニングの在り方を検討していく必要があると考えられた。

5) 学生授業評価アンケート集計結果の教員へのフィードバックに対する授業担当教員からの意見

前期の回収率は69科目中55科目(科目回収率80%)、後期の回収率は66科目中43科目(科目回収率65%)であり、令和元年度に比べて大幅な改善が認められた。昨年度から実施方法を紙

面から manaba に移行したこともあり、教員フィードバックの周知が容易となったと考えるが、教員フィードバック回収率の向上に向けて、周知方法や実施時期の検討がさらに必要であると考えられた。

教員からのフィードバックアンケートは各教員が担当する授業科目に対する学生の授業評価アンケートを、教員が自己評価するものである。評価の項目は、学生の自身に対する学習の評価、科目に対する学生からの評価、講師に対する学生からの評価、全体評価の 4 項目であり、学生アンケートの自由記述での回答も含まれており、教員にとって開講授業の方法や内容を振り返るうえで貴重な情報となっていると思われる。

2. 遠隔授業に対する学生アンケートの実施

令和2年度での授業評価アンケートでは、コロナ禍により遠隔授業にて急遽対応する科目が増大したため、遠隔授業に対するアンケート項目を追加した。遠隔授業に関するアンケート項目は表 4 のとおりである。

1) 遠隔授業導入の割合 (授業評価アンケートの対象科目)

前期科目:69 科目中 67 科目 (うち、43 科目 (62%) は遠隔のみ)

後期科目:66 科目中 64 科目 (うち、25 科目 (38%) は遠隔のみ)

※学生のアンケート結果に基づく集計

2) 遠隔授業の満足度や理解度

5 点満点中で満足度は前期 3.6 点、後期 3.8 点、理解度は前期 3.6 点、後期 3.7 点であり、比較的満足し、理解が得られたとする評価であり、後期科目において若干の高値であった。後期科目では教員、学生の双方で遠隔授業への適応がされつつあり、授業方法や内容にも改善がみられてきたものと思われる。

3) 対面と遠隔での理解度の違い

回答割合は前期と後期ともにほぼ同等の割合であり、約 30% の学生が遠隔と対面での理解度に差異はないと回答しており、約 35% で対面の方が理解しやすいと回答していた。また、約 10% の学生で遠隔の方が理解しやすいと回答していた。これらの結果は、講義科目によっても差異があり得る。

表4. 令和2年度遠隔授業に関する授業評価アンケート

質問内容	5	4	3	2	1	—
本科目の2020年度前期の講義形態は以下のいずれでしたか。	—	対面授業のみ	遠隔授業と対面授業の組み合わせ	Zoomでのリアルタイム配信はなく、オンデマンドによる動画視聴や課題作業、manabaでの課題提示などの遠隔授業のみ	Zoomでのリアルタイム配信による遠隔授業のみ	
本科目の遠隔講義の全体を通しての満足度はいかがですか。	非常に満足だった	かなり満足だった	満足だった	やや不満であった	かなり不満であった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義を通しての理解度はいかがでしたか。	非常に理解できた	かなり理解できた	理解できた	やや理解できなかった	かなり理解できなかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義（Zoomやオンデマンド教材）での資料の見やすさはいかがでしたか。	非常に見やすかった	かなり見やすかった	見やすかった	やや見づらかった	かなり見づらかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義（Zoomやオンデマンド教材）での教員の声の聞こえやすさはいかがですか。	非常に聞こえやすかった	かなり聞こえやすかった	聞こえやすかった	やや聞こえづらかった	かなり聞こえづらかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義における教員の工夫が感じられましたか。	非常に工夫を感じた	かなり工夫を感じた	工夫を感じた	やや工夫を感じなかった	かなり工夫を感じなかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義の進行についていけましたか。	非常に進行についていけた	かなり進行についていけた	進行についていけた	やや進行についていけなかった	かなり進行についていけなかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔授業において、自身の学習態度や意欲はいかがでしたか。	非常に積極的・意欲的に取り組んだ	かなり積極的・意欲的に取り組んだ	積極的・意欲的に取り組んだ	やや積極的・意欲的に取り組めなかった	かなり積極的・意欲的に取り組めなかった	対象外・該当しない
科目を遠隔で行った場合と対面で行った場合を比較すると、理解度に違いがあると思いますか。	—	わからない (判断できない)	遠隔と対面で理解度に違いはない	対面の方が理解度が低い (遠隔の方が理解しやすい)	遠隔の方が理解度が低い (対面の方が理解しやすい)	—
本科目は、以下のどの講義形式が望ましいと感じましたか。	—	わからない	遠隔講義と対面授業の併用が望ましい	対面授業のみが望ましい	遠隔講義のみが望ましい	—
本科目の遠隔講義に関して、感じたことや意見を自由に記載してください。						

表 5. 学生による遠隔授業に対する授業評価結果

	前期 (67 科目)		後期 (64 科目)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
本科目の遠隔講義の全体を通しての満足度はいかがですか。	3.60	0.35	3.83	0.46
本科目の遠隔講義を通しての理解度はいかがでしたか。	3.61	0.30	3.73	0.46
本科目の遠隔講義(Zoom やオンデマンド教材)での資料の見やすさはいかがでしたか。	3.69	0.32	3.90	0.49
本科目の遠隔講義(Zoom やオンデマンド教材)での教員の声の聞こえやすさはいかがですか。	3.71	0.31	3.96	0.42
本科目の遠隔講義における教員の工夫が感じられましたか。	3.59	0.38	3.79	0.47
本科目の遠隔講義の進行についていけましたか。	3.63	0.30	3.71	0.42
本科目の遠隔授業において、自身の学習態度や意欲はいかがでしたか。	3.65	0.26	3.77	0.44
科目を遠隔で行った場合と対面で行った場合を比較すると、理解度に違いがあると思いますか。 わからない(判断できない) 遠隔と対面で理解度に違いはない 対面の方で理解度が低い(遠隔の方が理解しやすい) 遠隔の方で理解度が低い(対面の方が理解しやすい)				
	26%		24%	
	31%		32%	
	10%		8%	
	33%		36%	

※対面授業が 100%と回答した前期 2 科目、後期 2 科目は除く

3. FD 講演会の実施

a) 鹿児島大学でできる Web 講義の準備と運用に関する研修会

講演会名：鹿児島大学でできる Web 講義の準備と運用について

講師：鹿児島大学 高等教育研究開発センター 森 裕生 先生

日時：令和2年4月8日(水) 10:00～12:00

場所：メイン会場 医学部共通教育棟 6階 インテリジェント室

サテライト会場 共通教育棟：501号 502号

参加者：保健学科教員 45名

新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から、2020年度前期から導入する遠隔授業の教員対応を円滑に進めるために2020年4月8日(水)10:00～12:00に「鹿児島大学でできる Web 講義の準備と運用について」のタイトルで鹿児島大学医学部保健学科2019年度第1回FD講演会を実施した。講師は鹿児島大学高等教育研究開発センター・森裕生先生にお願いした。鹿児島大学で Web 講義に活用が可能な具体的なシステムやツールの使用方法を教示してもらい、コロナ禍における教員の Web 講義における不安の解消や教育の質を確保につながったものとする。

<p>令和二年度 第1回FD研修会 プログラム</p> <p>主催 FD委員会保健学科部会</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"><p>【題 目】 「鹿児島大学でできる Web講義の準備と運用について」</p><p>【講 師】 鹿児島大学 高等教育研究開発センター 森 裕生 先生</p></div> <p>2020/04/08</p>	<h2 style="text-align: center;">プログラム</h2> <p>【研修名】 「鹿児島大学でできるWeb講義の準備と運用について」</p> <p>【講 師】 鹿児島大学 高等教育研究開発センター 森 裕生 先生</p> <p>【場 所】 メイン会場 医学部共通教育棟6階 インテリジェント室 サテライト会場 共通教育棟：501号 502号 理学療法学大学院講義室 基礎・成人看護学実習室</p> <p>【月 日】 2020年4月8日（水） 【時 間】 10:00～12:00</p> <p>09:00 受付開始 09:55 開会の辞 牧迫飛雄馬 委員長 10:00 研修会① 10:50 休憩および換気 11:00 研修会② 11:50 質問 12:00 閉会の辞 沖 利通</p>
--	---

b) 学外講師による保健学教育講演会または研修会(理学療法学専攻)

講演会名:回復期リハビリテーション病棟における感染予防の実践と臨床実習指導での対策

講師:野口 隆太郎 氏

医療法人社団輝生会初台リハビリテーション病院

リハケア部チームマネージャー・回復期セラピストマネージャー 理学療法士

日時:令和2年12月4日(金)13:30~14:30

場所:桜ヶ丘キャンパス 共通教育棟 401 講義室ならびに Web での開催

共催:鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻

参加者:臨床実習指導者、学内教員、外部希望者の計 34 名


新型コロナウイルス感染症の拡大予防策の徹底のため、学外臨床実習の実施方法や指導の在り方を慎重に検討する必要が生じた。実習生を受け入れる医療機関においても、感染拡大予防策を講じるとともに、実習生の受け入れ体制の再考が求められた。実習指導における教育の質の維持しつつ、学生ならびに患者の安全を考慮しながらの臨床実習方針の統制が課題であることから、コロナ禍における最前線での臨床実習教育に携わる方を講師に招き、教員・臨床実習指導者及び学生を対象にコロナ禍での臨床実習指導の在り方や最新の動向などについて講演してもらい、教育指導方法の改善や質の向上に資することを目的に研修会を開催した。

令和2年度医学部FD委員会保健学科部会主催研修会

【主催】医学部FD委員会保健学科部会
【日時】令和2年12月4日(金)13:30~14:30(13:00受付)

【場所】桜ヶ丘キャンパス 共通教育棟401講義室ならびにWebでの開催
【招聘講師】野口 隆太郎 氏
医療法人社団輝生会初台リハビリテーション病院
リハケア部チームマネージャー・回復期セラピストマネージャー

13:00~13:30 受付
13:30~14:30 講演
「回復期リハビリテーション病棟における感染予防の実践と臨床実習指導での対策」
野口 隆太郎 氏
医療法人社団輝生会初台リハビリテーション病院
リハケア部チームマネージャー・回復期セラピストマネージャー



回復期リハビリテーション病棟における
感染予防の実践と
臨床実習指導での課題

医療法人社団輝生会
初台リハビリテーション病院
リハケア部チームマネージャー
野口隆太郎

kisei-kai

c) 大学・大学院における英語教育の課題と今後に関する研修会

講演会名： 大学・大学院における英語教育の課題と今後

講師： 杉山産婦人科 生殖医療科 新宿 院長 中川浩次先生

日時： 令和3年3月16日(火)18:00～19:30

場所： web 開催

参加者：保健学科教員 36名(事後での動画研修を含む)

ディプロマポリシーのひとつであるグローバル化を達成するために、講義や業績の英語化は鹿児島大学保健学科にとって喫緊の課題である。今回は、臨床現場だけでなく、英語論文執筆や海外の学会で活躍する臨床医を招き、「大学・大学院における英語教育の課題と今後」に関する研修会を開催した。研修会では、日本における英語教育改革の現状と英語による学術活動のコツを講義していただき、教員として英語の日常化と業績へとつなげる具体的実践方法を学ぶ機会となり、大変参考になるものであった。

大学・大学院における英語教育の課題と今後		
		主催 鹿児島大学医学部保健学科 FD 委員会
開催日	3月16日(火)	
開催時間	18:00～19:30	
場 所	web開催 (zoom meeting ライブ配信)	
	ミーティング ID: 764 746 1897	
	パスコード: 746125	
受付開始	17:30～	
プログラム		
18:00～18:05	開会の挨拶	主催者
18:05～18:20	第1部 日本における英語教育の現状	沖 利通
	1. 文部科学省が推進する英語教育	
	2. 大学入学までの英語教育の現状 (取材報告)	
	・ 入学者選抜と英語	有川博人先生 : 英語領域専攻
	・ 高校教師の立場から	正村千鶴子先生 : 清風予備校
	・ 予備校教師の立場から	竹内正興先生 : 広島大学
	3. 大学における英語教育	
	18:25～18:30 質疑応答	
18:30～18:55	第2部 特別講演	
	「英語論文を書くための私の工夫」 杉山産婦人科 生殖医療科新宿 中川浩次先生	
	18:55～19:00 質疑応答	
19:00～19:25	第3部 総合討論 -私たちが今後すべきことは?-	
19:25～19:30	閉会の挨拶	沖 利通
※ 退出される前に、Google formによるアンケートをお願いします		

4. ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケート

令和2年度医学部保健学科でのベストティーチャー賞を選出するにあたり、以下の要領で保健学科所属の1～4学年の全学生を対象としたアンケートを実施した。

<2020年 保健学科ベストティーチャー賞候補者に関するアンケートの要領>

対象:2020年12月現在で保健学科に在籍している1～4年生

実施期間:2020年12月21日(月)～2021年1月8日(金)

アンケート内容

過去1年間を振り返って、自分にとって最も有意義であった授業科目とその担当教員(授業を実施した教員)を1つのみ挙げてください。候補の選出にあたっては、以下に示す5つの観点を参考にしてください。また、その授業および教員に関して、5つの観点を1～5点(5点が最も良い)で評定してください。有意義であったと感じた理由やベストティーチャーとしての推薦理由を記載してください。

①回答者の在籍している専攻

②有意義であった授業科目と担当教員(授業を実施した教員)

③②で選んだ授業と教員に関して、以下の観点から1～5点(5点が最も良い)で評定してください。

③-1. 授業の実施方法(教材等の分かりやすさ、理解度の確認など)

③-2. 授業への教員の熱意(授業の準備状況、配布資料の工夫など)

③-3. 能動的学習の促進(アクティブ・ラーニングの活用、学生自身による思考の促進など)

③-4. 授業時間以外の学習支援(自己学習の促進、宿題・レポートなどへの取組など)

③-5. 学習目標の達成(内容の理解度、目標の達成度、講義に対する満足度など)

④②で選んだ授業と教員に関して、有意義と感じた点およびベストティーチャーとしての推薦メッセージがあれば、ご記入ください

<アンケート結果の回収概要>

・回答期間:2020年12月21日(月)～2021年1月8日(金)

・対象:学科在籍中の1～4年生488名

(看護学専攻323名、理学療法学専攻84名、作業療法学専攻81名)

・回答数:看護学専攻203名(62.8%)、理学療法学専攻49名(58.3%)、作業療法学専攻51名(63.0%)

<アンケート結果の活用>

学生アンケートからの推薦者リストをFD委員会で供覧し、各専攻におけるベストティーチャー賞候補者を選考するうえでの資料とした。また、学生アンケートからベストティーチャー賞として推薦のあった科目、学生からの推薦コメントは、被推薦教員にフィードバックした。

<令和2年度ベストティーチャー賞>

各専攻 1 名ずつの教員をベストティーチャーに選出し、4 月開催の教授会で表彰した。また、そのうちの 1 名を医学部保健学科から全学のベストティーチャー賞候補者として推薦した。

5. 教務委員会との連携による授業参観の実施

令和2年度では、教務委員会との連携で教員による授業参観を実施した。授業参観科目は、保健学科の各専攻(看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻)において令和元年度 BT 賞を受賞した教員の担当科目から推薦を依頼した。BT 賞受賞者から推薦のあった科目について、授業参観としての参加者を募り、5科目に対して計18名の教員による授業参観への参加があった。授業参観の参加後には、報告書の提出を求め、講義のわかりやすかった点や工夫していると感じた点などの意見を聴取した。

表. 令和2年度授業参観実施科目

科目名	授業参観人数
放射線看護学	7名
カウンセリング論	4名
臨床精神医学Ⅱ	3名
臨床運動学	2名
チーム医療実習	2名

6. FD 活動への教員参加状況の把握

令和元年度の医学部保健学科における FD 活動への参加率は 97.8%であった。授業アンケートフィードバック、FD 講演会・研修会、授業参観の FD 活動への参加状況を把握した。

合計参加率		97.83 % (専任教員 46 名中 45 名 参加)
企画別 参加率	授業アンケートフィードバック	63.04 % (専任教員 46 名中 29 名 参加)
	遠隔授業に関するFD研修会	97.83 % (専任教員 46 名中 45 名 参加)
	評価に関する FD 講演会	21.74 % (専任教員 46 名中 10 名 参加)
	保健学科理学療法専攻企画 FD 講演会	17.39 % (専任教員 46 名中 8 名 参加)
	英語教育に関する FD 講演会	78.26 % (専任教員 46 名中 36 名 参加)
	授業参観	30.43 % (専任教員 46 名中 14 名 参加)

終わりに

令和2年度においては、コロナ禍での学習機会の確保や大学教育の質の担保が大きな課題とな

り、これまでに全く経験のない状況での FD 活動を余儀なくされた。そのなかでも、医学部保健学科では manaba や遠隔システムを有効に活用し、遠隔での授業の実施に関する FD に関する研修会や感染予防対策を講じた実技や実習の在り方などに関する研修会を開催することができた。また、英語教育に関する FD 研修会や授業参観企画、授業評価アンケートへの教員フィードバック、ベストティーチャー賞の選考など、年度計画を遂行することができた。

令和3年度では、本学科の課題を整理したうえで、特に教学 IR の推進に寄与する企画を検討し、本学科において重要度の高い課題に対する教員の理解を深める FD 研修会などを企画していく予定である。

保健学研究科 FD 活動

はじめに

令和2年度 FD 委員会保健学研究科部会の活動として以下を実施した。

1. 修了学生における修学達成度などに関するアンケート(保健学研究科運営委員会との共同)
2. 修了生の就職先からの情報収集のためのインタビュー企画の検討

以下にその概略を述べる。

1. 修了学生における修学達成度などに関するアンケート

<2020年度 保健学研究科 博士前期課程修了者へのアンケートの要領>

対象:保健学研究科博士前期に在籍しており、2021年3月に修了を予定している者 20名

実施期間:2021年3月3日～3月5日

アンケート内容

満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評定してください。

- ①大学院での講義内容や講義方法について
- ②研究指導について
- ③事務手続きや書類に関して

達成度を5点が最も達成度が高いとして、1～5点で評定してください。

- ④自身の達成度について

努力度を5点が最も努力度が高いとして、1～5点で評定してください。

- ⑤自身が努力した程度について

- ⑥在学中に最も学びになったことについて、教えてください。

博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、以下についての自己評価をお教えてください。

- ⑦保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた
- ⑧地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた
- ⑨研究を行うための基礎的な能力を獲得できた

博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、カリキュラムに対しての評価をお教えてください。

- ⑩豊かな人間性と広い視野を獲得できるように大学院全学横断的教育プログラムや、博士前期課程共通科目によって専門領域以外の様々な人々と共に学べるように編成されていた
- ⑪専門領域における基礎的能力を補強し、専門的学習を促進するために領域共通科目を配置されていた
- ⑫高度専門職業人としての優れた知識・技術を修得し、様々な地域における保健医療に関する課題を解決するための研究力、教育力を獲得できるように専門科目(特論・特別演習・特別研究)が配置されていた

⑬他専門領域を理解し、協働できるようになるために、他領域の専門科目を修得できるように編成されていた

本学の大学院への進学について

⑭本学の大学院への進学を周りの人に勧めたいと思いますか

⑮修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との情報交換を行うような懇談会が必要だと思いますか。

⑯修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との情報交換を行うような懇談会が開催された場合、参加したいと思いますか。

⑰調査結果は、学内での教育改善や学外で情報収集を目的にご報告させていただく予定ですが、個人情報はその中には一切含まれませんのでご安心ください。

調査結果を報告することに同意していただけますか。

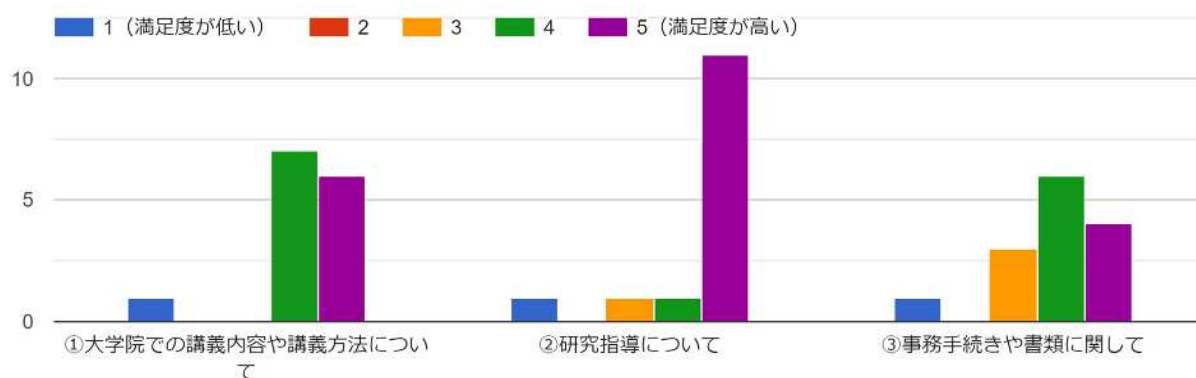
<アンケート結果の回収概要>

回答数: 修了予定者 20 名のうち 14 名 (70%) から回答を得た。

ディプロマポリシーの 3 項目のうち、「保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた」、「地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を实践する能力を獲得できた」については、14名全員が可(修士として必要な程度は獲得できた)以上の自己評価であり、「研究を行うための基礎的な能力を獲得できた」に対する到達度は、2名(14.3%)が5段階の2「不可(獲得できたが修士として不十分)」との自己評価であった。

大学院での講義や研究指導、事務手続きなどに関する満足度の調査では、1名(7.1%)が満足度が低いとする評価であり、13名(92.9%)が5段階中の3以上の満足度の評価であった。

満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評定してください。



2. 修了生の就職先からの情報収集のためのインタビュー企画の検討

大学院を修了した学生が、大学院での経験や学びを修了後の臨床および研究活動に反映できているか、また社会での高度専門医療人としての貢献度を把握するために、修了生の就職先からの情報収集のためのインタビュー企画を検討した。具体的には令和3年度以降にインタビューを予定しており、各専攻(看護学、理学療法学、作業療法学)から1名ずつの修了生の就職先の上司や指導者などからのインタビューを予定している。令和2年度では、インタビュー内容を検討し、以下のような項目を含む半構造的インタビュー内容を検討した。

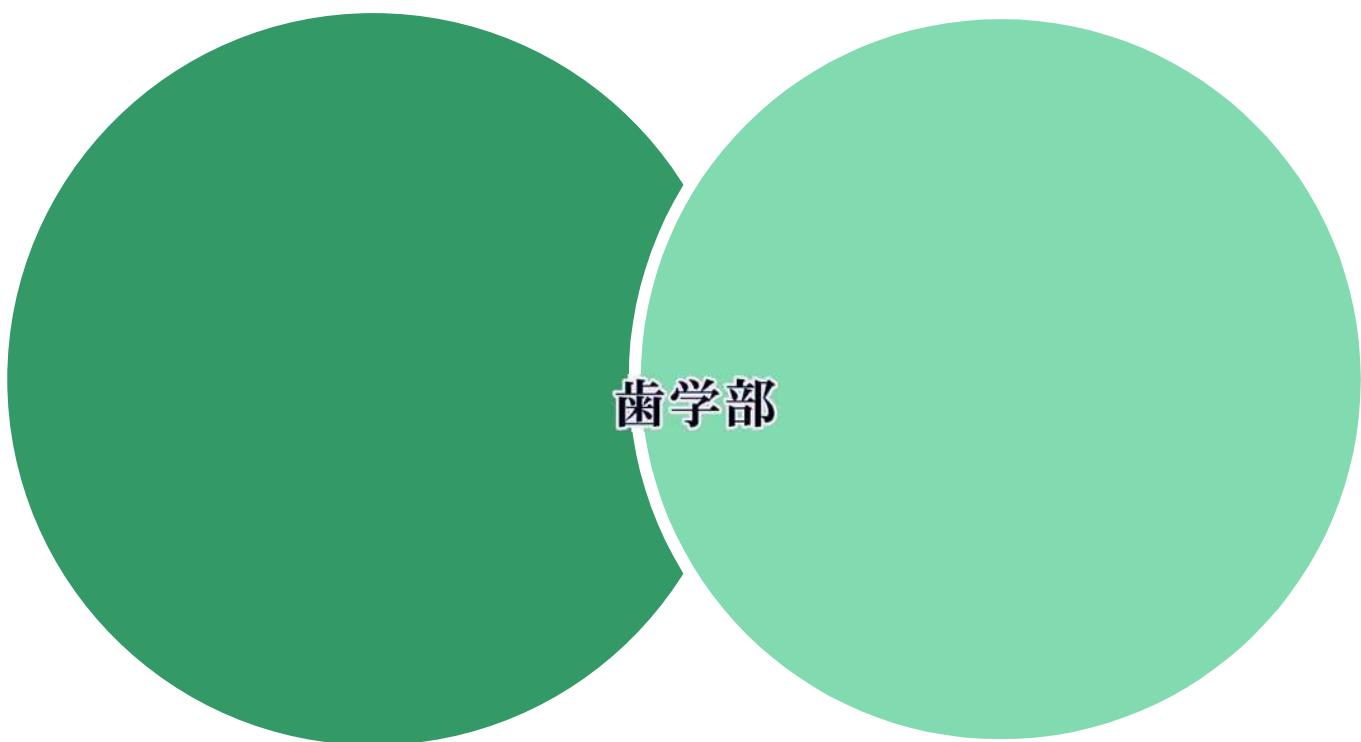
質問内容	回答選択肢
① 2019年度(2020年3月)の本学大学院修了生との職場でのご関係を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的な上長・先輩 ・間接的な(たとえば、他部署など)上長・先輩 ・その他
② 2019年(2020年3月)の本学大学院修了生との職場での関わりについて、該当するものを教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> ・本学大学院に進学前から関わりがある ・本学大学院在学中に関わるようになった ・本学大学院修了後に関わるようになった ・その他
次の項目について、本学大学院修了生において、大学院修了による学習成果を感じる点がありますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・「ほとんど学習成果を感じない」 ・「あまり学習成果を感じない」 ・「ときどき学習成果を感じる」 ・「よく学習成果を感じる」 ・「非常に学習成果を感じる」
③ 保健学に関する優れた専門的知識と技術	
④ 地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力	
⑤ 研究を行うための基礎的な能力	
③～⑤について、その理由をお教えてください。	自由回答
⑥その他、本学大学院修了による学習成果を感じる点があれば、お聞かせください。	自由回答
⑦ 現在の職場の状況において、進学希望者がいた場合、どのような検討が可能ですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・勤務体制や雇用条件を大きく変更することなく、進学の検討が可能 ・勤務体制や雇用条件を見直すことで、進学の検討が可能 ・進学の検討は難しい ・わからない
⑧ 現在の職場に本学大学院修了生が就職を希望する場合、どのようにお考えになりますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院修了生を積極的に採用したい ・大学院修了の有無はあまり関係しない ・大学院修了生を採用することは控えたい ・その他
⑨本学大学院への意見や要望がありましたら、お寄せください。	自由回答

終わりに

保健学研究科博士前期課程在学中における自身の達成度の高さは、本大学院で定めるディプロマポリシーの到達度に直結しており、講義の満足度の高さは専門的知識と技術や実践能力の獲得に対する到達度に寄与すると考えられた。しかしながら、コロナ禍で計画通りの研究遂行が困難な学生もいたことが想定される。また、コロナ禍における大学院での修学環境について、手続き方法や講義形式、研究指導方法など様々な変更が余儀なくされ、学生自身にとっても不安や混乱が生じたことも推察される。

このような状況においても、学生自身の達成度を高める教育体制の充実を図るとともに、ディプロマポリシーに準じた学修成果を客観評価できるアセスメントポリシーの整備が重要であろうと考えられ、引き続きの検討が必要であるものと考えられた。

(文責 医学部 FD 委員会保健学科部会長 牧迫飛雄馬)



歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、学部教育や学部組織、研究、および国際交流などの多面的な領域について、教員の能力開発に関わる様々な活動を企画、実施している。令和2年度は、これまでのFD活動を踏まえ、7回のFD講演会を企画、開催した。鹿児島大学の目標は「75%以上の参加」であるが、歯学部の全教員（128名）のうちFDに1回も参加しなかった教員は2名のみであり、参加率は98.4%で、目標を達成した。FDの効果は参加率のみでは測れないところもあり、今後も形式的ではなく、教員の教育能力の向上に資する実質的なFD活動が必要であると思われた。以下に令和2年度の主な事業を記載する。

令和2年度の主な事業（コロナ禍で実施できなかったものも含む）

- ・学生による授業評価
- ・授業公開・授業参観による教員相互の評価 ⇒ コロナ禍のため中止
- ・FD講演会「歯科医師国試の現状と対策」の企画（昨年度、新型コロナウイルス感染症対策にて無期延期となったため、今年度はWebにて開催）
- ・FD講演会「ベストライター賞受賞者による学部学生の実習指導講習会」の開催
- ・FD講演会「1. 歯学教育分野別評価の概要、2. 共用試験歯学系OSCEの「公的化」」の開催
- ・FD講演会「分野別歯学教育認証評価受審並びに共用試験OSCEに向けての講演会」
- ・FD講演会「CBTの作問に関するFD講習会」の開催
- ・FD講演会「遠隔授業主体のコロナ禍におけるアクティブラーニングの実施方法ー考え方と具体例についてー」の開催
- ・FD講演会「共用試験CPX・共用試験CSXに関するFD講演会」の開催
- ・令和2年度鹿児島大学歯学部ベストティーチャー賞表彰の実施

2. 歯学部FD委員会の活動状況

1) 令和2年度歯学部FD委員会 委員構成

委員長：杉村光隆（歯科麻酔全身管理学分野 教授）

委員：中村典史（口腔顎顔面外科学分野 教授）

西谷佳浩（歯科保存学分野 教授）

田松裕一（解剖法歯学分野 教授）

事務所掌：歯学教務係

2) 令和2年度歯学部FD委員会 開催状況

(1) 第1回歯学部FD委員会（令和2年5月10日（日）～13日（水）開催）

場所：メール会議

議題1. 令和2年度歯学部FD活動計画・経費要求書について

- (2) 第2回歯学部 FD 委員会 (令和2年5月28日(木)～6月5日(金)開催)

場所：メール会議

議題1. 令和2年度の歯学部 FD 活動の見通し

- (3) 第3回歯学部 FD 委員会 (令和2年6月26日(金)～7月3日(金)開催)

場所：メール会議

議題1. 授業公開・授業参観について

2. 歯学部授業評価アンケートについて

- (4) 第4回歯学部 FD 委員会 (令和2年10月27日(火)開催)

場所：医歯学総合研究科棟1 7階カンファレンス室

議題1. 後期授業評価アンケートについて

2. 次回 FD 講演会について 3. FD 講演会出席率について

- (5) 第5回歯学部 FD 委員会 (令和3年1月5日(火)～1月6日(水)開催)

場所：メール会議

議題1. 令和2年度ベストティーチャー賞の投票の仕方について

- (6) 第6回歯学部 FD 委員会 (令和3年3月3日(水)開催)

場所：メール会議

議題1. 鹿児島大学ベストティーチャー賞候補者の推薦について

- (7) 第7回歯学部 FD 委員会 (令和3年3月30日(火)開催)

場所：Web 会議

議題1. 令和2年度 FD 経費予算執行状況について

2. 令和3年度活動計画書の提出について

3. 歯学教育認証評価受審のための報告書の準備について

4. 令和2年度活動報告書について

5. 令和2年度ベストティーチャーの報告について

3. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として「学生による授業評価」について、歯学部教育委員会と共同で2018年度に更新した評価票を用いて実施した。この授業評価は、令和2年度に開講した全ての授業を対象に、各科目の授業の終了時に無記名式で適宜実施した。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教である。得られた記入済み調査票は OCR により読み込み処理後、集計作業が行われ、その結果が科目毎に PDF 化された。

各科目の集計結果を各分野へ配布し、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような PDCA サイクルを構築している。そのため、授業を提供する教員のモチベーションが上がり、

PDCA サイクルがある程度機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられ、授業改善に直接つながるような内容が多かった。昨年同様、個々の授業科目責任者は、学生視点のフィードバックをもとに、授業内容、方法等を見直し、「授業改善シート」を提出している。

授業評価アンケートの結果は、本学部のホームページ（<http://w3.hal.kagoshima-u.ac.jp/limit/committee/committee08/43-2016-10-26-05-00-27.html>）で公開されている。なお、平成27年度から31年度のアンケート結果については、令和2年5月現在、学内専用で閲覧可能である。今後は、各科目担当責任者から提出された「授業改善シート」を活用し、学生の意見も反映させた授業改善が課題である。

4. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員の授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施している。歯学部では2019年度に続いて開催予定であったが、コロナ禍を受けて中止を余儀なくされた。昨年度は、授業公開・授業参観の指定時期である6月および12月に授業を行っている教員を対象に、歯学部自己評価委員会（分野別歯学教育認証評価実施部会）の教授の中から一人ずつ評価者としてマッチングさせ、授業参観ならびに授業評価を行っている。評価者は参観レポートを作成し、参観直後に授業担当教員にフィードバックし、それを踏まえて教員は授業改善シートを提出して完結としていた。また、6月と12月の期間外に授業を行う教員は評価を受ける機会がないため、今後は期間を弾力的に設けて全教員の授業公開・授業参観を目標としていた。加えて、提出された授業改善シートが次の授業でどのように活用されたか、すなわちPDCAサイクルを評価することを次の課題としている。

5. 令和2年度第1回歯学部FD講演会

- 1) 講師：歯学部教育委員会 田松 裕一 教授
- 2) 講演タイトル：「歯科医師国試の現状と対策」について
- 3) 日時：令和2年7月30日（木）17:30～19:00
- 4) 場所：歯学部第4講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 97名
- 6) 内容：問題の領域分け、配点、合格基準など教員として知っておきたい国試の実施状況を解説したのち、東京歯科大学における国試対策の例を示し、鹿児島大学歯学部の合格率アップのために、私たち教員はどのような対応ができるのか考える機会を持った。

6. 令和2年度第2回歯学部FD講演会

- 1) 講師：勝俣 愛一郎 講師、大賀 泰彦 助教、岐部 俊郎 助教
- 2) 講演タイトル：「ベストライター賞受賞者による学部学生の実習指導講習会」
- 3) 日時：令和元年10月14日（水）17:30～19:00
- 4) 場所：歯学部第4講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 74名
- 6) 内容：臨床実習終了後のアンケートによりベストライターに選出された先生より学生指導の

コツが紹介された。

7. 令和2年度第3回歯学部FD講演会

- 1) 講師：日本大学松戸歯学部 葛西 一貴 教授
- 2) 講演タイトル：「1. 歯学教育分野別評価の概要 2. 共用試験歯学系OSCEの「公的化」」
- 3) 日時：令和2年12月1日（火）～令和2年12月31日（木）、令和3年1月15日（金）まで延期） 17:30～19:00
- 4) 場所：オンライン講習
- 5) 参加者：歯学部教員83名（オンライン講習受講者）
- 6) 内容：「歯学教育認証評価へ向けた領域別評価」は、今後、本学が受審予定の歯学教育認証評価を想定し、歯学部自己評価委員会がこれまで領域別に検討してきた。本講演会は、受審に向けた取り組み並びに近い将来公的化される共用試験に関する歯系教員の理解を深めることを目的とし、Web開催のため一定期間内に講演者の動画を視聴後、質問を収集し、時を改めて演者とWeb上での質疑応答を実施した。

8. 令和2年度第4回歯学部FD講演会

- 1) 講師：鹿児島大学歯学部
 - 田口則宏教授（歯科医学教育実践学分野）
 - 松本祐子助教（歯科総合診療部）
 - 岩下洋一朗助教（歯科医学教育実践学分野）
 - 川島雄介講師（顎顔面放射線学分野）
 - 後藤哲哉教授（歯科機能形態学分野）
 - 田松裕一教授（解剖法歯学分野）
- 2) 講演タイトル：「CBTの作問に関するFD講習会」
 - (1)今年度の作問体制、作問割り振り、スケジュール、作問ソフトについて
 - (2)PCセキュリティ
 - (3)放射線画像利用の手続き
 - (4)どんな問題がボツになるのか
 - (5)視覚素材の重要性
 - (6)質疑応答
- 3) 日時：令和2年1月19日（火） 17:30～19:00
- 4) 場所：歯学部第3講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員99名
- 6) 内容：共用試験歯学系CBTにおいて、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内のCBT作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した。

9. 令和2年度第5回歯学部FD講演会

- 1) 講 師：高等教育研究開発センター 伊藤 奈賀子 准教授
- 2) 講演タイトル：「遠隔授業主体のコロナ禍におけるアクティブラーニングの実施方法－考え方と具体例について－」
- 3) 日 時：令和3年2月22日（月）17:00～18:30
- 4) 場 所：Web
- 5) 参加者：歯学部教職員96名
- 6) 内 容： 歯学系教員の教育能力向上のため、昨今求められているアクティブラーニングの実施方法について、それも急遽遠隔授業を余儀なくされた今年度におけるそのあり方を含めて、その基本的な考え方を講演された。

10. 令和2年度第6回歯学部FD講演会

- 1) 講 師：田口 則宏 教授、南 弘之 教授
- 2) 講演タイトル：「共用試験CPX・共用試験CSXに関するFD講演会」
- 3) 日 時：令和3年3月23日（火）16:30～17:40
- 4) 場 所：Web
- 5) 参加者：歯学部教職員97名
- 6) 内 容：近い将来公的化される共用試験CPXおよび共用試験CSXに関する歯系教員の理解を深めることを目的とし、Webにてその概要を学んだ。

11. ベストティーチャー賞の実施

ベストティーチャー賞は平成30年度鹿児島大学で「鹿児島大学ベストティーチャー賞」表彰制度が制定されたことにより、歯学部でも鹿児島大学ベストティーチャー賞候補者1名を推薦する必要が生じた。ちなみに、「鹿児島大学ベストティーチャー賞」の審査項目として以下の3点が示された。

- (1) 授業において、卓越した指導力で教育効果の高い授業を実践した者
- (2) 教育方法の工夫又は改善に取り組み、顕著な教育成果をあげた者
- (3) その他ベストティーチャー賞に相応しいと認められる者

歯学部についてベストティーチャー賞候補者を選定するにあたり、「歯学部ベストティーチャー賞選定のための教員授業評価実施要綱」に則り、以下の方法及び学生のアンケートにおける評価基準で選出した。

方法：

2年次生から4年生次生の学生に対して、今年度前期・後期に授業を受けた教員の中から次の項目に相当する教員を1名選ぶ。なお対象の教員は常勤で、かつ各科目で2コマ以上の授業を担当したものを対象とする。

学生がベストティーチャーを選考するときの評価項目は、

- ・ 授業方法や学びへの工夫がなされているか（技法）
- ・ 教育に対する姿勢や取り組みが優れているか（熱意）
- ・ 授業を受けることによってその科目に対する関心が深まったか（理解）

の3項目を選考基準であることを学生に説明したのち、今年度前期・後期の科目担当教員の中から、総合的に優れていると思う教員を各学生は1名選ぶ。集計して各学年のトップの教員を歯学部のベストティーチャー賞とし、その中から最も得票率の高い1名を鹿児島大学のベストティーチャー賞の歯学部推薦者とする。鹿児島大学のベストティーチャー賞の歯学部推薦者は、各学年のベストティーチャー賞から歯学部FD教員及び学部長により選出する。

なお、昨年度より研究科（医歯学総合研究科）籍教員も評価対象とすることになり、研究科FD（歯系）委員会と最終協議を実施の上、研究科（歯系）・歯学部として推薦者1名を選出することになった。

以上の方法により、2年次生から4年生次生の3学年に対し、令和2年1月にアンケートを実施後、その結果をもとに3月3日の第6回歯学部FD委員会を開催し、各学年の選出による歯学部ベストティーチャー賞受賞者を確定するとともに、3名の受賞者の中から1名を鹿児島大学ベストティーチャー賞の歯学部の推薦者に決定した。さらに研究科FD（歯系）委員会と協議の上、研究科（歯系）・歯学部の推薦者を1名決定した。

12. 特筆すべき事項と改善例

これまでの歯学部FD活動を踏まえ、今年度もその趣旨に鑑み、教員の教育能力の向上に資する取り組みを目標にした。今年度はコロナ禍を踏まえての運営となり、特に下半期はWeb方式での開催に終始したことが、大きな特筆事項となろう。一昨年度末よりコロナ禍でのFD活動に移行し、教員個々の受け止め方は千差万別であろうが、少なくともmanabaの利用価値が認識され、Web方式での授業、会議スタイルが一気に浸透したと考えられる。働き方改革が問われる時代の趨勢もあり、教育に加えて、研究、臨床、地域貢献等、各教員の多忙な日常業務の中での効率的な運営を念頭に置いたが、参加率だけを見れば98.4%と目標を達成できており、Web方式による参加のしやすさもその達成要因かもしれない。

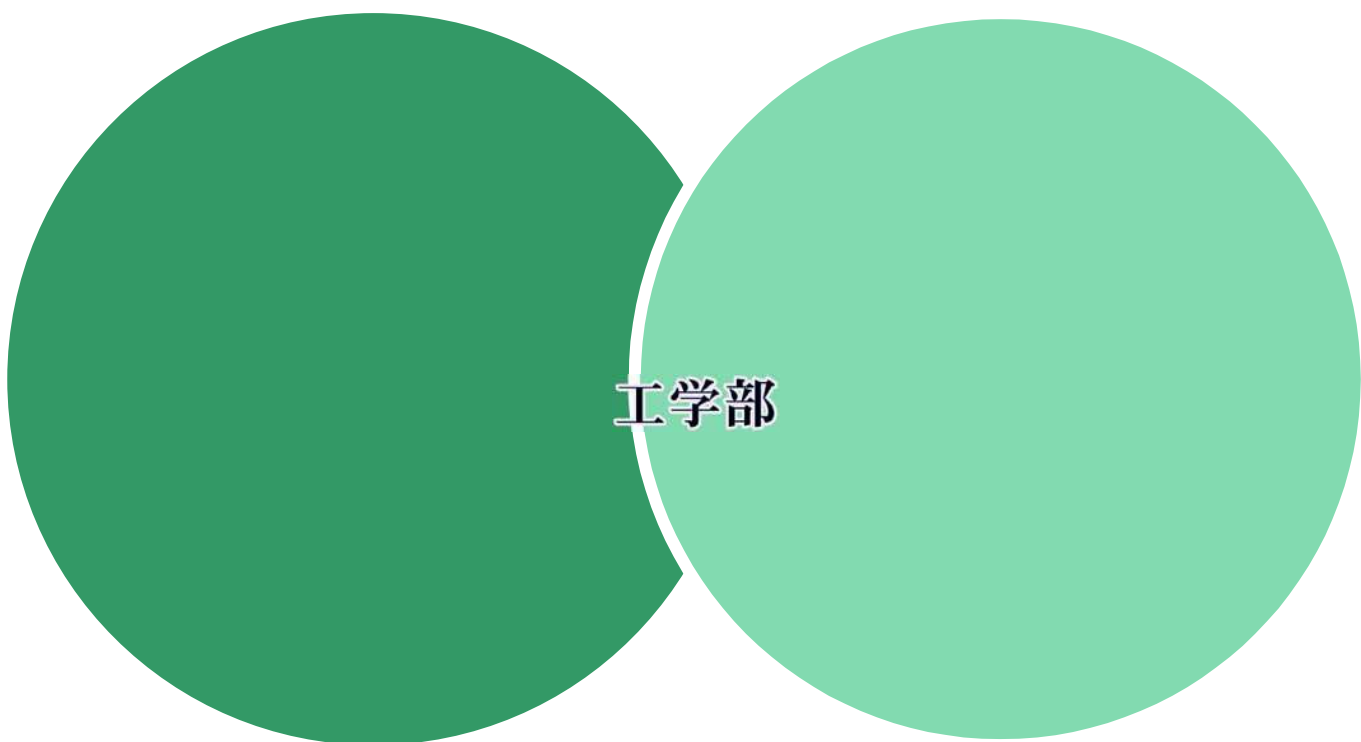
また、歯学部では学生教育の総括に位置付けられる歯科医師国家試験の合格率の向上が例年の関心事であり、上級教員を中心にその取り組みが継続されている。第1回FD講演では、毎年、好成績を挙げている他大学の情報を収集してきた歯学部教育委員長による「歯科医師国試の現状と対策」について報告があり、国家試験対策という初めてのテーマで、全教員の意識レベルの向上を図った。

また、本学のベストティーチャー賞が教員の授業評価を通じた教育能力の向上を目的とするが、実習へもスポットを当てるべきではないか、との歯学部長の発案により、近年、臨床系分野で設けられたベストライター賞受賞者による「学部学生の実習指導講習会」を開催した。今後は基礎系分野の実習評価も取り込んだ内容に発展することが理想的であるが、それぞれの評価項目を統一することの困難さなども指摘されており、今後の検討課題である。

さて歯学部は、令和4年度、分野別歯学教育の認証評価を受審予定で、歯学部自己評価委員会ではそれへの準備を継続してきた。昨年度はその状況を歯学部教員に周知するため学内講師によるFD講演会を開催したが、今年度は次年度を受審に向けて、本テーマの専門家をWebで招聘し、間もなく公的化される共用試験も含め、「分野別歯学教育認証評価受審並びに共用試験OSCEに向けての講演会」と題して、その概要を学んだ。さらに日を改めて、学内講師による「共用試験CPX・共用試験CSXに関するFD講演会」を開催し、卒前・卒後のシームレスな歯科医師養成を目的とする本取り組みへの理解を深めた。

昨年度本格的に開催した授業公開・授業参観は、今年度も予定したが、コロナ禍に見舞われ、残念ながら中止を余儀なくされた。ただ、授業改善の一つのポイントとして、アクティブラーニングの導入が挙げ

られていることから、高等教育研究開発センターの専門家を Web で招聘し、「遠隔授業主体のコロナ禍におけるアクティブラーニングの実施方法ー考え方と具体例についてー」と題して講演を開催した。アクティブラーニングの方法は、授業の目標や教員の性質によって多様であるが、目的は学生の頭の中をいかにアクティブにするか、ということであって、対面と遠隔での根本的な違いはないことを学んだ。すなわち、コロナ禍であろうとなかろうと、その状況に応じた適切なアクティブラーニングを展開することが肝要である、と認識できたことは特筆されよう。ここで得られた認識を踏まえて、次の授業公開・授業参観に繋げ、かつ PDCA サイクルを回すことで、歯学部の教育レベルの発展に寄与することが期待される。



工学部

令和2年度 鹿児島大学工学部FD委員会活動報告書

はじめに

各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする旨の提言が「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（平成10年10月26日大学審議会答申）においてなされた。それを受けて、平成11年9月14日より大学設置基準において努力義務が規定された。工学部においても、FD委員会は、個々の教員が限られた時間の中で行う教育効果の改善の試みを支援し、学部教育全体の質を向上させるための活動を継続的に実施している。

本報告書は、令和2年度の活動報告である。委員と学生係職員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げます。本報告書を読んでいただき、FD委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いです。

令和2年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 甲斐 敬美

令和2年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	(工学部副学部長, 第1号委員)
委員	松崎健一郎	(機械工学プログラム, 第2号委員)
委員	甲斐祐一郎	(電気電子工学プログラム, 第2号委員)
委員	柴田 晃宏	(建築学プログラム, 第2号委員)
委員	甲斐 敬美	(化学工学プログラム, 第2号委員)
委員	三隅 浩二	(海洋土木工学科, 第2号委員)
委員	大橋 勝文	(情報・生体工学プログラム, 第2号委員)
委員	中島 常憲	(化学生命工学プログラム, 第2号委員)
事務	有村美樹子	(理工学研究科等研究科・工学系学務課学生係長)
事務	福元 水映	(理工学研究科等研究科・工学系学務課学生係)

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期目標には、【A1】「進取の精神」を発揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。といったことが掲げられており、充実したFD活動の実施が求められている。工学部FD委員会では令和2年度もこの中期目標の達成を目指して活動を行った。工学部では、全7プログラムのうち5プログラムが日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラムであり、他の2プログラムもJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルに取り込まれた形で実施されている。令和2年度の第1回工学部FD委員会においては、年度内に次の活動を実施することが決定された。1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成、2) 授業公開と授業参観の実施、3) FD講演会の実施、4) 学外FD研修会への学部教員の派遣、5) 授業評価アンケートの分析、6) 報告書の作成。しかし、4)については新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行により実施できなかった。本報告書では他の項目について報告を行う。

第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

2.1 工学部FD講演会

令和2年度の第1回工学部FD講演会は、令和3年1月20日(水)15:00から16:00まで工学部教授会を一次中断してWebexを使用したオンライン形式で行った。講師はプレゼンテーションルーム(理工系総合研究棟2階)において講演を行い、一部の教員(執行部役員、教授会の議題・報告等で説明を行う教員)は同室で聴講した。今回の講師は令和元年度の工学部エクセレント・レクチャー受賞者の7名の先生方で、リレー方式でお話いただいた。講演テーマは「受賞の対象となった科目または今年度の遠隔講義のいずれかについてのアピールできる工夫など」であった。講演会への工学部教員の参加者数は103名で参加率は94.5%であった。

講演者(氏名および所属プログラム)

松崎健一郎 教授(機械工学)	永山 務 助教(電気電子工学)
審良 善和 准教授(海洋土木工学)	五島 崇 助教(化学工学)
隅田 泰生 教授(化学生命工学)	淵田孝康 准教授(情報・生体工学)
曾我 和弘 教授(建築学)	

2.2 新任教員FD研修会

令和2年度の新任教員FD研修会は開催されなかった。

2.3 学外FD研修

令和2年度の学外FD研修への派遣はなかった。

第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

3. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果

図 3.1.1(1)は、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成 28～令和 2 年度までの 5 年分の授業評価の推移を示している。平成 30 年度後期より、アンケートの実施方法を紙ベースのものから web システム (manaba) を利用したものに変更されている。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均した後、学科ごとの科目数で重みづけて平均化して得られた値であり、学科ごとの科目数の違いが考慮されている。本年度より、講義・演習科目に関するアンケートの質問項目に④授業の難易度が追加され、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の難易度、⑤授業の理解度、⑥教材等の適切性、⑦レポート等の理解への効果度、⑧授業目標の達成感、⑨文字の明瞭性、⑩声の明瞭さ、⑪教員の熱意度、⑫質問等に対する教員の対応度、⑬レポート等の評価への満足度、⑭出席回数、⑮予習・復習の時間数、⑯総合的満足度の 16 項目となった。

図 3.1.1(1)より、ほとんどの項目で顕著な改善傾向にあることが分かる。⑮予習・復習に関しては、平成 30 年、令和元年度と顕著な低落傾向にあったが本年度は上昇している。しかしながら、依然として他の質問項目よりも低い値を取っており、授業時間外学習が不足しないよう注視し対策を講じる必要がある。また前年度と同様に、⑫教員の対応については、ほとんど変化が無く他の項目に比べ低いことから、特に改善することが望まれる。

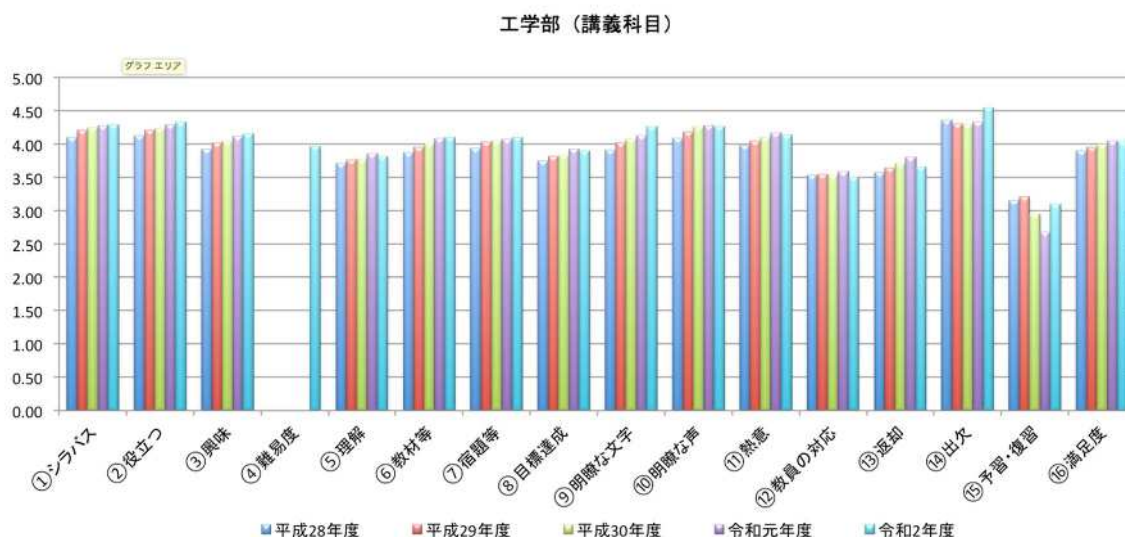


図 3. 1. 1 (1) 講義・演習科目の結果（工学部全体の平均）（平成 28～令和 2 年度）

次に、平成 28～令和 2 年度の実験系科目に関する授業評価アンケート結果を図 3.1.1(2)に示す。実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習

の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度である。

図 3.1.1(2)より、全体的に講義・演習科目の評点よりも高いが、ほとんどの項目で前年よりも減少傾向にある。本年度はコロナ禍のため、実験科目の多くが遠隔やオンデマンド授業により十分に実施出来なかったためと考えられる。コロナ禍の終息により改善されることを期待する。また、前年度と同様に⑬予習は改善されていることから、講義・演習科目とは異なり、授業時間外学習は十分に確保されていると思われる。⑪教員の対応については、前年度と同様に他の項目に比べ低く、特に改善することが望まれる。

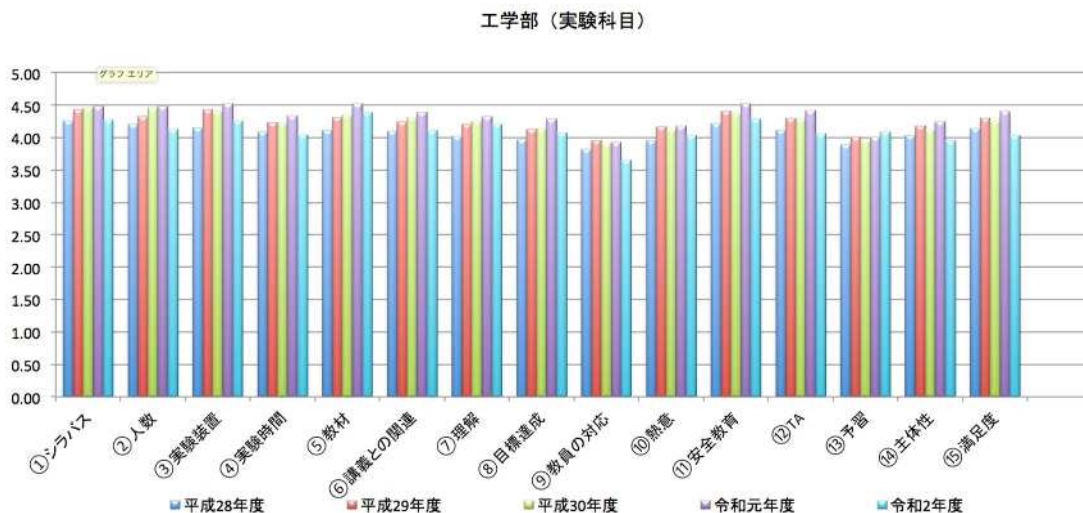


図 3.1.1(2) 実験系科目の結果 (工学部全体の平均) (平成 28～令和 2 年度)

3. 1. 2 機械工学科(PGM)の推移とその分析結果

機械工学科(PGM)の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を図 3.1.2(1)に示す。この図は、前期及び後期 (1 年間) に開講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成 28 年度から令和 2 年度 (5 年間) までの評点の推移を示している。

平成 28 年度までは「大いにそう思う (5)」、「そう思う (4)」、「どちらとも言えない (3)」、「そうは思わない (2)」、「全くそう思わない (1)」の 5 段階評価、平成 29 年度以降では「そう思う (5)」、「どちらかと言えばそう思う (4)」、「どちらとも言えない (3)」、「どちらかと言え

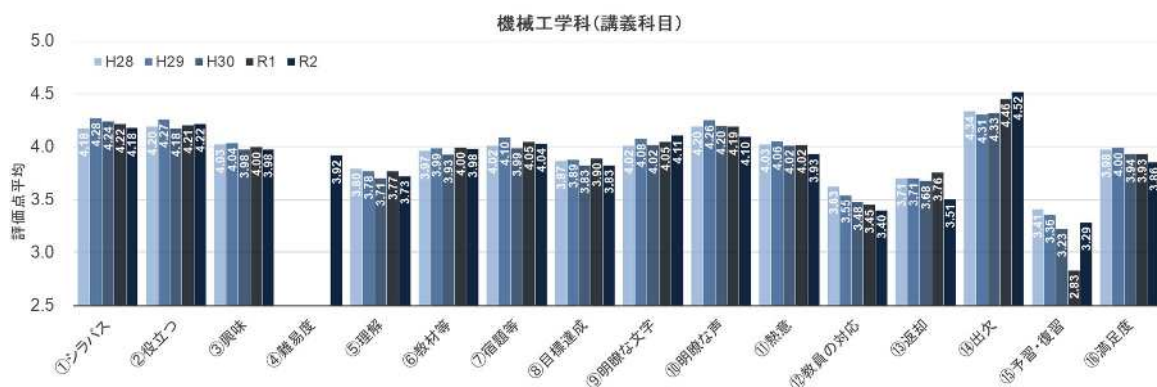


図 3.1.2(1) 過去 5 年間の開講科目における評価点の推移 (平成 26～30 年度)

ばそうは思わない(2)」、「そう思わない(1)」の5段階評価となっている。平成28年度のみ評価方法が異なる点に注意が必要である。図3.1.2(1)から、ほとんどの項目の評点は、4前後で推移しており、各教員による継続的な授業改善によって維持されていると考えられる。比較的評点が低い項目に着目すると、まず「⑤理解」は講義内容の学生への定着を示す重要な項目であり、今後も学生の理解度を上げるための授業改善が必要といえる。また、学生の理解度を上げることは「⑧目標達成」の向上につながるものと考えられる。「⑫教員の対応」は減少傾向を示しており、オフィスアワーなど学生が教員に質問しやすい環境づくりが必要であろう。「⑮予習・復習」の項目は昨年度までは低下傾向を示していたが、令和2年度には向上した。しかしながら、評価点としてはまだ低いため、学生が率先して予習・復習を行うようなさらなる取り組みが必要と思われる。今後も授業評価アンケートの推移を確認しながら授業改善を継続することが重要である。なお、令和2年度から「④難易度」の項目が追加された。評価点は3.92となっており、講義が難しくすぎて理解できないというレベルではなく、難易度としては概ね適切と考えられる。

3. 1. 3 電気電子工学科(PGM)の推移とその分析結果

図3.1.3(1)および図3.1.3(2)に、電気電子工学科(PGM)の過去5年分(平成28年度から令和2年度)の授業評価アンケート結果の推移を示す。図3.1.3(1)が講義科目を、図3.1.3(2)が実験科目を示している。講義科目に関しては、①シラバス、②役立つ、⑨明瞭な文字、⑩明瞭な声、⑭出欠は高い評価を維持し、③興味、⑥教材等、⑦宿題等、⑪熱意は上昇傾向を示しているものの、⑤理解、⑧目標達成、⑫教員の対応、⑬返却、⑮予習・復習は低水準のままである。⑫教員の対応と⑬返却に関しては、教員の改善の努力が望まれる。昨年度大きく低落した⑮予習・復習は、前年度より0.32ポイント上昇した。今年度は遠隔授業が導入され、⑦宿題等も増えたことから、⑮予習・復習に費やす学習時間が増加したと考えられる。学力の低下や学生の興味の変化以外に、学生の生活スタイルの変化が強く影響していると考えられるため、入学時の早い段階で、自宅学習を習慣付けるような指導をしっかりと行っていく必要がある。今年度から④難易度の設問が追加されたが、工学部全プログラムの平均値と同程度であった。実験科目については、ほとんどの項目においても高い評価が得られており改善傾向であるが、今後も高い評価が得られるように改善を続けていく必要がある。

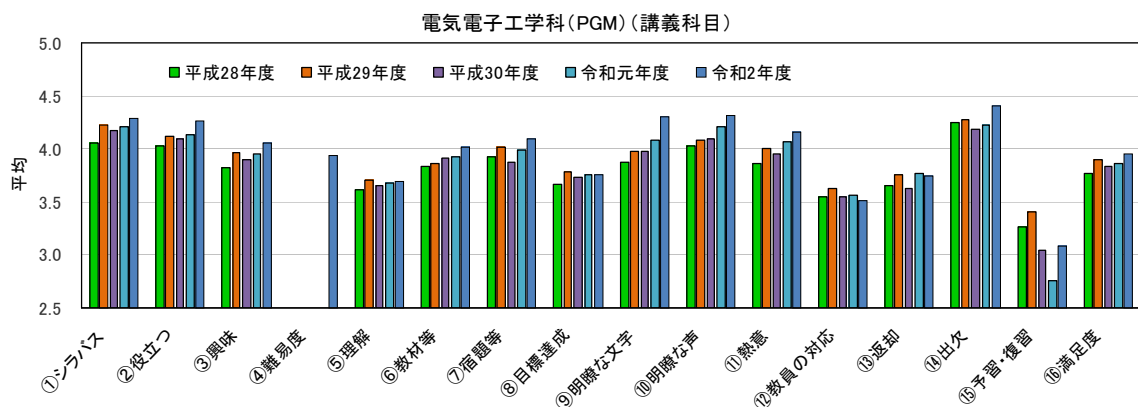


図3.1.3(1) 電気電子工学科(PGM)講義科目のアンケート結果の推移(平成28～令和2年度)

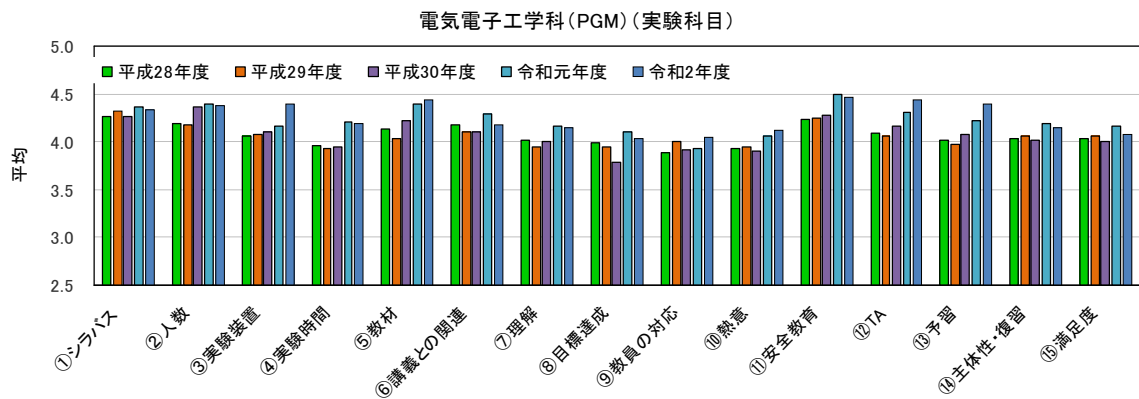


図 3.1.3(2) 電気電子工学科(PGM)実験科目のアンケート結果の推移（平成 28～令和 2 年度）

3. 1. 4 建築学科(PGM)の推移とその分析結果

前年度報告と同様に、建築学科では、建築設計演習の科目が全学年にあり、講義形態は、講義とも実験とも異なるが、アンケートでは、これを講義科目に含めている。また、実験科目は、1科目だけで比較しにくいので、講義科目についての授業アンケート結果を分析することとする。図 3.1.4 は、建築学科の講義科目の授業評価アンケート（前期および後期）で過去 5 年間の年度ごとの結果を示している。⑫教員の対応、⑬返却を除けば増加傾向にある。⑫教員の対応、⑬返却、⑮予習・復習を除き、評点が 4 前後の高い水準を推移している。前年での傾向と同様であるため、教員側の更なる改善が望まれる。⑮予習・復習については、前々年度、前年度減少していたが、本年度は大きく回復している。建築学科では、設計演習科目の課題負担がその他科目に比べて非常に高く、従来より問題が指摘されているが、建築学における最重要科目であるため、簡単には解決できない。設計演習課題のために、他科目の総合的な学習時間が少なくなつては本末転倒であり、工夫・調整が課題と考える。

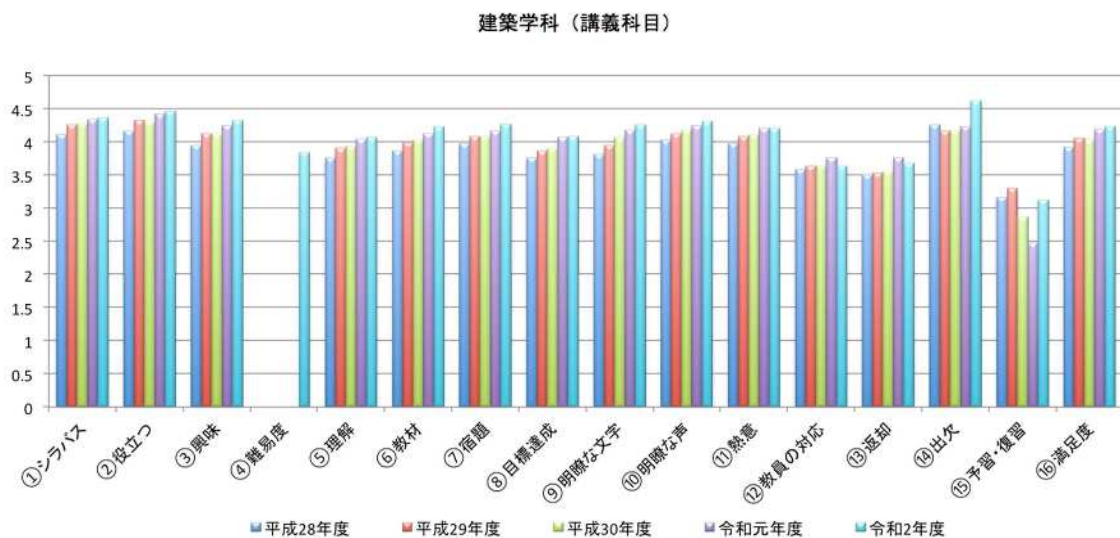


図 3.1.4 建築学科の講義科目の授業評価アンケート（講義科目）の結果
（平成 28～令和 2 年度）

3. 1. 5 環境化学プロセス工学科(化学工学 PGM)の推移とその分析結果

最近3年間(平成30年～令和2年度)の講義科目の授業評価アンケート結果を図3.1.5(1)に示す。ほぼすべての項目について向上の傾向が持続している。また、令和2年度については、⑭出欠、⑮予習・復習のふたつの項目以外はすべて工学部他学科の平均よりも上回っていた。このことから、⑭と⑮が今後の改善余地が大きな項目と考えられる。令和2年度は遠隔講義が多かったが、理解度や満足度の低下は見られなかった。

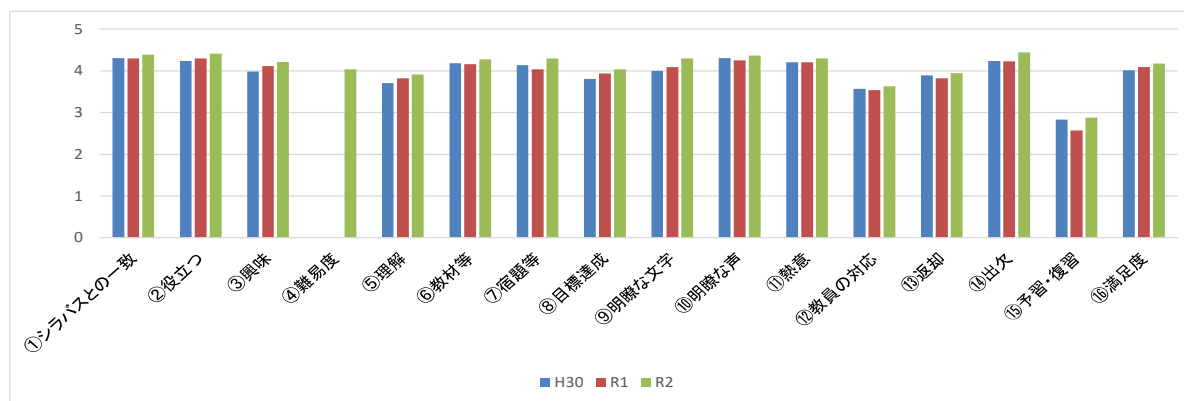


図 3.1.5(1) 環境化学プロセス工学科 (化学工学 PGM) における講義科目アンケート結果

実験科目のアンケート結果は図3.1.5(2)に示す。令和2年度前期においては、実験科目はオンラインで実施した。実験の説明と実験そのものを教員とTAで行い、その様子をビデオ撮影して配信し、そこで得られたデータを与え、それをもとにレポートの作成を学生が行った。また、後期からは実験科目の実施体制を変更した。従来は研究室毎に実験テーマを用意して受講学生はグループで順番に各研究室のテーマについて実験を行っていた。令和2年度からは学生実験担当の教員を決めて、その指導のもとで実験を実施するようにした。このように通年で従来とは異なった方式となった影響でいくつかの項目で低下が見られた。2年目となる来年度は改善されることを期待する。ただし、令和2年度の他学科の平均に比べて劣っていたのは「⑩熱意」のみで、他の項目はすべて優っていた。特に、②役立つ、③興味、④理解、⑫返却の項目は10%以上高い数値であった。

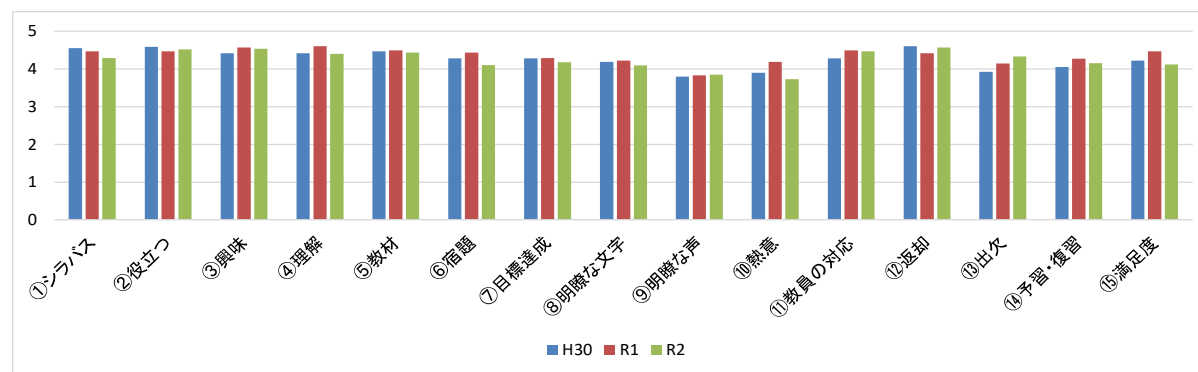


図 3.1.5(2) 環境化学プロセス工学科 (化学工学 PGM) における実験科目アンケート結果

3. 1. 6 海洋土木工学科(PGM)の推移とその分析結果

図 3.1.6(1)は、本学科(PGM) において、平成 28～令和 2 年度の 5 年間に実施した講義・演習科目の授業評価アンケートの結果を示す。本学科(PGM) における令和 2 年度の評価は、⑦宿題等、⑨明瞭な文字、⑫教員の対応、⑬返却、⑮予習・復習を除く 10 項目において、工学部の平均値を上回った。本年度はコロナ禍により不慣れな遠隔授業が行われたため工学部の平均値を上回った項目が減ったものと考えられる。

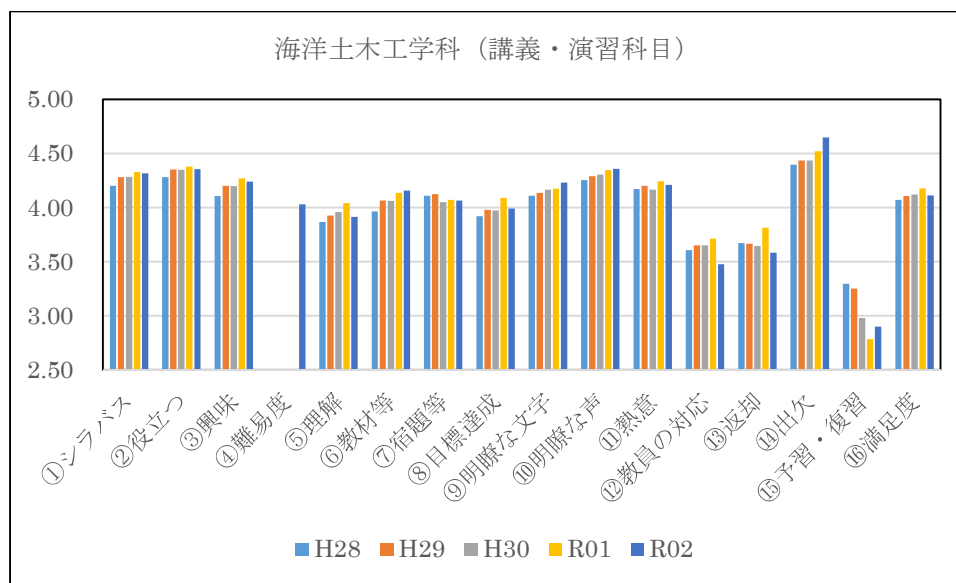


図 3. 1. 6(1) 海洋土木工学科(PGM) の講義・演習科目のアンケート結果 (平成 28 年度～令和 2 年度)

図 3.1.6(1)を見て分かるように、⑥教材等、⑨明瞭な文字、⑩明瞭な声、⑭出欠の評価は右肩上がりであり、この 5 年度間で最高の評価を得ている。特に、⑭出欠の評価が極めてよいのはコロナ禍のため家から出ることが減って遠隔授業の出席率が増えたためだと考えられる。⑮予習・復習の評価は前年度と比べると改善が見て取れる。これも不幸中の幸いであり、外出が減ったため家での学習時間が増えたものと考えられる。新項目の④難易度の評価は 4.00 を超えており、まずまずの評価だと思われる。残りの①シラバス、②役立つ、③興味、⑤理解、⑧目標達成、⑪熱意、⑫教員の対応、⑬返却、⑯満足度は前年度よりも明らかに評価が低い。この事も不慣れな遠隔授業のせいだと考えられる。教員は遠隔授業のための教材作り等でかなりの負担を強いられたものと考えられる。来年度は本年度評価の下がった項目について本年度の経験を生かして改善できるように努力することが必要であると思われる。

図 3.1.6(2)は、本学科(PGM) において、平成 28～令和 2 年度の 5 年間に実施した実験科目の授業評価アンケートの結果を示す。ここで、アンケートの実施科目数は 4 科目であった。本学科(PGM) における令和 2 年度の評価は、①シラバスの 1 項目を除いて工学部の平均値を上回った。特に、②実験グループの人数の適切さ、④実験時間の配慮、⑪安全教育の実施の評価が高かった。

図 3.1.6(2) を見て分かるように、②実験グループの人数の適切さの評価は、平成 29 年度に大きく低下しているが、これは海洋土木工学棟の改修工事に伴い、選択科目である実験科目の一つを夏休み期間中の集中講義とする必要があり、受講生数が激減したためであると考えられる。海洋

土木工学棟の改修後はこの評価が戻ったが、前々年度と前年度は工学部の平均値を下回っていた。④実験時間の配慮は前年度よりも評価が高い。②実験グループの人数の適切さ、⑪安全教育の実施、⑬予習の割合は前年度と同様かわずかに評価が高い。以上の4項目以外はいずれも前年度よりも明らかに評価が低い。特に、①シラバスの内容と実際の実験、⑥講義との関連、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑮総合的満足度は、この5年度間で最低の評価となっている。前年度に比べて評価が下がった項目が多かったのは、コロナ禍で遠隔授業が多かったせいであると考えられる。来年度は本年度評価の下がった項目について本年度の経験を生かして改善できるように努力することが必要と思われる。

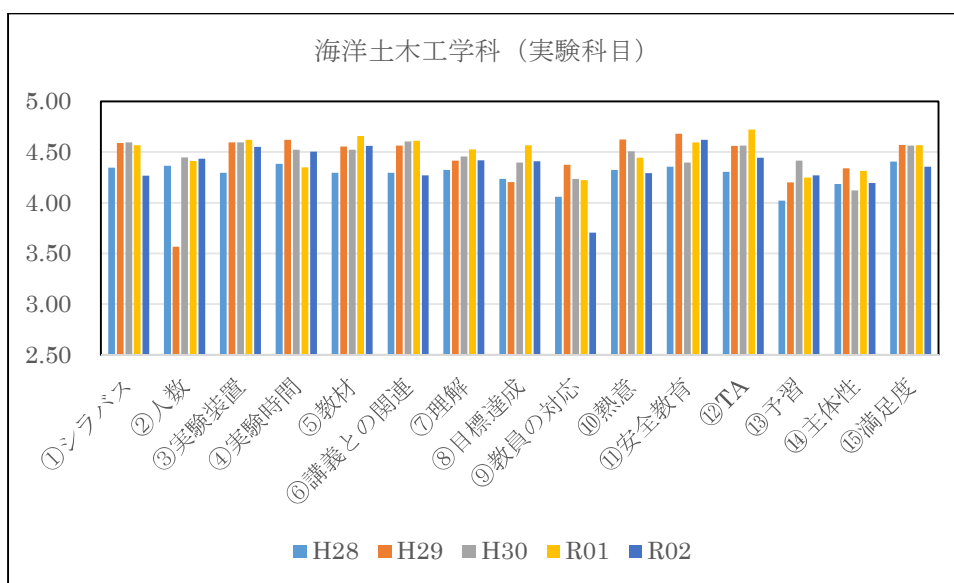


図 3.1.6 (2) 海洋土木工学科(PGM) の実験科目のアンケート結果 (平成 28 年度～令和 2 年度)

3. 1. 7 情報生体システム工学科(情報・生体工学 PGM)の推移とその分析結果

平成 21 年度の改組により情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合され誕生した情報生体システム工学科が、卒業生を送り出したのは今年度で 9 回目となる。令和 2 年度から先進工学科情報・生体工学プログラムに改組したため、1 年生が情報・生体工学プログラム、2～4 年生は情報生体システム工学科のシラバスで教育を受けている。

FD 授業評価アンケートは、平成 21～令和 2 年度の 12 年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析(平成 30,令和元,2 年度)と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度であった。講義系科目の集計結果を図 3.1.7(1)に示す。

令和 2 年度は、従来の講義形式から Zoom を用いたオンライン講義や講義を動画にした画像をアップデートすることでいつでも講義を受けられ、さらに繰り返し受講できるなど今までにない手

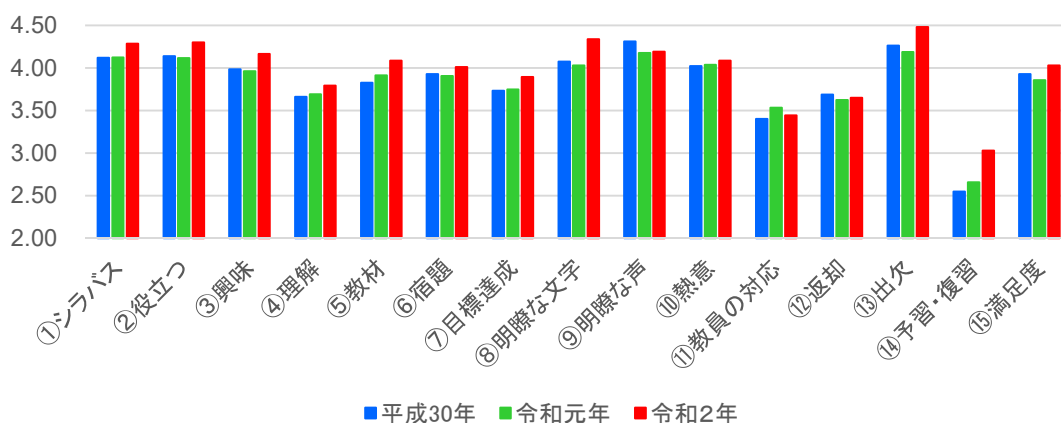


図 3.1.7(1) 情報・生体工学プログラムの講義科目授業評価アンケート結果の推移 (H30～R2)

法を取り入れらことで、「①シラバス」から「⑧明瞭な文字」と「⑬出欠」「⑮満足度」が上がった。しかし、対面での対応ができなくなったため⑪の教員の対応が低下した。また、今年度の工学部平均値と比較すると、「⑭予習・復習の時間数」を除く項目の評価は工学部平均に拮抗する値であった。「⑭予習・復習の時間数」は年々上昇し 3.0 を超えているので、「⑭予習・復習の時間数」の低い科目の数値を改善する必要がある。

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。実験系科目の集計結果を図 3.1.7(2)に示す。今年度の実験は各学生が持つ PC などでも実習をしてもらい Zoom により TA や教員が対応する手法を行ったが、実験準備に十分な時間がとれなかったため、多くの項目でアンケートの評価を落としてしまった。今年度の実験は助教と准教授が分担で作成したが、助教と准教授が担当している講義を遠隔講義にする作業を進めながら行っているため、実験の準備等に十分な時間をかけられないなどの問題が生じていると思われる。そのため、各教員の授業負担を考

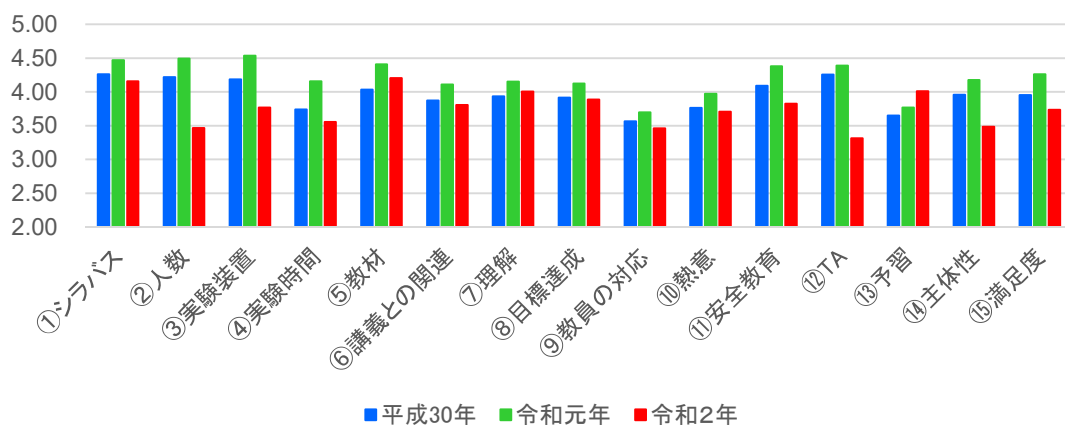


図 3.1.7(2) 情報生体システム工学科の実験科目授業評価アンケート結果の推移 (H30～R2)

慮した改善を行う必要がある。

以上のように、講義系科目及び実験科目のアンケート結果の推移及び分析から、情報・生体工学プログラムの授業は、アンケート点数の評価としては今年度も昨年度と同様に、教員及びTAの努力により十分な水準を保っていること分かった。しかし、情報・生体工学プログラムの授業の教員が減る一方で補充が行われていないため、学生数が同規模の電気・電子工学科に比べ教員数が64%と少なくなっている。このような状況で、十分な教育を行うためには、各教員により一層の改善が求められるが、同時に教員補充等の対策を期待する。

3. 1. 8 化学生命工学科(PGM)の推移とその分析結果

令和2(2020)年度の集計結果を平成30(2018)～令和元(2019)年度分と合わせて、図3.1.8(1)に示す。本年度より④難易度という項目が追加された。項目⑫、⑮を除き評価は概ね4前後を推移しており、工学部・他学科と比較しても遜色のない結果であった。評価の低い項目の内、まず項目⑮“予習・復習”の評点については、3.03と昨年度の2.71より高く改善傾向であった。本年度は、オンデマンド配信やmanabaを活用した電子的な資料の配布など遠隔授業の形態で実施された授業が多く、受講生のライフサイクルに合わせて予習・復習を行うことができた結果と考察する。一方で⑦宿題や⑩満足度は低下しているが、例年よりも取り組むべき宿題が多く、また教員と直接対面して指導を受ける機会が少なかったためこのような評価につながったと推察する。遠隔授業の場合に、manabaなどのツールを十分活用して、提出された課題に対する丁寧なフィードバックを実践していくことが改善に繋がるのではと考える。次に項目⑫“教員の対応”の評価が低く、各教員の対応に学生が満足していないことがわかる。上述したように、遠隔授業が増えたことにより、教員が授業の準備に費やす時間が増え、授業後の細やかな対応がおろそかになった可能性がある。また、財政の劣悪化や諸業務の肥大化が教員の本業である教育を侵食し始めていることが危惧される。学生から提出されたレポート等は、JABEE用のエビデンスとしても重要な資料であり、各教員がmanaba等の教育支援ツールを使いこなし、効率的に保管することが望まれ、教育活動に費やす時間を十分に確保することが重要である。

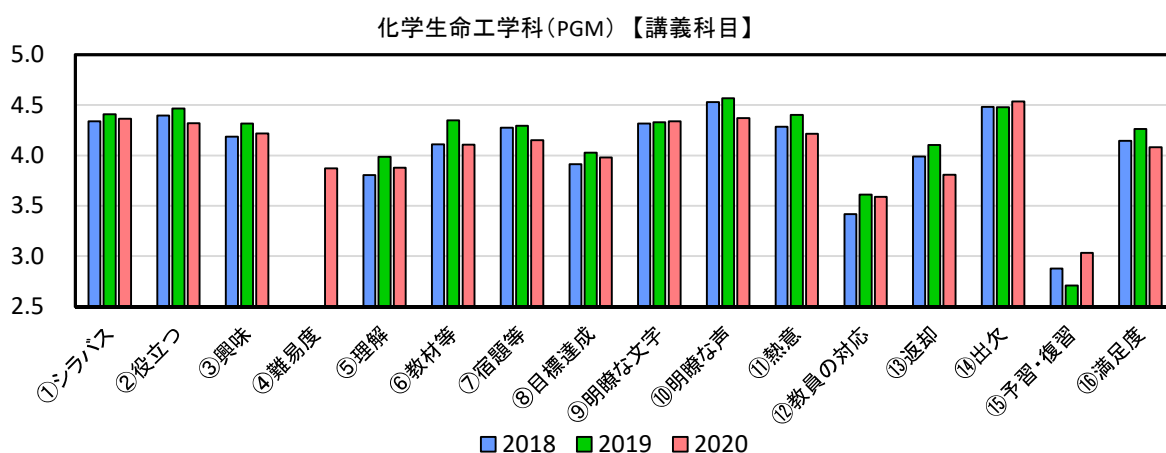


図 3.1.8(1) 化学生命工学科におけるアンケート結果

次に、項目②、⑤、⑧、⑪、⑯について、平成 23（2011）年度から令和 2（2020）年度までの経年変化を図 3.1.8(2)に示す。平成 28（2016）年度において一部の項目でポイントが下がる傾向が見られたが、平成 29（2017）年度から令和元（2019）年度にかけてはすべての項目で改善され、FD活動の成果が表れていると考えていたが、本年度はすべての項目で前年度よりも低評価となった。とくに、⑤理解と⑯満足度の項目が減少しており、受講生の視点では、manaba や電子メールを介した質問事項への対応では、十分に満足いく指導が受けられていないと感じていると思われる。科目によっては特に成績下位の受講生の習熟度が例年よりも低下していると感じられる場合があり、今後対面形式での授業が再開された後は、オンデマンド配信などの長所を取り入れながら学生と直接対話して指導するということの重要性を再確認して授業を行うことが重要と考える。

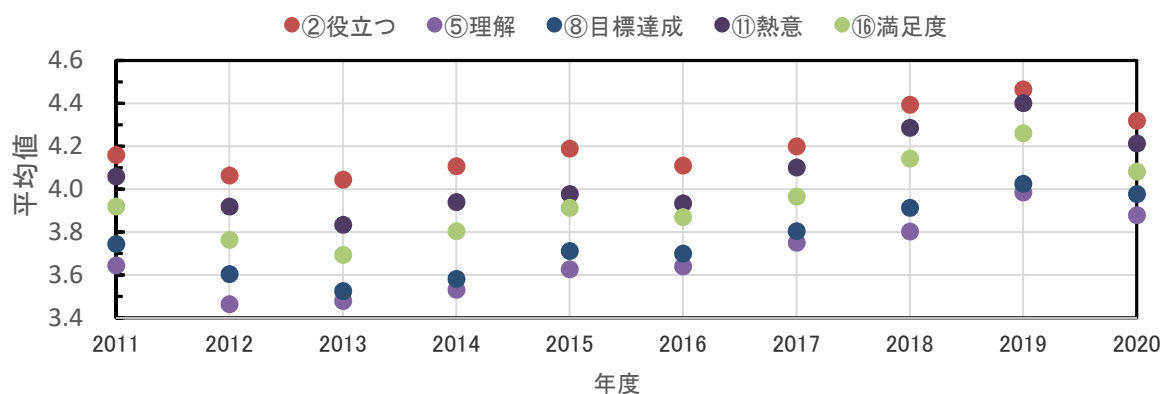


図 3.1.8(2) 化学生命工学科における主要アンケート結果の経年変化

3. 2 授業計画改善書の各学科の活用状況

3. 2. 1 機械工学科(PGM)の活用状況

学科(PGM)のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに学科(PGM)の教育評価委員会が整理して分析を行っている。学科(PGM)の教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「教育評価委員会報告書」としてまとめている。授業計画改善書は、学科事務室にPDFファイルで保管され、全教員が必要に応じて閲覧できる。また、教育評価委員会報告書は学科のサーバに電子ファイルで保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教員に公開されている。

3. 2. 2 電気電子工学科(PGM)の活用状況

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共にプログラム事務室や会議室のJABEE用保管庫にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として工学部FD委員が管理し、JABEE活動の一環として、プログラムFD委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

3. 2. 3 建築学科(PGM)の活用状況

教員は、授業評価アンケートの集計結果に基づいて、授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業に反映させることとなっている。また、授業アンケートの全科目の評点は学科内で閲覧可能であり、問題点を共有することとしている。本学科では、平成 19 年度より授業満足度の評点と授

業担当時間を用いて、教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している。この結果も学科内で閲覧可能にしている。しかし、授業改善計画書は各期末に提出することになっているが、各教員からの提出状況は芳しくない。授業アンケートの結果から教員による授業改善の努力は伺えることから、授業改善計画書が形式的な書類となっている可能性がある。また、本年度より授業評価のチェックも FD 委員の業務に追加されているが、授業改善計画書の提出状況からも資料を揃えるのが難しい。大学における個人の業務時間の増加傾向から考えるに、授業改善計画書の簡易化や manaba の利用など、名を捨てて実を取る改善が必要と考える。

3. 2. 4 環境化学プロセス工学科(化学工学 PGM)の活用状況

各教員が作成した授業計画改善書の電子ファイルは FD 委員が集約して教員が自由に学科サーバで閲覧し確認できる体制がある。学科会議や学期末に開催する教員間ネットワークでは、授業計画改善書について議論する仕組みを整えている。また、次学期開講予定科目のシラバスについても点検を行っている。令和2年度からは授業計画改善書に追加された成績分布の項目についても点検を実施した。カリキュラムについては、カリキュラム WG で年に数回の検討・精査を実施している。今後もこのような継続的な取り組みにより、評価の再確認と改善を図っていく。

3. 2. 5 海洋土木工学科(PGM)の活用状況

工学部 FD 委員会が学生に対して実施する専門科目の授業アンケートの結果に基づき、授業担当教員は、授業計画改善書を作成して FD 委員に提出する。FD 委員は、これを学科(PGM)教育システム評価委員会に提出する。また、授業担当教員は、専門科目の学習目標の達成度を自身で評価し、この結果も学科(PGM)教育システム評価委員会に提出する。学科(PGM)教育システム評価委員会は、提出された授業計画改善書と学習目標の達成度評価を比較・検討し、学科(PGM)会議で報告する。そして、学科(PGM)会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科(PGM)内の基礎科目部会、環境システム科目部会、建設システム科目部会や、JABEE WG および教務委員会で検討し、改善方法を策定する。このような PDCA サイクルを構築し、授業計画改善書と学習目標の達成度評価の両者を活用しながら、教育の点検および改善を継続的に実施している。

3. 2. 6 情報生体システム工学科(情報・生体工学 PGM)の活用状況

情報生体システム工学科では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、学科としての JABEE 申請は行わないことにし、その代わり学科内で組織している教科グループ WG において、半期に1度、全開講科目について担当教員による報告と振り返りを実施し、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

3. 2. 7 化学生命工学科(PGM)の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースの時代から引き続き同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、必要に応じて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において、十分な教育効果が達成されているかどうか

か討論されている。検討した結果や問題に対する対策はプログラム内教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体カリキュラムとの整合性も考慮しつつ、最も効率の良い方法で運用できるよう検討され、必要な改善がなされている。このように、授業計画改善書等のFD活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。令和2年度は、令和元年度に引き続き、授業アンケート評価結果を利用して、エクセレントレクチャー賞を推薦している。

第4章 学科(PGM)におけるFDとJABEEへの取り組み

4.1 JABEE認定プログラムを実施している学科(PGM)での取り組み

4.1.1 機械工学科(PGM)

機械工学科(PGM)は、平成16年度にJABEE認定の審査を受けた。平成18年度のJABEE中間審査において、平成16年度に評価Wの指摘を受けていた全ての評価項目を改善している。平成21年度実施のJABEE認定継続審査では、評価Cを受けた項目が10箇所あり、W以下の評価を受けた項目は無く、6年間のJABEE認定継続が認められた。平成27年度実施のJABEE認定継続審査では、評価Cを受けた項目が11箇所あったが、W以下の評価を受けた項目も無く、さらに6年間のJABEE認定継続が認められた。令和3年度には再びJABEE認定継続審査を受審予定である。

本学科(PGM)は、平成22年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育研究を生産工学、エネルギー工学、機械システム工学の3つのコース(分野)で分担実施している。各コース(分野)は、複数の研究室により構成され、それぞれにコース長(分野長)をおいている。この3名のコース長と副専攻長から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成25年度からその役割は「コース長(分野長)会議」に移管された。この「コース長(分野長)会議」を基に、学科(PGM)の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。学科(PGM)内には、さらに、教務委員会委員、FD委員会委員、JABEE委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「教育評価委員会」と、JABEE認定のための審査資料作成を行う「JABEEワーキンググループ」があり、平成27年度にはJABEE認定継続審査を受けるため審査項目や評価項目の確認などを検討した。また、平成26年度は、「教育評価委員会」において、PDCAサイクルの「評価」を実践強化するために運営規程の検討・修正を行うとともに、教育環境に関するアンケートを実施した。さらに、「JABEEワーキンググループ」では、学習・教育到達目標の達成度評価方法を提案して、4年生の卒業時におけるJABEE修了判定の評価を行った。平成27年度より1年生から4年生まで成績の自己点検として「学習・教育達成目標(教育目標)の達成度の自己点検」を続けている。さらに平成26年度からは卒業論文発表時に複数教員による発表評価を「卒業論文発表評価表」により実施しており、評価結果をすべての発表学生にフィードバックしている。これらの委員会およびワーキンググループによって、教育方法や教育改善に関する実質的に活動が実施され、促進するように継続的に検討が行われている。

4.1.2 電気電子工学科(PGM)

電気電子工学科(PGM)では、平成28年10～11月に、JABEE継続審査を受審し、6年間の継続

認定が認められた。今年度は、プログラムFD委員会を計2回開催し、その他プログラム会議や電子メールでの議論、シラバス点検、各種アンケートの実施などでプログラムの教育改善に取り組んできた。今年度のプログラムFD委員会を含むプログラムの教育改善活動は以下の通りである。

- (1) シラバスの点検：プログラムFD委員会において、専門教育科目の全シラバスを点検し、シラバスの整備を行っている。
- (2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善：プログラムFD委員会において、科目の成績評価と授業評価アンケート結果、授業計画改善書等をもとに授業の検証を行ない、必要に応じて担当教員と連絡を取っている。
- (3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施：新入時とその1年後にアンケートを行い、学生の実態を把握し、改善のための資料としている。
- (4) 学生定期面談の実施：各期末の指導教員による学生定期面談を義務化し、指導・助言する体制を整えている。
- (5) 教員間連絡ネットワークの構築：科目間連携会議を基礎科目と各コース専門科目で行い、プログラムFD委員会で結果を議論している。
- (6) 社会からの要望調査の実施：来学された企業採用担当者に「求める学生像」や「電気電子工学科(PGM)に期待する教育内容」などについてのアンケートを実施し、教育改善に役立てている。

4. 1. 3 建築学科(PGM)

建築学科では、平成29年度にJABEEの継続審査を受審し、6年間の継続認定が認められた。建築学科における最近のFD活動とJABEE関連の主な取組は以下のとおりである。

- (1) 公開ホームページの更新：昨年度更新したホームページではSNSとの連携を図っており、建築学科関係のイベント告知やニュースなど情報発信を随時実施した。
- (2) 改正建築士法に伴う建築士試験への対応科目の実施：建築士法の改正による一級建築士試験の受験資格変更の対応科目を実施し、在大学院生の合格が達成されている。
- (3) 教員の教育負担と教育貢献度の評価：教員の教育負担を調べて教育貢献度を評価し、資料に基づいて授業の分担を再検討した。
- (4) 期末および中間授業アンケートの実施：期末授業アンケートだけでなく、中間授業アンケートも実施した。中間授業アンケート結果により、進行中の授業の改善を促した。

改組に伴う進級条件の検討：改組に伴い、上下学年で必修科目の時間割上の重複があるため、進級条件の検討を行った。検討結果は現状維持となったが、JABEE面談などで学生へ注意喚起し、今後検討を継続することとした。

4. 1. 4 海洋土木工学科(PGM)

海洋土木工学科(PGM)のFD活動は、JABEEプログラムの実施・点検に沿った教育改善の一環として、次のような確立した手順で行われている。すなわち、工学部PD委員会が学生に対して実施する専門科目の授業アンケートの結果に基づき、授業担当教員は、授業計画改善書を作成してFD委員に提出する。FD委員は、これを学科(PGM)教育システム評価委員会に提出する。また、

授業担当教員は、専門科目の学習目標の達成度評価を行い、この結果も学科(PGM)教育システム評価委員会に提出する。学科(PGM)教育システム評価委員会は、提出された授業計画改善書と学習目標の達成度評価の結果を比較・検討し、学科(PGM)会議で報告する。そして、学科(PGM)会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科(PGM)内の各委員会で議論し、改善計画を策定する。

なお、本学科(PGM)では、エンジニアリング・デザイン教育の充実を図っている。まず、3年次には、「海洋土木デザイン工学 I」において、エンジニアリング・デザインの実例を学ぶ。そして、実際のプロジェクトの調査方法や代替案を立案し、レポートを提出して発表を行う。次に、4年次には、「海洋土木デザイン工学 II」において、3～4人程度のグループで、知識、情報や技術を駆使して、社会的・技術的な問題点を自ら発見して解決することを体験する。そして、その成果をポスタ・セッション形式で発表する。こうして学生のチームワーク力を養いながら、課題発見能力や問題解決能力の高い技術者の養成を試みている。更に、本学科(PGM)では、以前より、アクティブ・ラーニングを幾つかの科目で採り入れている。例えば、「土木技術者倫理」では、技術者に要求される倫理に関して、グループによる調査・発表や、ディベートを行っている。「海岸防災工学」では、防災に関して、グループによる調査・発表や、避難ワークショップを実施している。「海洋土木工学総合演習II」では、技術士による講演とアクティブ・ラーニングを1コマ実施している。

4. 1. 5 化学生命工学科(PGM)

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成18年度の審査によりJABEE認定を受け、平成29年度に認定継続審査を受審し、6年間の追加認定を受けた。JABEEに関する情報は学科ホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標とJABEE基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、教育改善のためのアンケート調査が、化学工学プログラムおよび同窓会との共催による講演会の際に既卒業・修了生を対象に1回、年度末に新卒業・修了生を対象に1回、計2回継続的に実施され、結果は教室会議および学科ホームページを通じて情報共有、公表されている。アンケート項目中の共同利用施設に対する評価結果は学科長名で各施設長等へ送付され、改善等の一助としてもらうとともに、学科と施設等との連絡網の構築を図っている。さらに、工学部統一書式の自己点検表(ポートフォリオ)を活用し、学生自らが自己点検を行い継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であるとの考えから、後期が開始される時期に全学生の面談を担当教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施、指導している。同様に、成績不調者に対しても、インタビューを実施している。これらのインタビューでは、報告の書式を学科独自に作成し、重要なインタビュー項目が欠落しないように工夫している。さらに、インタビューの結果を書面として保管し、必要に応じて、当該学生の過去のインタビュー結果を参照しながらインタビューを実施できるようにしている。これらの活動は平成26年度に工学部で新入生に対して導入されたアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度発足後もそれらと矛盾の無いように自己点検表制度等を継続的に運用

している。令和2年4月新入生に対しては、所謂コロナ禍における遠隔授業の導入により、実際に対面形式でのインタビューが困難なケースも見られたが、これまでのノウハウも活用して、学生相談員の協力のもとWEB上でのリモート会議ツールや電子メールなどを活用して、学生の指導を行った。また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。例年は、各教員が年間1科目は必ず授業を公開し、どの科目に誰が参観するかを定め、全教員が必ず1回は他の教員の授業を参観を受ける仕組みを導入している。しかしながら、本年度は前期に開講された授業の多くが遠隔授業であったため、後期に開講された授業のみの公開・参観となった。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指しプログラム内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCAサイクルを構築している。

4. 2 JABEE を受審していない学科での取り組み

4. 2. 1 環境化学プロセス工学科(化学工学 PGM)

本学科では平成16年度より継続してきたJABEE認定を平成26年度に終了し、これに代わる取り組みとして、平成26年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士(基礎)」の取得を意識した新カリキュラムを実施しているほか、本学を試験会場とした団体受験を実施している。目標としている合格率は60%であり、合格率アップに向けて補習内容の見直しや講義内容の修正などの対策も継続して実施している。令和2年度は新型コロナウイルス感染症対策下で集合しての試験をすることが難しいため5月に中止が決定された。

学科のFD活動においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD講演会への参加などに取り組んでいる。さらに、本学科教職員は、原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している。教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので、各教員がどのような講義を行うのかシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている。また、令和2年度からは成績評価についても点検を行った。シラバスおよび授業改善計画書は電子ファイル化して学科のサーバにおかれており、学科教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている。

将来のカリキュラムについては年に数回のカリキュラム検討ワーキングを開催し、学科(プログラム)としてどのような科目をどのような順番で開講するか、誰が担当するかなどについて、綿密に検討を行い、新入生に配布される履修要項の更新を毎年度行っている。

学生は毎期ごとに個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、ポートフォリオを作成している。尚、ポートフォリオを印刷できるコーナーを学科図書文献室に設置している。学部1,2年生には年2回、全教員が面談員となり定期個別指導(学生面談)をチーフアドバイザーの教員が企画し実施することで、学修指導ならびに生活指導を行い学生と教員との間のコミュニケーションをとっている。3年生は後期の研究室仮配属後に研究室で面談を実施しているほか、4年生には卒業研究の従事記録を記録させている。また、学生相談員による相談会を実施し、学修、生活について気軽に相談できる機会を設けている。

4. 2. 2 情報生体システム工学科（情報・生体工学 PGM）

情報生体システム工学科は、平成 21 年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて新学科となり 12 年間が経過した。今年度は、新学科の卒業生を送り出して 9 年目となる。令和 2 年度から先進工学科情報・生体工学プログラムに改組したため、1 年生が情報・生体工学プログラム、2～4 年生は情報生体システム工学科のシラバスで教育を受けている。

情報・生体工学プログラムは、JABEE への申請は行わないことに決定し、その代わりにプログラム内の教科グループ WG を組織し、開講科目とカリキュラムの改善に取り組んでいる。情報・生体工学プログラムでは、教育企画委員会と、FD 推進委員会により、学科の教育改善などの FD 活動を担っている。FD 推進委員会の下には、教科グループ WG（情報基礎科目、ソフトウェア科目、工学基礎・教養科目、語学科目、実験科目）が設置されており、前期と後期の終わりに全教員による科目ワーキングを開催し、各科目の履修状況、単位取得状況、講義内容、成績評価基準などを報告し、学科の教育内容についての評価・検討を行っている。ここ数年、学生の数学の学力低下が懸念されており、工学基礎・教養科目 WG では、数学に関する授業の内容を科目間で調整している。また、ソフトウェア科目 WG でも同様に、プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し、科目間での調整を行っており、昨年度は開講期の変更を決定した。さらに、実験科目 WG では、昨年度末の計算機システムの導入に伴い、実験機器の更新や内容の見直しを検討している。情報生体システム工学科では、授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し、各教科グループ WG で積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また、1 年生には、高校における数学・理科の詳細な履修状況、志望動機、進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して、学生への指導の参考にするとともに、カリキュラム改善に役立てている。

第 5 章 GPA 制度の現状と学習成果

平成 18（2006）年度の FD 報告書において、GPA 制度の現状と問題点の整理がなされ、GPA の推移、分布、GPA 制度と JABEE との関係、授業アンケート調査結果との関係について調査・検討がなされた。平成 19（2007）年度と平成 20（2008）年度は年間 GPA の推移、年間修得単位数の推移、入学者数に対する卒業生数の割合の推移が調査された。平成 21（2009）～平成 27（2015）年度も平成 20（2008）年度の調査を継続し、GPA と授業アンケートデータの関係が調査され、学習成果と学習の質の関連性についての分析が試みられた。本年度も継続してこれらの調査・分析を試みた。

5. 1 年間 GPA の推移

平成 29（2017）年度報告書までは、平成 15（2003）～平成 29（2017）年度入学生の年間 GPA の平均値（以下、年間 GPA 平均と記す）を経過年数別のデータを取りまとめ、入学年度による年間 GPA 平均の推移について報告してきた。ここでは概ね次のような傾向が見られた。1）在学 1 年目の年間 GPA 平均に対し在学 2 年目の年間 GPA 平均が低くなる。2）在学 2 年目の年間 GPA 平均に対し在学 3 年目の年間 GPA 平均が高くなり、在学 1 年目の年間 GPA 平均と同程度まで回復する。詳細は平成 29（2017）年度の FD 報告書を参照していただきたい。

平成 28 (2016) 年度に共通教育改革が行われた。初年次教育プログラムが設定され、「初年次セミナーⅠ」、「初年次セミナーⅡ」が開講された。また、グローバル教育プログラムとして、「英語」の他、「異文化理解」が新設された。さらに、これまで基礎教育科目として共通教育で開講されていた数学および物理科目は、共通教育では開講せず工学部で専門教育の一環として位置づけられた。そこで、本項では平成 27 (2015) 年度入学生以降の年間 GPA 平均の推移について報告する。

図 5.1 に、平成 27 (2015) 年入学年度～令和 2 (2020) 年入学年度の年間 GPA 平均を示す。入手データの都合上、年間 GPA 平均は GPA が 1.5 以上の学生の平均値を用いて算出している。

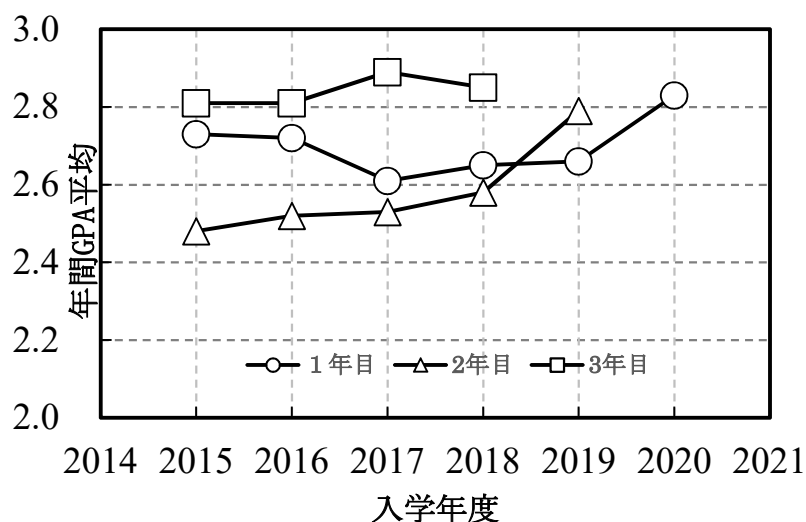


図 5.1 入学年度による年間 GPA 平均の推移

この 6 年間の 1 年目の年間 GPA 平均は、2.61～2.83 であった。共通教育改革の初年次は 2.72 であったが、それ以降の 3 年間は 2.6 台に低下していた。ところが、令和 2 (2020) 年度は 2.83 と値が急上昇した。これは本年度は工学部の改組に伴い工学系概論科目の「工学概論」と分野融合科目の「工学分野実験・演習」(工学系共通クラスの学生のみ履修)の新設科目が開講され、教員の熱意と 1 年生のやる気(競争心)が増したためだと考えられる。また、コロナ禍のために遠隔授業が実施され自宅やアパートから出られず、勉強する時間が増えたことも年間 GPA 平均の急上昇に繋がったものと考えられる。

この 5 年間の 2 年目の年間 GPA 平均は 2.48～2.79 であった。従来は 2 年目は大学生生活に慣れて勉強意欲が希薄になるため 1 年目に比べて年間 GPA 平均は低下してきたのだが、平成 31 (2019) 年度入学生の 2 年目は 1 年目を 0.13 ポイント上回った。これもコロナ禍のために遠隔授業が実施され外出できず勉強時間が増えたこと、教員も学生も不慣れな遠隔授業に慎重に対処したことなどが原因であると考えられる。また、平成 27 (2015) 年度入学生から令和元 (2019) 年度入学生まで 2 年目の年間 GPA 平均は年々上昇してきており、教員の FD 活動が功を奏してきたとも考えることができる。

この 4 年間の 3 年目の GPA は従来と同様に回復傾向が見て取れる。平成 29 (2017) 年度入学生は 0.28 ポイント、平成 30 (2018) 年度入学生は 0.20 ポイント上昇している。3 年目は講座配属や就職を控え、より専門性の高い選択科目に接することでやる気が出たりして、年間 GPA 平均が回

復したものと考えられる。4年目は取得単位数が少ないため、比較は行っていない。

5.2 年間修得単位数の推移

図 5.2 に年間修得単位数の平均値を年度ごとに算出した結果を示す。途中年度のデータが欠落しているが、令和3（2021）年3月におけるデータを過去のデータに追加して図に示した。解析は、令和2（2020）年度における在学1年目の1～2期生、在学2年目の3～4期生、在学3年目の5～6期生が令和2（2020）年度に取得した単位数の平均値を求めた。ただし、確定GPAが1.5未満の学生のデータは除いている。

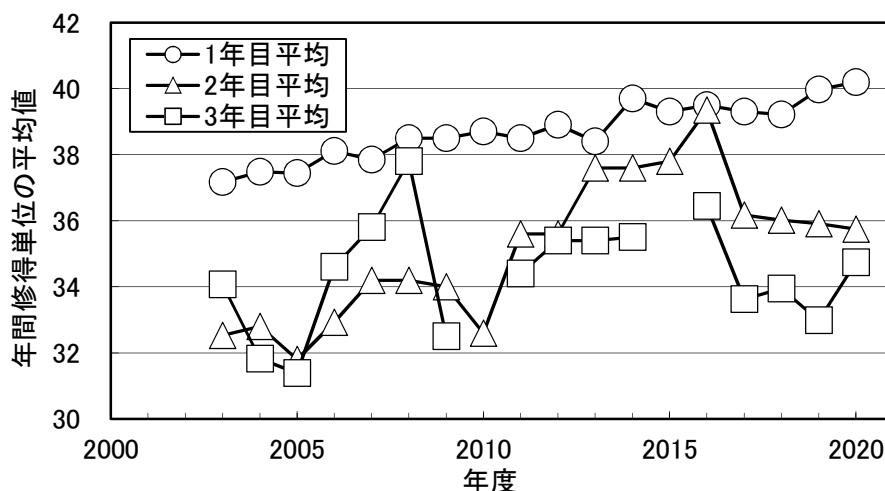


図 5.2 年間修得単位数の平均値

在学1年目の1～2期生が取得した単位数は、途中多少の増減はあるが、統計を取り始めてからおおむね微増の傾向のように見られる。在学2年目の3～4期生および在学3年目の5～6期生が取得した単位数（途中年度の解析結果がデータ不足で欠落している）は、年によって大きく変動しており、数年周期で落ち込みが見られ、近年では2017年度に著しい低下がみられた後、元の水準まで回復するには至っていない。1～2期では共通教育科目や基礎的な専門科目が主であるが、3～6期でGPA値が低下しており、専門科目での息切れが懸念され、学習意欲の低下、もしくは単位取得の動機付けが低下している可能性がある。ここ数年は全国的な学生数の低下により求人数が増加して、就職が売り手市場になっていたが、来年度以降はコロナ禍による急激な景気低下が予想されるため、学生の意識改革を行い、就職率低下を防ぐための対策が必要と考えられる。また、2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、多くの科目が遠隔授業となり、学生の理解度が低下し単位取得状況にも影響が出ることが懸念されたが、現時点での解析結果では顕著な落ち込みなどは見られず、かえって単位取得数が向上した学年があった（在学1年目および在学3年目の学生）。オンデマンド配信授業や「manaba」を通じて電子的に資料が提供され、各人のペースで学習ができることなどが現在の学生の学習スタイルに合致し、プラスの要因として作用したのではないかと考えられる。

5.3 卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図5.3に、卒業者数と卒業延期者数の合計に対する、卒業者数の占める割合の経年変化を示す。

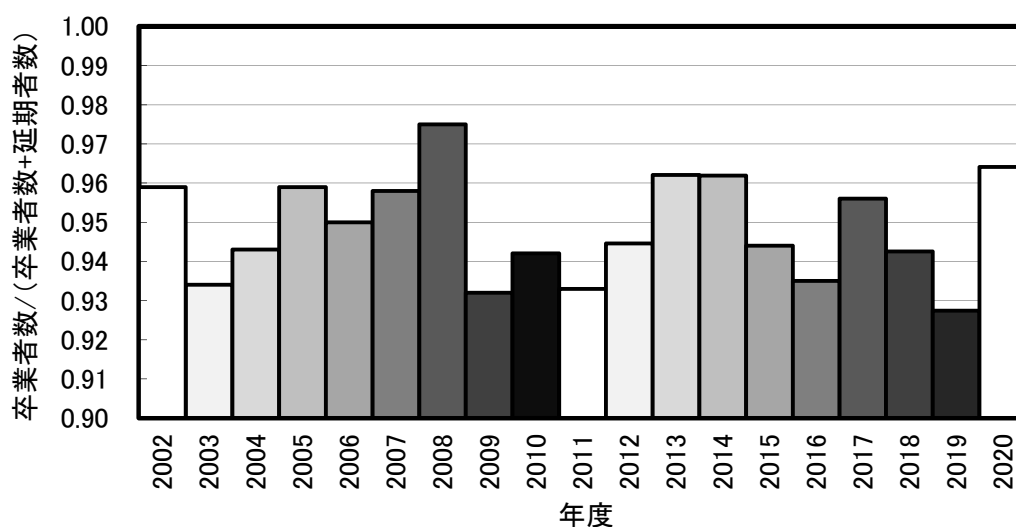


図 5.3 卒業生数と卒業延期者数の合計に対する卒業生数の占める割合の経年変化

統計を取り始めた平成14（2002）年度以降，この割合は，0.92～0.98 の間で推移している．平成21（2009）年度～平成24（2012）年度の割合が低いが，これは，リーマンショックに伴う景気低迷の影響によると推察される．その後，平成25（2013）年度及び平成26（2014）年度には，0.96強に回復した．ところが，平成27（2015）年度及び平成28（2016）年度には，再び低下した．これは，平成27（2015）年度に，選考解禁が8月1日に後ろ倒しになったことが大きな原因と考えられる．前年度までの4月選考開始から，スケジュールが大きく変更され，学生が就職活動を進めにくくなった可能性がある．平成28（2016）年度には，面接解禁が6月1日に2箇月前倒しとなったが，事態の好転は，見られなかった．しかしながら，平成29（2017）年度には，一転して値が上昇した．この背景に，景気高揚感と労働人口減により企業の求人数が増加して，学生の卒業意欲が高まったことがある．しかし，平成30(2018)年度から2年連続で低下し，令和元（2019）年度は約0.93に至った．前年度まで容易に就職できたことから勉学をおろそかにしているため卒業生数が低下したと分析する．令和2(2020)年度は，コロナ禍における景気の急激な低下により卒業生数の割合もさらに低下すると思われたが，予想に反して0.96と増加した．これは，オンラインによる説明会や面接の形態が増加し就職活動にかかる経済的負担が軽減されたため，これまで経済的理由によりエントリーする企業数を絞っていた学生が，多くの企業へチャレンジすることができた，自宅待機期間中に希望する企業の研究に多くの時間を割くことが可能であったなど，ポジティブな要因があったのではないかと考察する．しかしながら，本当の意味での景気の冷え込みは，次年度以降におとずれると考えられるため，オンラインでの面接対策など，就職活動に対する適切な指導・支援が必要になるとと思われる．

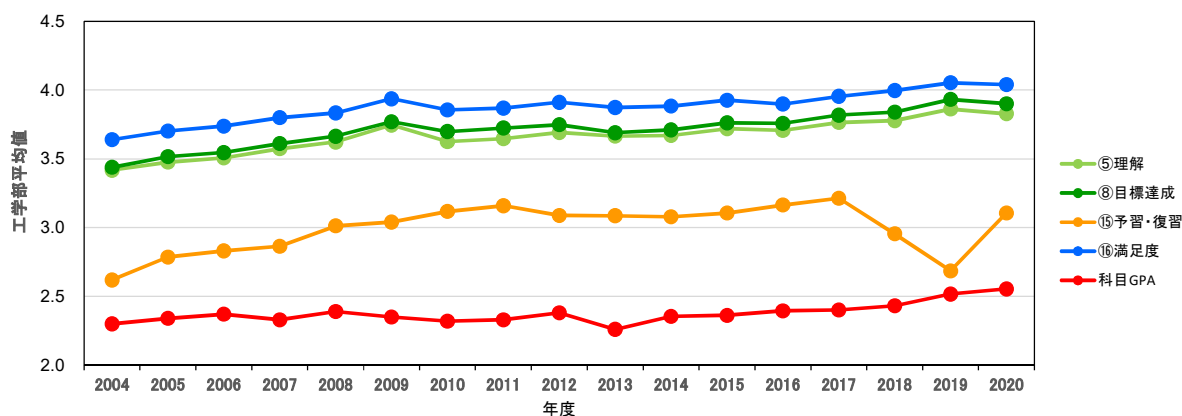
5. 4 学習成果と質の向上

昨年度に引き続き，これまで蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケートから，学生の学習の質と関連があると考えられる「⑤理解」，「⑧学習目標の達成」，「⑮予習・復習」及び「⑯満足度」の4項目に着目し，これらとGPの科目平均値の関係を調べ，学習成果と質の向上に関

して検討する。

5. 4. 1 学習成果と質の向上の経年変化

平成 16 (2004) 年度～令和 2 (2020) 年度における、講義・演習科目の授業評価アンケートのうち、「⑤理解」、「⑧目標達成」、「⑮予習・復習」及び「⑯満足度」の 4 項目の各評価の工学部平均値と、GP の科目毎の平均値 (科目 GPA) の工学部平均値の推移を図 5.4.1 に示す。



5.4.1 授業評価アンケートのうちの 4 項目の評価及び科目 GPA の工学部平均値の推移

「⑤理解」、「⑧目標達成」、「⑯満足度」は、少しずつ上昇する傾向を示しており、授業改善への取り組みの効果が現れている。また、これらの 3 項目は変化傾向が類似しており、学生は、理解度に応じて達成感及び満足感を得ると考えられる。「⑮予習・復習」は、平成 17 (2005) 年度～平成 23 (2011) 年度では緩やかな増加傾向、その後は平成 29 (2017) 年度までほぼ横ばいであったが、ここ数年は大きく変動している。この変動はアンケート実施を manaba システムに変更した後に見られているが、manaba システム導入が直接的に予習・復習の時間に影響を及ぼすとは考えにくく、回答率の変化などアンケートの実施方法との因果関係を詳しく分析していく必要があると思われる。

科目 GPA と、「⑧目標達成」及び「⑯満足度」の 2 項目の評価の工学部平均値を比較すると、平成 21 年 (2009 年) 年度を除いて、変化傾向が類似している。すなわち、受講生の達成感と満足度が得られるような授業を心掛けることが、学生の成績 (GPA) の向上につながるということが読み取れる。一方、平成 30 年 (2018 年) より予習・復習時間が大きく変動しているにもかかわらず、科目 GPA への影響は見られない。manaba システムの導入により予習・復習が効率よく効果的に行えるようになったのか、あるいは、単にアンケート回収方法に問題があり正確な学生の動向をキャッチできていないのか、経年的に注目し考察する必要がある。

5. 4. 2 令和 2 年度の学習成果と質の向上

令和 2 (2020) 年度の前期および後期の科目 GPA と授業評価アンケート 4 項目の科目平均の相関関係を図 5.4.2 (1)、図 5.4.2 (2) に示す。

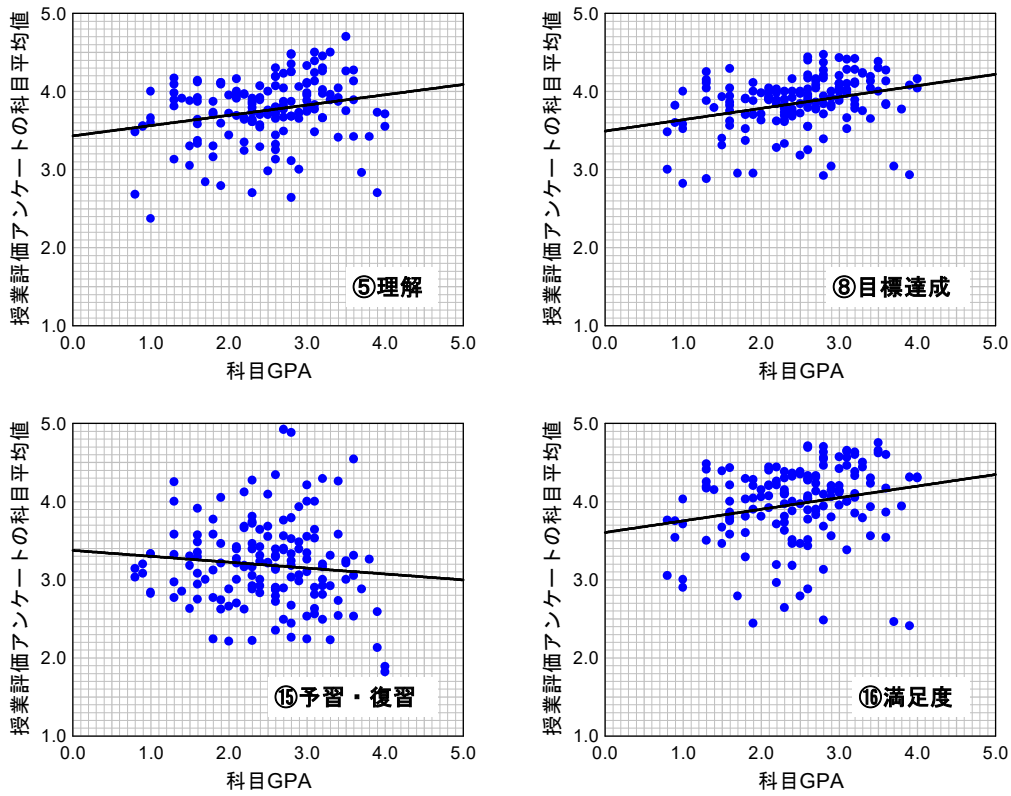


図 5.4.2(1) 令和2年度前期の科目GPAと授業評価アンケートの科目平均の相関

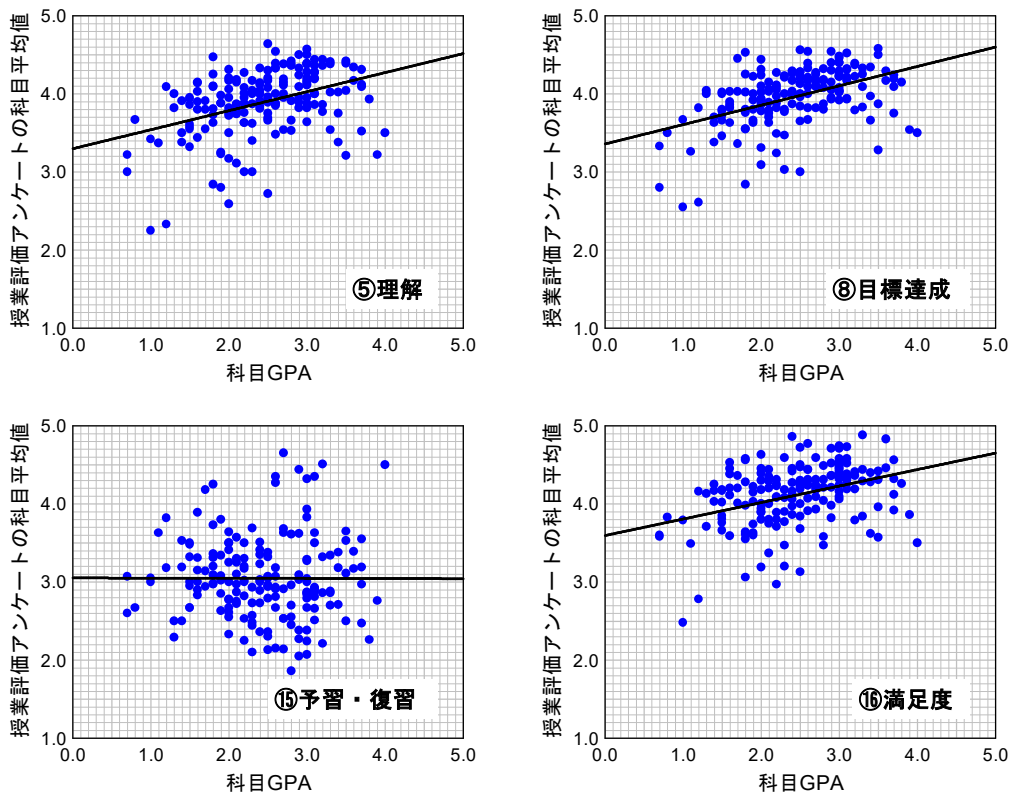


図 5.4.2(2) 令和2年度後期の科目GPAと授業評価アンケートの科目平均の相関

「⑤理解」, 「⑧学習目標の達成」, 「⑩満足度」それぞれの相関値が, 前期 0.23, 0.31, 0.21, 後期 0.40, 0.47, 0.37 となり, 0.2 を越える相関値を示すため弱い相関があると考えられ, この相関から, アンケート評点の科目平均が高くなるにつれ, 科目 GPA も高まる傾向が確認できた. 一方, 「⑭予習・復習の時間」については, 前期 0.10, 後期 0.003 と低い相関値を示すため, ばらつきが大きく科目 GPA との相関は無いと判断される. これらの傾向は, 平成 22 年 (2010 年) 度以降変わっていない. 近年の報告書でも指摘されているように, 授業時間外学習が少なくても良い成績が取れる状況や授業時間外学習に多大な時間を割いても良い成績が取れない状況は, 健全とはいえない. 各学科で状況を確認する必要があると思われる.

第 6 章 特筆すべき取り組みや改善事例

令和 2 年度前期の講義分から成績評価が厳格かつ客観的に評価しているかどうかの点検を実施した. 令和 2 年度後期から各教員が作成する授業計画改善書に該当科目の成績の各評価の人数を記載する項目を追加した. 各プログラムの FD 委員がプログラム教員から提出された授業計画改善書をまとめ, それらの資料と成績評価分布一覧表に基づいて, 各プログラムにおいて授業評価の点検を実施する. その結果は工学部 FD 委員会にて確認し教授会において報告した. この取組は今後も継続して実施する予定である.

第 7 章 令和 2 年度の工学部 FD 活動の総括と今後の FD 活動

7. 1 令和 2 年度の FD 活動の総括

第 1 章で述べたように, 工学部では令和 2 年度の第 1 回工学部 FD 委員会において, 従来の FD 活動を本年度も継続して遂行することが決定され, 一部を除きそれらの活動が実施された. 本年度は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行のため遠隔授業を実施せざるを得ない状況となった. ほとんどの学生および教員にとってはじめての体験であったと思われる. 授業評価アンケートの結果を見る限りでは, 工学部の平均として講義科目はいずれの項目も向上している. 特に出席状況は向上幅が大きい. オンラインの場合には個人が特定しやすいことが原因かもしれない. また, 明瞭な文字も向上幅が大きい. これは板書ではなく, パワーポイント等の利用割合が増えたためであろう. 一方, 実験科目については対面での実験の実施が難しかったため, 評価は低下した. やむを得ないことである. 平成 3 年度も似たような状況が続くと思われるが, 教員は遠隔授業になれてきたため, 前年度の改善がなされることが期待される.

毎年度, 各部局において全専任教員の 75%以上が FD 活動に参加することが求められている. 令和 2 年度に工学部主催および学内で実施された FD 関連の企画への参加状況を表 7.1 に示す. いずれかの活動に参加した教員は 107 名中 106 名で 99.1%の教員が何らかの FD 活動に参加した.

表 7.1 令和2年度専任教員のFD活動参加の状況

合計参加率		99.1 % (専任教員 107 名中 106 名 参加)		
企画別 参加率	理学部・工学部合同FD講演会	82.2 %	(専任教員 107 名中)	88 名 参加)
	第1回工学部 FD講演会	95.3 %	(専任教員 107 名中)	102 名 参加)
	後期授業公開 参観報告書	5.6 %	(専任教員 107 名中)	6 名 参加)
	前期授業改善報告書提出	47.7 %	(専任教員 107 名中)	51 名 参加)
	後期授業改善報告書提出	29.9 %	(専任教員 107 名中)	32 名 参加)
	全学FDセミナー、FD講演会	56.1 %	(専任教員 107 名中)	60 名 参加)
	他学部FD講演会	7.5 %	(専任教員 107 名中)	8 名 参加)
備考				
・前期授業公開・参観は、コロナのため実施しなかった。				

7. 2 今後のFD活動

工学部は平成16年度から授業アンケートを行い、その結果を受けて各教員が授業改善のための計画を策定しながら、分かりやすい授業の実施を目指してきた。10年間のトレンドで見ると改善はされているが、この数年は変化がなくなっていることや、各科目単位で見るとアンケートの評価には大きな分布が存在する。また、予習や復習などの自宅学習の時間は低いままである。このことはまだ改善の余地が残されていることを示している。平成28年度から工学部ではエクセレント・レクチャー表彰制度が実施された。毎年度、表彰された教員による講演会を実施しており、これを参考に授業の質の向上と、その結果として学生の講義の理解度が深まり、授業に対する満足度も向上することが期待される。工学部は平成2年度の新入生より改組された組織による教育を受けることとなる。基本的には従来の7学科の教育を新しい7プログラムがそれぞれ踏襲しており、これまでのFD活動を継続し、さらに充実していくことが肝要である。



農学部・
農林水産学研究科

令和2年度 農学部及び農林水産学研究科 FD 活動報告書

令和2年度の農学部FD委員会は、委員長を含む教員5名と教務係長で構成され、教務系の支援を得て運営された。委員会は年間計画及び実施上の事項について議論を対面で行ったが、その後はメール会議を主体として行われた。

今年度の農学部FD委員会が担当、実施した事項としては、オンライン授業支援、授業アンケート、前期と後期に設定されたFD月間(授業参観)、FD月間内に実施されたベストティーチャー賞連動企画、9月に実施された一回のFD講習会、第三回農学部ベストティーチャー賞の選考が挙げられる。

農学部委員名簿

委員長 藤田 清貴 (食料生命科学科)

副委員長 志水 勝好 (農業生産科学科)

委員 加治佐 剛 (農林環境科学科)

委員 鶴丸 博人 (食料生命科学科)

委員 清水 圭一 (農業生産科学科)

事務担当者 橋元 浩幸 (学務課長)

〃 吉村 学 (教務係長)

農学部FD委員会による実施事項(特筆すべき取り組みは下線で表した)

・オンライン授業支援:本年度、対面授業が禁止された中で教育の機会を確保するため、Zoomなどオンラインツールが提供された。しかし、農学部では不慣れな教員が多数いたため、農学部FD委員会が教員に対する相談窓口として活動を行った。Zoom, Manaba や respon など支援ツールの使用方法をメールリストでアナウンスするとともに、manaba 上に農学部FDサイトを設置し、学科FD委員による対応窓口の設置や、powerpoint に音声を載せるオンデマンド教材の作成方法、授業動画のYoutubeへの限定公開の手法などを掲載した。

・授業参観:オンデマンド型やオンライン型、ハイブリッド型など、授業形態をアナウンスした上で授業参加者を募集した。新しい授業形態への対応を学ぶ目的により、本年度は58.9%の教員が参加した。また、複数回参観する教員も多かったため、のべ人数では66名が参加した。

・FD講習会:多数の教員の参加を得て授業評価アンケートの解析結果を説明することで農学部の課題を共有できた。

・ベストティーチャー賞:授業参観やアンケートを利用して3回目の選考を実施した。第2回ベストティーチャー賞を踏まえた企画を予定したが、ベストティーチャーの宮田先生が全学の企画で遠隔授業の実施事例を講習することになったため、急遽、農学部独自の企画は中止して「遠隔授業に関するFD連続セミナー」の案内を複数回アナウンスすることで受講を促した。結果的に、複数回行われた「遠隔授業に関するFD連続セミナー」の中で最多の参加者34名を記録することができた。

令和元年度に発足した農林水産学研究科は農学部 FD 委員と水産学部 FD 委員が兼務する形で行われた。農林水産学研究科の所属教員は必ず農学部もしくは水産学部に所属しているため、教員に対する FD 教育は実質的に各学部で行われ、FD 講習会はそれぞれの学部の講習会の共催という形で開催された。

1. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果(令和元年度実施分)の分析(農学部)

<p>評価する点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ項目が1年生3年生共に高い水準。 ・入学後の変化において、プレゼンテーション能力が1年生で他学部より低い37.9%であったのに対して、3年生では62.7%に上昇。 ・3年生の専門教育の授業や演習に対する満足度は平均より高い。
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1.将来展望に見通しがあり、理解実行している割合が1年生では7.7%と全体で最も低く、3年生でも18%に留まる。また、理工学部に比べて大学院を希望する割合が1年生と3年生共に低い傾向(理学部:43.9%→39.8%、農学部:19.2%→18.8%)。 2.授業をつまらなく感じたという回答が、3年生では他学部より高い(80%)。授業時間外での勉強時間が1年生より3年生の方が少なくなっている。一方、アルバイトの時間は3年生の方が長くなっている。 3.大学教員の学問的な期待を理解する項目が1年生・3年生共に他学部より最も低い50%程度という結果である。
<p>課題への 具体的な対応案</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1.企業説明会やインターンシップの周知をしっかりと行うと共に、研究室紹介や大学院説明の機会の拡充により、将来の選択肢を広く考える機会の拡充を図る。 2.教員に対する manaba・Zoom・オンデマンド等のオンラインツールの利用促進や授業参観の機会の拡充、各自の授業アンケートの評価を検討する機会を増やすことで全体的な授業に対する満足度の向上を図る。 3.教員に対する manaba・Zoom・オンデマンド等のオンラインツールの利用促進を図ることにより、学習意義の理解や復習の機会の提供を目指す。
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p>広報へ力を入れていくという対応策に関しては、研究室紹介の動画配信やHPの充実などを行っており改善が見られる。</p> <p>時間外学習の習慣や動機付けを向上する対策は道半ばであるが、今後授業改善を進めることで改善を目指す。</p> <p>英語能力の熟達度の向上についてはカリキュラム改変の効果は検証できていない。今後の推移を見守りたい。</p>

2. 令和2年度農学部授業参観・授業公開

授業参観・授業公開は農学部では「FD ウィーク」として授業アンケートとともに農学部におけるFD活動の基幹として位置付けられてきた。今年度は新しい授業形態への対応を学んでもらうため、オンデマンド型やオンライン型、ハイブリッド型など、授業形態をアナウンスした上で授業参加者を募集した。期間は昨年同様「FD 月間」として実施した。授業参観の参加者は43名で専任教員73名の58.9%となった。複数回受講した教員も多数見られ、延べ人数では66名が参加した。

授業参観関連日程

(前期)

5月30日(土)～6月30日(火):授業参観予約

6月3日(水)～6月30日(火):授業公開(農学部FD月間)

6月3日(月)～7月3日(金):授業参観報告書作成・提出

(後期)

10月31日(土)～12月18日(金):授業参観予約

11月2日(月)～12月18日(金):授業公開(農学部FD月間)

11月2日(月)～12月25日(金):授業参観報告書作成・提出

3. 農学部各 FD 委員による今年度の FD 活動

食料生命科学科 FD 委員 鶴丸博人

2020 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、前期授業の開始が約 2 週間遅れ、すべての授業がオンライン授業となった。対面授業を行うことが可能となってからも、受講生の 2 倍以上の座席数を持つ教室を使うなど、コロナ対策規則が導入された授業形式となった。例年と異なる状況で実施された授業は、前年度までに導入されていた manaba や、今年度新たに導入された Zoom などによって支えられた。今にして思えば、今年度の FD 活動の課題は、「manaba や Zoom を積極的に・効率的に用いて、授業満足度を、例年の授業と同等または向上させること」であったと思う。オンライン授業と対面授業は、それぞれに利点、欠点があるようで、参観した授業で行われていた「オンライン授業と対面授業の併用」が、欠点が除かれ利点が残りに、授業満足度が高くなるのではないかと感じた。一方で、「(おそらく例年の授業で使用している)パワーポイント資料だけを manaba に添付して、自主学习とレポートを課した授業」に対しては、授業アンケートに複数の苦情が来ていた。こうした授業は、講義ビデオ等で補足した授業に変えるなどの改善策を、来年度の FD 委員会で話し合った方がよいと感じた。ベストティーチャー賞を受賞した教務(主)の宮田先生や、FD 委員長の藤田先生が、オンライン授業で発生したトラブルを迅速に解決していただけたことに感謝したい。これにより、例年と異なる状況であった 2020 年度を、当学科は無事に(?)終えることができた。

農学部 FD 委員会は、本年度の達成目標を「授業アンケート回収率を、50%を超えるようにする」とした。この目標を達成するため、昨年度のアンケート回収率(43%)を学科会議で周知し、学生がアンケートに答える時間を授業で確保するよう協力を呼びかけた。しかし、前期のアンケート回収率は、目標値をわずかに超えた 50.1%であった。(昨年度の)他学科のアンケート回収率が、18%と 32%であったことと比較すると、これでも農学部内では高いアンケート回収率である。農学部 FD 委員会内でも、「匿名アンケートを回収する意味はあるのか?」といった反対意見が出されたこともあり、FD 活動の難しさを感じた。現在、2021 年度の認証評価対応のために、成績評価に関するガイドラインが作成中である。各研究室・各指導教員ごとに成績評価を行う英語 6 や卒業論文などの授業科目では、授業アンケートに「評価基準がわかりづらい」、「秀と優の差はどのようにして決められたのか?」など苦情が来ている。同一科目で統一した評価が行える対策を、認証評価対応の機会に、FD 委員会・教務委員会で話し合った方がよいと感じた。最後に、有料版 Zoom を、鹿児島大学教職員がすぐに使えるようにした大学の判断にとっても感謝したい。2021 年度からは、学生のノート PC 携帯が必須となり、microsoft 365 A3 を学生、教職員が利用できるようになる。一方で、そんな予算があったのだと驚いた。また、これらのことは、コロナ対策の前からでもできたのではないと思う。コロナ禍が過ぎても、「このような FD 活動」を鹿児島大学には続けて欲しい。

農業生産科学科 FD 委員 清水圭一

本年度はコロナ禍により、遠隔授業が多くなり、学生も教員も慣れないやり方に最初は戸惑いを感じたのではないと思う。私自身も遠隔授業は今年が初めての体験であり、これまでと違う授業のやり方に手間取り、Zoom で音声が出ていないのを学生に指摘されるまで気が付かなかったなど、恥ずかしいミスもあった。また、manaba の取り扱いに慣れないために、学生にも迷惑をかけたのではないと思う。しかし、半ば強制的に遠隔授業を行うことで、様々なツールの扱い方を習得でき、結果として、授業のスキルが向上したのではないと思う。その点は良かったと前向きに考えたい。

また、本年度は授業参観やFD セミナーに積極的に参加した。特に参考になったのはFD 連続セミナーでベストティーチャーの宮田先生の講演であった。その講演では様々な工夫が紹介されていた。例えば、Zoom による授業ではマルチモニターを用い、マイクもノイズキャンセル装置をつけた専用の物を用いる等大変参考になった。また、すべての授業を毎回同じ形式で行うのではなく、ある回は Zoom による遠隔授業、また別の回はビデオ配信、ある回は対面と、変化をつけて授業を行うことで、マンネリ化を防止して効果的であったという話が印象的であった。さらに、Zoom を使う授業では背景の画像を毎回変えると学生は興味を持ってくれる、授業の途中でレスポンの機能を活用したクイズを入れる等、細部にわたって学生が飽きない工夫が凝らされていた。ビデオ配信では授業の全体をそのまま配信するのではなく、いくつか分割して、manaba のコンテンツ内にリンクを張る形式であった。その際、テキストによる解説と参考となる URL や資料と一緒にしたコンテンツを作成しており、非常にわかりやすく整理されていた。宮田先生はこのようなテクニク的な工夫に加えて、学生からの質問や要望には Line を活用するなどしてきめ細かく対応しており、ベストティーチャーとして選出されたのは、その背後にこのような多大な努力があるのだと感心した。

上記のような授業のやり方は、早速自分の授業にも応用して、学生からも好評であった。ただ、残念ながら、このようなFD講演会のような活動に参加した教員が少なかったことである。せつかくの授業スキル向上の機会もそれに参加しなければどうにもならない。今後の課題としては、FD活動への委員以外の教員の参加をする方策を考える必要があると考える。

農林環境科学科 FD 委員 加治佐 剛

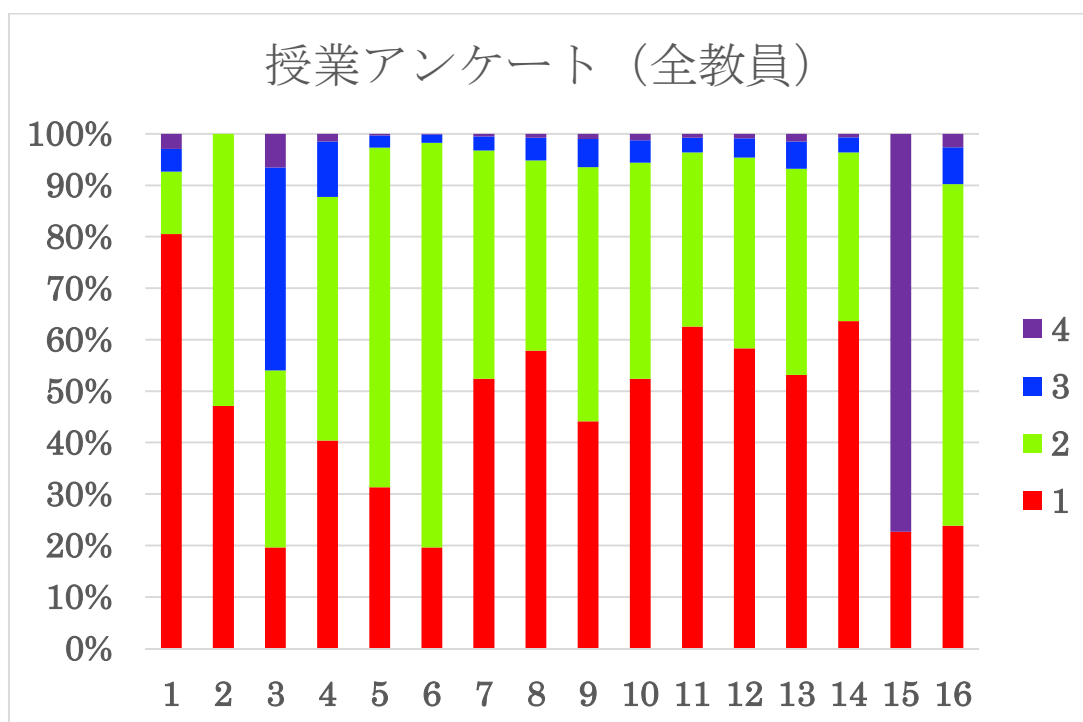
FD 活動として、幾つかの講義を参観しました。今年度はコロナウイルス感染拡大防止のため、遠隔授業での実施が多くなったため、授業参観期間に限らず、講義をどのように実施しているか、様子をうかがった。遠隔での実習を余儀なくされた地頭菌先生は地形図の判読を行う実習においては、電子ファイルで学生に地形図を配布し、実習時間中に実施方法を見せながら説明されていた。説明が難しくなる一方で、多くの学生に実際の作業を見せながら説明は、実習の実施方法を発展できる可能性を感じた。畑先生はオンデマンド型講義を実施しており、一回で理解できなかった内容については、繰り返し視聴することで理解を深められると感じた。各先生方が、遠隔講義を試行錯誤されている中で、遠隔講義の長所と対面講義の長所を組み合わせたより良い講義の実施を改めて考えることが出来た。

毎年複数回授業参観をしているが、今年はFD委員として前期に赤木 功先生の食料安全生産論を受講した。40人程度の講義であったがコロナ対策で学生は十分な間隔をとって受講していた。対面授業だったので学生のリアクションを見ながら進められて、オンラインよりも聴講者は理解しやすいと感じた。縦長の講義室なので後ろの方では果たしてスクリーンの文字が見えるのか疑問であった。このような場合、後ろの席ではオンラインによりPCなどで画面を見られるとよいかもかもしれないと感じた。同講義を参観したのはもともと研究分野的には近いこともあり、私の担当する講義に参考になると考えたからである。一般的な植物栄養・肥料学的内容を想像していたが、参加した講義は福島県浜通り地域における土壌の放射性核種の移動と植物への吸収について詳細に紹介するものであった。私は2011年3月11日に茨城県つくば市の自宅で被災し、その後に起こった福島第一原発の水蒸気爆発に伴う放射性物質の拡散による被害を受けた。放射性ヨウ素、その後セシウムにより自宅庭は $0.08\sim 0.1\mu$ シーベルトであったが現在でもあまり変わっていない。しかしホットスポットと言われる 0.3μ シーベルト以上の場所が市内にもあり、目に見えない恐怖を感じていた。私自身は福島の帰宅困難地域であった飯館村を学会の調査で訪問することができ、人が住めない村の不自然さ、住居や畑の酷い荒れ方を散見し、土壌から少しでも早く放射性核種を取り除き、人が住める村や町にするため、植物栽培による土壌浄化法を研究してきた。そのため、赤木先生の講義は原発の水蒸気爆発以後の福島の汚染から、放射性核種の特性、土壌への吸着および植物への影響を詳しく、興味深く紹介され、福島から遠く離れた鹿児島において学生がこれだけ詳しく学べるのが素晴らしいと感じた。ただ、私は被災者であり、環境浄化に取り組んできた当事者であることもあり、非常に身近に感じた話題であるが、学生は地震、津波、放射線被害はテレビの向こうのことなのか真剣に恐怖感を持って受講しているものがほとんどいないのが残念であった。農学は実学なので、学生に帰宅困難地域を見せ、現場で課題を探求させ、農学の知識で環境修復と農業復興のための手段を考えさせる、そんな実習を行えたらと考えさせられた有益な講義であった。

4. 授業評価アンケートの分析

回答率は、前期の講義・演習は 45.79%、実験・実習は 31.29%。後期の講義・演習は 36.07%、実験・実習は 33.84%であった。前期の方が教員への呼びかけを頻繁に行なったため、回収率の差につながったと予想される。全体の回答率は 39.76%となった。また、91 人の授業担当教員別では回収率 9.68%が最低で最高は 93.1%であった。

全体的な傾向としては、昨年度と同様、授業そのものの評価を示す問 1.5～1.14 は全て 90%以上が肯定的な評価となっていた(下図参照;授業アンケート(全教員))。授業アンケートに協力的な学生は一定の満足感を授業に感じている可能性が高い。匿名と言われても否定的なコメントは書きづらい、授業全体を良い悪いで単純評価し難い、オムニバス形式や二人の教員で分担など質がバラつくなど、アンケートの限界もあると予想される。



今回、ベストティーチャーの選定を目的として、2021年3月19日農学部FD委員会で承認された①から③の基準を元に農学部の授業を担当した全教員のアンケートを立体集計した。基準を以下に示す。

① 授業アンケートでFD委員会として意味の大きいと思われる項目を取り上げ、点数化する。

点数化する項目

- 1.9 この授業の学習目標は達成できたと思いますか。(20点)
- 1.10 この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。(20点)
- 1.11 この授業はシラバスに沿って進められましたか。(20点)
- 1.13 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。(20点)
- 1.14 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。(20点)

アンケート回答率については100%が10点になるよう比例配分する。(10点)

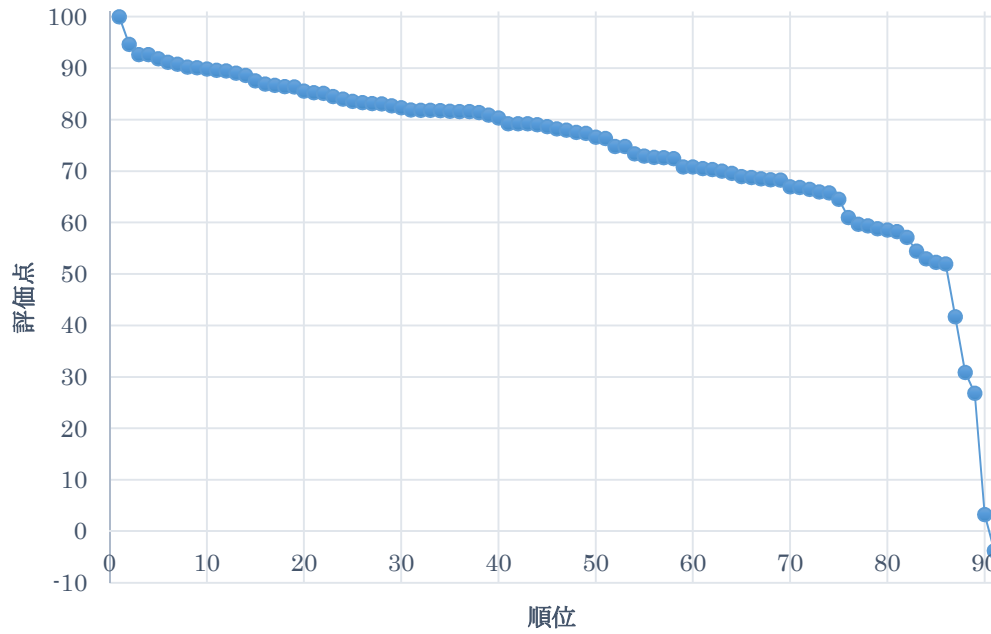
1.9～1.13については、1が最高、4が最低の4段階評価なので、アンケートから平均値を取り、1が20点、2が10点、3が-10点、4が-20点になるよう平均値を変換し、その合計を点数化。

② ベストティーチャーの被推薦数を基に加点する。4人以上を4点、3人を3点、2人を2点、1人を1点。

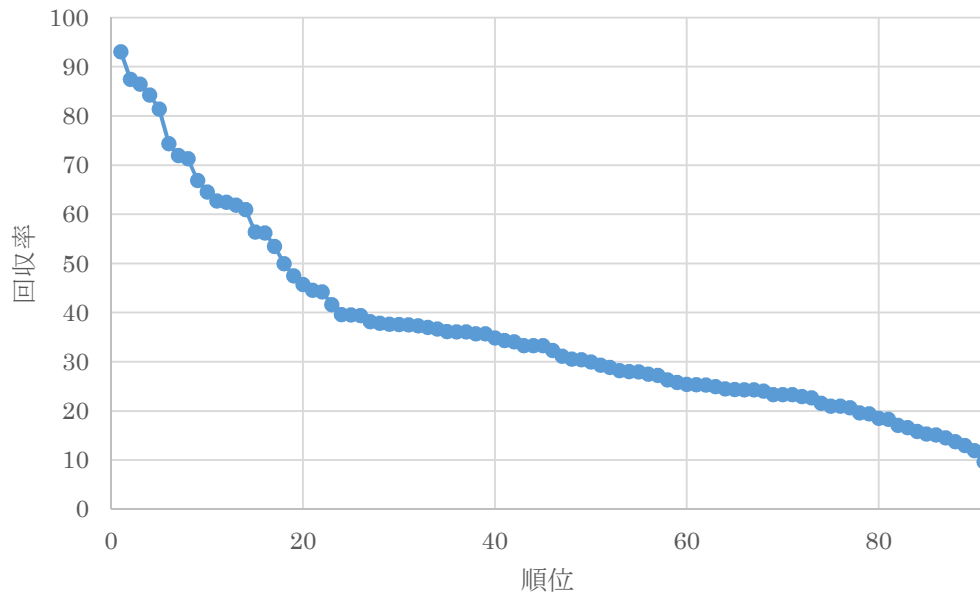
③ 受講者数に応じた重みを付けるため、受講者数200人以上に係数1.11をかけ、受講者数150人以上に係数1.05をかけ、受講者数100人以上に係数1.00をかけ、受講者数50人以上に係数0.95をかけ、受講者数50人未満に係数0.90をかける。

その結果、宮田健先生が100.0点、北原兼文先生94.69点、坂尾こず枝先生が92.68点であった一方、最下位は-3.75点と大きな差が出る結果となった(下図参照;教員別授業評価)。平均点は73.8点であった。これは、授業アンケートの解析で各教員の学生評価がかなり正確に反映される可能性が高いことを意味している。ただし、全教員のアンケート結果が実態を反映するためには50%以上の回答率が必要である。教員間の差が大きい理由は、アンケートの回答を授業時間中に時間をとってあげること、学生のアンケートを促した教員と未対応の教員がいたことを表している。回答率と学生からの評価は相関関係にあり、学生評価上位の北原兼文先生が93.1%の回答率で、坂尾こず枝先生が87.5%の回答率であった。農学部FD委員長の藤田も繰り返し呼びかけた結果、84.3%の回答率を得ることができた。教員別の回答率を上位から並べると40%以上の回答率の教員と40%以下の教員で傾きが大きく変わることがわかる(下図参照;教員別回答率)。働きかけなくても自発的に行う学生は20%から30%程度であり、学生側に時間を取って繰り返しお願いすることが高い回収率を得るためには必要であることを意味する。つまり、アンケート回収率を上げるためには教員側のFDに対する意識向上が必要となる。また、何らかのインセンティブがあれば教員側にとっても学生側にとってもアンケートを促すもしくは答える同期付けになる。農学部FD委員会として可能なことは、分析結果の公表によりアンケートが授業改善に繋がることを繰り返し訴えていくことであろう。

教員別授業評価



教員別回答率



以下、授業アンケートの質問項目を示す。

授業評価アンケート(講義・演習用)【農学部】

- 1.1 この授業の出席状況を教えてください。(選択必須)
1. 全て出席
 2. 1回欠席
 3. 2回欠席
 4. 3回以上欠席
- 1.2 この授業に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。(選択必須)
1. はい
 2. いいえ
- 1.3 この授業について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。(レポート作成を含む)(選択必須)
1. 90分以上
 2. 60～90分
 3. 60分未満
 4. しなかった
- 1.4 この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかというと思う
 3. あまりそう思わない
 4. そう思わない
- 1.5 この授業内容の水準はどうでしたか。(選択必須)
1. 高かった
 2. 妥当だった
 3. 少し低かった
 4. かなり低かった
- 1.6 この授業の分量はどうでしたか。(選択必須)
1. 多かった
 2. 妥当だった
 3. やや少なかった
 4. 少なかった
- 1.7 この授業は知力や学力の向上に役立ちましたか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかといえばそう思う
 3. どちらかといえばそう思わない
 4. そう思わない
- 1.8 この授業は将来役立つと思いますか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかといえばそう思う
 3. あまりそう思わない
 4. そう思わない
- 1.9 この授業の学習目標は達成できたと思いますか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかといえばそう思う
 3. どちらかといえばそう思わない
 4. そう思わない
- 1.10 この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかといえばそう思う
 3. どちらかといえばそう思わない
 4. そう思わない
- 1.11 この授業はシラバスに沿って進められましたか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかといえばそう思う
 3. どちらかといえばそう思わない
 4. そう思わない
- 1.12 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。(選択必須)
1. そう思う
 2. 大体そう思う
 3. あまりそう思わない
 4. 全くそう思わない
- 1.13 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思いましたか。(選択必須)
1. そう思う
 2. どちらかといえばそう思う
 3. どちらかといえばそう思わない
 4. そう思わない
- 1.14 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.15 講義・演習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。(選択必須)

1. 質問した 2. 質問しなかった

1.16 質問に対する教員の対応に満足しましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない 5. 質問しなかった

自由記述

この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。(例えば、授業の進め方、プレゼンテーションを含む)(入力必須)

授業評価アンケート(実験・実習用)【農学部】

1.1 この実験・実習の出席状況を教えてください。(選択必須)

1. 全て出席 2. 1回欠席 3. 2回欠席 4. 3回以上欠席

1.2 この実験・実習に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。(選択必須)

1. はい 2. いいえ

1.3 この実験・実習について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。(レポート作成を含む)(選択必須)

1. 90分以上 2. 60～90分 3. 60分未満 4. しなかった

1.4 この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.5 この実験・実習から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. まあそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

1.6 この実験・実習の内容のレベルはどうでしたか。(選択必須)

1. 高すぎた 2. 妥当だった 3. 少し低かった 4. かなり低かった

1.7 この実験・実習の分量はどうでしたか。(選択必須)

1. 多かった 2. 妥当だった 3. やや少なかった 4. かなり少なかった

1.8 この実験・実習は、知力や学力の向上に役立ちましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

1.9 この実験・実習の学習目標は達成できたと思いますか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

1.10 この実験・実習は、総合的にみて満足できるものでしたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.11 この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. まあそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない

1.12 板書、配布資料、実験マニュアルなどは実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.13 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.14 教員の準備は十分で、実験・実習に対する熱意が感じられましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない

1.15 実験・実習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。(選択必須)

1. 質問した 2. 質問しなかった

1.16 質問に対する教員の対応に満足しましたか。(選択必須)

1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない 5. 質問しなかった

自由記述

この実験・実習についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。(例えば、実験・実習の進め方、プレゼンテーションを含む)(入力必須)

5. 令和2年度農学部FD講習会

今年度は、農学部FD委員会主催で農林水産学研究科共催の農学部FD講習会を一度のみ9月に実施した。本会の開催は、出来るだけ多くの教員の参加が可能となるよう、教授会の前に実施した。講師は農学部FD委員長の藤田清貴が担当した。内容は、農学部ベストティーチャー賞の表彰と授業評価アンケートの分析結果の解析、前期授業参観の参観者数と後期授業参観の案内、後期の遠隔授業のサポート体制の説明を行なった。特に、授業評価アンケートの分析結果の解析においては、R1前期とR2前期の各学科別の回答率の比較を行なった。

	R1 前期 回答率(%)	R2 前期 回答率(%)	回答率推移 (倍)
農業生産科学科	31.7	47.31	1.5
食料生命科学科	43.0	50.52	1.2
農林環境科学科	17.7	26.75	1.5

今年度は目標とする50%を食料生命科学科で辛うじて達成したものの、全体としての達成は遠い道のりと言える。ただし、昨年度と比較すると1.2から1.5倍の回答率を達成できたことを説明し、今後の協力を訴えた。

<FD活動参加状況>

本講習会の参加者は56名で、これは専任教員73名の76.7%となった。なお、授業参観の参加者は43名で専任教員73名の58.9%となった。両方を合わせると、FD活動への参加は63名(のべ99名)となり、これは専任教員の86.3%となった。全体の内訳は教授(25名)+准教授(29名)+講師等(9名)/73名(専任教員)。不参加の専任教員は10名。昨年度の参加率は91%であり同等の参加率と言える。

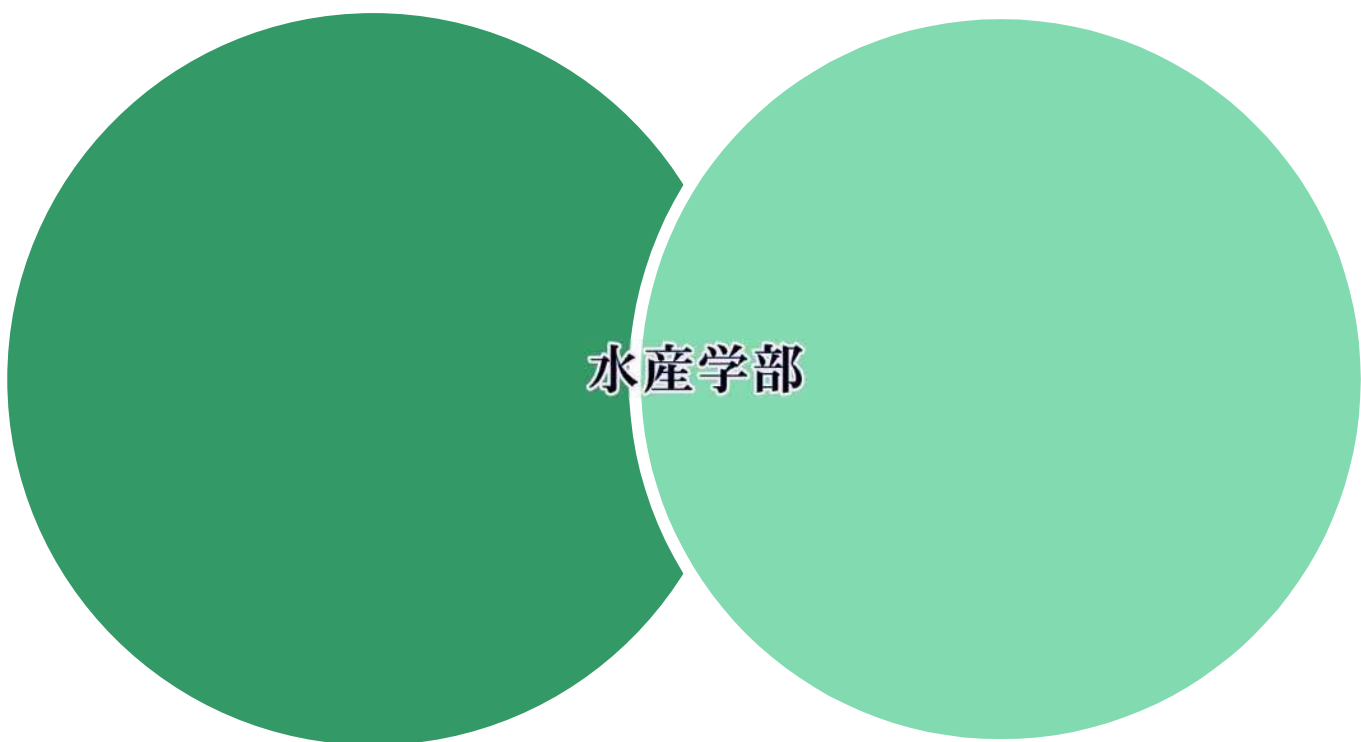
6. ベストティーチャー賞の選考

宮田先生が昨年度のベストティーチャーであり、推薦対象者から外れるため、北原先生と坂尾先生の授業アンケート回答結果を基に FD 委員会において協議した結果、全会一致で北原兼文先生を候補者として選考した。

(1)授業において、卓越した指導力で教育効果の高い授業を実践した者と考えられる理由は、「8 この授業は将来役立つと思いますか」というアンケートで 1 番の「そう思う」を選んだ割合は、北原先生が 75.37%で全体 57.88%より非常に高い数字であったためである。また、(2)教育方法の工夫又は改善に取り組み、顕著な教育成果をあげた者と考えられる理由は、「14 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。」というアンケートで 1 番の「そう思う」を選んだ割合」というアンケートでは、北原先生が 82.84%で全体 63.63%より非常に高い数字であったためである。また、教員の授業の感想でも「Zoom と対面をうまく組み合わせると分かりやすい授業をされていると感じました。対面を積極的に選び、真剣に聞いていた。」など、ポジティブな意見が多くあった。また、学生の授業アンケートも大多数が満足というものであった。また、「説明が丁寧で生徒の質問も真摯に受け止めてくださっています」「化学が苦手だったが、とてもわかりやすい説明で、質問に対しても丁寧に答えてくれたので、最後まで理解することが出来た。」とアンケートに書かれているように学生の質問に真摯に対応している点と、「コロナ禍の状況で Zoom を用いてスライドを駆使して非常に分かりやすい講義が実施され、植物性食品に対する理解がミクロ、マクロの両面から深まったと感じる」「遠隔授業がメインであったこの授業は、Zoom でのトラブルがややあったものの、全体的な影響はさほどなかったといえる。そのため、遠隔授業で行うことでのデメリットは、さほどないようにも感じた」など、オンライン授業にもしっかり対応して満足度の高い授業を行っていたことがうかがえる。

7. 全学 FD 活動への参加

農学部 FD 委員長は全学 FD 委員会に全て出席するとともに、メーリングリストの形で情報を農学部教員に伝えた。また、全学で FD 研修会・講習会の開催情報を周知し、参加を促した。



1. はじめに

鹿児島大学水産学部・FD委員会では、学生に対する指導の充実、主体的な学習を促すための方法の検討、教育・研究の場が抱える今日的課題への対応などを課題として活動に取り組んできました。2020年度に部局で企画・開催したFDイベントとして、アンケート調査以外にも、FD講習会：「遠隔授業に関するアンケート解析」、「新型コロナウイルス状況下における教育・研究・運営活動の改善取り組みについて」FDワークショップを開催しました。

この一年間のFD委員会の活動を振り返り、以下のようにまとめました。部局あるいは全学が主催したFD活動や、授業参観の実施、授業改善報告書の提出等を実施し、FD活動に参加した専任教員の割合は100%でした。各イベントへの専任教員の参加者の内訳は、部局FDワークショップ（新型コロナウイルス状況下における教育・研究・運営活動の改善取り組みについて）に41人（専任教員の100%）、部局FD講習会「遠隔授業に関するアンケート解析」に34人（81%）、授業改善報告の作製が30科目で26人（62%）でした。

2. 授業アンケート

水産学部FD委員会では、各期の授業が終了する毎に受講した学生に対して授業アンケート（表1）を行っています。アンケートはmanabaを利用して行われ、受講生の授業を選択した動機や予習及び復習時間などの調査、授業に対する満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、2020年度前期から後期までのアンケートを分析した結果の概要について報告します。

2-1. 授業アンケート内容

2020年度前期及び後期の授業アンケートはmanabaで行い、アンケート内容も2018年度後期及び2019年度の内容を継続して実施しました。manabaでは表1の通り、受講生の満足度を「はい」

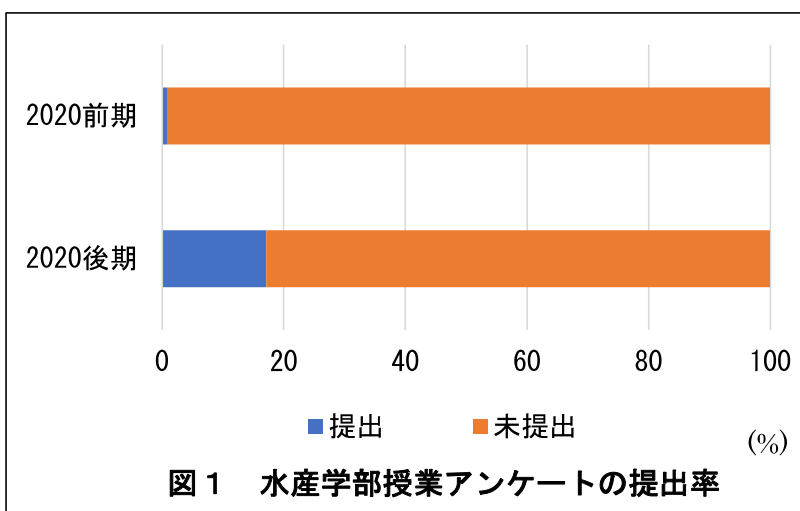
表1 manabaを用いた水産学部授業アンケートの質問

1. この授業を選んだ動機は何ですか？（複数回答可） 授業内容に興味・関心を持ったから・専攻分野との関連性を考えて・履修しやすい曜日や時間帯 だったから・必修科目だから・単位修得のため
2. この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習（予習、復習、宿題など）をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。
3. 授業はシラバスどおりに進められましたか？（はい・いいえ）
4. シラバスに示された学習目標を達成できましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
5. 授業は分かりやすかったですか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
6. 授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
7. 第1回から最終回までの授業の構成や進め方は適切だと思えましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
8. 他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
9. 授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
10. 担当教員が次年度の授業改善に役立っていますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。

か「いいえ」で回答した後、満足できた点あるいは、満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、より学生の講義への期待や理解を把握する結果を得られるアンケートとなっています。

2-2. 授業アンケート提出率と回答率

図1に2020年度前期及び後期のアンケート提出率を示しました。2020年度前期は93科目中7科目の提出がありました。学生の回答率は0.8%と前年度前期の提出率が40%程度であったのに対して著しく低い回答率でした。2020年後期は86科目中66科目の提出があり、回答率は17%と前期に比べて



増加しましたが、昨年度と比べると依然として低い回答率でした。今年度は年度が替わる時期にコロナ禍も重なり、多くの科目で感染症対策や講義形態の変更などの対応に迫られる事態となり、例年では講義の時間を利用して授業アンケートの実施や呼びかけを行っていましたが、遠隔授業などでの呼びかけが困難だったためにアンケート回収率が低い結果になったものと考えられます。

2-3. アンケートの各項目集計結果及び総評

表3に基づき、各アンケート項目の集計結果について概要を報告します。

自宅学習時間平均は、2020年度前期から後期の期間において平均約1.6時間でしたが、各科目別に見ると自宅学習時間には差がありました。自由記述欄からは、事前配布された講義資料が自宅での予習や復習に活用され、自習を促していることが読み取れました。

「シラバス通りの授業だったか」、という質問に対しては、「はい」と答えた割合が前期は84%、後期は94%であり、前期は感染症対策のために予定していた実習が中止になったり、対面講義から遠隔講義の変更が行われたり、とシラバスからの変更が多かったため「いいえ」の回答率が高い結果となりました。しかし、後期までにはシラバスの修正も行われ、計画的な講義が行われていることが確認できました。

「学習目標を達成できたか」、ではいずれも肯定的な意見が多く目標達成できていました。

表2 各アンケート項目の集計結果。表中の数字はアンケートに「はい」と答えた割合（％）。

	2020 年前期	2020 年後期
1. 自宅学習時間（週平均）	1.8 h	1.3 h
2. シラバスどおりの授業だったか。	84 %	94 %
3. シラバスの学習目標を達成できたか。	100%	96 %
4. 授業はわかりやすかったか。	92 %	93 %
5. 質問や発言がしやすい配慮があったか。	81 %	90 %
6. 授業構成や進め方は適切だったか。	95 %	94 %
7. 授業に重複/類似している内容があったか。	8 %	23 %
8. 全体的に内容に満足しているか。	95 %	93 %

「授業がわかりやすかったか」、の質問に対しては、「はい」と回答した割合が約 93%と高い値が得られました。自由記述欄には「はい」と答えた理由として、授業のわかりやすさに対しては「オンデマンド式でわからない部分を繰り返し視聴し、理解することができたため」、「解説が分かりやすく、レジュメも見やすかった。」、「リモート授業は、自分のペースで繰り返し見られたのでよかった。」などの肯定的な意見が見られました。一方、「スライドが早すぎて書きとれない」、「資料だけの授業の形式になってしまい、先生の解説が聞きたかった」、「資料が複雑で分かりにくかった」など、授業の進め方を改善する際の参考意見がありました。

「質問や発言がしやすい配慮があったか」、の質問に関しては、前期は 81%と低く、遠隔授業の不慣れが原因による不便さを感じる意見があがっていました。後期では「はい」と回答した割合が 95%と高い値が得られました。その理由として、遠隔授業のチャット機能を活用したり、manabaにより質問をしたりすることができ、「対面講義よりも質問がしやすかった」という肯定的な意見もありました。

「授業構成や進め方は適切だったか」、に関しては、「はい」と答えた割合が前期は 95%、後期は 94%といずれも肯定的な意見が多い結果となりました。自由記述欄には、「シラバス通りに進められていた」、「前回の講義でわからなかったことを質問したら次の回で回答と説明があった」という肯定的な意見が大半でした。一方、「いいえ」と回答した自由記述欄には、「対面から遠隔講義への変更で混乱を生じた」、「講義の休校連絡の遅延や連絡がないことがあった」という意見がありました。

「他の科目との重複や類似」に対しては、前期は 8%と後期は 23%程度が「重複や類似性があり」と答えていたが、それらは決して否定的な意見ではなく「他の講義の復習になる」、「関連した講義

でより深く理解できる」という肯定的な意見が多く、分野の中での内容の重要性の確認や関連科目との繋がりを意識するきっかけとなっているようです。

授業の満足度を示す質問に対して、「はい」と答えた割合は前期が 95%、後期は 93%といずれも高い満足度が得られていました。自由記述欄には「はい」と答えた理由として、「知識を身に着けることができた」、「面白かった、わかりやすかった」というように理解しやすい工夫された講義が多く提供されていることがわかりました。

一方、「いいえ」と回答した自由記述欄には、「実験は対面で行いたかった」、「実際に船に乗りたかった」という実験や乗船などの実習に関しては対面を望む意見が多く挙げられていました。自由記述欄には学生の率直な意見が多くかかかれているため、科目担当教員は授業アンケート結果により授業振り返り、継続的に改善を検討することが大切であると考えられます。

3. 授業公開・参観と授業改善

授業公開については昨年度と同様に、授業公開科目を募った後に授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。2020 年度は、コロナウィルスの影響により前期では授業公開科目を募らず、後期のみ授業公開を行いました。なお、感染予防の目的から対象科目は遠隔講義のみとしました。下記に示す合計 7 科目で公開科目が出され、その内の 2 科目で授業参観が行われました。

後期（計 7 科目）

電波測器学・水産資源解析学・水圏環境保全科学・陸水学・水産商品学・フードビジネス論・水産マーケティング論

部局 FD 活動として例年授業公開科目の集約と参観の呼びかけが継続的に行われているが、今年度はコロナウィルスにより公開科目数も少なく、参加者も激減しました。一方で、遠隔講義の形式がこの先も続くことが予想されることから、他教員の工夫を凝らした遠隔授業の参観から学ぶことは多いと考えられ、授業公開や参加を呼び掛ける必要があります。また、授業内容をより良いものにするため、学生アンケートに基づいた「授業改善報告書」を開講者が作成しており、2020 年度は下記に示す合計 31 科目で報告書の作成が行われました。前年度と比較すると 13 科目提出科目が減少しました。それぞれの科目の担当教員（群）が授業アンケート結果を見つづ報告書を作成することで、授業における教授手法として継続すべき点、改善すべき点について振り返る機会となっています。水産学部では提出された授業改善報告書を HP に掲載し他教員にも閲覧可能としています。

前期（合計 17 科目）

資源生産管理学・水圏科学実験基礎・水圏生物学実験 2・水産資源生物学・水産生物学・水産統計

学演習・水産動物行動学・生物化学実験・プランクトン学・海洋学・海洋生態学・基礎水産資源学・基礎生化学・漁具漁法学・漁具設計学・魚類学・水圏生物科学野外調査実習

後期（合計 14 科目）

食品化学・水圏生物学実験Ⅰ・水産資源解析学・生体防御学・先進資源利用科学・増養殖学実験・基礎代謝生化学・電波測器学・分子生物学・無脊椎動物学・栄養生理学・海洋観測乗船実習Ⅱ・魚類栄養学・実験計測機器基礎

4. FD 講習会：「遠隔授業に関するアンケート解析」

今年度はコロナウィルスにより初めて遠隔講義が主となる授業形式となりました。そこで遠隔講義が抱える問題点を明らかにするために、高等教育研究開発センターによる「遠隔講義に関するアンケート」、ならびに学部 FD 委員会が行った「(学部 2 年生以上対象) 遠隔講義に関するアンケート」の集計結果を FD 委員で解析しました。その結果について、学部 FD 委員長の塩崎准教授が講師となり、2020 年 9 月 16 日に解説と質疑応答を行いました。教員 36 名（船舶教員 1 名、非常勤講師 1 名を含む）、事務職員 4 名の参加を得ました。（使用した講習会資料は次ページ。）

遠隔授業に関するアンケート（学部2年以上）

2020/07/01

1. あなたは今学期、次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか。それぞれ、(1)全然ない、(2)1時間未満、(3)1～2時間、(4)3～5時間、(5)6～10時間、(6)11～15時間、(7)16～20時間、(8)20時間以上、で回答してください。

活動に関する項目

- A：授業を受ける
- B：授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする
- C：授業時間外に、授業に関連しない勉強をする
- D：読書をする（まんが、雑誌を除く）
- E：個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）

2. 今学期の遠隔授業に対して、意欲的に取り組んでいますか。
- ① 全く意欲的に取り組めていない
 - ② どちらかというとい意欲的に取り組めていない
 - ③ どちらかというとい意欲的に取り組んでいる
 - ④ とても意欲的に取り組んでいる
3. 今学期の遠隔授業を通して、知識や能力は得られましたか。
- ① 全く得られていない
 - ② どちらかというとい得られていない
 - ③ どちらかというとい得られている
 - ④ 十分得られている
4. 今学期の遠隔授業を受講して、対面授業よりよかったと思う点がありましたか。もしあれば自由に回答してください。（→自由回答）
5. 今学期の遠隔授業を受講して、対面授業の方がよかったと思う点がありましたか。もしあれば自由に回答してください。（→自由回答）（6の質問との類似性から回答に困るかも）
6. 遠隔授業について、現時点で技術的に困っていることや不安に感じていることはありますか。もしあれば、自由に回答してください。（→自由回答）
7. 大学生活全般について、現時点で困っていることや不安に感じていることはありますか。もしあれば、自由に回答してください。（→自由回答）
8. その他、大学への要望があれば教えてください。
（→自由回答）

設問1 あなたは今学期、次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか。

A：授業を受ける	全然ない	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	20時間以上
1年生	0.0	0.0	1.0	7.1	8.1	21.2	35.4	27.3
2年生	1.0	1.0	0.0	4.2	27.1	30.2	28.1	8.3
3年生	1.5	1.5	3.1	3.1	26.2	38.5	18.5	7.7
4年生	45.8	6.3	25.0	16.7	4.2	0.0	2.1	0.0

B：授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする	全然ない	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	20時間以上
1年生	1.0	1.0	4.0	19.2	30.3	16.2	11.1	17.2
2年生	2.1	3.1	7.3	27.1	37.5	14.6	3.1	5.2
3年生	0.0	3.1	23.1	27.7	41.5	1.5	1.5	1.5
4年生	39.6	2.1	27.1	20.8	6.3	2.1	2.1	0.0

C：授業時間外に、授業に関連しない勉強をする	全然ない	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	20時間以上
1年生	32.3	22.2	19.2	18.2	4	1	1	1
2年生	28.1	28.1	30.2	8.3	2.1	3.1	0.0	0.0
3年生	15.4	18.5	29.2	23.1	7.7	6.2	0.0	1.5
4年生	25.0	12.5	6.3	22.9	10.4	6.3	8.3	8.3

D：読書をする（まんが、雑誌を除く）	全然ない	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	20時間以上
1年生	31.3	32.3	20.2	12.1	4	0.1	0	0
2年生	56.3	12.5	21.9	7.3	1.0	0.0	0.0	1.0
3年生	56.9	20.0	15.4	6.2	0.0	1.5	0.0	0.0
4年生	29.2	25.0	25.0	10.4	0.0	8.3	0.0	2.1

E：個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）	全然ない	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	20時間以上
1年生	6.1	4	12.1	28.3	24.2	11.1	5.1	9.1
2年生	2.1	3.1	8.3	29.2	18.8	10.4	8.3	19.8
3年生	1.5	1.5	15.4	21.5	30.8	6.2	7.7	15.4
4年生	4.2	6.3	12.5	22.9	31.3	12.5	2.1	8.3

設問2 今学期の遠隔授業に対して、意欲的に取り組んでいますか

	全く意欲的に取り組めていない	全く意欲的に取り組めていない	どちらかという意欲的に取り組めている	とても意欲的に取り組めている
1年生	5.1	15.2	60.7	19.2
2年生	7.3	33.3	46.9	12.5
3年生	6.2	26.2	53.8	13.8
4年生	27.1	14.6	39.6	18.8

設問3 3. 今学期の遠隔授業を通して、知識や能力は得られましたか。

	全く得られていない	どちらかという得られていない	どちらかという得られている	十分得られている
1年生	2	20.2	60.6	17.2
2年生	3.1	31.3	55.2	10.4
3年生	0.0	20.0	63.1	16.9
4年生	25.0	10.4	45.8	18.8

4. 今学期の遠隔授業を受講して、対面授業よりよかったと思う点はありましたか。
(一部抜粋・文章は原文のまま)

- 朝の時間にゆとりがもてる。遠くに住んでいるので、通学の時間が減ったこと。
- 自分の好きな時間にビデオ講義をみることができた点。
- 交通機関が雨などで通行止めになっているときなどの考慮を入れる必要がなかった。
- リアルタイムではなく動画での講義で後からも見返せるものの場合、授業を一通り受けてわからないところを再度確認することができた。
- 対面授業よりも課題やレポートが多く要求されるため勉強時間が対面の時よりも増えた。
- プリントが配布されない分、資料や授業のメモをパソコン上で管理できたので、便利だった。
- 周りにうるさい人がいて集中できないなどの問題がないため、対面より集中でき、授業内容もよく理解できた。
- 好きな時間に何回でも学べるということ。
- チャット機能があったため、対面授業よりもその場での質問がしやすかった。
- スライドが見やすい
- 授業を聞かないと課題ができないので授業をしっかり聞くようになった
- 登下校や休み時間を、家事や仮眠に利用することができた。特に、短い時間でも仮眠を行えることで、授業に集中することができた。また、プリントを忘れたりすることが無く、むしろ、パソコンに保存してあるすべての資料を閲覧できるので、効率的な勉強をすることができた
- 郡元キャンパスの授業と下荒田キャンパスの授業の両方を取っていたため、10分休みで移動できない可能性が高かった。しかし、遠隔授業が主のためそれに遅刻をせずに済んだ。
- zoomを使った授業以外は、自分の都合のいいときに受講して課題を提出することができるのでそこが良かったかなと思いました。
- レポートを書く機会が増えたので文章を書く力は身についたと感じている。
- バス内でのコロナウイルスの感染を心配していたが、その心配をしなくて良かった点。
- 課題を多く出されるため、予習復習に費やす時間が増え、強制的にステイホームするようなからくりというか、意図があるように感じた。
- 音声がよく聞こえる。対面のときのように板書が見えないことがない
- 大学の新しいスタイルとして確立すべきなのではと思うほどしっくりきていた。わざわざ対面に戻す必要を感じません。
- 授業中に眠たくなることがなくなった。
- 教室が暑い等の問題がない

5. 今学期の遠隔授業を受講して、対面授業の方がよかったと思う点がありましたか（一部抜粋・文章は原文のまま）

- 勉強する時間と休み時間の区別がはっきりとわかれていた。生活のリズムがきちんと取れていた。また、課題も今より多くなく、無理せずに取り組むことができていた。友達とも会えて何気ない会話などをかわすこともできたので、対面授業のほうが良かった。
- レジюмеなどを先生が印刷してくれて配ってくれていたので、遠隔授業はそれがなく不便でした
- 遠隔講義で分からない点があっても、質問しづらい。
- 先生に直接質問ができる。他の人と意見交流ができる。
- 実験が実際にできなかつたり、講義で提示された物の実物を見ることができなかつたので、その点については対面の方が良いと感じた。
- 家だとやらない
- 授業で大事なところが遠隔授業ではわかりにくい。対面のほうが話の内容が頭に入りやすいように感じる
- 対面授業の方が、一つ一つの授業を集中して聞くことができる
- 誘惑が少なかつたり、授業を見るのを後回しにしたりせずにすむため集中して取り組める。
- 遠隔授業は講義や課題の自己管理が増える
- 講義を受ける側の空気感が先生に伝わらないのが。遠隔授業の短所。
- ノートをあまりとらなくなり、メモが増えた。手軽ではあるが、記憶には残りにくいような気がする。
- 難しい内容などは対面の方が良い
- モチベーションを保つという点では対面授業の方が良いように感じた。
- グループディスカッション等のグループワークを行う授業は対面で行いたかつた。
- 講義中の先生の余談がためになつたり面白いのにそれがなく、残念だつた。
- ありません
- 毎日レポートに追われているという気持ちになる点

6. 遠隔授業について、現時点で技術的に困っていることや不安に感じていることはありますか。
(一部抜粋・文章は原文のまま)

- 悪天候やその他の影響によって WiFi の接続状況が悪くなった際に授業をオンラインで受ける ことができない。
- 課題が多く、バイトもかけ持ちしているため寝る時間や将来自分が着く仕事に関連する本を読みたいが読む時間がない。
- 全く授業が無く、資料と課題だけしか出されていなくて、課題の答えももらえない授業があり、勉強する意欲がどうしてもわからない授業があります。
- 遠隔授業をするならするで、マイクとの距離を開けて声が籠らないようにするとか、工夫してほしいです。
- 授業のスピードが速すぎる先生がいて本当に対面の時もこれくらいのスピードなのか心配になります。
- 資料のみの授業は受ける意味があるのか分からなかった
- レポートなどの負担が多い。ほとんどの授業で毎回レポートの提出を求められたが、文字数は150~2000字ほどであった。総合的に4000字ほどのレポートを毎週おこなっていたことになった。さらに、レポート以外の課題もあり予習復習にとれる時間がほとんど無く、大学側が提言する授業は予習復習で完成するということがほとんど不可能であった。
- カメラをオンにすることは強要してくる先生が見受けられた点。
- 時々マナバに情報を載せずにホームページに情報を載せる先生がいたので出来るだけそれは無くしてほしいです。
- 時間内にファイルをマナバに提出するタイプの期末試験は、ファイルに入力するのに時間がかかり書きたい数式をかけずに終わりました。
- 集中力が続かない
- 先生のスライドが早くて、書ききれないので、スライドを授業後にアップしてもらったり、動画をあげていただけるとありがたいです。
- 途中で切れて強制退出となってしまう、また再度入室するのが、最初から授業を受けているのにもかかわらず、遅れてきたと思われていそうできつかった。

7. 大学生活全般について、現時点で困っていることや不安に感じていることはありますか。
(一部抜粋・文章は原文のまま)

- 大学生活の2年目がこんな形となってしまうとは思ってもいなかった。来年までこの状況が続くのかと思うと不安である。
- いつまでオンライン授業が続くのかわからない。
- ずっと家にいて、以前より友達と過ごす時間が減り、ストレスがたまる。ストレスで食べる量は増えたのに、コロナがさらに拡大してサークルに行けなくなると運動不足やさらなるストレスにつながるのではないかと不安を感じる。
- 今までにないくらいコロナ感染が鹿児島で広まっているのに、対面でテストをするのか不安になる科目もある。
- サークル活動や大学施設の利用等が制限されている。進路の情報が得にくくなってしまうこと。
- 後期も遠隔授業が続くと思うと、やる気が出ないまま一年間が過ぎてしまいそうで不安。早く通常に戻ってほしい。
- 友達と会う機会が前より減ったこと。
- 人との新しい繋がりが少なく、次学年や研究室の情報があまり得られていないこと。
- コロナコロナと騒いでいるが、騎射場などの飲み屋街では学生が多数いて不安
- コロナで就職はどうなるのか不安です。
- 留学か海外研修に行きたいと思っているのですが、いつ行けるかもわからない状態なので不安です。
- いつ友達と会えるのか、講義以外に他の学生とのふれあいが少ないので、ほとんど放送大学と変わらないのが現状です。もちろん感染防止のためにやむを得ないことではありますが、このまま大学に通うことなく生活が終わってしまうのは物足りない、また将来の就職がどうなるのか悲観的になっています。
- 授業前にスライドを公開してくれない先生がいるため、予習ができず授業についていけないことが多々あったので改善をお願いします。おそらく自分以外の多くの熱心な学生は困っていると予想できます。なんとかこの状況を改善して欲しいです。この大学に本気で学びにきているのに十分な学びが得られずとても精神的にきつい思いをしています。
- 授業料が同じという所がよく分からない。私は今、アルバイトもコロナのせいで入れていない状況です。収入がなく、授業料が今までと同じなのが困っています。また、レポート課題が多ければ多いほど生活の中でレポートに費やす時間が増え、リズムの良い生活ができるか不安である。
- コロナでアルバイトができず、生活をしていけるか不安
- 実験が本格的にできなかったこと。
- 学部によってコロナ対策の対応の差が大きい気がした。
- 就職活動や卒業までの必要な準備について少し不安です

8. その他、大学への要望があれば教えてください（一部抜粋・文章は原文のまま）

- 現在、鹿大生にもコロナ感染者は出ているのでしょうか。大学の施設を使う機会が多いのですが、もしすでに濃厚接触者等がいるのでしたら利用を控えようと考えているので情報が欲しいと思います
- コロナウイルスの影響により混乱状態であるため学生への連絡をもっと早くしてほしい。
- 現在鹿児島でもコロナが拡大しつつあるため、後期も感染拡大予防のため遠隔授業にしてほしい。
- できるだけ対面授業の方が良いです。
- 授業の予定はできるだけ早めに通告してほしい。
- 1年生がかわいそうです。彼らは、みんな必死にがんばって鹿大に入ってきたのです。それなのに、入学式に出席するのを許されたのは総代だけだなんて、わたしが1年生だったら本当にがっかりします。いつに延期になっても、新一年生の入学式は、平等に、全員に開かれるべきだと思います。きっと新1年生はそう願っていると思います。
- 今後の授業方針について早めに知りたいです。学校側の皆様も大変なのは重々承知ですがよろしくをお願いします。
- 履修単位の上限を緩和して欲しい。また、教育実習は4年に行われるらしいが、就職に響くことが容易に想像できるので、3年のうちに教育実習をできるようにカリキュラムを調整して欲しい。
- 後期は対面に移行してほしいです。それが無理で後期もオンラインならいっそのこと全部オンラインにしてほしいです。1つ、2つだけ対面とか逆に困るんです。それならもう実家に帰りたいからです。
- 授業料の見直しを検討をお願いします。
- 対面とオンラインが両方あるため、その二つの授業が並ぶとどちらかに遅れることになってしまいます。どちらかに統一していただきたいです。
- PCRを受ける際の授業参加はどうなるのか、PCRを受けた場合の金額・生協保険の適応などを明確にして、PCRを積極的に受けられるような安心できる環境を作って欲しい
- 対面授業をするかしないかや、研究室活動などはどんな判断基準で行なっているのか、その基準を知りたいです

Manaba で生じたトラブル (一部抜粋・文章は原文のまま)

- マイページではお知らせのマークがついているのに何回か開けて閉じてを繰り返しても何のお知らせか分からなかったです。
- レポートを書き終わった後、提出しようとした際、ログイン画面に戻り、書いた内容が消えたこと
- 40分経つと書いているレポートが消えること。iPadでWordファイルを提出したところ、再編集がきちんと機能していなかったこと。(最初に保存した中途半端なものが提出されてしまった。)
- 個別指導をこちらから作成できないようにしている先生が多数おり、メールにて連絡しなくてはならない点。
- アクセスが多くてクラッシュした
- 授業で使うズームのパスワードがコースコンテンツから消えてわからなくなり、入らなかったことがありました。
- レポートの分量が増えたが、締め切りが早いです。
- 先生が動画の制作などの慣れないことをするようになり、質問の回答が遅れていると感じた。
- ネットワーク環境によるものだと思いますが、音声聞き取りづらいことが多々ありました。

農林水産学研究科アンケートより抜粋 (一部抜粋・文章は原文のまま)

- 水産出身で今まで学んでこなかったため何の知識もない状態で農学分野の授業内容を、解説なしで資料だけ読んでレポートを提出するのは困難でありました。
- フィールド調査が行えず研究内容の変更をしなければなりませんでした。
- レポートが負担となり、研究が思うように進まなかった。
- 研究室に突然来ることができなくなる可能性があったため、見通しを立てることが例年より困難であった
- 院に進学してよかったのかと思うことがあり辛い。
- どんどん気持ちが落ちていて不安です。

5. FD ワークショップ「新型コロナウイルス状況下における教育・研究・運営活動の改善取り組みについて」

来年度以降 with コロナ/post コロナの状況が継続することが予想されることから、今年度に各構成員がコロナウイルス状況下で直面した問題点の洗い出し、およびその改善への取り組みについての情報共有を目的とし、「新型コロナウイルス状況下における教育・研究・運営活動の改善取り組みについて」をタイトルに、FD ワークショップを開催しました。

例年と異なり、3密を避けるためにグループ単位の話し合いは「分野」毎に行う形式とし、7つの小グループ（水圏科学分野、水産資源科学分野、水産経済学分野、水圏環境保全学分野、国際食料資源学特別コース、練習船）に分かれて、本テーマについて話し合いを行いました。その内容を事例報告様式（表3参照）に各グループで「分野教育（分野担当科目等を含む）」「研究活動」「学生（生活）指導」「その他」の 카테고리から3つ（同じカテゴリーが複数含まれても可）を選択、i) 問題点、ii) それを改善するための取り組み事例、iii) その結果、についてまとめました。なお、グループ単位の話し合いには1ヶ月の期間を設け、教員47名（船舶教員含む）が参加しました。

各グループでまとめた内容については、2021年3月17日（水）12時40分～13時20分にオンラインによる学部全体の発表会にて共有されました。進行は、水産学部FD委員の鬼頭助教、発表は各分野選出のFD委員が務めました。各グループからの事例報告は、いわゆる座学による講義に関するものに止まらず、実験・実習、学生の研究活動に関連する取り組み、研究室での感染対策、練習船を含む附属施設での実習や研究における取り組み、就職活動を行なっている学生の研究活動に関して、報告がなされました。このワークショップ報告会には参加者41名（船舶教員5名、事務職員2名を含む）参加（専任教員の81%）があり、ZOOMのチャット機能をうまく利用しながら、充実した質疑応答を行うことができました。各グループでまとめた事例報告（計35例、表3）については、FD委員長より3月22日に学部教員に配布されました。

カテゴリー：■教育 □研究 □学生指導 □その他

問題点：遠隔授業への対応をどのように行っているか？

解決への取り組みと実状：オンライン授業における学生の理解度について情報共有した。ある授業では遠隔によるリアルタイム授業の後、録画したものを Youtube にアップする方式を採用した。出席者数については例年とほとんど違いが認められなかったが、成績について、90 点以上と 89-80 点の成績上位者が多くなるとともに 60 点以下の学生数が多くなり、成績の二極化が例年より大きくなった。アンケートの結果より、Youtube 等での復習が効果的であることが示唆された。成績下位者に対しては遠隔授業により学習への取り組み方に問題が生じることが懸念された。

また、他の授業において遠隔テストを行った際にも同様の現象が認められるとの報告があった。遠隔のため試験難易度を上げたところ（資料参照可能のため）、成績上位者と下位者の二極化が認められた。成績下位者に対しては対面における追試で対処した。遠隔授業（オンデマンド形式の授業）は成績の二極化を引き起こし、成績下位者への対処が必要となる可能性があるが、成績上位者の理解度向上には効果的に作用する可能性がある。

問題点：卒論発表会の実施をどうするか？

解決への取り組みと実状：コロナ渦のため満足に実験ができない学生が生じ、運よく実験ができた学生とできなかった学生との間に本人の責めに帰さない差が生じる懸念より、食品生命科学分野では合同の卒論発表会を開催しなかった。発表会は研究室ごとに行い、それぞれ学生が達成感を得られるように工夫をしながら開催することで学生の満足度向上に配慮した。

問題点：乗船中の感染を防止する

解決への取り組みと実状：①乗船者にマスク着用の徹底。

②学生・教員の乗船定員を南星丸は半数の 8 名、かごしま丸は 24 名に減員。

③食堂の利用について横並びあるいは間隔を取る配置とする。

④1 日数回、船内消毒作業（テーブル、手摺等拭き取り）の実施

⑤南星丸では乗組員居室が三密状態の為、宿泊航海の禁止。避難等やむを得ない場合は乗組員減員で対応。

その結果：南星丸では宿泊航海が出来ない為、実習海域が大きく制限された。かごしま丸では必修科目を 2 航海に分けて行わざるを得ない状況が発生するとともに、定員制限により希望者全員が乗船しえない航海があった。

問題点：体調不良者発生への対応

解決への取り組みと実状：乗組員は体調不良が確認された場合、2週間の自宅待機を要請、法定職員など運航に支障をきたす者の場合、体調回復後、保健管理センターにてPCR検査を実施、陰性確認後に乗船した。

またかごしま丸では学生、乗組員とも航海中に発熱や倦怠感を訴えたケースがあったが、その都度、船内病室に隔離、保健管理センターと水産学部に報告し対応を行った。

その結果：航海途中で下船し病院受診やPCR検査を行うケースもあったが、これまで練習船で感染者は確認されていない。

問題点：遠隔授業用の配布資料印刷に関して学生の金銭的負担が大きい

解決への取り組みと実状：

(取り組み)

- ・コンビニ印刷の方法やPDF印刷時のインク節約方法を案内した
- ・印刷が必要な資料には白黒の資料をできるだけ用意した
- ・印刷の必要がある資料を明確にし、それ以外の資料の印刷は各自の判断に任せた

(結果)

- ・コンビニ印刷の方法やインク節約方法の案内が役に立ったと反応があった
- ・紙での配布を希望や、遠隔講義期間中でも受け取れる手段があればよかったとの反応もあった

問題点：学生入構禁止の際の錦江湾ステーション海洋生産実験室での水産動物の飼育および世話をどうするか。

解決への取り組みと実状：利用者氏名及び入退室時刻および健康状態の記録を実施し、作業時間をずらすよう配慮した。作業は最小限の時間で実施させ、水槽間にスペースを設け、作業時に密にならないよう配慮した。その結果、開始時期の遅れ等はあったが、ほぼ予定していた卒業研究、修士論文研究及び博士論文研究を実施できた。

問題点：受講生の多い科目のオンライン授業における学生の理解度チェック

解決への取り組みと実状：

オンライン講義は感染症対策や学生の状況に合わせて受講できるという利点がある一方、学生のデバイスやネット環境の違い、あるいは対面に比べて理解度が分かりにくいという点が懸念される。そのため、講義中にレスポンスやアンケートを入れて理解度を調べたり、集中させるような工夫を行ったりした。授業アンケート結果をみると、講義中に行う数回のミニテストや質疑応答などは、学生の好感が得られていたが、オムニバスの講義などでは担当教員間で出席やアンケートを取る方法が異なり、学生によっては出欠がとれているかどうか、混乱を生じるという問題点もあった。

問題点：当分野の卒論研究は実態調査を中心とするが、産業現場における実態調査を計画通りに行えないケースが発生した。特に県外調査が困難であった。

解決への取り組みと実状：

県内中心の小規模な調査やオンライン調査に変更したり、実態調査が不要な文献研究や資料に基づく計量分析に卒論研究テーマを変更したりした。しかし学生がやりたいテーマに取り組めない、学びたいことが学べないといった状況が出現している。

今後もこうした状況が続くようであれば、多様な県内調査フィールドや調査受入企業の新規開拓を進める必要がある。

問題点：科目「海外研修」「海外研修（実用英語）」における渡航不可

解決への取り組みと実状：

従来の受入先であるフィリピン大学ビサヤス校・JICA と2ヶ月にわたって調整し、以下のように対応・実施できた。

① 現地での語学研修・視察

座学はリアルタイム講義にて対応、現地でチューターと行っていた実技の箇所は、ZOOMにて担当の先生とTAで対応。現地での視察については、紹介ビデオを視聴し、質疑などを行ない、理解を深めた。また、前年度までの経験談を共有することで、疑似体験のような効果が得られた。

② 現地の農業・水産業に関する講義：UPVの教員によるリアルタイム講義にて対応

③ 日本の国際協力に関する講義：JICA 現地事務所がリアルタイム講義にて対応

④ 国内での事前学習：内容は通常通り（オンラインと対面で実施）

総評：

渡航により研修効果を高めてきた海外研修ではあるが、new normalの時代になるとオンラインで対応すべきことがらのウエイトも増加してくる。オンライン対応では、対面よりも聞き取りにくく理解しにくい、伝えたいことが伝わりにくいという問題も起きてきて、対応すべき能力が必要にもなってくるものと想定される。この点で、オンラインに依存しなければならぬ今年の環境は担当教員にとっても良いFDの機会にもなったし、学生にとってもあらたに修得すべき能力があるのだと認識する機会になった。特にメイン機コンポーネントのUPV対応の研修は学生の食いつきも良く、研修全体としては80%の到達と評価して良いだろう。今回の研修で、学生は一層リアルを確認してみたいという気持ちになっていると思われるので、この20%を自らの足で確認・復習する契機になり、実現することがあれば100点の研修と評価したい。

問題点：科目「卒業プロジェクト」（海外での活動等）における海外渡航の不可

解決への取り組みと実状：

国際食料資源学特別コース運営委員会にて、オンラインによる現地とのやりとりなどの取り組みに代えることにより、30日間の渡航が必要な海外での卒業プロジェクトの活動として認めることとした。

具体的には、ZOOMを用いてリアルタイムで聞き取り調査やプロジェクトミーティングを実施し、日常的なやりとりについてはSNS（Whatsup）を利用して、密に連絡を取るなどの方法で対応した。なお、対象学生は前年度に研究室活動でプロジェクト対象地域に訪問していたこともあり、スムーズに実施できた。

総評：

こういう時代であり、ネットワークのおかげで初期の目的は十分に達成できた。一方で人の感情は理解しづらく、親切で対応してくれているのか、いやいや仕方なくカウンターパートが対応してくれているのか不安を感じる学生もいた。日頃の人間関係が構築できている故推進できたものであるが、プロジェクトサイトの状況を自ら目の当たりにして問題分析をすすめ、課題解決を進めるのにはやはり人の体温や空気を感じる必要があり、オンラインで完結することは難しいといえる。同じ課題を複数学年で共有し、オンラインで進める部分、対面で進める部分を切り分けて進めて完結することも考えなければならないのでしょう。

カテゴリー： 教育 研究 学生指導 その他

問題点： 出校停止期間の卒論や学生指導をどのように行っているか？

解決への取り組みと実状： 使用しているオンラインミーティングツールとして Zoom や Webex の他、Teams や SLACK が挙げられ、いずれも適切に使い分けることでゼミや研究におけるディスカッションに役立てているとの情報を共有した。Teams はセキュリティーを保ちながらファイルを共有できる点で実験データ等を扱う際に有用とのことであった。また、チャット形式ですばやくやり取りができる点もメリットとして挙げられた。出校停止期間はネガティブな面ばかりでなく、ポジティブな面も多く認められた。例えば、Zoom で個人面談を頻繁にすることにより普段よりもコミュニケーションが良好になった例があった。

問題点：コロナ禍によって大幅に就職活動が長引き、かつ緊急事態宣言地域の実家から移動できなかった修士院生の研究実施をどうすればよいか。

解決への取り組みと実状：研究内容の一部をレビューとし、論文研究のテーマに関連する過去の知見をまとめさせた。その結果、多くの文献を熟読し、かつその内容を研究テーマに則して取りまとめることによって、学生の能力は向上したものと考えられた。学生自身もその作業に面白みを感じていたようであった。その一方で、学生の実験スケジュールに合わせた教員のスケジュール調整に限界があり、実験時間の確保のために休日や夜間で補間する場合も多かった。

カテゴリー： 分野教育 研究活動 学生指導 その他

問題点：学生居室の密状態回避

解決への取り組みと実状：

（取り組み）

- ・学生や就労者の人数が多いため昼夜を問わず時間差で作業をせざるを得なかった
- ・時間差で作業をおこなったり分野内の学生居室への融通について関係教員間で話し合った

（結果）

- ・可変スペースの利用申請で場所を確保できたが高い人口密度の解消に至っていない。次年度以降も問題が継続する

6. 卒業時アンケート・修了時アンケート

水産学部では、教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施してきました。アンケートでは、学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に基づく質問、および卒業後の進路決定に関する質問を設定しました。ここでは、2019 年度（平成 31 年度）の卒業時・修了時アンケートについてまとめます（学部回答率 16%（138 名中 22 名）、修士回答率 21%（34 名中 7 名））。

卒業時アンケートおよび修了時アンケートの設問項目を図 2 および図 3 に示します。各質問は「① 十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階、または「①はい」「②いいえ」の 2 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を測るための質問、項目 B では国際化に関する質問、項目 C では就職・進学に関する質問に答えてもらいました。卒業時、修了時アンケートの分析結果を図 3 および図 4 に示します。

教育目標に関する質問（項目 A）については、卒業生では、教育目標にかかげた各能力を習得できたと考える学生がほとんどでしたが、「②ある程度そう思う」「③少し思う」の割合が昨年度より増加しており、いくらか満足度が低下したと考えられます。また、A4（水産技術者として必要な英語能力が向上した）、A5（水産技術者として必要な情報処理能力が身についた）の項目について「まったく思わない」の割合の増加が目立ち、英語や情報処理に関する教育への満足度の低下が考えられます。修了生では、ほぼ全ての項目で「①十分にそう思う」「②ある程度思う」の割合が昨年度より減少していました。特に、A3（高度な水産技術者に必要な英語を運用できる能力が身についた）、A4（知識と体験に基づき新たな調査・研究のプロセスを実施できる能力が身についた）の項目については「① 十分にそう思う」が全くみられませんでした。全体的な満足度が低下しているようです。

国際化に関する質問（項目 B）について、卒業生では「①十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」の割合が高く、学部教育の目標を達成できたと考えられます。海外研修に参加した学生は回答者の 20%ほどで、全員が大学として開講している研修を受けたことから、大学が与えた機会を活用できていると思われれます。B15（入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか？）、B16（これから、英語の力（語学力）を伸ばしていこうと思いますか？）、B19（これからの就職先等では、国際的に活躍すること、また国際的な知識や理解が期待されますか？）、B20（これから、国際的に活躍していきたいと思いますか？）の項目については、昨年度より「④そう思わない」の割合が高く、国際化に興味をもてない学生も一定数いたようです。修了生については、全体的に「①十分にそう思う」の割合が減少していました。国際化についても満足度が少し低下したようです。

就職・進学に関する質問（項目 C）については、卒業生では、「①十分にそう思う」「②ある程度思う」の割合が 60%程度で、「③少し思う」を含めると約 80%となり、希望する職種かそれに近い職種に就くことができた学生が多かったと考えられます。その一方、3 年度連続で同程度の割合、未決定という回答がみられたことから、今まで以上に細やかな就職支援が必要かもしれません。修了生では、「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」が 60%程度で、「④全く思わない」「⑤未決定」と

いう回答はみられなかったため、ある程度希望する職種に就くことができたと考えられます。

以上、全体としてみると肯定的な回答の割合が高い項目が多く、学部・大学院の教育目標は概ね達成できたと考えられます。しかし、今年度のアンケートの回答率は極めて低く、分析結果の信頼度は高くないことに注意が必要です。学生の回答を促すような取り組みが必要であると考えられます。

平成31年度 卒業時アンケート (学部生用)

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、あなた自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。

1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に強い水産技術者に必要な教養と基本的な知識を体系的に修得した (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
2. 水産学の各専門分野で、実践的で高いレベルの知識・技術を修得した (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
3. 水産技術者として十分な基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
5. 水産技術者として実務に必要な情報処理能力が身に付いた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
6. 水産技術者として必要な報告書作成、プレゼンテーション能力、問題解決型の能力が身に付いた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
7. 水産技術者として必要なレベルの現場対応能力が備わった (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
8. 水産技術者として適切な協働(チームワーク)能力や倫理観、判断力及び職業観が身に付いた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
9. 水産技術者として国際社会や地域社会の課題に果敢に取り組む意識と思考力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

10. 在学中に海外研修に参加しましたか? (必須)
①はい ②いいえ
11. その海外研修は共通教育や学部など大学として開講されているものですか? (10で「はい」と答えた方のみ)
①はい ②いいえ
12. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
13. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
14. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
15. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
16. これから、英語の力(語学力)を伸ばしていこうと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
17. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
18. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
19. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
20. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
21. 在学中に取得した英語資格の種類及びスコア等をお教えてください。(任意)

C. 就職・進学について、ご回答ください。

22. あなたが修得した知識や技術が活かして、希望する職種等に就職・進学できた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

D. 水産学部の教育について評価できる点、改善すべき点がありましたら、ご回答ください (任意)

図2. 2019年度 卒業時アンケートの様式.

平成31年度 修了時アンケート (大学院生用)

- A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較してあなた自身が修得できたかを総合的な観点から評価してください。
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野の高度な専門的知識を体系的に修得した (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 2. 水産学の幅広い最新の基盤的知識を持ち、新たな取り組みに対応できる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 3. 高度な水産技術者に必要な英語を運用できる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 4. 知識と体験に基づき新たな調査・研究のプロセスを実施できる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 5. 調査・研究計画を策定できる能力が身に付いた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 6. 高度な調査・研究機器等を利用できる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 7. 情報収集と資料整理・分析を高い水準でできる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 8. 報告書作成やプレゼンテーションができる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 9. 調査・研究の結果を統合的に理解・活用し纏めることができる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 10. 高度な水産技術者として職業能力で現場対応ができる能力が身についた (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
- B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。
11. 研究科在学中に海外研修に参加しましたか? (必須)
①はい ②いいえ
 12. その海外研修は大学として開講されているものですか? (11で「はい」と答えた方のみ)
①はい ②いいえ
 13. 研究科在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 14. 研究科在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 15. 研究科在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 16. 研究科入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 17. これから、英語の力(語学力)を伸ばしていこうと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 18. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 19. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 20. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 21. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか? (必須)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
 22. 研究科在学中に取得した英語資格の種類及びスコア等をお教えてください。(任意)
- C. 就職・進学について、ご回答ください。
23. あなたが修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定
- D. 水産学研究科の教育について評価できる点、改善すべき点がありましたら、ご回答ください (任意)

図3. 2019年度 修了時アンケートの様式.

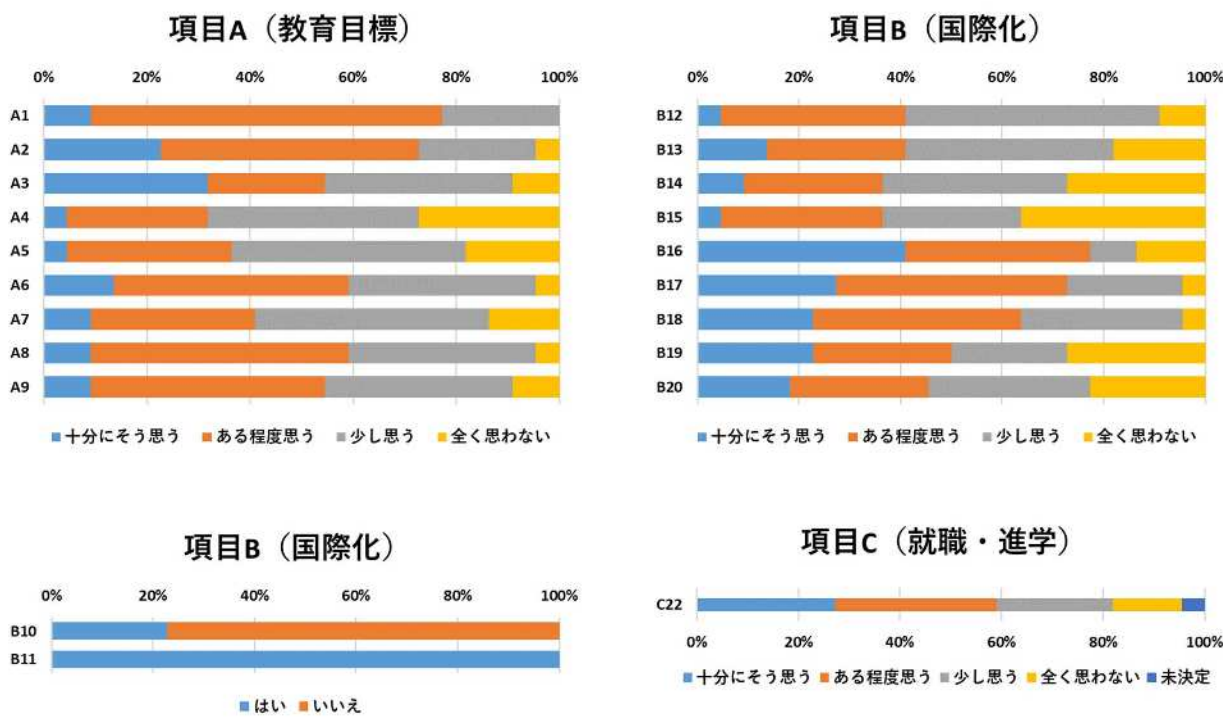


図 4. 2019 年度卒業生に関する集計結果.

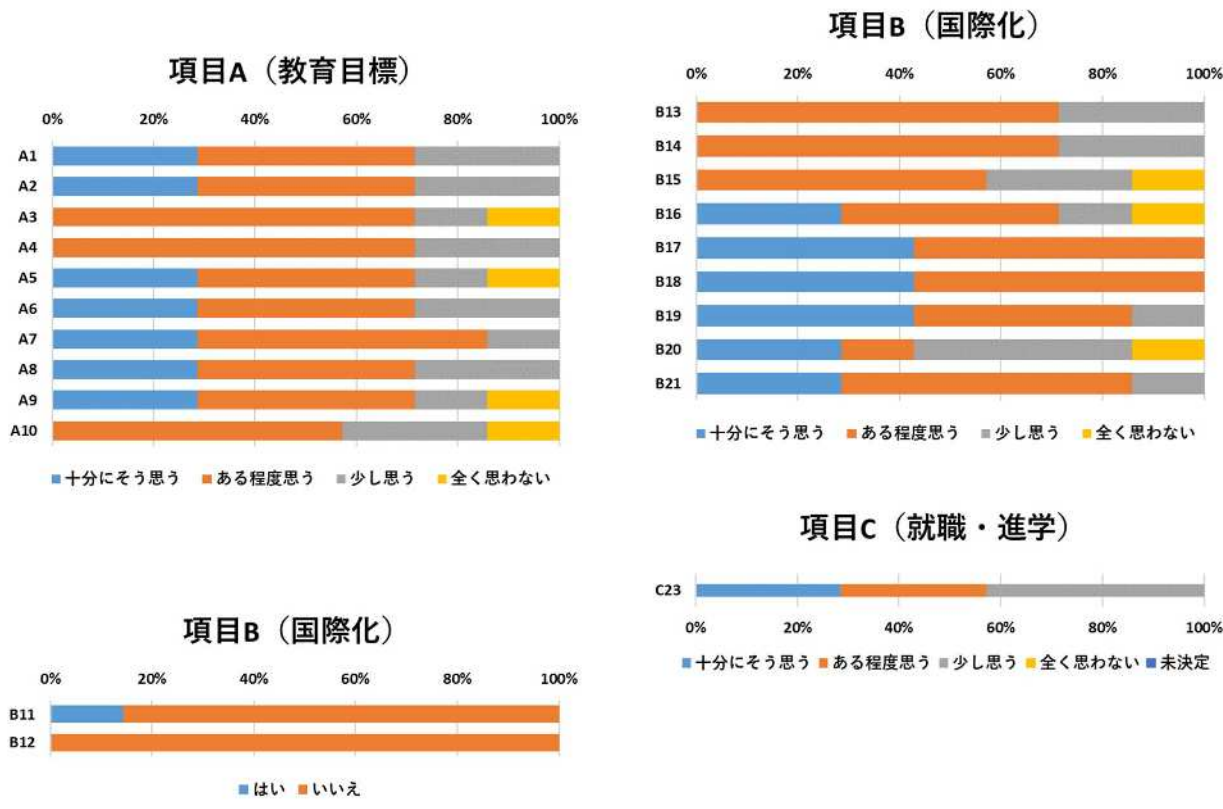


図 5. 2019 年度修了生に関する集計結果.

7. ベストティーチャー賞被推薦者の選出

2018年度より、優れた講義を行った教員を表彰する「ベストティーチャー賞」制度がはじまりました。本年度も授業アンケート結果を基にFD委員会で協議し、ベストティーチャーの被推薦者選考を行いました。2020年度前期および後期に実施した授業アンケートを分析し、特に授業アンケート項目の中の、授業が計画通りに実施されたか、学習目標を達成できたか、授業が分かりやすかったか、授業中や授業時間外に質問しやすい配慮があったか、授業の進め方は適切であったか、授業に満足できたかに関わる質問を重要視し、アンケートへの回答を分析しました。本年度はアンケートの回答率が悪かったため、まずは回答率で絞り込みを行い、そのなかから学生満足度の高いものを選出しました。その結果、水産学部食品生命科学分野の内匠准教授を被推薦者として選出しました。内匠准教授の担当科目「食品化学」は、アンケートの回答率の高い上位3科目に選出され、さらにそれら3科目のうち最も満足度平均の高い評価となりました。授業アンケートの学生コメントには、「毎回最後に小テストがあり、重要なポイントが分かりやすかった。」「毎回の授業がまとまった内容で構成されていてわかりやすかった。」「栄養素から始まり、具体的な食品へとつながっていき、流れがつかみやすかった。」などの意見が挙げられていました。

水産学部でも多くの科目が開講されていますが、ベストティーチャーの開講する科目の授業参観等を企画し、さらに学部の教育が学生にとってより良いものになるよう工夫していきたいと考えます。



共同獣医学部・
共同獣医学研究科

令和2年度共同獣医学部、共同獣医学研究科 FD 活動の記録

I. 共同獣医学部 FD 活動組織 (FD 委員会の構成と活動状況)

委員長 乙丸 孝之介 准教授
委員 宇野 泰広 准教授
委員 小澤 真 准教授
委員 安藤 貴朗 准教授
事務担当者 橋元 浩幸 学務課長
吉村 学 教務係長
豊島 剣士 教務係員

第1回共同獣医学部 FD 委員会

日時：令和2年12月25日（金）16：30～17：30、場所：小動物病院の2階、症例検討室

出席者：乙丸委員長、宇野、小澤、安藤（敬称略）、陪席者：事務部（豊島教務係員）

議題1．ベストティーチャー賞の選考方法について

報告事項1．その他

第2回共同獣医学部 FD 委員会

日時：令和3年3月31日（水）11：00～12：00、場所：21 セミナー室

出席者：乙丸委員長、宇野、小澤、安藤（敬称略）

議題1．ベストティーチャー賞選出における集計結果および令和3年度案の確認について

報告事項1．その他

その他、その都度FDに関する個別事項について、メール会議にて対応した。

II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成 15 年度後期より授業公開・授業参観を実施している。平成 24 年度より共同獣医学部が発足し、本年度は共同獣医学部所属の学生のみとなった。

平成 28 年度後期より山口大学共同獣医学部も本取り組みに一部参画している。両大学の教員が互いに参観できる仕組みとしており、参加者拡大を図ると共に、本取り組みの内容をより一層充実させている。

実施については、例年どおり、授業公開に関する周知は事務経由でメールにて行い、授業参観参加希望申込みは授業担当者と参観希望者間の直接のやりとり(メールおよび電話)で行われた。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出してもらった。また、平成 26 年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらい、本取り組みの PDCA サイクルを確立している。

本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、後期 25 名の参加があった。参加率は 56%程度となっている。前期は新型コロナウイルス対応のため、学期途中での遠隔授業への切り替えがあったため授業参観は実施していない。次年度以降、さらに参加者拡大を目指す。

III-①. 学生による遠隔授業に関するアンケート

令和2年度前期は新型コロナウイルス対応により期の途中から遠隔授業への対応となったことから例年実施している授業評価アンケートではなく遠隔授業全体に関するアンケートを実施した。

下記に回答の集計結果を示す。

【鹿児島大学・山口大学】オンライン授業に関するアンケート（学生）

対象：1～6年生（鹿児島）、1～5年生（山口）

実施時期：2020年7月7日より約1週間

回答人数：293（全349名）

【1～4：ライブ授業配信についての質問】

問1. ライブ配信（Zoom、Webex など）による授業（ポリクリ含む）を受講しましたか。

- はい 207(71%)
- いいえ 86(29%)

問2. 上記問で「はい」と答えた方にお聞きします。ライブ配信による授業はどうでしたか。

- 大変満足している 31(11%)
- 満足している 85(29%)
- 普通 81(28%)
- やや不満 10(3%)
- 大いに不満 1(0%)
- 無回答 85(29%)

問3. 上記問で「やや不満」または「大いに不満」と答えた方にお聞きします。その理由をお答え下さい。

（全コメント・12件）

- ・各大学の回答を参照してください。

問4. 自身の学習理解度についてお聞きします。従来の対面方式と比較して、ライブ配信による授業はどうでしたか。

- 対面方式より良いと思う 59(20%)
- 対面方式より悪いと思う 43(15%)
- どちらも同じである 87(30%)
- わからない 42(14%)
- 無回答 62(21%)

【5～10 録画授業配信についての質問】

問5. 録画授業を視聴しましたか。

- はい 276(94%)
- いいえ 10(3%)
- 無回答 7(2%)

問6. 上記問で「はい」と答えた方にお聞きします。録画授業配信はどうでしたか。

- 大変満足している 94(32%)
- 満足している 115(39%)
- 普通 59(20%)
- やや不満 9(3%)
- 大いに不満 0(0%)
- 無回答 16(5%)

問7. 上記問で「やや不満」または「大いに不満」と答えた方にお聞きします。その理由をお答え下さい。

(全コメント・11件)

- ・各大学の回答を参照してください。

問8. 録画授業の視聴は、配信後おもにいつしましたか。

- 配信当日 44(15%)
- 配信翌日から3日以内 150(51%)
- 配信3日後から1週間以内 69(24%)
- 配信1週間後から2週間以内 16(5%)
- 無回答 14(5%)

問9. 一つの録画授業を平均何回視聴しましたか。一部分の見返しも含めて構いません。

- 1回だけ 108(37%)
- 2～3回 161(55%)
- 4～5回 6(2%)
- それ以上 4(1%)
- 無回答 14(5%)

問10. 自身の学習理解度についてお聞きします。従来の対面方式と比較して、録画配信による授業はどうでしたか。

- 対面方式より良いと思う 173(59%)

- 対面方式より悪いと思う 16(5%)
- どちらも同じである 67(23%)
- わからない 23(8%)
- 無回答 14(5%)

【11～15 :オンライン授業全般についての質問】

問11. 自宅でのオンライン授業（ライブ授業および録画授業配信）の視聴で問題がありましたか。
（複数回答可）

- 問題なかった 212(72%)
- 音声のトラブル 13(4%)
- 映像のトラブル 24(8%)
- 視聴設定（Zoom、Webex）のトラブル 5(2%)
- 自宅ネットワーク環境の問題 30(10%)
- 無回答 9(2%)

問12. あなたにとって、ライブ授業配信と録画授業配信のどちらがよいと思いますか。

- ライブ授業 14(5%)
- 録画授業 190(65%)
- どちらもよい 58(20%)
- どちらも悪い 2(1%)
- わからない 22(8%)
- 無回答 7(2%)

問13. 上記問の回答について、その理由をお答え下さい。

（全コメント・240件）

・各大学の回答を参照してください。

白石コメント（参考）：「録画授業がよい理由」についてのみですが分類しました。なお分類は白石の主観です。

- ・わからなかったところを何度も視聴できる 108
- ・期間中なんども見返すことができる 27
- ・都合の良い（集中できる）時間・場所で視聴できる。55
- ・ライブはトラブルの影響が大きい。16

問14. 台風などの自然災害時に、オンライン授業（ライブ授業および録画授業配信）で対応するこ

とについてご意見があれば記述して下さい。

■ 賛成 143(49%)

■ 反対 4(1%)

■ その他 8(3%)

■ 無回答 138(47%)

(全コメント・155件)

・各大学の回答を参照してください。

問15. オンライン授業（ライブ授業および録画授業配信）についてよかった点、悪かった点、改善要望などを書いて下さい。

(全コメント・170件)

・各大学の回答を参照してください。

III-②. 学生による授業評価

令和2年度後期に学生による授業評価のアンケートを manaba によって実施した。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。質問項目は下記のとおりである。

●					◆				
授業評価アンケート(講義・演習用)									
授業科目番号: 9999				受講者氏名 <small>(氏名の記載は任意です。)</small>					
授業科目名: ●●●●				(☑)遠隔授業システム		教員名: ●●●●			
* このアンケートは、授業をより良くするために行うもので、回答者の成績には一切影響ありません。考えを率直に記入してください。									
* この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。									
1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)									
○1. 90%以上(14回以上)		○2. 80~90%(12~13回)		○3. 60~80%(9~11回)		○4. 40~60%(6~8回)		○5. 40%未満(6回未満)	
2 あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか?総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。									
○1. 3時間程度または以上		○2. 2時間程度		○3. 1時間程度		○4. 30~50分程度		○5. 30分未満	
3 この授業内容の水準はどうでしたか?									
○1. 高かった		○2. やや高かった		○3. 妥当だった		○4. やや低かった		○5. 低かった	
4 この授業の分量はどうでしたか?									
○1. 多かった		○2. やや多かった		○3. 妥当だった		○4. やや少なかった		○5. 少なかった	
5 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
6 板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
○6. この授業は該当しない									
7 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
8 この授業はシラバスに沿って進められましたか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
○6. 答えられない									
10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
11 この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)、送信・受信に関わらず回答してください。									
12 教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
13 教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
15 授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか?									
○1. そう思う		○2. ややそう思う		○3. どちらとも言えない		○4. あまりそう思わない		○5. そう思わない	
* 以下は、授業担当教員の各自設定質問です。教員によって異なりますので、指示があれば回答してください。									
17 (自由質問 ①)									
○1. 選択肢 1		○2. 選択肢 2		○3. 選択肢 3		○4. 選択肢 4		○5. 選択肢 5	
18 (自由質問 ②)									
○1. 選択肢 1		○2. 選択肢 2		○3. 選択肢 3		○4. 選択肢 4		○5. 選択肢 5	
自由記述									
この授業についての意見・要望・感想などを自由にご記入下さい。スペースが足りない場合、適宜裏面にご記入下さい。									
ご協力ありがとうございました。									
共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会									

平成 29 年後期の様式より、新たに【教員からの自由質問欄】を設けた。これにより、各授業担当教員個々の質問設定が可能となり、教員が必要とする独自の意見収集が可能となった。

なお、様式に記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。

共同獣医学部所属の学生に対して実施し、共同獣医対象の共通教育科目と専門教育科目において、後期 55 科目（講義・演習：42 科目、実験・実習：13 科目）の回答を回収した。

次のページより、今年度のアンケート集計結果を紹介する。

●アンケート集計結果（全科目集計）

【講義・演習科目】後期：42科目

No.	質問項目	回答	R2前期	% (R2前)	R2後期	% (R2後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上		#DIV/0!	367	92.9%
		80~90%		#DIV/0!	20	5.1%
		60~80%		#DIV/0!	6	1.5%
		40~60%		#DIV/0!	2	0.5%
		40%未満		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上		#DIV/0!	95	24.1%
		2時間程度		#DIV/0!	101	25.6%
		1時間程度		#DIV/0!	134	33.9%
		30~50分程度		#DIV/0!	37	9.4%
		30分未満		#DIV/0!	28	7.1%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
3	この授業内容の水準はどうでしたか？	高かった		#DIV/0!	109	27.6%
		やや高かった		#DIV/0!	116	29.4%
		妥当だった		#DIV/0!	163	41.3%
		やや低かった		#DIV/0!	7	1.8%
		低かった		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった		#DIV/0!	112	28.4%
		やや多かった		#DIV/0!	108	27.3%
		妥当だった		#DIV/0!	168	42.5%
		やや少なかった		#DIV/0!	7	1.8%
		少なかった		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う		#DIV/0!	222	56.2%
		ややそう思う		#DIV/0!	106	26.8%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	46	11.6%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	17	4.3%
		そう思わない		#DIV/0!	4	1.0%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？	そう思う		#DIV/0!	216	54.7%
		ややそう思う		#DIV/0!	109	27.6%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	42	10.6%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	19	4.8%
		そう思わない		#DIV/0!	9	2.3%
		この授業は該当しない		#DIV/0!		0.0%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う		#DIV/0!	187	47.3%
		ややそう思う		#DIV/0!	76	19.2%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	122	30.9%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	9	2.3%
		そう思わない		#DIV/0!	1	0.3%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う		#DIV/0!	249	63.0%
		ややそう思う		#DIV/0!	84	21.3%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	58	14.7%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	2	0.5%
		そう思わない		#DIV/0!	2	0.5%
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%

9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	146	37.0%	
		ややそう思う	#DIV/0!	158	40.0%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	72	18.2%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	15	3.8%	
		そう思わない	#DIV/0!	4	1.0%	
		答えられない	#DIV/0!		0.0%	
		計	0	#DIV/0!	395	100.0%
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	#DIV/0!	152	38.5%	
		ややそう思う	#DIV/0!	185	46.8%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	39	9.9%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	16	4.1%	
		そう思わない	#DIV/0!	3	0.8%	
				計	0	#DIV/0!
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	#DIV/0!	200	50.6%	
		ややそう思う	#DIV/0!	130	32.9%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	47	11.9%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	14	3.5%	
		そう思わない	#DIV/0!	4	1.0%	
				計	0	#DIV/0!
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	198	62.3%	
		ややそう思う	#DIV/0!	75	23.6%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	33	10.4%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	11	3.5%	
		そう思わない	#DIV/0!	1	0.3%	
				計	0	#DIV/0!
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	186	58.9%	
		ややそう思う	#DIV/0!	85	26.9%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	33	10.4%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	9	2.8%	
		そう思わない	#DIV/0!	3	0.9%	
				計	0	#DIV/0!
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	#DIV/0!	188	59.5%	
		ややそう思う	#DIV/0!	86	27.2%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	30	9.5%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	9	2.8%	
		そう思わない	#DIV/0!	3	0.9%	
				計	0	#DIV/0!
※15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	186	58.9%	
		ややそう思う	#DIV/0!	91	28.8%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	28	8.9%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	10	3.2%	
		そう思わない	#DIV/0!	1	0.3%	
				計	0	#DIV/0!
※16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	159	50.2%	
		ややそう思う	#DIV/0!	96	30.3%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	48	15.1%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	8	2.5%	
		そう思わない	#DIV/0!	6	1.9%	
				計	0	#DIV/0!

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

【実験・実習科目】後期：13科目

No.	質問項目	回答	R2前期	% (R2前)	R2後期	% (R2後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上		#DIV/0!	93	95.9%
		80~90%		#DIV/0!	4	4.1%
		60~80%		#DIV/0!	0	0.0%
		40~60%		#DIV/0!	0	0.0%
		40%未満		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上		#DIV/0!	24	24.7%
		2時間程度		#DIV/0!	11	11.3%
		1時間程度		#DIV/0!	28	28.9%
		30~50分程度		#DIV/0!	24	24.7%
		30分未満		#DIV/0!	10	10.3%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う		#DIV/0!	23	23.7%
		ややそう思う		#DIV/0!	50	51.5%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	15	15.5%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	9	9.3%
		そう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う		#DIV/0!	62	63.9%
		ややそう思う		#DIV/0!	25	25.8%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	6	6.2%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	4	4.1%
		そう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？	そう思う		#DIV/0!	71	73.2%
		ややそう思う		#DIV/0!	23	23.7%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	3	3.1%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		そう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
6	実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う		#DIV/0!	56	57.7%
		ややそう思う		#DIV/0!	23	23.7%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	12	12.4%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	5	5.2%
		そう思わない		#DIV/0!	1	1.0%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う		#DIV/0!	62	71.3%
		ややそう思う		#DIV/0!	16	18.4%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	7	8.0%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	2	2.3%
		そう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		この授業は該当しない		#DIV/0!		0.0%
		計	0	#DIV/0!	87	100.0%
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う		#DIV/0!	60	61.9%
		ややそう思う		#DIV/0!	28	28.9%
		どちらとも言えない		#DIV/0!	9	9.3%
		あまりそう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		そう思わない		#DIV/0!	0	0.0%
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%

9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	35	36.1%	
		ややそう思う	#DIV/0!	48	49.5%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	13	13.4%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
		そう思わない	#DIV/0!	1	1.0%	
		答えられない	#DIV/0!		0.0%	
		計	0	#DIV/0!	97	100.0%
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	#DIV/0!	45	46.4%	
		ややそう思う	#DIV/0!	45	46.4%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	7	7.2%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
		そう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
				計	0	#DIV/0!
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	#DIV/0!	55	56.7%	
		ややそう思う	#DIV/0!	33	34.0%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	8	8.2%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	1	1.0%	
		そう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
				計	0	#DIV/0!
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	43	68.3%	
		ややそう思う	#DIV/0!	11	17.5%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	5	7.9%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	4	6.3%	
		そう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
				計	0	#DIV/0!
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	40	63.5%	
		ややそう思う	#DIV/0!	16	25.4%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	5	7.9%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	2	3.2%	
		そう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
				計	0	#DIV/0!
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	#DIV/0!	34	54.0%	
		ややそう思う	#DIV/0!	18	28.6%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	7	11.1%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	2	3.2%	
		そう思わない	#DIV/0!	2	3.2%	
				計	0	#DIV/0!
※15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	33	52.4%	
		ややそう思う	#DIV/0!	18	28.6%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	9	14.3%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	3	4.8%	
		そう思わない	#DIV/0!	0	0.0%	
				計	0	#DIV/0!
※16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	#DIV/0!	26	41.3%	
		ややそう思う	#DIV/0!	18	28.6%	
		どちらとも言えない	#DIV/0!	13	20.6%	
		あまりそう思わない	#DIV/0!	5	7.9%	
		そう思わない	#DIV/0!	1	1.6%	
				計	0	#DIV/0!

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

IV. 令和2年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同 FD 研修会

2020 年度 FD 研修 基調講演

文責 島田

日時：2020 年 9 月 11 日

場所：山口大学 iCOVER 101

講演者：山口大学医学部医学科 システムバイオインフォマティクス講座

浅井 義之 先生

参加者：山口大学 教員 31 名

・ AI とシステムバイオロジー

AI とシステムバイオロジーを組み合わせることで、基礎研究の発展、新規医療技術の開発、データサイエンティストの人材育成を目指す。

AI は大量のデータを構造化することで未知の知識の発見を行い、病気の早期発見を目的とする。システムバイオロジーはマクロな視点でネットワークのメカニズムの理解を行い、病態の深い理解を目的とする。

・ AI の発展と実用

AI のパーセプトロン→ネオコグニトロン→ディープラーニングの順で発展した。

CAD (computer-aided diagnosis) には様々な種類が開発されており、脳卒中、アルツハイマー病など認証を経て販売に至っているものが数多くある。

・ AI の学習と予測

AI の学習には教師あり学習 (小脳モデル)、教師無し学習 (大脳皮質モデル)、強化学習 (大脳基底核モデル) の 3 種類存在する。

この中で重要なのは、教師無し学習であり、データレベルでの分類が可能であることが利点である。また、学習段階で医師が答えを出しているため医師を超えることがない、という教師あり学習においての問題点を解決できる。

・ AI の問題点

AI は視覚的には見えないデータ上のノイズを拾ってしまうことが問題になっている。前提知識として何をどこまで教えるかという問題も存在する (フレーム問題)。

テーマ：講義・実習において改善すべきこと

参加者：山口大学 教員9名

1) 講義・実習に関する問題点について

- ・ カリキュラムにおける授業内容の重複改善について検討した。科目担当者間の連携の重要性が示された。臓器別のカリキュラムの導入により、重複の多くは改善される可能性が提案された。臨床系の科目を含めた重複の検討をすべきとの指摘があった。
- ・ 学生の技能の評価と実習へのフィードバックについて検討した。一部の実技について、学生の習得度のレベルの低さが指摘されている例を挙げた。評価ワーキングやカリキュラム委員会での事例の収集と検証の必要性について議論した。
- ・ 講義録画の自宅での視聴について議論した。COVID-19に対するオンライン授業適用のため2020年度の著作権は無償化されており、また特例措置が終了しても、現在では改正著作権法により緩和傾向にある。アクセス用サーバーは山口大学のものが利用可である（鹿児島島の学生も利用可能）。録画視聴による教育効果を検証し、利用範囲の拡充の可能性を探ることが提案された。

2) COVID-19対応授業に関する問題点について

- ・ Glexaのバージョンアップについて紹介があった。
- ・ 実習コンテンツの拡充と開発について議論した。山口大学より、今年度前期で利用・作成した組織学実習、生理学実習、薬理学実習のオンラインコンテンツに関して紹介があった。
- ・ オンライン授業への移行による学生負担について議論した。出欠確認代わりの小テスト、全体のレポート数の増加などを原因とした学生の疲弊に関して検討した。オンライン試験については、山口大学では今年度後期での適用は中止する方向性（成績の公平性を保てない）であることの紹介があった。

3) 実習で利用する動物数削減に関して議論した

- ・ 山口大学より、ゼロプロジェクトの紹介と実習動物の利用実績について報告された。学生の実技習得のため、生きた動物に接する必要性に関する紹介があった。
- ・ 鹿児島大学より、動物数削減の方針および努力内容について紹介があった。山口大学のゼロプロジェクトおよび方針に対して質疑応答があった。

参加者：山口大学 教員9名

1. 緊急事態（コロナ等）における外部実習について

a. 現状の把握

山口：外部実習は中止（公衆衛生）：缶詰実習、山口県周東食肉センター、食肉検査学実習（熊本）

環境保健センターは講師を呼んで代替
食品加工→未定

鹿児島：食肉衛生検査学実習→中止

魚関連→実施見送り

市内施設→移動手段を工夫して実施

動物感染症総合実習→家保は中止、撮影ビデオで

b. 代替授業について

山口：未定。ビデオ撮影案は教材化に対する懸念（今後の実習を断られる口実となる）

鹿児島：動物感染症総合実習→家保は中止、撮影ビデオで

食肉衛生検査→動画撮影済み、講義と合わせて配信

ビデオ撮影教材は今後も利用可能か（予習等）

c. ビデオ教材の共有について

先方の許可、映っている学生への確認・許可が必要か

動画撮影はあらかじめ教育目的で作ることが重要（長さ、質、使いやすさ、公開のしやすさ等）

執行部に教材の共有を議論してもらいたい。

2. 外部実習の維持について。大学側ができること。

山口：学生の態度の指摘。

学部機関のメリットはなにかという疑問

就職の勧誘がメリット→あまり就職していない（広島市）

と畜場（山口、広島）からの依頼で病理検査を受けることは可能

HACCP 支援（豊福先生）

学生への事前教育が重要（モチベーション含め）

鹿児島：と畜場から相談、アドバイスする形で応える

鹿児島県としては就職先として考えてもらえればメリットに
県職員への助言、サポートを含めて常に大学側から提供できる
病理関連の依頼も受け入れることは可能

3. アフターコロナの講義のあり方。録画講義を自由に家から見ることは可能か？

賛成意見：汎用性の高いコンテンツは別枠にして自由に視聴できるようにする

学年を跨いで過去の動画も見れた方が利便性が高い

対面授業、出席を前提とした予備資料として家でも見れるように

サーチ機能を導入しないと学生が検索できない。

反対意見：学生が授業に集中しなくなる。

視聴期間を限定した方が良いのではないか（実習期間のみ、とか）

スキルスラボ（図書室）では今も自由に視聴できる

著作権含めて講義内容の自由度が下がる懸念

来年度からの著作権関連については不透明

著作権の関係でコンテンツを作り直す必要がある

実習は対面実施を重視した方が良い

共同獣医は録画講義の視聴方法で学生の感染管理とストレス解消などに成功している（前期）

4. 実習における生体の利用について

a. 状況の把握

山口：動物総合感染症でマウスを使用（マラリア感染）

徐々に使用数を減らしており、ゼロにすることも可能（内容を変更する）

ただし学生のマウスを取り扱う技術の低下を実感、懸念あり（この実習内で教えることもやむなし）

鹿児島：病態予防関連で生体使用はなし

b. 今後

目標の設置が重要（必要以上の削減は不要なのではないか）

山口大学のゼロプロジェクトの問題

低学年時の基礎実習と高学年の実習の連携、調整が必要

参加者：山口大学 教員 12名

1. 教育（授業、実習体制）

- コロナ禍での授業対応など
 - 学生側としては、録画視聴の方が教育的効果、時間の使い方からいい、という意見が一部ある（鹿児島でもアンケートをとっている）
 - 後期について、鹿児島ではハイブリッドで実施するという方向性（学生を大学に来させることも一つの目的）
 - 録画視聴は、著作権の問題が大きいので、一定期間で消す必要がある（鹿児島大はとくに厳格なので、今の状況はあくまでもコロナに対する緊急的措置という位置づけ）
 - ICT委員（とくに鹿児島）の負担が大きい→山口発信の授業は山口側で録画できるようにすることが先

- 実習における生体利用について
 - 鹿児島の診断治療学実習では全く使用していない：シミュレーターの使用とシェルター動物を用いた実習を行なっているが、それで十分ではない
 - 山口では、実験動物委員会に届け出た上で、供血犬を用いて伴侶動物診断治療学実習を実施

- Dayone で求められる不妊手術の実習について：獣医師法の抵触、獣医事審議会の水準3の問題
 - 鹿児島ではシェルターメディシンで実施しているが、厳密には上記の問題はあり。EAEVE 視察では学生が自分でやっているということを伝えているが、書類上は学生が実施しているという明確な文言は削除している。またシェルターでの本実習は、県からの依頼ということになっているが、締結したところの文言では、学生がしないことになっている（教員が主、機械だしは学生）。
 - ただし鹿児島はあくまでもシェルターメディシン、山口は地域猫。所有者が異なるとも考えられる。
 - 全国で水準の見直しをするべきかについて、4大学で話し合うべきこと？前回の水準を作った時からすでに10年以上過ぎているため、見直しもあり。
 - 山口では、地域猫不妊措置の実習の在り方について外部より学部意見があった

- コロナ禍でのポリクリについて
 - 両大学とも緊急事態宣言下ではポリクリは中止したが、現在は再開。
 - ◇ 山口大では、診察室の大きさが小さいこともあり、通常8人／班を半分の人数で実施。人数を制限して問診を行なっている。

- ◇ 鹿児島は、もともと12班(3-4人) x 4クールなので、変更なし。ただし飼い主の問診はとらせていない
- ◇ シェルターは完全にストップ。入院の面会ストップ
- 夜間実習：鹿児島はコロナのために現在中止中であるため、夜間診療も22:30まで => ただし今後は元に戻していく予定
- 鹿児島の臨床病理の実習は、zoomを用いた演習を毎日行なった
- 実施できていない実習の単位をどうするか？ → レポートなどで適宜対応

2. 臨床業務

- コロナ感染者がでた場合に病院はどのように対応するか？
 - 両大学とも基本的には、保健所および大学の指示に従う
 - 鹿児島では接触アプリの使用を推奨している＝濃厚接触者の特定をしやすくするため => 山口はもともと病院が狭いため、あまり意味がない？

テーマ：産業動物臨床における情報交換両大学における現状の問題点の共有

参加者：山口大学 教員3名



1. 講義科目（牛診療学Ⅰ、牛診療学Ⅱ、馬診療学、豚診療学、獣医繁殖学）について現状報告と問題点について協議がなされた。両大学とも4月以降は遠隔録画配信で講義を実施したが、試験成績などを鑑みるに習熟度について影響は無いものと考えられた。

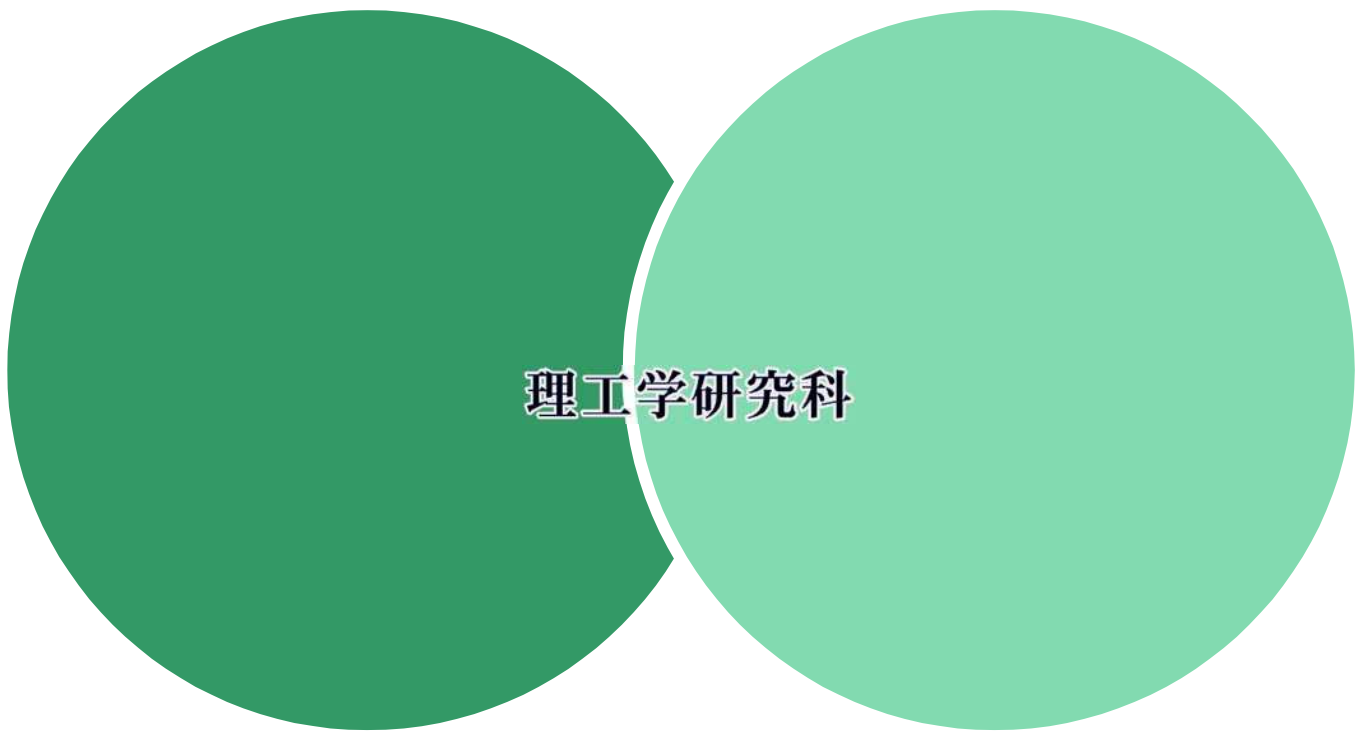
2. 前臨床実習科目（産業動物診断治療学実習、獣医繁殖学実習）については、両大学ともに5月まで対面実習が中止され、録画教材の受講が代替として行われた。6月以降、人数制限や野外での実施などコロナ対策を講じながら対面での実習を実施した。特に、鹿大ではOSCE項目についてはしっかりと実習を行い、豚の項目については、モデルを用いた実習を実施した。山大では人数を制限して、4班にわけて4回の実習を実施した。また、山大では社会人学び直し講座では独自に開発した模型・屠体などの教材を利用してオンラインでHands-on実習を開催した。

3) ポリクリ[学外実習（NOSAI、豚、鶏）、牛診療、馬診療、豚獣医療、その他]では、鹿大では4月からは十分なポリクリが実施できておらず、9月以降5年生において再開する予定にしている。NOSAI実習についても2021年春からの再開に向けて調整を行っている。山大では、6月より人数制限（最大乗車人数の半分）、換気、検温、消毒を実施しながら、往診型のポリクリを再開した。産業動物臨床では、大動物の触れ方、扱い方といった基本事項について、生体を用いる必要があり、今後も対面での実習の重要性を確認した。

V. 共同獣医学部専任教員のFD参加率

合計参加率		95 % (専任教員 40 名中 38 名 参加)
企画別参加率	合同FD研修会	* % (専任教員 40 名中 * 名 参加)
	授業評価アンケート	80 % (専任教員 40 名中 32 名 参加)
	授業公開・授業参観	62.5 % (専任教員 40 名中 25 名 参加)
	遠隔授業に関するアンケート	80 % (専任教員 40 名中 32 名 参加)
備考		
合同FD研修会については参加者未集計であるが、他企画での参加者の合計(38名)により合計参加率95%となる。		

講座等	研究室	職域	氏名	合同FD研修会	授業評価アンケート	遠隔授業に関するアンケート(RGのみ)	授業公開・授業参観	カウント
基礎獣医学	解剖学	教授	松元 光春		○	○	○	○
		助教	辻尾 祐志		○	○	○	○
	生理学	教授	白石 光也		○	○	○	○
		准教授	内藤 清惟		○	○	○	○
	分子病態学	教授	藤田 秋一		○		○	○
	薬理学	教授	宮本 篤		○	○	○	○
		准教授	宇野 泰広		○	○	○	○
	実験動物学分野	教授	浅野 淳		○	○	○	○
病態予防獣医学	組織病理学	教授	三好 宣彰		○	○	○	○
		准教授	畑井 仁		○	○	○	○
	動物微生物学	准教授	小尾 岳士		○		○	○
	寄生虫病学	准教授	松尾 智英		○	○	○	○
	感染症学	教授	田仲 哲也		○	○	○	○
	動物衛生学	准教授	小澤 真		○	○	○	○
	獣医公衆衛生学	教授	中馬 猛久		○	○	○	○
		准教授	安藤 匡子		○	○	○	○
臨床獣医学	伴侶動物内科学	教授	遠藤 泰之		○	○	○	○
	画像診断学							
	臨床病理学	教授	大和 修		○	○	○	○
	外科学	教授	三角 一浩		○	○	○	○
	産業動物内科学	教授	帆保 誠二		○	○	○	○
		助教	石川 真悟			○	○	○
	産業動物獣医学	准教授	畠添 孝		○		○	○
	獣医繁殖学	教授	窪田 力					
附属施設	附属動物病院	准教授	安藤 貴朗		○	○	○	○
		教授	三浦 直樹		○	○	○	○
		教授	矢吹 映		○	○	○	○
		教授	藤木 誠		○	○	○	○
		准教授	高橋 雅			○	○	○
		准教授	乙丸 孝之介		○		○	○
		助教	十川 英			○	○	○
		助教	岩永 朋子			○	○	○
		助教	齋藤 靖生		○	○	○	○
		助教	高橋 香			○	○	○
	特任助教	古澤 悠						
	助教	戴元 智英						
	特任助教	野口 亜希						
	大隅産業動物診療研修センター	特任助教	百武 幸治			○※カウントなし		○※カウントなし
		特任助教	山下 紀幸					
	TADセンター	教授	小原 恭子		○	○	○	○
准教授		松嶋 彰		○		○	○	
准教授		藤本 佳万		○	○	○	○	
助教		一二三 達郎		○	○	○	○	
助教		井尻 萌		○	○	○	○	
獣医学教育改革室	准教授	有村 卓朗		○	○	○	○	
共同獣医学研究科	特任准教授	Smith Henry Ivan			○※カウントなし	○	○※カウントなし	
	専任教員	40						
						参加者数	38	
						合計参加率	95.0%	



理工学研究科

令和2年度 鹿児島大学大学院理工学研究科

ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書

(令和3年4月)

鹿児島大学大学院理工学研究科

ファカルティ・ディベロップメント委員会報告

目次

はじめに	1
第1章 令和2年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動	
1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動	2
1.2 理工学研究科FD委員会	2
第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動	
2.1 理工学研究科FD講演会	3
2.2 海外実習報告	4
2.3 他機関主催FD研修会参加報告	5
第3章 学生による授業評価	
3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果	5
3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	5
3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	6
3.2 博士前期課程の各プログラムにおける授業評価アンケート分析結果	7
3.2.1 機械工学プログラム	7
3.2.2 電気電子工学プログラム	7
3.2.3 海洋土木工学プログラム	8
3.2.4 化学工学プログラム	9
3.2.5 化学生命工学プログラム	10
3.2.6 情報・生体工学プログラム	11
3.2.7 建築学プログラム	11
3.2.8 数情報科学プログラム	12
3.2.9 物理・宇宙プログラム	13
3.2.10 化学プログラム	13
3.2.11 生物学プログラム	14
3.2.12 地球科学プログラム	15
3.3 授業計画改善書の活用	16
第4章 GPA制度の現状と学習成果	19
第5章 学生の研究活動と教育成果	21
第6章 特筆すべき取組及び改善事例	24
第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待	24

- 参考資料-1 令和2年度理工学研究科FD委員会議事要旨
- 参考資料-2 授業評価アンケート質問・回答（令和2年度）
- 参考資料-3 授業計画改善書の様式

令和2年度 鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会活動報告

はじめに

理工学研究科の教育目標は、「今日の諸課題に対応できる倫理的判断力及び人間生活を取り巻く自然についての総合的な知識をもち、自然科学に関する学問の高度化と多様化に幅広く柔軟に対応できる、次世代を担う技術者、研究者、さらには高度専門職業人を養成する」ことである。鹿児島大学の教育理念に基づき、この教育目標を達成すべく、教育の内容及び方法の改善を図るため、理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は設置された。

理工学研究科の教員は、研究科と併せ、理学部と工学部を兼担し、教育・研究に当たっているため、研究科におけるFD活動は学部でのFD活動と重なる活動もあるが、授業の改善への取り組みも含め、各専攻での年度の始めに立てた計画に従って実施している。

令和2年度も前年度に倣い(1) 学生による授業アンケートとそれに基づいた各教員による授業改善計画書の提出、(2) FD講演会の実施、(3) 他機関主催FD研修会参加、(4) 理工学研究科構成員の活動等の自己点検、(5) 学生の研究活動と教育成果の点検を計画したが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の全世界的な流行により一部は実施できなかった。本報告書においては、実施された活動の概要について報告する。

尚、本報告書は学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深く感謝する。

令和2年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 甲斐 敬美(全学FD委員会委員)

令和2年度 鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	全学FD委員会委員(工学部委員)
委員	松崎 健一郎	機械工学プログラム
委員	甲斐 祐一郎	電気電子工学プログラム
委員	三隅 浩二	海洋土木工学プログラム
委員	甲斐 敬美	化学工学プログラム
委員	中島 常憲	化学生命工学プログラム
委員	大橋 勝文	情報生体工学プログラム
委員	柴田 晃宏	建築学プログラム
委員	近藤 剛史	数理情報科学プログラム
委員	野澤 和生	物理・宇宙プログラム
委員	児玉谷 仁	化学プログラム
委員	上野 大輔	生物学プログラム
委員	宮町 宏樹	地球科学プログラム
委員	内海 俊樹	(3号委員) 生物学プログラム

第1章 令和2年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動（甲斐 敬美）

鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目を表1.1にまとめた。これらの方針にそって、理工学研究科のFD委員会ではFD活動を実施した。

表1.1 鹿児島大学の第3期中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目

中期目標	中期計画
【A1】「進取の精神」を発揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。	【B2】大学院課程において、専門性を活かしつつ地球的課題に取り組むことのできる人材を育成するために、課題解決型学修（PBL：Problem Based Learning）等、多様な学修機会を平成31年度までに整備してその成果を評価・検証する。
【A2】地（知）の拠点として、地域課題の解決に取り組むことのできる人材を育成する。	【B4】鹿児島の特徴（島嶼、火山等）を活用し、自治体等との連携に基づいて把握した地域課題やニーズを踏まえ、地域志向意識を醸成し、地域課題解決の基盤となる汎用的能力の育成を図る「地域志向一貫教育カリキュラム」を平成30年度までに整備するとともに、その成果を基礎として、地元就職率向上を目指す「地域キャリア教育プログラム」を平成31年度までに整備し、本プログラムの受講者を年間150人以上に増やす。これらの人材育成にあたっては、試験結果や共通ルーブリックに基づくレポートやプレゼンテーションの評価、ポートフォリオ等のデータを収集・分析してその成果を評価・検証する。
【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。	【B8】在学生や卒業生の要望、卒業生に対する社会からの評価を収集し、教育センター高等教育研究開発部及び担当教員を中心とした情報分析体制を平成30年度までに整備し、分析結果を大学全体で共有した上で具体的な教育改善策を実施する。
【A4】学術研究院制度や国際認証制度等を活用し、教育の質の向上を図る教育研究体制を整備する。	【B10】教員の指導力向上を図るため、新任教員等に対する研修制度を立ち上げ、必要に応じて教育学部や附属学校、教育センター高等教育研究開発部から教員を派遣し、カリキュラム開発や指導法、教育相談等に関する研修会を全教員に向けて定期的に開催し、平成28年度までに全専任教員の75%以上の参加を達成する。
【A15】グローバル化が進む社会の現状を理解し、国際的に活躍できる人材を育成するとともに、海外の学術機関等との教育・研究の交流を深め、国際貢献を推進する。	【B32】理系大学院課程において、シラバス及び教員が作成する講義資料の英語化、柔軟な学年暦の整備等を進め、国際的通用性を向上させる。また、学部・大学院の課程において、外国語（英語）による授業科目を、平成33年度までに平成26年度と比較して1.5倍に拡充する。
【A36】学内規則を含めた法令遵守の徹底により、大学活動を適正かつ持続的に展開する。	【B77】研究活動上の不正行為や公的研究費の不正使用を防止するため、鹿児島大学における研究活動に係る行動規範、オーサーシップ・ポリシー、公的研究費の不正使用防止対策に関する基本方針について、教本やパンフレット等を作成し、講習会を実施する機会を増やすなどにより教職員や関係する学生に周知徹底する。また、外部資金の申請等には講習会への参加を義務付ける。更に法令遵守に関わる相談受付、助言等のための環境を整備する。

1.2 理工学研究科FD委員会（甲斐 敬美）

理工学研究科は令和2年度から博士前期課程を理学専攻(5プログラム)と工学専攻(7プログラム)の2専攻に改組された。令和2年度は理工学研究科FD委員会を5回行った。第1回は、令和2年5月7日に開催した。本委員会では、令和2年度FD活動分担およびFD報告書原稿作成の分担について議論を行った。また、遠隔授業が行われるため授業評価アンケートの設問内容につ

いても議論した。第2回は、令和2年6月8日～23日の期間にメール会議として開催し、授業評価アンケートの設問内容について諮られ、一部訂正することが承認された。第3回は令和2年9月23日～30日の期間にメール会議として開催した。本委員会では、令和2年度第1回のFD講演会の開催について議論を行った。第4回は令和2年11月24日～12月2日の期間にメール会議として開催した。本委員会では、授業計画改善書の様式を変更して、成績評価のデータの記載欄を設けることが承認された。第5回は令和3年3月2日に対面で開催した。本委員会では各プログラムで実施した成績評価分布の検討結果について確認を行った。また、令和3年度のFD活動計画を決定した。さらに、FD活動報告書の作成について分担の確認を行った。その後、各委員へ報告書の原稿作成について依頼がなされた。

第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動

2.1 理工学研究科FD講演会（内海 俊樹）

令和2年度の理工学研究科FD講演会は、理学部、工学部との合同の講演会として企画し、令和2年12月16日（水）13時30分～14時30分に開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から3会場に分かれ、各会場をZoomで結んだリアルタイムオンライン形式で実施した。講師として、広島大学准教授 高大接続・入学センター 副センター長の竹内正興氏をお招きした。

本理工学研究科、理学部、工学部は改組を終え、本年度に新体制での最初となる学生を迎え入れたばかりである。新学習指導要領での入試となる2025年度入試に向けた入試改革、あるいは、令和2年度学部入試や大学院への進学状況などを鑑みると、選抜方法の改善や改組後の学部・研究科についての広報活動などが特に重要な課題と考えられる。一方、本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大という、これまでに我々が経験したことがない状況下におかれ、オープンキャンパスをはじめとする広報活動は、軒並みオンライン開催となった。オンライン開催は、遠方の高校生にとっては参加しやすいなどのメリットもある反面、大学・受験生の双方にとって不慣れた環境での情報収集となり、入試に関する広報についても制約を余儀なくされた。本講演会は、このような理工学研究科、理学部、工学部が共通して抱える課題の解決に資することを目的として企画した。講師の広島大学・竹内准教授は、株式会社ベネッセコーポレーション在職中は教育研究開発センター研究員として、大学入試の分析、および、高校生・大学生の学習意識と学習行動について調査・研究活動に従事された。その後、2014年10月から2020年3月まで、鹿児島大学アドミッションセンター専任の准教授として、鹿児島大学の入試広報・入試改革を担当されたご経験もあり、本学の事情にも通じておられることから講演をお願いした。講演題目は、「大学入学者選抜方法の検証・改善と学生確保に係る広報活動」であった。

まず、工学部、理学部の入試の特徴として、一般選抜の割合が約7割と高いこと、共通テストの配点の割合が高いことなどが説明され、このことと九州圏の大学の序列化を関連づけた出願傾向との関係について解説があった。中堅進学校の理数クラスの数学の履修状況から、数Ⅲまで履修する理系選択者が減っていることが示され、併せて、女子学生の割合を高くする工夫が必要との提言があった。

広報活動については、従来実施してきたような高校訪問だけに限らず、メディアを有効に活用することが重要であるとの指摘があった。受験生は、オープンキャンパスに参加した経験があるなど、既に知っている大学から志望校を決定する傾向があるので、早い段階で、鹿児島大・工学部・理学部を志望進路の一つとして認識してもらうようにすることが肝要である。そのためには、大学施設の積極的な公開や訪問の受け入れ、あるいは、受験生の居住地に応じた広報内容（鹿児島大学全体の魅力を伝える広報と学部の魅力を中心とした広報）の使い分けが重要であるとのことであった。高校生の学年進行と進路希望の変化に関するデータに基づいて、理学系は高校低学年をターゲットとしたアプローチ、工学系は高学年をターゲットとしたアプローチが有効であろうとの提案があった。また、高校の先輩大学生から後輩受験生へと伝えられる大学の情報が、進路決定に影響を及ぼすことがあることを考慮すると、エンロールメントマネジメント（本学在学生の満足度）を高めることが最大の広報であり、どのように高校へフィードバックするかという視点も大学の魅力を発信する上で重要であるとのことであった。

時間的な制約もあり、メイン会場から数件の質問を受け、回答を頂いたところで講演会を終了した。当日、受け付けることができなかった質問については、取りまとめて竹内准教授に回答をお願いし、後日、質問と回答を全教員にメールで配信するという形式をとった。それらも含めて、数値データと詳細な解析に基づいた説得力のある講演内容、及び、回答であり、多くの重要なご示唆を頂いた非常に有益な講演会であった。しかし、その内容の多くは、今後の入試に関する可能性がある判断されるため、この紙面で詳細について記述することは控えることとする。

講演会当日は都合がつかない教員がいることも予想されたため、講演は録画し、manabaを利用してオンデマンド視聴も可能とした。また、学内の他部局にも開催案内を通知し、事前申し込みにより当日の視

聴を可能とした。本講演会の参加者は、理学系教員43名、工学系教員90名、その他（他部局教員、及び、事務職員）20名の合計153名であった。



2. 2 海外実習報告（甲斐 祐一郎，宮町 宏樹）

理工学研究科では、「グローバルに活躍できる理工系人材」を育成することを目標に、グローバル人材育成支援室を設置し、平成27年度から、大学院共通科目として「理工系国際コミュニケーション海外研修（Graduate Overseas Engineering and Science Studies for Innovation: GOES）」を開講し、その中で、海外での語学研修と、大学、企業などでのインターンシップ等を行っている。令和2年度は、代替プログラムとして、オンライン方式による「GOES HOME」が開催され、Q2期

に 11 名が参加した。その概要を以下に示した。

開講期	研修先国・地域	参加人数	研修内容	地域貢献活動
Q2	オーストラリア (オンライン)	M2 : 4 名 M1 : 7 名	全研修期間 : 6 週間 ・語学研修 : 5 週間, 西オーストラリア大学附属英語学校によるオンライン授業 ・English Camp : 1 週間, 対面形式による英語でのワークショップ	鹿児島市とパース市を繋ぐ英語での情報発信, 英語サイト[Bridge to the world]の設立

平成 28 年度が 18 名, 平成 29 年度が 9 名, 平成 30 年度が 6 名と参加者が年々減少傾向にあったが, 令和元年度と令和 2 年度の参加者はいずれも 11 名であり減少傾向がとまった。今後も参加者の事後報告会などを通して, 参加者の増加を図っていききたい。

また, 新型コロナ感染拡大の要因により, 工学系及び理学系の両者において, GOES 以外の大学院生参加型の海外実習は実施しなかった。

2. 3 他機関主催 F D 研修会参加報告

令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響のため他機関主催の F D 研修会の参加はなかった。

第 3 章 学生による授業評価

3. 1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

3. 1. 1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告 (柴田 晃宏)

平成 27 年度から令和 2 年度までの工学系専攻の授業評価アンケート結果を比較したものを図 3.1.1 に示す。令和 2 年度は前年度に比べ, ①出席と②予習と復習の項目で比較的大きく増加している。②予習と復習以外の項目は, 4 ポイント台の高い水準を維持しており, 授業改善の効果が出ていると考えられる。前述の様に②予習と復習は前年度よりも大きく増加して改善があったが, 依然 3 ポイント前後の低い水準にあり, 今後注視し必要に応じて対策を講じていく必要がある。また, 令和元年度からアンケートを Web で実施しており, 結果がその影響を受けている可能性もある。更に本年度はコロナ禍で遠隔授業が主であったため, 次年度以降の傾向と併せて検討していく必要がある。

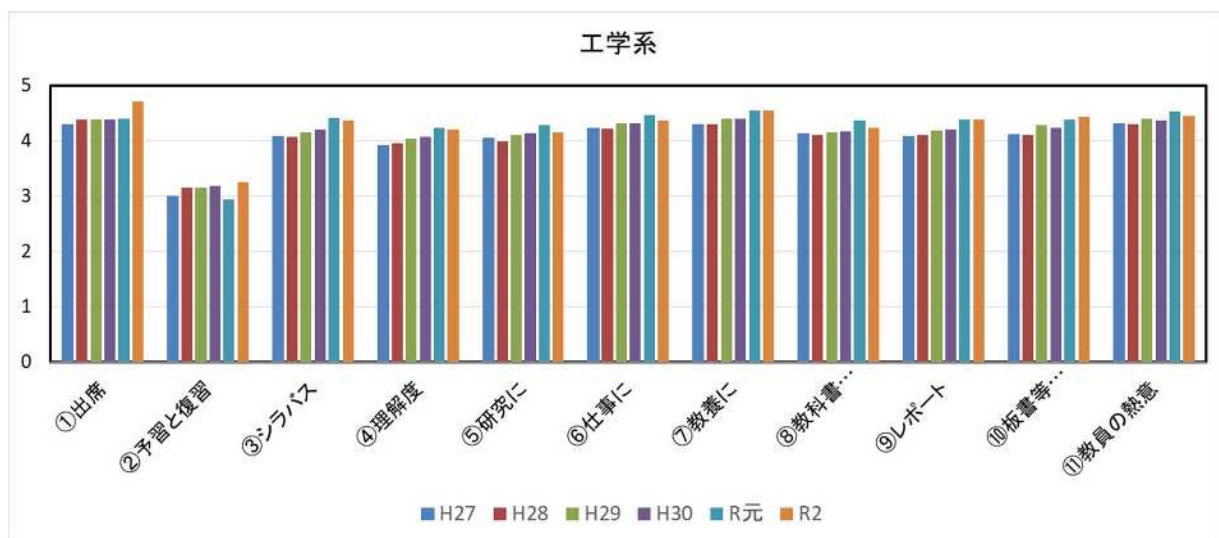


図 3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（児玉谷 仁）

平成 27 年度から令和 2 年度までの理学系専攻の授業評価アンケート結果を図 3.1.2 に示す。①出席，②予習復習以外の③～⑪のスコアは，平成 28 年度から上昇傾向にあったが，令和 2 年度では低下した。その一方で，①出席のスコアは 0.5 ほど上昇した。本年度はコロナ対応のため，多くの講義がオンデマンドや遠隔など，例年の対面講義とは異なる形態で講義を行ったため，このような変化が生じたものと考えられる。②予習・復習の項目は，昨年度に比べて今年度は上昇（2.34 → 2.81）したものの，この 6 年間に渡ってスコア 3 を超えることもなく，改善すべき項目であることに変わりはない。予習や復習などの自己学修時間が，単位取得のために必須であることを学生に周知し，また学生が予習・復習を進められるように教員側も講義内容の変更など対応していく必要があると考えられる。

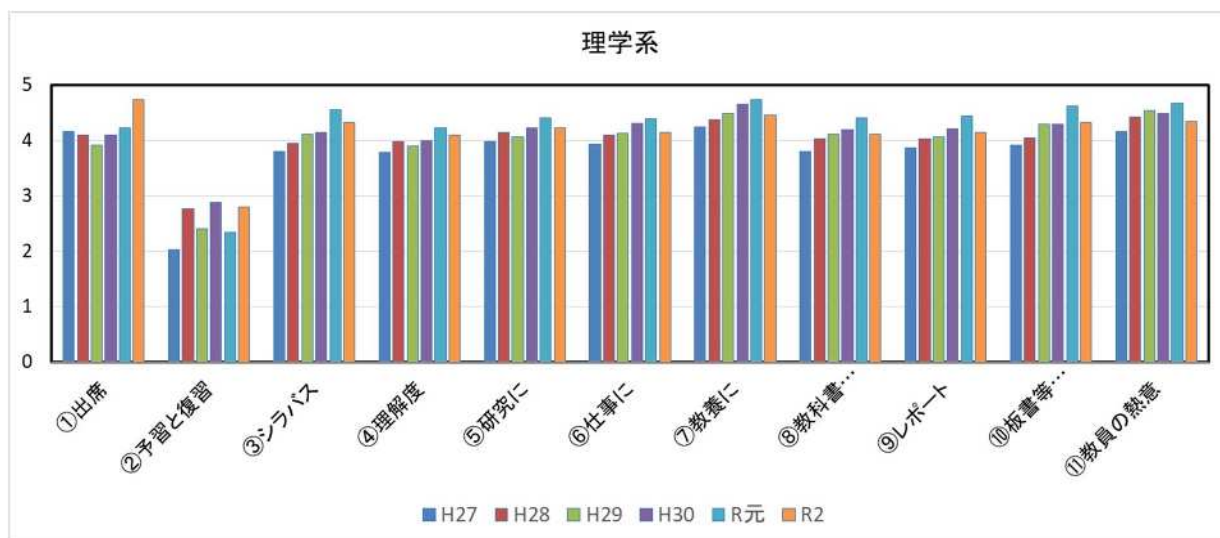


図 3.1.2 博士前期課程（理学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

3.2 博士前期課程の各プログラムにおける授業評価アンケートの分析結果

3.2.1 機械工学プログラム（松崎 健一郎）

機械工学プログラムの講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について1年間に開講された科目で平均した点の過去6年間における推移を示している。

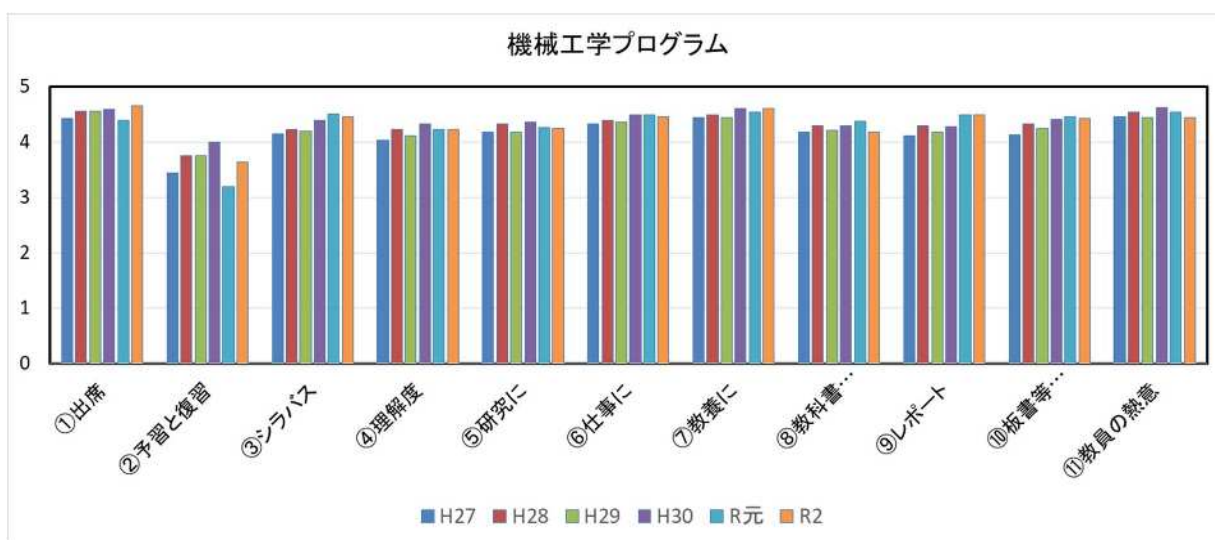


図 3.2.1 機械工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

平成29年度よりアンケートの回答選択項目が「5.大いにそう思う, 4.そう思う, 3.どちらともいえない, 2.そう思わない, 1.全くそう思わない」の5段階から、「5.そう思う, 4.どちらかと言えばそう思う, 3.どちらとも言えない, 2.どちらかと言えばそうは思わない, 1.そうは思わない」の5段階へと変更となっている点に注意が必要である。この変更により、高い評点の場合より高く、低い評点の場合にはより低く表れると推察されるものの、図 3.2.1 に示す通りほぼ横ばいの傾向を示しており影響は軽微であった。

項目②の「予習と復習」について見ると、令和元年度では低下したが、今年度は少し向上した。新型コロナウイルスによる遠隔講義の増加などが理由として考えられるが、今後も学生が積極的に予習・復習に取り組むような工夫が必要であろう。それ以外の項目についてはいずれも高い水準を維持しており、教員が授業改善に意識して取り組んでいる結果であろう。

今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析により、教員と学生の意識改善に役立てていくことが重要である。

3.2.2 電気電子工学プログラム（甲斐 祐一郎）

図 3.2.2 に、電気電子工学プログラムの過去6年分（平成27年度から令和2年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。令和2年度は前年度に比べ、ほとんどの項目が改善しており、特に、①出席と⑩板書等項目が大きく改善した。今年度は、遠隔授業の導入によって場所を選ばずに授業が受けられたことや電子媒体の講義資料を用いて解説することが多くなったため、これら

が改善した可能性がある。また、②予習と復習と⑨レポートにおいて前年度よりも改善がみられるが、レポート課題等が増えたことで予習・復習時間が増えた可能性がある。しかしながら、④の理解度、⑤研究に、⑥仕事にや、⑪教員の熱意などは改善できていない。大学院生の学力の低下と気質の変化の影響も受けていると考えられるが、この点に対応した授業の改善に引き続き取り組む必要がある。

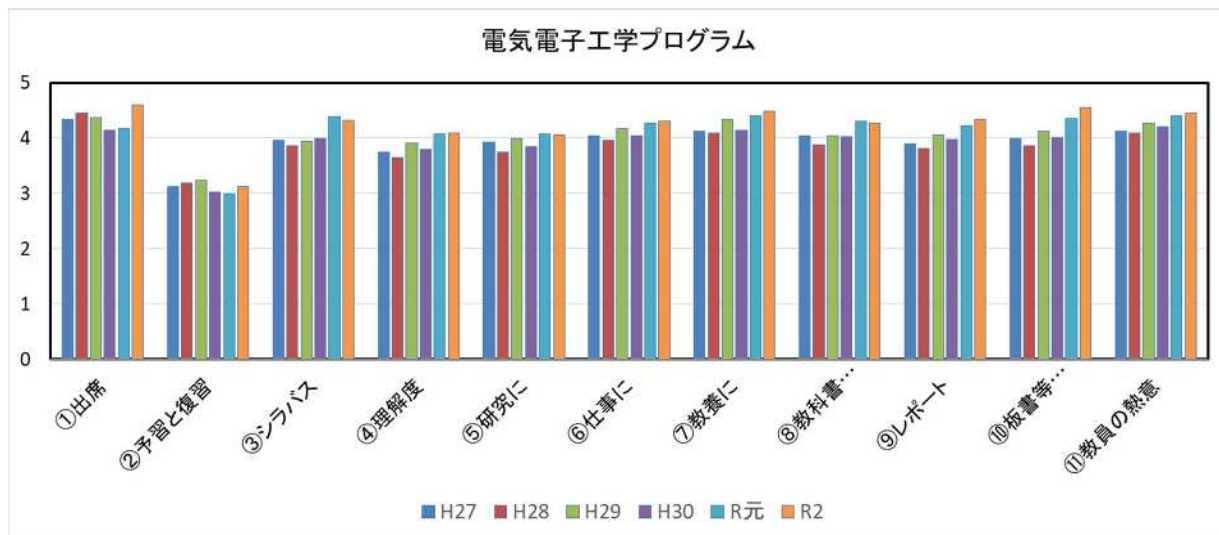


図 3.2.2 電気電子工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.3 海洋土木工学プログラム (三隅 浩二)

本プログラムにおいて、平成 27 年度～令和 2 年度の 6 年度間に実施した授業評価アンケートの結果を図 3.2.3 に示す。ここでは、各項目に対するアンケート実施科目全体の平均評価を示している。図 3.2.5 より、令和 2 年度の評価は、⑧「使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。」と⑨「レポートなどは授業の理解に役立った。」を除くその他の項目で令和元年度の評価を上回った。⑧と⑨は 3 年前から徐々に評価が下がっているの、注意する必要がある。①「授業にどれだけ出席しましたか。」の評価は過去 6 年間で最も評価が高く 4.93 という高評価だった。これはコロナ禍で遠隔授業が増えたお陰であると考えられる。⑤「授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。」、⑥「授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。」、⑦「授業の内容は自身の教養や学力を高めるうえで役立つと思う。」、⑩「板書などは明瞭だった。」、⑪「教員の熱意が感じられた。」の評価も過去 6 年間で最も評価が高い。令和 2 年度は、教員も学生も不慣れた遠隔授業に慎重に対処した結果、功を奏したものと考えられる。

令和 2 年度の本プログラムの評価は、②「予習と復習は 1 コマ (90 分) の授業に対して、どれくらいしましたか (レポート作成時間も含みます).」を除くその他の項目で理工学研究科の平均値と工学系の平均値の評価を上回った。②の評価は過去 2 年間理工学研究科の平均値と工学系の平均値の評価よりも低いので、注意する必要がある。単に、レポートの提出回数を増やすのみならず、講義の内容やその周辺領域に対して、より深い関心を持つよう大学院生を導くといった工夫が必要であろう。また、講義の資料を事前に配布して予習させることも必要であると思われる。

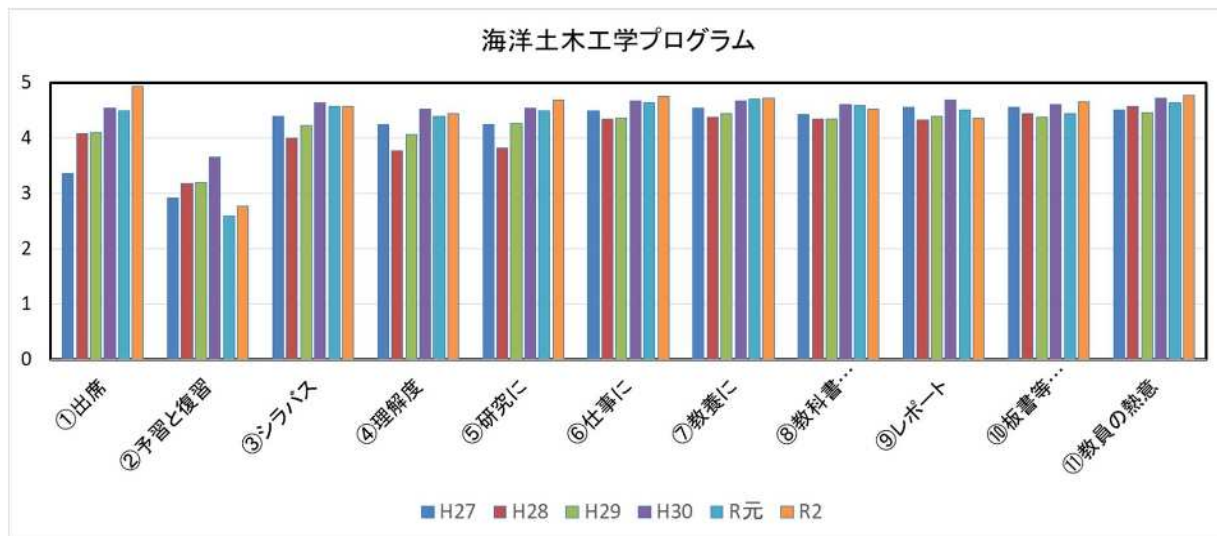


図 3.2.3 海洋土木工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.4 化学工学プログラム（甲斐 敬美）

化学工学プログラムの最近6年間（平成27～令和2年度）の授業アンケート結果を図3.2.4に示す。ただし、令和2年度までは化学生命・化学工学専攻での集計結果である。項目②“予習と復習”の評価を除き、ほとんどの項目で4を超えており総じて高い評価を得ている。項目①出席は年々上昇傾向であったが、令和2年度は大きく伸びた。②予習と復習は低下傾向にあったがこの項目も高くなった。工学系および研究科での結果も同様であったので、遠隔講義であったことが大きな原因と推測される。その他の項目は、例年と比べて大きな変化はない。令和2年度の各項目を理工学研究科（工学系）の平均と比較すると、項目②予習と復習は0.5ポイント、⑥仕事に役立つかの項目は0.08ポイント、⑩板書等の明確さは0.13ポイント低い。これらの点は今後の

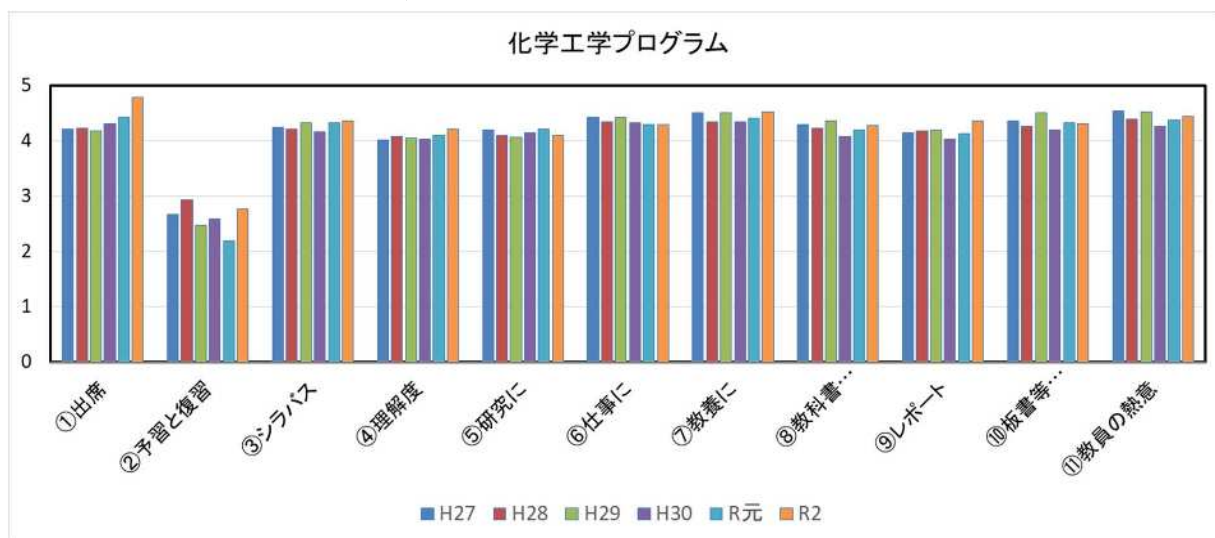


図 3.2.4 化学工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
（令和元年度までは化学生命・化学工学専攻として集計）

課題である。他の項目は工学系の平均と大きな差はない。教員数の減少、財政の劣悪化や諸業務の肥大化が教育活動を侵食し始めていることが危惧されるが、このような状況においても最大限の改善に努めたい。

3.2.5 化学生命工学プログラム（中島 常憲）

化学生命・化学工学専攻は、令和2年度の改組によって工学専攻化学生命工学プログラムと化学工学プログラムとそれぞれ独立したプログラムとなった。これに伴い授業評価アンケートについても化学生命工学プログラム独自で集計することとなった。図3.2.5に最近5年間（平成27～令和元年度）旧専攻で実施した授業アンケート結果と令和2年度に改組後のプログラムで実施したアンケート結果を併せて示した。項目②“予習と復習”が2.19-3.04と低い。その他の項目では4.01-4.64であり、総じて高い評価を得ている。改組前と改組後を比較すると、項目①出席、②予習と復習、⑨レポートの項目で上昇がみられた。これは、コロナ禍において令和2年度の多くの講義が遠隔授業で実施されたため、対面で実施される授業よりも出席しやすくまた毎回の授業でレポートなどの課題が課されたためと考えられる。また、遠隔授業形式では、オンデマンドで学習が可能となる教材が提供されることも多く、時間にとらわれず学生你的生活スタイルに合わせて予習・復習に費やす時間が確保しやすかった等の要因も考えられる。その他の項目は、例年に比べて大きな変化はないが、項目⑩教員の熱意が若干低下した。遠隔授業が多くなり教員と受講生が直接コミュニケーションを取ることが減少したため、教員の授業に対する熱意を感じにくくなったことが原因と思われるため、遠隔授業における学生とのコミュニケーションの取り

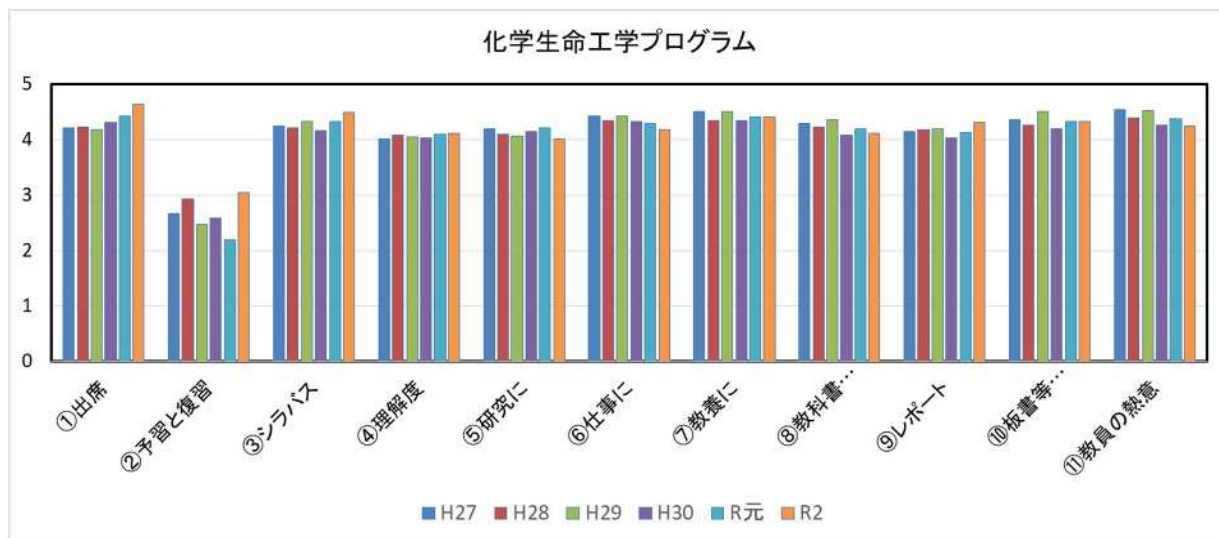


図 3.2.5 化学生命工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは化学生命・化学工学専攻として集計)

方を工夫する必要があるのではないかと考察する。各項目を理工学研究科（工学系）の平均値と比較しても、同様な傾向がみられるため、本年度の結果は、改組により独立したプログラムとなった影響というよりも、コロナ禍における授業形態の変化の影響を反映していると思われる。改組により専門性の高いコンパクトなプログラムになったが、その効果はコロナ禍が収束し、化学

生命工学プログラムとして数年分の結果が集積された時点で改めて考察する必要がある。

3.2.6 情報・生体工学プログラム（大橋 勝文）

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり 11 年が経過し、令和 2 年度から情報・生体工学プログラムが立ち上がった。情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体プログラムの FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から令和 2 年度分の 12 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 12 年間のうち直近の 6 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと令和元年度の工学系専攻の平均値及び令和元年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。比較対象となった 11 項目について情報生体システム工学専攻の集計結果を図 3.2.6 に示す。集計した科目数は、18 科目（前期 9 科目、後期 9 科目）であった。平成 27 年度～令和 2 年までで、令和 2 年の今年度の数値は、予習と復習および板書等の明瞭さ以外は令和元年から若干下がった。しかし、工学系全体の平均値も低下しているため、当専攻と数値的には大きな差が見られない。予習と復習の上昇に関しては、多くの科目で予習と復習の時間を増やす工夫をした結果であり、また遠隔授業の導入により教室のスクリーンよりも学生の PC 画面の方が見やすくなったことで⑩板書等の明瞭さの評価が上昇したと見られる。

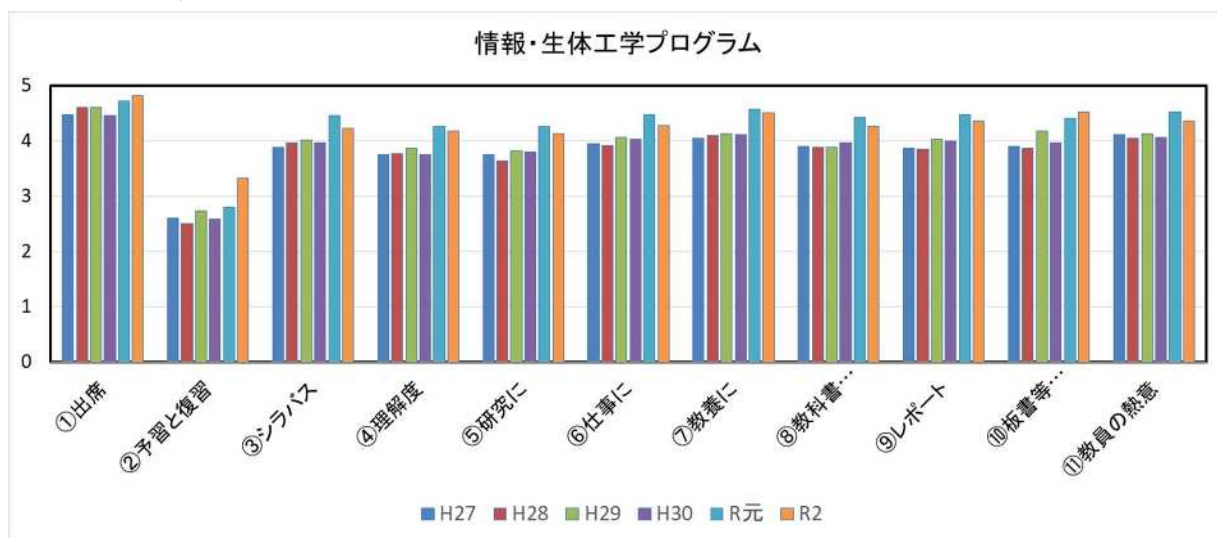


図 3.2.6 情報・生体工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.7 建築学プログラム（柴田 晃宏）

建築学プログラムの令和 2 年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図 3.2.7 に示す。11 項目中 10 項目が 4.0 を上回り、良好な結果であった。前年度を大きく下回った項目は「②予習と復習」「⑤研究に」「⑪教員の熱意」であるが、「②予習と復習」以外の評点は 4.0 以上である。経年的な評点の上下変動はあるが、ここ数年で見ると全体的に評点は上昇傾向にあり、教員による改善努力の成果と考えられる。しかし評点に着目すると、10 項目は 4.0 以上であるが、「②予

習と復習」は評点 3.50 であり、低い値を示している。本年度はコロナ禍で遠隔授業が中心であったため、「⑤研究に」「⑥仕事に」「⑪教員の熱意」などは伝え難かったことが考えられる。今後、コロナ禍終息後の傾向を見守りたい。

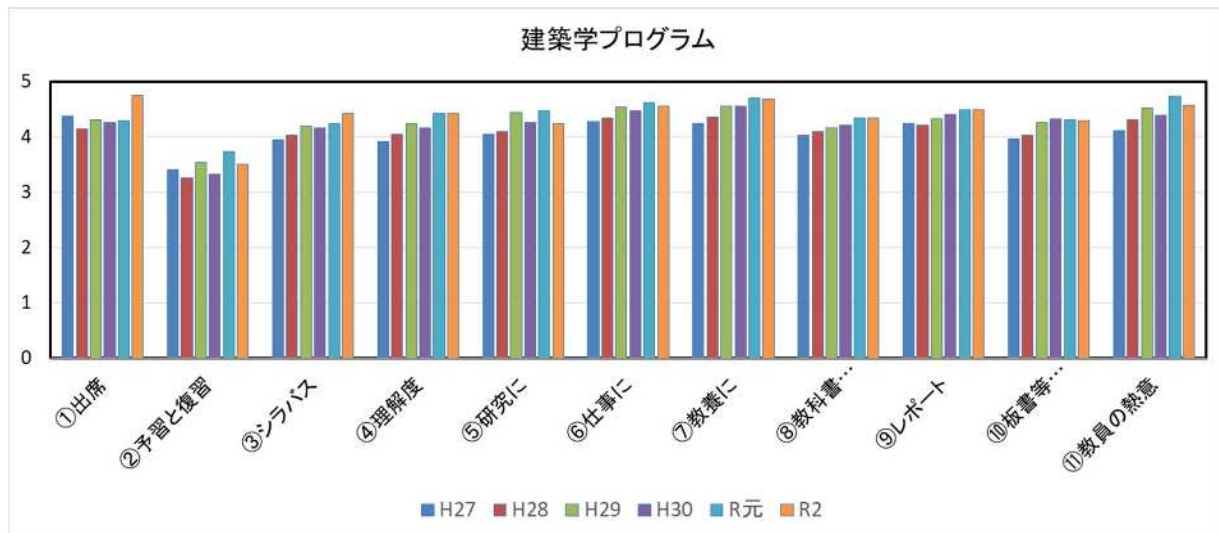
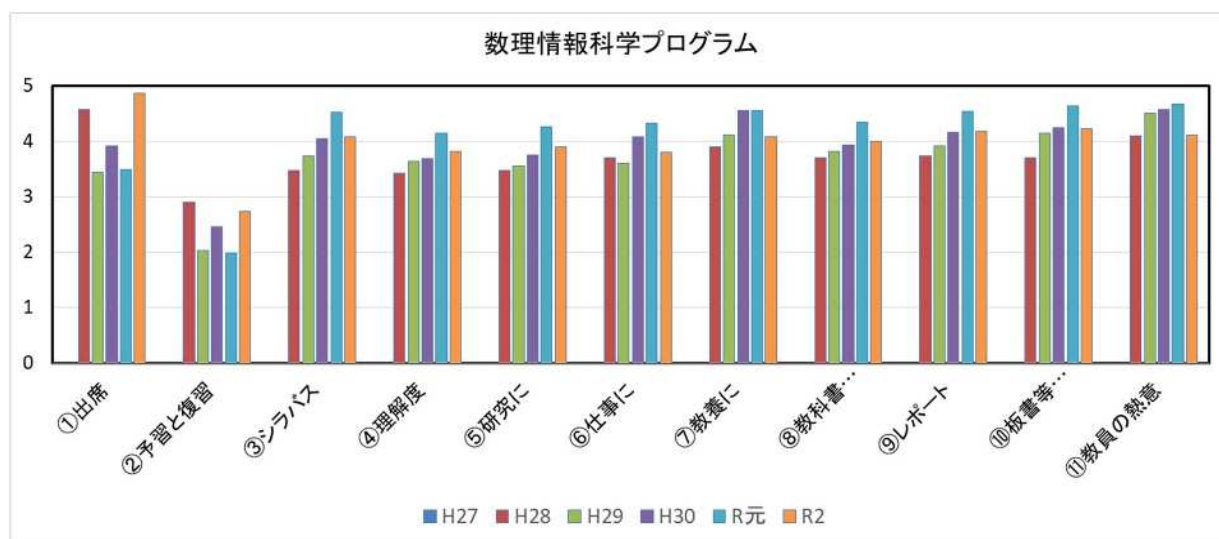


図 3.2.7 建築学プログラムの授業評価アンケートの結果の推移

3.2.8 数理情報科学プログラム (近藤 剛史)

直近6年の授業評価アンケートの結果を図 3.2.8 に示す。H27 年度のデータが無いのは、受講者が少人数だったことから授業評価アンケートを行わなかったためである。この図からわかるように、例年ほとんどすべての調査項目で高い評価を得ているが、調査項目「予習と復習」だけは低い評価に留まっている。大学院での課程を修了するためには、自身の研究分野に直接関連しない講義も履修し単位修得する必要がある。そのような講義では、大学院生に「予習と復習」を要求しなくて済むように教員が配慮した可能性がある。「教員の熱意」等の幾つかの項目で昨年より下がっているのは、新型コロナウイルス感染症対策により急遽遠隔授業に切り替わる等の対応によって、



十分に熱意を伝えるのが難しかったのではないかと考えられる。「出席」が大きく伸びているが、これがなぜかは不明である。

図 3.2.8 数理情報科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.9 物理・宇宙プログラム（野澤 和生）

平成 27 年度から令和 2 年度までのアンケート結果を比較したグラフを図 3.2.9 に示す。項目①のスコアに上昇が見られる。これは、多くの授業が遠隔で行われたことにより、例年よりも出席がしやすくなったことによるものと考えられる。項目②については僅かな上昇傾向が見いだされるものの、例年指摘されている通り他の項目と比べて未だ低いスコアにとどまっている。項目⑧、⑨については昨年度のスコアが過去 5 年間で最高だったこともあり、それよりも若干減少した。急遽遠隔授業が開始されたことにより、遠隔授業に対応した教材の準備が間に合わなかったことや、講義資料・課題提示型の遠隔授業においてレポート課題が増加したことなどが影響した可能性もある。しかしながら、項目③、⑤、⑥、⑦については昨年度を上回る高いスコアを獲得できていることから、従来の水準以上の授業を提供できたものと思われる。これは項目④のスコアの上昇からも見て取れる。

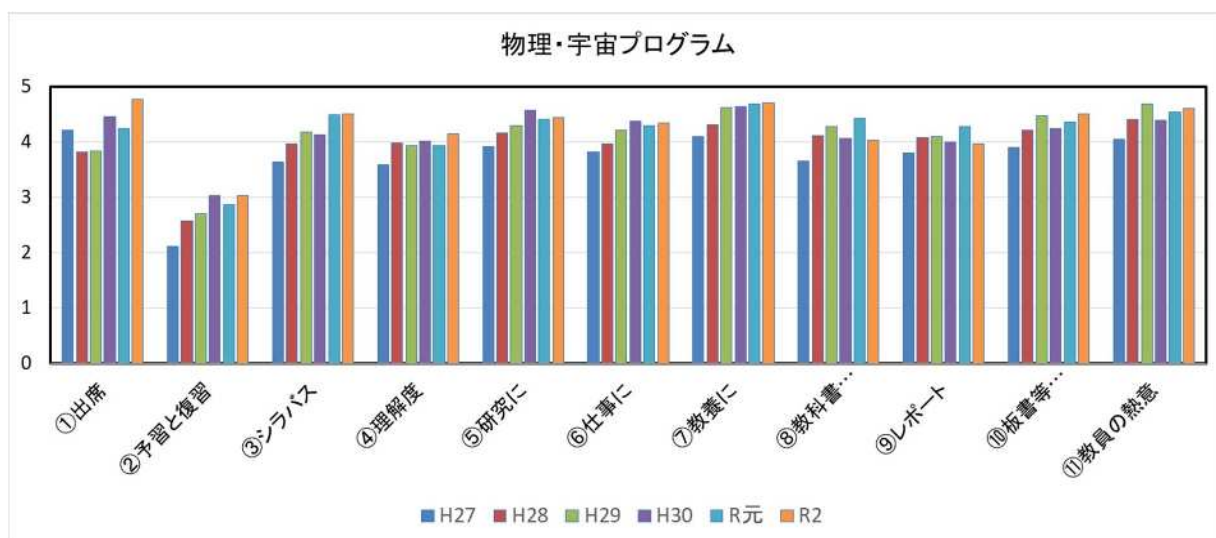


図 3.2.9 物理・宇宙プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.10 化学プログラム（児玉谷 仁）

平成 27 年度から令和 2 年度のアンケート結果を図 3.2.10 に示す。①出席と②予習と復習以外のスコアは昨年度より全体的に低下していることが確認された。しかし、R 元年度までのデータは生命化学専攻のものであり、改組によって本年度より化学プログラムでのアンケート集計となるため、スコアの経年変化については考察することができない。今後、化学プログラムとして継続した調査を行い、データを蓄積していく必要がある。一方、本年度のスコアを理学系他プログラムと比較すると、②予習と復習のスコアが 2.7 と理学系の中で最も低いことが確認された。

(理学系平均 2.81)。他の項目においては、スコア 4 をこえており、他プログラムと比較しても遜色ないが、③シラバス、⑩板書等の明瞭さのスコアがそれぞれ 4.22、4.155 となっている。この 2 項目のスコアは、教員の対応次第と言え、4.5 を超えるスコアのプログラムも複数存在しているため、改善の余地が十分にあると言える。今後、化学プログラムの各講義において、予習復習を促すようにシラバスの変更や、講義内容を工夫していくことが必要と考えられる。

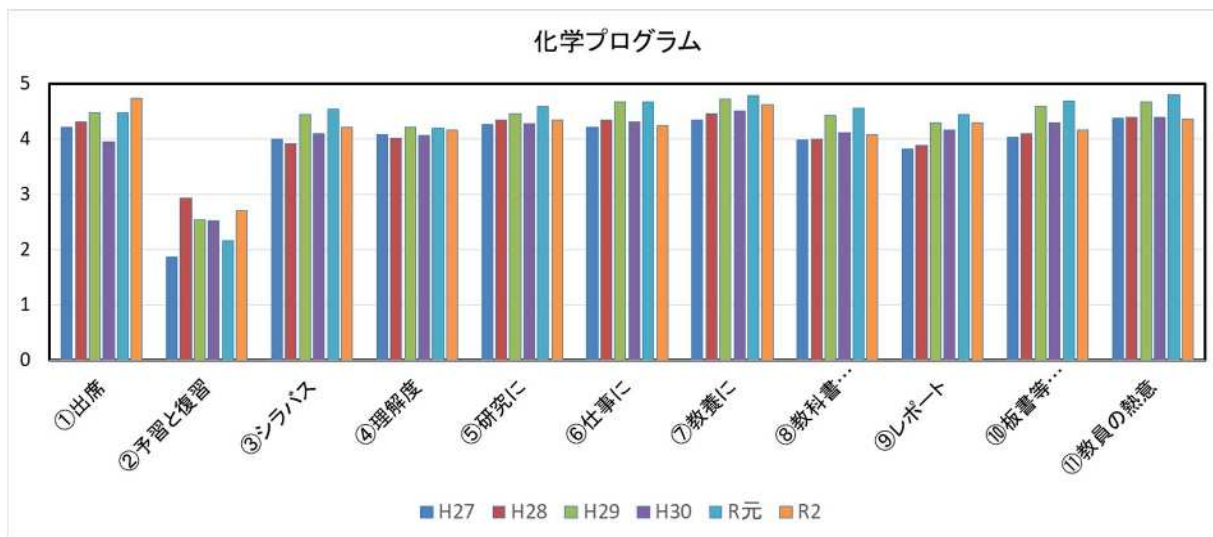


図 3.2.10 化学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは生命化学専攻として集計)

3.2.11 生物学プログラム (上野 大輔)

平成 27 年度～令和 2 年度のアンケート結果を図 3.2.11 に示した。なお、令和元年度までは生命化学専攻の集計値を、改組後の令和 2 年度からは、生物学プログラムの集計値を用いている。そのため、この結果は連続的なデータ推移を示すものとして評価することが難しい上、旧専攻と現プログラムの定員数の異なりについても留意する必要がある。その上で、令和元年度以前と 2 年度のアンケート結果について分析を行う。全体的には、11 項目中 9 項目において 4.3 以上の高い評価が得られている。項目別に見た場合、①出席、②予習と復習、③シラバス、④理解度、⑦教養に…については、昨年度と比べて高い評価が得られた。また、今回最も評価が低い②予習と復習についても、生命化学専攻時には年々評価が下がっていたものの、本年度から上昇に転じていると見ることが出来る。その他の項目は、前年度に比べ数字的には若干低いものの、大幅な下降という程では無いことから、今後個々で改善策を講じつつ今後の経過を見守るのが良いと判断される。以上から、早急に大きな改善が必要な状況ではなく、今後の継続した調査結果との照らし合わせに基づくチューニングが必要である。

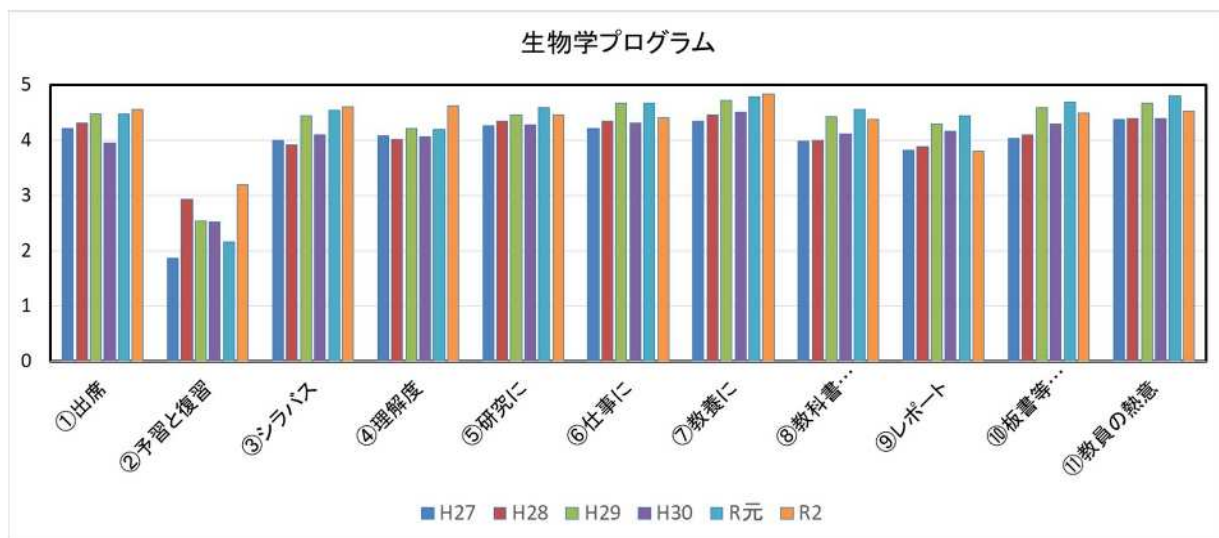


図 3. 2. 11 生物学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは生命化学専攻として集計)

3. 2. 1 2 地球科学プログラム (宮町 宏樹)

平成 27 年度～令和 2 年度のアンケート結果を図 3.2.12 に示す。なお、令和元年度までは地球環境科学専攻の集計値を、令和 2 年度からは、改組に伴い、地球科学プログラムの集計値を用いている。そのため、地球環境科学専攻では 1 学年の定員 17 名であったが、地球科学プログラムでは 1 学年の目安定員 6 名となり、集計する際の母集団が大きく異なっていることに注意を要する。

地球科学プログラムの令和 2 年度のアンケート項目全 11 項目中、10 項目において、4.3 以上の高い評価だったことから、早急な改善が必要という状況にはないと考えられる。特に、「出席」、「シラバス」、「研究に」、「教養に」の 4 項目においては、4.5 以上のスコアとなっている。これらの項目における高スコア傾向は、地球環境科学専攻時代における高スコア項目とほぼ同じで

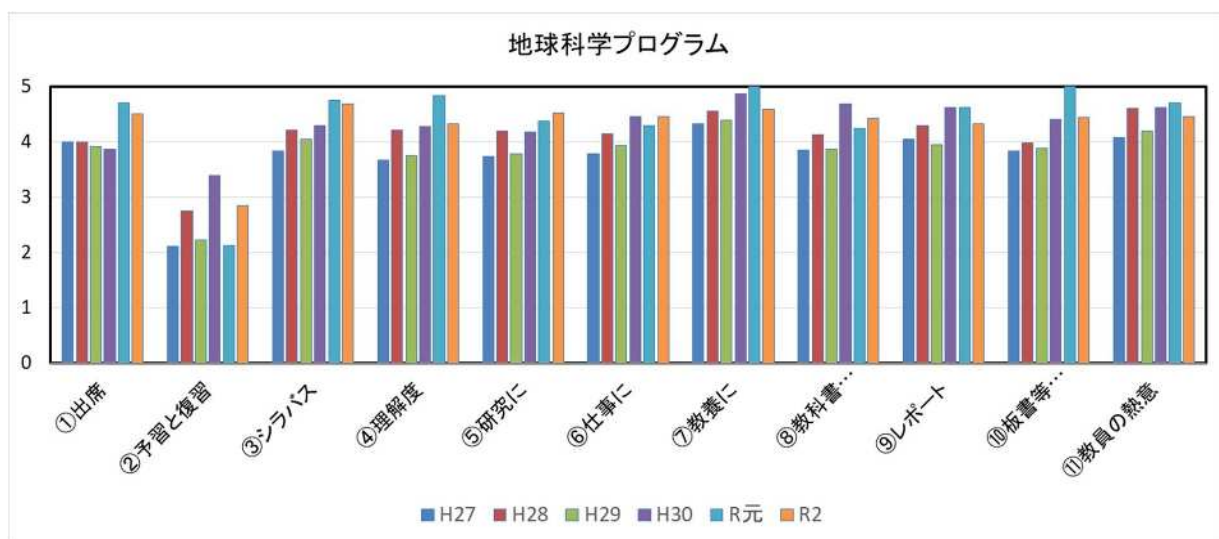


図 3. 2. 12 地球科学プログラムの授業評価アンケート結果の推移
(令和元年度までは地球環境科学専攻として集計)

あり、地球環境科学専攻から地球科学プログラムへの改組によって、受講生に提供される教育の質的低下は一切見られないことを示唆し、教員のスキル維持が受講生の高い満足度につながったと思われる。一方、「予習と復習」のスコアは、従来から指摘されているように、1年毎にスコアが変動する傾向がみられる。また、地球環境科学専攻時の平均的スコアは2.5（平成30年度の3.40が最高値）と相対的に低いスコアである。地球科学プログラムの令和2年度においては2.85であり、今後、この項目における学生への指導が重要と思われる。地球科学プログラムの傾向を見定めるのは、今後の継続した追跡調査が望まれる。

3.3 授業計画改善書の活用

(1) 機械工学プログラム

学部と同様に、研究科のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともにプログラム教育評価委員会が整理して分析を行っている。プログラム教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「プログラム教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書はプログラムのサーバに電子ファイルで保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

(2) 電気電子工学プログラム

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共にプログラム事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科FD委員が管理し、プログラムFD委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

(3) 海洋土木工学プログラム

理工学研究科FD委員会が博士前期課程の大学院生に対して実施する授業評価アンケートの結果に基づき、海洋土木工学プログラムの各教員は、担当科目の授業計画改善書を作成する。本プログラムが対象とする教育・研究分野は、海洋学（環境システム工学）分野と土木工学（建設システム工学）分野の二つの分野で構成されている。本プログラムの教員は、いずれか一つ分野に所属し、それぞれの分野に対して、環境システム科目部会と建設システム科目部会を開催する。これら二つの科目部会において、上記の授業計画改善書を活用しながら、教育の点検および改善を継続的に実施している。

(4) 化学工学プログラム

各教員は授業計画改善書の作成により授業内容や進め方および成績評価に問題がなかったか再確認するとともに、改善に向けた取り組みを継続的にしている。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認し保管する。不備がある場合は、FD委員が差し戻しを行い、不備箇所を指摘して再提出してもらっている。問題が発見された場合にはプログラム長と協議の上、対応を検討する。また、令和2年度後期からは授業計画改善書に成績評価につ

いての記載もするようになったため、この結果を基に成績評価がシラバスに書かれた基準に従ってなされたかの確認をプログラムの会議の場で実施した。

(5) 化学生命工学プログラム

各教員は、授業評価アンケートの結果を受け取り、授業内容や進め方、評価方法に問題がなかったか等を検証して授業計画改善書を作成し次年度以降の授業改善に取り組むことを継続的に行っている。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認し、保管しており授業の進め方や評価法について問題点が発見された場合には、プログラム長を中心としたプログラム検討委員会にて対応を検討している。本年度は、授業評価アンケートの自由記述欄を通じて遠隔授業に関する意見が多く寄せられていたので、この意見を参考に作成された授業計画改善書を活用して受講生からの評価向上に取り組んでいく予定である。

(6) 情報・生体工学プログラム

情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体工学プログラムでは平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取組み及び結果を教員全員で共有することで、情報・生体工学プログラム全体の教育内容への継続的な改善が試みられている。

(7) 建築学プログラム

授業改善計画書に関しては、全科目の評点を専攻内で閲覧可能にして問題点を共有することとしている。建築学専攻では、コースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では、授業アンケートの結果を複数教員で確認し、また、定期的に授業方針等の打合せを行い、検討した結果を授業改善に反映させている。しかし、授業改善計画書は各期末に提出することになっているが、各教員からの提出状況は芳しくない。3.2.3で述べたように、授業アンケートの結果からも教員による授業改善の意識は高いと思われることから、授業改善計画書が形式的な書類となっている可能性がある。大学における個人の業務時間の増加傾向から考えるに、授業改善計画書の簡易化など、名を捨てて実を取る改善が必要と考える。

(8) 数理情報科学プログラム

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を提出し、保管はFD委員または授業担当教員自身が行っている。授業計画改善書には昨年と一昨年の評点を記入する欄があり、各教員が授業計画改善書を作成する際に評点の推移を確認することが継続的かつ効率的な授業改善につながる重要な要素となっている。今のところ授業アンケートおよび授業計画改善書を専攻内の他の教員に公開する制度とはなっていない。また、例年受講生者が10名前後の講義が大半であるため、授業アンケートの実施率はあまり高くない。

(9) 物理・宇宙プログラム

令和2年度には、授業計画改善書の提出が4件あり、授業アンケートの結果を受けた分析がなされた。授業計画改善書の提出件数は多くないが、「授業アンケートの結果報告」で示したグラフに表れているとおり、多くの項目でスコアが増加しており、授業計画改善書提出の有無にかかわらず、授業内容は改善されているものと思われる。

(10) 化学プログラム

各教員が授業アンケート結果を基に授業改善計画書を作成し、授業内容や方法についてのアンケート結果の推移を確認し、授業改善に利用することになっている。今年度より化学プログラムに改組されたため、プログラムとしての授業計画改善書の取扱いについては決まっていない。FD委員が各教員から毎年の授業計画改善書を確実に回収し、保管できる体制を作るなど、講義の継続的な改善に有効活用できる授業改善計画書の取扱い方法について、今後、検討を行う予定である。

(11) 生物学プログラム

化学プログラム、地球科学プログラムと共に、生物学プログラムも令和2年度から改組された。このため、本授業評価アンケートの結果を今後どのようにプログラム全体として活用するのか、その方針や取扱いについては今後決める予定である。まずは、個々の授業のアンケート結果を分析し、授業で扱う内容や進め方の改善について個々人が取り組むところから始めるべきであろう。来年度、そして再来年度のアンケート結果の蓄積を以て、全体として改善すべき点の見定めを行ってゆく予定である。

(12) 地球科学プログラム

令和2年度は7名の授業担当教員から授業計画改善書が提出された。アンケート結果に基づき、授業計画改善書を作成することによって、授業内容や授業技法の改善に継続的に取り組んできている。ただし、個々の授業の受講者数が少ない場合、アンケート結果が年度によって大きく変動する可能性があることにも留意すべきであろう。今後も、継続的な授業改善を推進することが肝要である。

第4章 GPA制度の現状と学習成果

理工学研究科では平成20年度よりGPA制度が導入された。ここでは、平成30年度から令和2年度までのデータを中心にGPA制度の現状について検討する。

4.1 工学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（甲斐 敬美）

工学系専攻における平成30年度から令和2年度までの3年間のM2学生の累積GPAおよび取得単位数のヒストグラムを図4.1に示す。累積GPAに関しては、令和2年度における3.8以上の割合は前年度から大幅に増加して50%となった。一方で3.6以上3.8未満の割合は前年度から大幅に減少して20%をきった。3.8以上の学生の割合は平成30年度と令和元年度は約40%と同程度であるが、その一年前の平成29年度は30%なかったため、この4年で20ポイント増加したことになる。令和2年度は遠隔授業が多かったが、学年としてはM2であったので、授業は多くはなく、遠隔授業の影響ではない。つまり、年々平均の評価ポイントが上昇していることを示す。一方、取得単位数に関しては、修了要件の30単位の割合及び29単位以下の割合が共にこの3年間減少傾向にあり、30単位を超えて単位を取得する学生の割合が増加している。

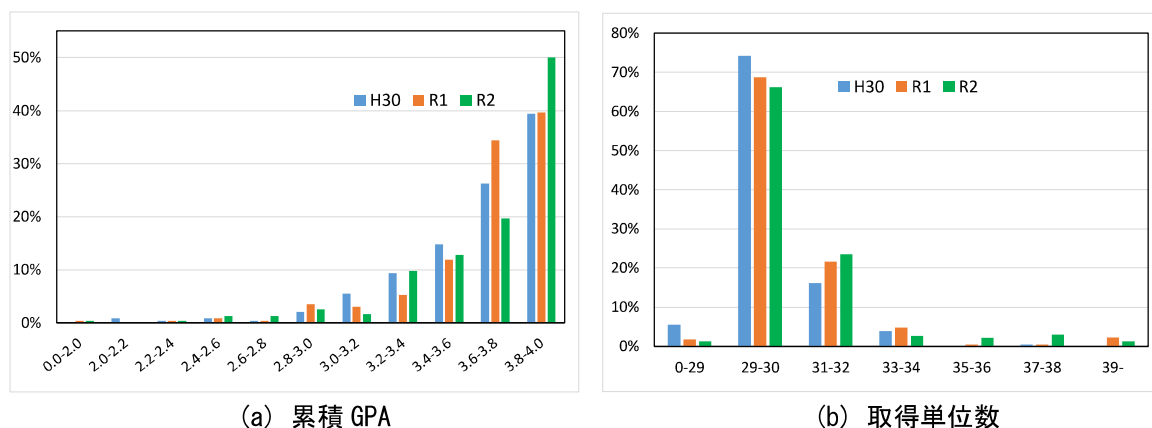


図 4.1 平成30年度、令和元年度及び令和2年度のM2の累積GPAと取得単位数のヒストグラム

4.2 理学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（野澤 和生）

理工学研究科理学系に在籍する令和2年度の博士前期課程2年次大学院生全49名の累積GPAの分布図を図4.2(1)に示した。98%の大学院生がGPA3.0以上であり、GPA3.6-4.0の高領域に76%が分布している。これらのことから、理学系の大学院生が高い意識を持って学業・研究に取り組んでいることがわかる。前年度の調査でもこの傾向は見受けられた。

次に、総取得単位数の分布を図4.2(2)に示す。履修基準の30~32単位の範囲に59%の大学院生が分布している一方で、24%の大学院生が40単位以上の領域に分布しており、二極化する傾向が見られる。これは前年度も見られた傾向であるが、自分の専門分野に直接関連する講義を集中して修得し、規定の単位数を修得した後は修士論文の研究に集中したいと考える学生がいる一方で、自分の専門分野以外にも興味を持ち、広く横断的に学習し幅広く学びたいと考える学生が一

定数存在するものと考えられる。

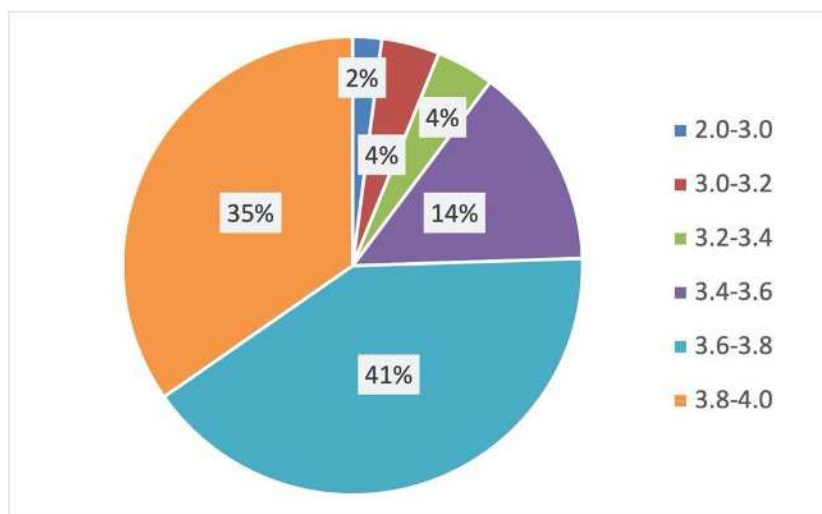


図 4.2 (1) 令和 2 年度 M2 (理学系) 累積 GPA の分布

次に、平成 30 年度～令和 2 年度の 3 年間における累積 GPA、および総習得単位数の推移を図 4.3 (1) と図 4.3 (2) に示した。累積 GPA の図に見られるように、3.0 以上の割合は平成 30 年度の 93% から年を追うごとに増加しており、令和 2 年度の 3.0 以上の割合は 98% であった。3.8 以上の割合だけを見ると前年度の方が多いが、総じて高い GPA を獲得する学生の割合が増加している傾向が見られる。一方、総習得単位数の推移には、40 単位以上を修得する学生の割合が増加している傾向があるものの、全体を通しての明確な傾向は見いだされない。より正確な傾向を見いだすには今後のデータの蓄積が必要であるが、大学院改組により、今年度の入学生から履修課程が大きく変更となり、従来通りの科目のほか、研究教育マネジメント、国内学会特別研修や国際学会特別研修、研究インターンシップ I、II 等の実践を伴った科目の履修が必要になる。これらの影響を注視し、さらに検討分析が必要になると思われる。

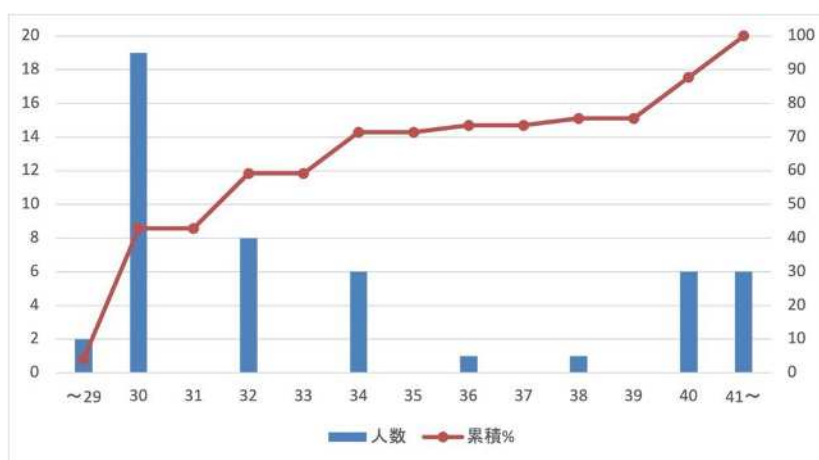


図 4.2 (2) 令和元年度 M2 (理学系) 総修得単位数の分布

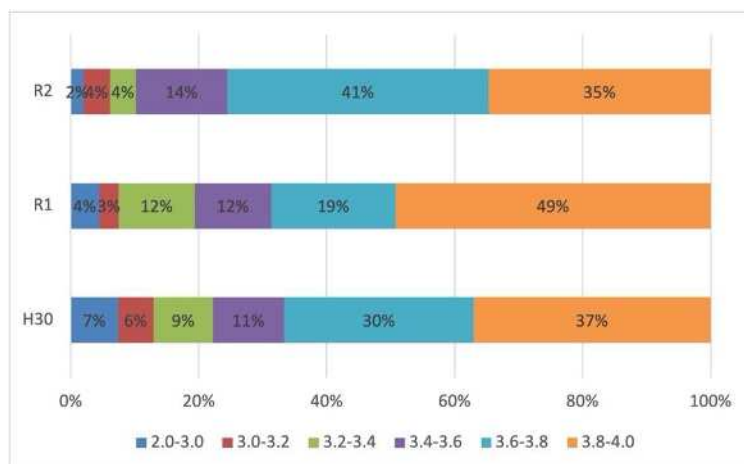


図 4.3 (1) 平成 29 年度～令和元年度 M2 (理学系) 累積 GPA の推移分布

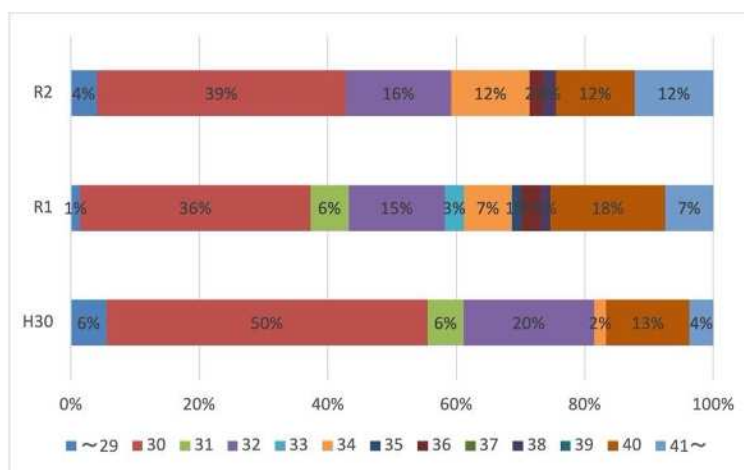


図 4.3 (2) 平成 29 年度～令和元年度 M2 (理学系) 総修得単位数の推移分布

第 5 章 学生の研究活動と教育成果 (上野 大輔, 三隅 浩二)

FD 活動の目的の一つとして、大学院生の研究発表支援を行っている。平成 22 年度から令和 2 年度までの研究発表件数について、表 5.1 に示す。令和 2 年度からの改組のため、各専攻とプログラムの発表件数推移について述べることは難しいが、全体としての件数は口頭発表、論文共に昨年度から減少している。これにはコロナ禍による影響があると考えられ、特に学会の大会開催延期や中止が相次いだことが大きな原因として挙げられるだろう。続いて、平成 22 年度から令和 2 年度までの各年度の在籍者数を表 5.2 に、学会等での受賞実績等について表 5.3 に示す。全体の在籍者数については、昨年度とほぼ同数と述べて差し支え無いだろう。受賞実績の件数についても、前年度計 51 件だったところ、今年度は計 22 件と大幅に減少している。これについても、コロナ禍により十分な研究教育活動が行えなかったことが影響すると考えられる。

表 5.1 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	海洋	生・化 工	化工	化生	情報	建築	数理	物理	生命	地環	化学	生物	地球	合計
平成22年度	口頭発表	国際会議	3	7	4	53	-	-	2	2	1	6	27	11	-	-	-	116
	(含むポスター発表)	国際会議以外	44	65	29	126	-	-	46	38	4	9	41	19	-	-	-	421
	論文	査読あり	19	12	17	39	-	-	19	3	1	4	29	2	-	-	-	145
		査読なし	7	30	2	20	-	-	36	26	0	6	7	2	-	-	-	136
平成23年度	口頭発表	国際会議	1	5	2	49	-	-	6	1	0	3	8	11	-	-	-	86
	(含むポスター発表)	国際会議以外	15	60	34	135	-	-	35	38	1	14	26	26	-	-	-	384
	論文	査読あり	4	13	27	25	-	-	9	0	1	3	9	8	-	-	-	99
		査読なし	3	18	9	7	-	-	7	6	1	6	3	0	-	-	-	60
平成24年度	口頭発表	国際会議	6	21	20	43	-	-	3	2	0	9	15	3	-	-	-	122
	(含むポスター発表)	国際会議以外	32	66	18	141	-	-	28	46	0	49	52	20	-	-	-	452
	論文	査読あり	10	30	11	36	-	-	11	9	0	8	7	4	-	-	-	126
		査読なし	4	38	5	9	-	-	7	0	0	10	6	0	-	-	-	79
平成25年度	口頭発表	国際会議	9	27	8	40	-	-	15	2	0	2	10	4	-	-	-	117
	(含むポスター発表)	国際会議以外	80	78	15	104	-	-	50	32	0	17	34	8	-	-	-	418
	論文	査読あり	15	33	14	24	-	-	22	6	0	5	9	3	-	-	-	131
		査読なし	10	28	4	1	-	-	22	0	0	3	9	0	-	-	-	77
平成26年度	口頭発表	国際会議	8	25	2	28	-	-	12	2	0	8	7	7	-	-	-	99
	(含むポスター発表)	国際会議以外	68	88	25	164	-	-	56	24	3	36	32	13	-	-	-	509
	論文	査読あり	21	27	21	24	-	-	27	1	0	11	6	3	-	-	-	141
		査読なし	1	10	2	0	-	-	31	0	0	0	1	1	-	-	-	46
平成27年度	口頭発表	国際会議	8	13	2	63	-	-	6	1	0	20	7	0	-	-	-	120
	(含むポスター発表)	国際会議以外	64	54	22	182	-	-	43	31	5	36	39	15	-	-	-	491
	論文	査読あり	14	21	13	30	-	-	18	1	3	14	5	3	-	-	-	122
		査読なし	0	8	2	3	-	-	16	14	0	6	7	1	-	-	-	57
平成28年度	口頭発表	国際会議	10	14	3	71	-	-	2	12	0	7	23	1	-	-	-	143
	(含むポスター発表)	国際会議以外	47	42	12	195	-	-	48	34	1	32	56	17	-	-	-	484
	論文	査読あり	10	7	8	28	-	-	7	9	0	4	17	1	-	-	-	91
		査読なし	0	11	2	9	-	-	6	19	0	0	4	3	-	-	-	54
平成29年度	口頭発表	国際会議	11	15	10	66	-	-	12	0	0	7	10	3	-	-	-	134
	(含むポスター発表)	国際会議以外	60	67	19	138	-	-	35	37	6	20	54	8	-	-	-	444
	論文	査読あり	4	9	12	25	-	-	16	4	0	9	11	1	-	-	-	91
		査読なし	3	2	0	2	-	-	18	3	0	0	1	2	-	-	-	31
平成30年度	口頭発表	国際会議	20	16	4	77	-	-	5	6	0	15	15	0	-	-	-	158
	(含むポスター発表)	国際会議以外	47	81	8	168	-	-	30	35	14	19	38	12	-	-	-	452
	論文	査読あり	7	13	11	31	-	-	5	2	0	10	9	0	-	-	-	88
		査読なし	0	1	17	2	-	-	7	0	0	1	0	0	-	-	-	28
令和元年度	口頭発表	国際会議	11	18	8	0	-	-	7	79	0	18	8	0	-	-	-	149
	(含むポスター発表)	国際会議以外	43	73	13	53	-	-	18	135	4	34	19	8	-	-	-	400
	論文	査読あり	7	8	8	4	-	-	14	26	0	13	14	3	-	-	-	97
		査読なし	0	8	9	9	-	-	9	2	0	0	1	11	-	-	-	40
令和2年度	口頭発表	国際会議	1	11	1	-	0	1	6	3	0	5	-	-	0	0	0	28
	(含むポスター発表)	国際会議以外	41	63	22	-	17	65	46	39	2	36	-	-	12	4	2	349
	論文	査読あり	3	8	11	-	4	14	12	3	0	8	-	-	7	1	0	71
		査読なし	0	4	1	-	0	1	14	8	1	0	-	-	0	3	0	32

表 5.2 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	機械	電気	海洋	生・化	化工	化生	情報	建築	数理	物理	生命	地環	化学	生物	地球	合計
平成22年度	109	106	39	132	-	-	85	46	25	30	36	-	-	-	-	644
平成23年度	116	105	32	88	-	-	89	52	24	28	32	30	-	-	-	596
平成24年度	116	104	32	88	-	-	89	52	24	28	32	30	-	-	-	595
平成25年度	99	95	26	84	-	-	84	43	21	32	34	33	-	-	-	551
平成26年度	93	96	30	85	-	-	90	46	20	36	33	31	-	-	-	560
平成27年度	105	104	26	80	-	-	94	59	15	38	43	33	-	-	-	597
平成28年度	112	98	18	89	-	-	87	67	13	37	47	29	-	-	-	597
平成29年度	112	85	27	97	-	-	84	62	19	32	35	23	-	-	-	576
平成30年度	105	93	24	101	-	-	88	61	20	33	43	26	-	-	-	594
令和元年度	96	108	22	98	-	-	85	54	22	34	47	16	-	-	-	582
令和2年度	108	93	26	48	17	26	83	68	27	32	17	4	17	9	4	579

表 5.3 受賞など

博士前期課程

<物理・宇宙プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
高橋 巡季	M1	日本金属学秋期講演大会会優秀ポスター賞

<化学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
下鶴 優美	M1	南日本分析フォーラム ポスター賞
赤坂 舞子	M2	南日本分析フォーラム 講演賞
溜池 美緒	M2	南日本分析フォーラム 講演賞

<機械工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
田代 篤穂	M2	精密工学会九州支部学生Web講演会唐津プレゼンション賞

<電気電子工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
濱崎 隆佑	M1	電気学会優秀論文発表賞A賞
林原 風雅	M1	電気学会優秀論文発表賞B賞
		2020 Excellent Student Award of the IEEE Fukuoka Section
藤原 周平	M1	第29回MAGDAコンファレンスin大津の優秀講演論文賞
松元 俊樹	M1	電気学会優秀論文発表賞B賞
吉永 賢	M2	2020年度 応用物理学会 九州支部 学術講演会 発表奨励賞
李 潤源	M2	RFIT2020 Student Award

<海洋土木工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
後藤 将斗	M2	第8回九州橋梁・構造工学研究会シンポジウム 優秀発表賞
嶋田 祐人	M1	第8回九州橋梁・構造工学研究会シンポジウム 優秀発表賞
川畑 雅樹	M2	令和2年度日本コンクリート工学会九州支部長賞

<化学工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
上田 裕喜	M2	第29回ソノケミストリー討論会 特別賞
赤星 薫	M2	第39回溶媒抽出討論会 学生優秀発表賞
坂本 洸大	M1	2020年度化学工学会九州支部学生発表会 優秀発表賞

<情報・生体工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
木下 貴裕	M2	Best Paper Award, International Workshop on Advanced Image Technology (IWAIT) 2021
小川 明彦	M2	電子情報通信学会九州支部学生会講演会 学生会講演奨励賞

<建築学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
徳田 優志	M2	第一回KASEI.r2リモートコンペティション 最優秀賞

博士後期課程

<総合理工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
小林 領太	D3	2020年 IEEE福岡支部 学生研究奨励賞
新福 優太	D2	公益社団法人日本水環境学会、博士研究奨励賞(オルガノ賞)

第6章 特筆すべき取組及び改善事例（甲斐 敬美）

令和2年度前期の講義分から成績評価が厳格かつ客観的に評価しているかどうかの点検を実施した。令和2年度後期から各教員が作成する授業計画改善書に該当科目の成績の各評価の人数を記載する項目を追加した。各プログラムのFD委員がプログラム教員から提出された授業計画改善書をまとめ、それらの資料と成績評価分布一覧表に基づいて、各プログラムにおいて授業評価の点検を実施する。その結果は理工学研究科のFD委員会にて確認し、理工学研究科の教授会において報告した。この取組は今後も継続して実施する予定である。

第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待（甲斐 敬美）

理工学研究科では、教育内容に対する選択の多様性を認めつつ、高度な専門教育だけでなく、社会の流れに則したイノベーションマインド（革新精神）を有する人材育成を目的として改組により令和2年度の入学者より教育システムを大幅に改革した。令和2年度から科目を5つの科目群（知の探求科目群・知の探索科目群・実践力養成科目群・大学院横断科目群・語学関連科目群）に整理し、それぞれの科目群に新規の科目を導入した。今後も活発なFD活動により、新たなシステムが効果的に機能し、大学院教育が充実することを期待する。

令和2年度第1回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨(案)

日時：令和2年5月7日（木）10：30～令和2年5月12日（火）12：00

委員：1号委員；甲斐（敬）（委員長）

2号委員；松崎、甲斐（祐）、三隅、甲斐（敬）（再掲）、中島、朱、柴田、
近藤、野澤、児玉谷、上野、宮町

3号委員；甲斐（敬）（再掲）、内海

4号委員；欠員

報告事項

1 FD経費予算要求について

委員長から、令和2年度FD経費予算要求について、令和元年度第3回理工学研究科FD委員会にて承認されたもので全学FD委員会に提出する旨の報告があった。

2 その他

なし

議題

1 委員の活動分担及びFD報告書原稿作成分担について

委員長から、令和2年度FD活動分担及びFD報告書原稿作成分担について、議題1資料に基づいて諮られた。審議の結果、特に異論はなく原案のとおり承認された。

2 大学院授業評価アンケートの設問内容について

委員長から、令和2年度大学院授業評価アンケートの設問内容について、議題2資料に基づいて、例年通りの設問内容で行うが、今後、遠隔授業が延長される際は、メール会議を開催し、設問内容を変更する条件付きで諮られた。審議の結果、特に異論はなく原案のとおり承認された。

3 その他

なし

令和2年度第2回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日時：令和2年6月8日（月）17：00～令和2年6月23日（火）15：00

委員：1号委員；甲斐（敬）（委員長）

2号委員；松崎、甲斐（祐）、三隅、甲斐（敬）（再掲）、中島、朱、柴田、
近藤、野澤、児玉谷、上野、宮町

3号委員；甲斐（敬）（再掲）、内海

4号委員；欠員

議題

1 大学院授業評価アンケートの設問内容について

委員長から、令和2年度大学院授業評価アンケートの設問内容について、議題1資料に基づいて諮られた。審議の結果、特に異論はなく原案のとおり承認された。

2 その他

電気電子工学プログラムの甲斐（祐）委員から授業の難易度についての設問を増やしてはどうかという意見があったため、委員長から投票によって決定する旨の説明があった。

令和2年6月15日（月）～6月23日（火）15時までを期間とし投票を行った。選択肢1：2票、選択肢2：2票、選択肢3：6票、無投票2名という結果から、選択肢3に決定した。

なお、投票は以下の選択肢から1つ選ぶ形式で行った。

<選択肢>

1. 理解度の項目があり、関連性が深いと思われるので不要

2. 設問を増やす

案A

設問7と（設問7）と（自由記述欄B）の間

※回答形式が変わるため。

○設問：授業内容の難易度は適当でしたか。

・難しい ・やや難しい ・ちょうどよい ・やや易しい ・易しい

案B

（設問4）と（設問5）の間

※選択肢形式が他と同じ。

○設問：授業の難易度は高かったですか。

・そう思う ・どちらかと言えばそう思う ・どちらとも言えない

・どちらかと言えばそうは思わない ・そうは思わない

3. 設問は増やさず、授業内容全般の自由記述 B に難易度について記載するように説明を追加する。

【自由記述 B】授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。授業の難易度はどうでしたか。

報告事項

- 1 その他
なし

令和2年度第3回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日時：令和2年9月23日（水）13：00～令和2年9月30日（水）12：00

委員：1号委員；甲斐（敬）（委員長）

2号委員；松崎、甲斐（祐）、三隅、甲斐（敬）（再掲）、中島、大橋、柴田、
近藤、野澤、児玉谷、上野、宮町

3号委員；甲斐（敬）（再掲）、内海

4号委員；欠員

議題

- 1 令和2年度第1回理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会の開催について
委員長から、令和2年度第1回理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会の開催について以下の内容で諮られた。審議の結果、特に異論はなく原案のとおり承認された。

※本件は理学系が企画担当である。

日時 令和2年12月16日（水）時間未定

題目：「大学入学者選抜方法の検証・改善と学生確保に係る広報活動」

講師：広島大学 高大接続・入学センター 准教授 竹内正興 先生

概要： 竹内先生は広島大学 高大接続・入学センターの副センター長として、優秀な志願者を安定的に確保することに寄与するために、入学者選抜方法や入試広報の改善を企画・実施しておられます。

現在、コロナ禍の渦中にあり、入試広報の制約が余儀なくされていますが、その中でも、新学習指導要領での入試となる2025年度入試に向けて、各国立大学が入試改革に取り組んでいます。

また、本理工学研究科、工学部、理学部は改組を終えたばかりであり、この困難な状況で、志願者をいかに確保するかは最重要の課題です。本FD講演会では、その課題解決に資することを目的とし、本学の事情にも詳しい竹内先生に講師をお願いしました。竹内先生のこれまでの取り組みの成果と課題について、本学のアドミッションセンター専任教員として従事された実例を踏まえながら、ご紹介頂く予定です。

- 2 その他
なし

報告事項

- 1 その他
なし

令和2年度第4回理工学研究科FD委員会（メール会議）議事要旨

日時：令和2年11月24日（火）15：05～令和2年12月2日（水）12：00

委員：1号委員；甲斐（敬）（委員長）

2号委員；松崎、甲斐（祐）、三隅、甲斐（敬）（再掲）、中島、大橋、柴田、
近藤（剛）、野澤、児玉谷、上野、宮町

3号委員；甲斐（敬）（再掲）、内海

4号委員；欠員

議題

1 授業計画改善書の様式変更について

委員長から、授業計画改善書の様式変更について以下の説明のもと諮られた。

認証評価において「成績評価分布等のデータを関係委員会等で確認するなど組織的に確認していることに関する資料」の提出が求められている。理工学研究科ではFD委員会で確認することになるが、本研究科では幸いにも授業評価アンケートに基づいて、授業計画改善書を作成しているため、そこに記載欄を設けたい。

委員から、大学院の場合、研究を重視し、大学院の講義の成績はほとんどA評価としてB評価をわずかにするという慣習があったがこれを認めるのかという質問があった。

認証評価で問われていることは、評価基準に則り厳格かつ客観的に成績評価を実施しているかを組織的に確認しているかということであり、規定されている評価基準に従って成績をつけていれば、研究科の規則で成績分布を定める必要はない旨の回答を委員長から行った。審議の結果、原案のとおり承認された。

2 その他

なし

報告事項

1 その他

なし

令和2年度第5回理工学研究科FD委員会（オンライン会議）議事要旨(案)

日 時：令和3年3月2日(火) 16:10～16:49

場 所：Webex（オンライン）

委 員：1号委員；甲斐（敬）（委員長）

2号委員；松崎、甲斐（祐）、柴田、甲斐（敬）（再掲）、三隅、大橋、伊藤（稔）
（代理）、野澤、児玉谷、上野、宮町

3号委員；甲斐（敬）（再掲）、内海

4号委員；欠員

陪 席：有村学生係長、武総務係員

議題

1 プログラムにおける成績評価分布の確認について

委員長から、プログラムにおける成績評価分布の確認について諮られ、議題

1 資料に基づき、各プログラムのFD委員から説明を行い、確認を行った。

種々意見が出され、委員長から、成績評価の分布を確認し、シラバスに記載された評価基準に基づいて成績評価を行うことの重要性について言及された。

審議の結果、委員長から文章の体裁などの修正を受け付ける旨の連絡が行われ、別紙のとおり一部修正の上、承認された。

2 令和3年度FD活動計画について

委員長から、令和3年度FD活動計画について諮られた。審議の結果、原案のとおり承認された。

加えて、委員長から令和3年度の研究科FD講演会の企画担当は工学系委員が担当することが承認された。

3 令和2年度FD活動報告書の作成について

委員長から、令和2年度FD活動報告書の作成について、議題2資料に基づいた業務分担の担当者割振りについて諮られた。審議の結果、原案のとおり承認された。

また、宮町委員より第2章海外実習報告の執筆について質問があり、委員長から海外実習の実績がない場合は、目次から削除することが確認された。

4 その他

なし

報告事項

1 その他

なし

令和2年度第5回理工学研究科FD委員会（オンライン会議）議事要旨(案)

日 時：令和3年3月2日(火) 16:10～16:49

場 所：Webex（オンライン）

委 員：1号委員；甲斐（敬）（委員長）

2号委員；松崎、甲斐（祐）、柴田、甲斐（敬）（再掲）、三隅、大橋、伊藤（稔）
（代理）、野澤、児玉谷、上野、宮町

3号委員；甲斐（敬）（再掲）、内海

4号委員；欠員

陪 席：有村学生係長、武総務係員

議題

1 プログラムにおける成績評価分布の確認について

委員長から、プログラムにおける成績評価分布の確認について諮られ、議題

1 資料に基づき、各プログラムのFD委員から説明を行い、確認を行った。

種々意見が出され、委員長から、成績評価の分布を確認し、シラバスに記載された評価基準に基づいて成績評価を行うことの重要性について言及された。

審議の結果、委員長から文章の体裁などの修正を受け付ける旨の連絡が行われ、別紙のとおり一部修正の上、承認された。

2 令和3年度FD活動計画について

委員長から、令和3年度FD活動計画について諮られた。審議の結果、原案のとおり承認された。

加えて、委員長から令和3年度の研究科FD講演会の企画担当は工学系委員が担当することが承認された。

3 令和2年度FD活動報告書の作成について

委員長から、令和2年度FD活動報告書の作成について、議題2資料に基づいた業務分担の担当者割振りについて諮られた。審議の結果、原案のとおり承認された。

また、宮町委員より第2章海外実習報告の執筆について質問があり、委員長から海外実習の実績がない場合は、目次から削除することが確認された。

4 その他

なし

報告事項

1 その他

なし

A(受講態度等について)

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。(選択必須)

- 1.1
- . 全て出席
 - . 1回欠席
 - . 2回欠席
 - . 3回欠席
 - . 4回以上欠席

設問2 予習と復習は1コマ(90分)の授業に対して、どれくらいしましたか。(レポート作成時間も含まれます)(選択必須)

- 1.2
- . 3時間より多く
 - . 2~3時間
 - . 1~2時間
 - . 30分~1時間
 - . 30分未満

【自由記述A】

その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

1.3

B(授業内容等について)

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。(選択必須)

- 1.4
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。(選択必須)

- 1.5
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。(選択必須)

- 1.6
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

設問6 授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。(選択必須)

- 1.7
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。(選択必須)

- 1.8
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

【自由記述B】

授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。授業の難易度はどうでしたか。

1.9

C(授業方法等について)

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。(教材等を使用しなかった場合には“3”を選択してください。)(選択必須)

- 1.1
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。(無かった場合には“3”を選択してください。)(選択必須)

- 1.11
- . そう思う
 - . どちらかと言えばそう思う
 - . どちらとも言えない
 - . どちらかと言えばそうは思わない
 - . そうは思わない

設問10 板書などは明瞭だった。(遠隔授業においては画面での視覚情報は明瞭であったか。)(選択必須)

1.12

- . そう思う
- . どちらかと言えばそう思う
- . どちらとも言えない
- . どちらかと言えばそうは思わない
- . そうは思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。(選択必須)

1.13

- . そう思う
- . どちらかと言えばそう思う
- . どちらとも言えない
- . どちらかと言えばそうは思わない
- . そうは思わない

【自由記述C】

授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。(遠隔授業について、学習する上でよかったと思う工夫や逆に困ったことなどがあれば、この欄に簡潔に書いてください。)

1.14	▲
	▼
◀	▶

授業計画改善書(令和2年度 ○期 講義・演習用)

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して
3. この文書を○月○日(○)までにプログラムのFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 令和 年 月 日

授業科目名： _____

授業担当者(代表者)名： _____

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※ 自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目		アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策	
		今回	前回	前々回		
(A) 受講態度について	①出席					
	②予習と復習					
	※自由記述					
(B) 授業内容について	③シラバス					
	④理解度					
	⑤研究に					
	⑥仕事に					
	⑦学力・教養に					
	※自由記述					
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材					
	⑨レポート等					
	⑩板書等の明瞭さ					
	⑪教員の熱意					
	※自由記述					
(D) 成績分布について	登録者数 [名]	受験者数X [名]		単位取得者数Y [名]	比率(Y/X) [%]	
	【成績分布】					
	A評価 [名]	B評価 [名]	C評価 [名]	D評価 [名]	F評価 [名]	
総括	成績の評価基準					
	学習目標の達成					
	その他(自由記述)					

授業計画改善書(令和〇年度 〇期 講義・演習用)

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して
3. この文書を〇月〇日(〇)までにプログラムのFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 令和 年 月 日

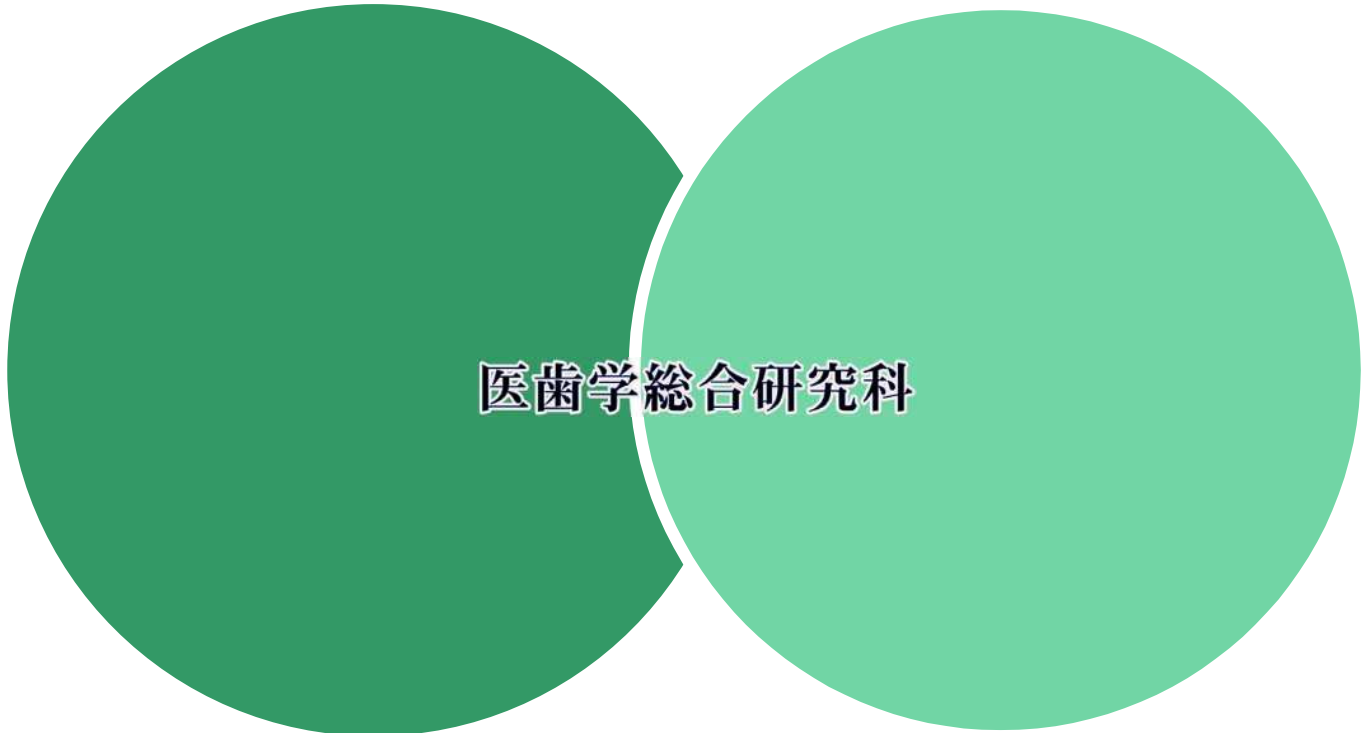
授業科目名： _____

授業担当者(代表者)名： _____

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※ 自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目	アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策	
	今回	前回	前々回		
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習	2.50	2.25	2.80	予習・復習の時間が1から2時間であり、本科目の内容を習得するためには不足しているので、課題を増やしたい。
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度	3.16	3.00	3.20	今年度は少し理解度を上げることができた。小テストなどで理解度の向上を図り、次年度は評点3.5となるようにしたい。
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等	3.70	3.20	3.50	今年度は5回のレポートを提出させた。昨年度は3回(評点は3.20)であったので、少し改善することができた。次年度は評点4.0となるようにしたい。
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述				
(D) 成績分布について	登録者数 [名]	受験者数X [名]	単位取得者数Y [名]	比率(Y/X) [%]	
	26	26	26	100	
	【成績分布】				
	A評価 [名]	B評価 [名]	C評価 [名]	D評価 [名]	F評価 [名]
	8	10	6	2	0
総括	成績の評価基準	シラバスに従い、試験7割、レポート課題3割の割合で評価した。			
	学習目標の達成	合格者の平均はC(78点)であり、大学院の成績としては、十分ではない。レポート課題への取り組みが十分ではないことが考えられるので、次年度は何らかの改善をしたい。			
	その他(自由記述)	評価の分布もめだった偏りはなく評価方法は妥当であったと思われる。			



医歯学総合研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学及び研究科が目指す大学院教育の質向上と研究環境の改善を目的として活動している。桜ヶ丘キャンパスの全ての教職員を対象とした効果的な FD とするために、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会と連携して活動を行った。

令和 2 年度は、COVID-19 の感染拡大で影響を受けた教育・研究活動の状況を把握し支援することも求められた。そのため授業公開、留学生を対象とした英語による授業評価及び研究支援に対するアンケートを継続し、Zoom 利用講習会は医学部 FD 委員会医学科部会との共催として実施した。遠隔による教育活動の急速な普及に加え著作権法の改正もあり、それらに教職員が適切に対応するための動画視聴の講習とその後のアンケートによる成果の把握も実施した。

令和 2 年度の専任教員の FD 参加率は、医学部及び歯学部、全学での FD 活動等を含めて算出したところ、87.8% (270 名中 237 名参加) であった。

2. Zoom 利用講習会

日時	2020 年 4 月 16 日 (木) 16:00~17:00
テーマ	Zoom 利用講習会
講師	森 裕生 助教 (鹿児島大学高等教育研究開発センター)
主催	医学部 FD 委員会医学科部会
共催	歯学部 FD 委員会、医歯学総合研究科 FD 委員会
会場	共通教育棟 6 階 インテリジェント講義室
参加者	教員 44 名、事務職員 4 名
概要	本学での Zoom を利用した授業の実施方法について解説があった。(医学部 FD 委員会報告参照)

3. 授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的として実施している。昨年に引き続き研究倫理に関する授業を公開授業とした。授業公開は対面のみの参加としたこともあり、参加者が少なかった。

日時	2020 年 12 月 22 日 (火) 6 限目 (18:00 ~19:30)
科目・テーマ	生命医療倫理学 (修士課程) ・医歯学倫理学 (博士科目) テーマ: 遺伝子組み換え実験の倫理的側面
講師	松口 徹也 教授 (口腔生化学分野)
会場	桜ヶ丘共通教育棟 5 階 501 講義室
参観者	1 名 (科目受講者を除く)
概要	修士及び博士課程の大学院生が研究倫理について学習する科目である。遺伝子組み換え実験は生命科学研究に必須の技術である一方、本来自然界にないものを創出するため、十分な注意も求められる。遺伝子組み換え実験において配慮すべき倫理的側面を概説する講義であった。

4. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要 昨年度より講義等を主体とする授業科目の評価アンケートに加え、演習・実験科目の評価として研究環境と研究指導に関するアンケートを、日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。医歯学大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に紙媒体又は鹿児島大学 manaba を通じて配布、回収して集計業務を行った。また集計結果は科目責任者および教育委員会にフィードバックした。

講義科目アンケート 講義を主体とする科目アンケートは3名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価9項目、学習に対する自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。

対象は「受講生3名以上」の科目であり、前期は対象32科目 154枚、後期は対象15科目 81枚の回答が得られた。前期は前年度とほぼ同じ評価、後期は前年度よりも授業評価、自己評価、全体評価全てにおいて、良好な評価となっていた。授業評価アンケートでは、COVID-19による評価の悪化は認められなかった。

演習、実験科目のアンケート 演習、実験科目についてのアンケートは2月に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目（研究指導）6項目、研究中断の有無、さらに正課、課外における英語によるコミュニケーション3項目について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

医系87枚（内留学生7名）、歯系41枚（内留学生1名）の回答が得られた。自由記載では、医系、歯系ともに丁寧な対応が指摘されている。改善点としては機器や資料の充実、英語のweb siteおよびコミュニケーションなど種々の意見が寄せられた。

医系 研究指導に関しては、前年度と同様の良い評価となっていた。在学期間が長期の学生が在籍している傾向が継続している。項目7で、個人的理由以外での研究の中断が15%となっており、昨年度の8%より増加しており、さらなる改善が求められている。

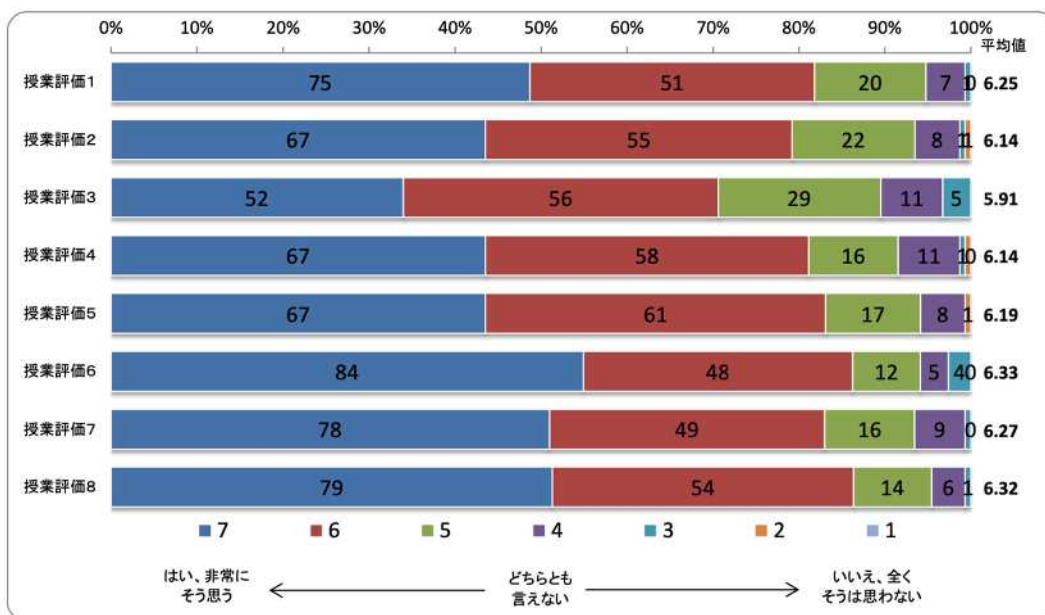
歯系 一部に個人的な理由以外での研究の長期中断が報告された。科目の有用性、教員の対応・支援は昨年度と同様の高い評価を得ている者の、一部の学生が実験科目での指導や環境について「全くできなかった」と回答している点については検討が必要である。

医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (R2年度 前期)

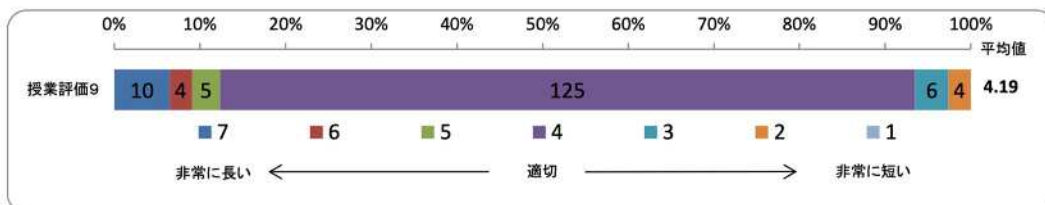
集計 32科目 アンケート回収枚数 154枚

【授業評価】

- 1 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 5 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 6 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 7 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 8 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

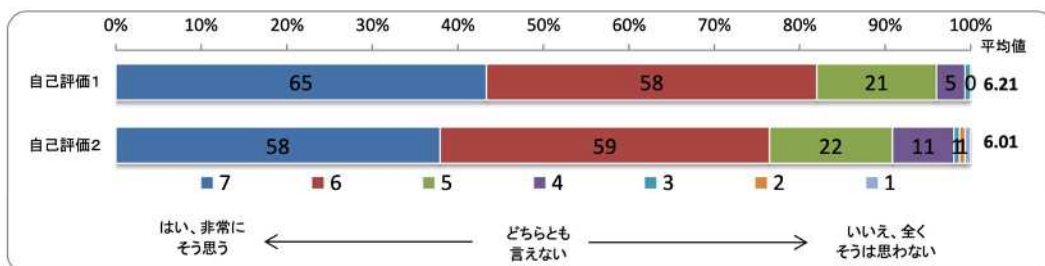


9 講義時間は適切でしたか



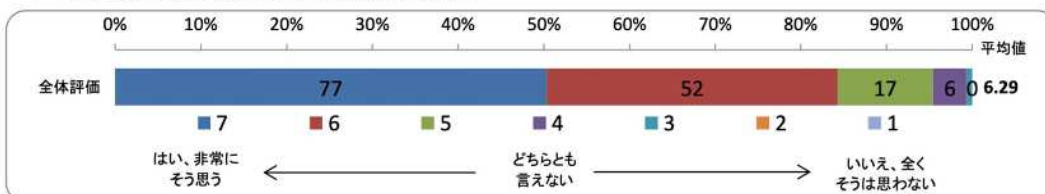
【自己評価】

- 1 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

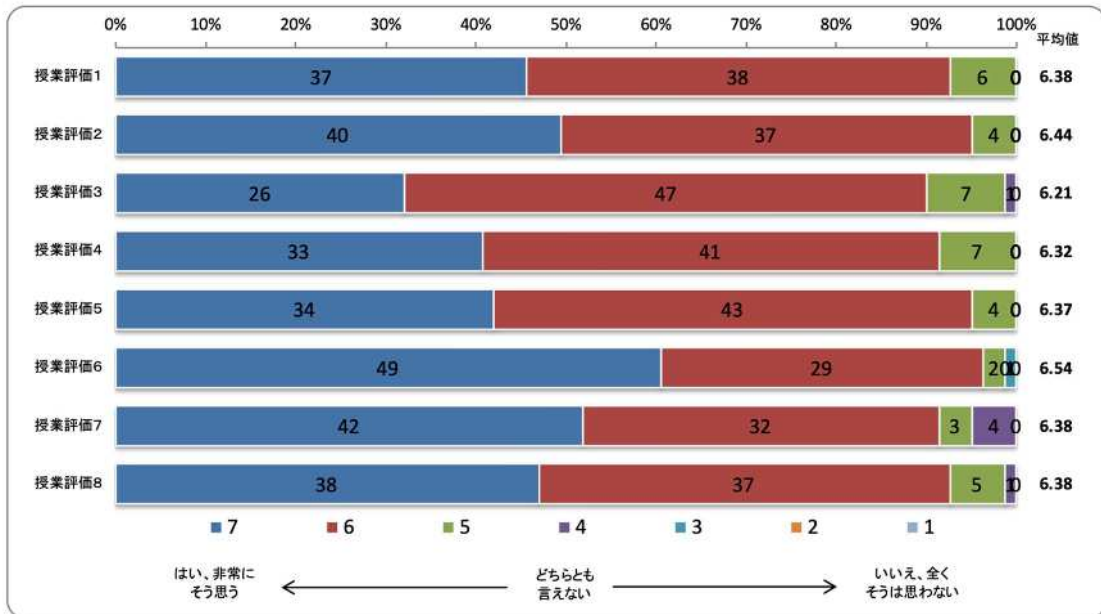


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (R2年度 後期)

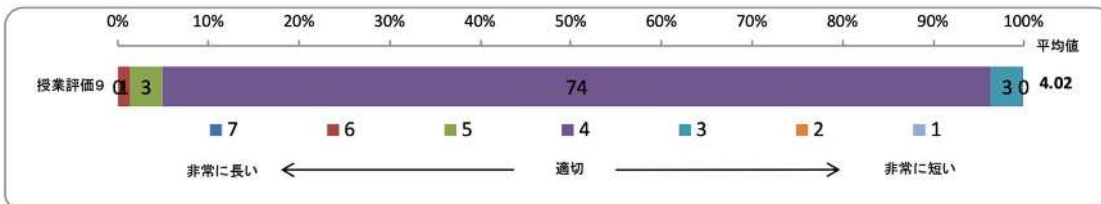
集計 15科目 アンケート回収枚数 81枚

【授業評価】

- 1 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 5 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 6 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 7 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 8 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

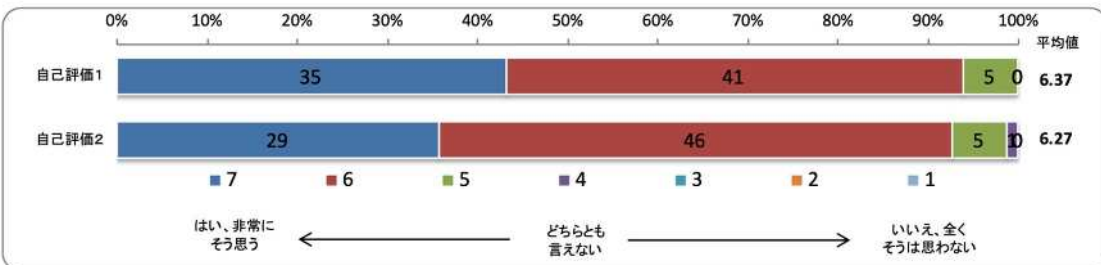


9 講義時間は適切でしたか



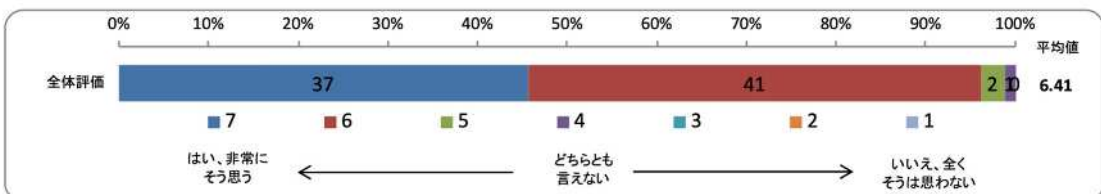
【自己評価】

- 1 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



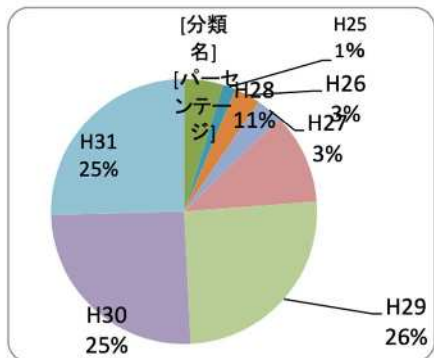
実験科目等アンケート

医 系

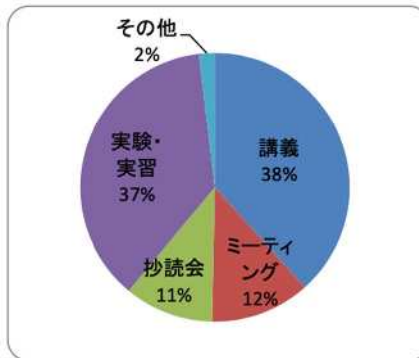
研究指導に係る学生アンケート(2021年 2月実施)

アンケート回収枚数(医系) 87 枚(内、留学生7名)

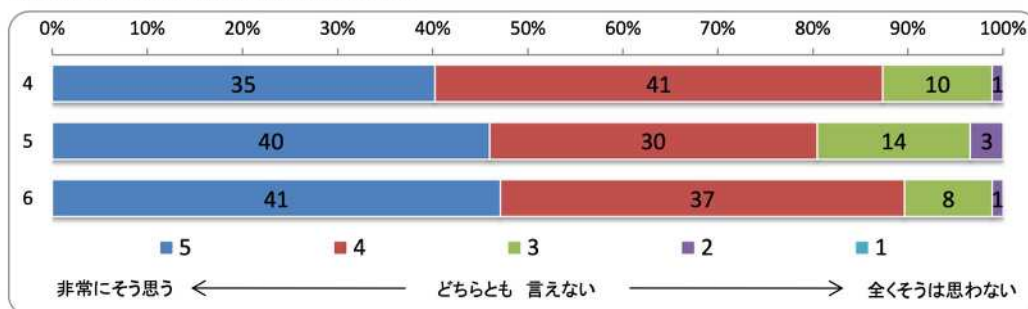
2 入学年度はいつですか



3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)

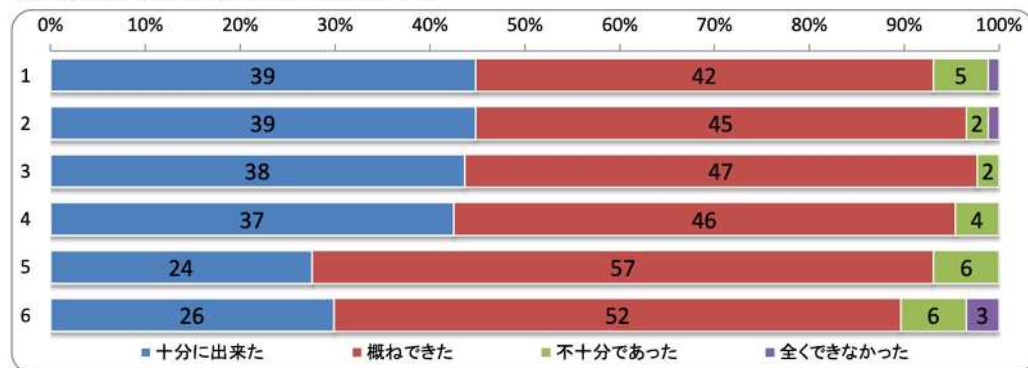


4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

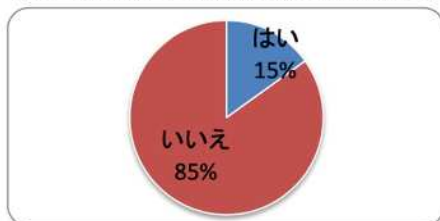


実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と話し、指導を受けることはできましたか
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

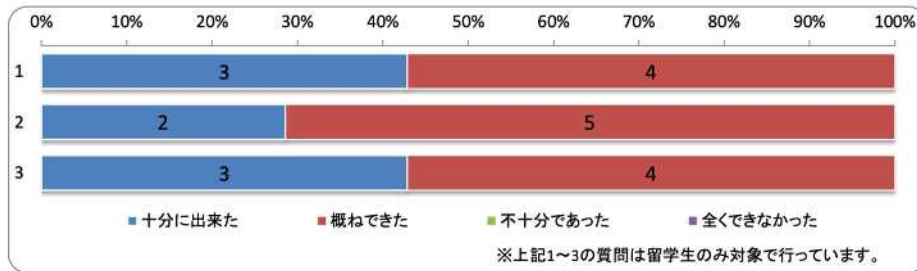


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありませんでしたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- どんな細かな質問も気軽に答えてくださった。
- 人数が少なかった為、わからない事がよく聞けた。
- 科研費申請に際し、的確な助言を頂き、参考になった。
- 対面で講義を受講できなかった際に、ZOOM等を用いてオンラインで受講できた。
- 研究に必要な資料へのアクセスや分析ツールの利用環境は十分であった。
- ていねいに指導頂いた
- Well supervised.
- Supervisor available for troubleshooting.
- Support and co-operation from all Lab members.
- On time delivery of Information and help regarding my studies and stay in Japan.
- Access to epidemiological chata, skills on analysis methods and research writing guidance from my supervisor.
- Independent thinking and doing.
- Timely delivery of lab reagents.
- I learn an advance technology in my experiment it's really interesting and mind-opening for me. It broadens my knowledge, and I hope I can make a good. Collaboration between my department and my country in the future.
- My experimental logil it gettily betten became of the "experiment" course. And the experimental technology is more advanced.

改善すべき点をお聞かせください

- 動物実験に使える小動物用のCT、Live Imaging 機器が無い
- 教員の研究指導に偏りがあり、研究法の標準(論文やテキスト記載のもの)と大きく異なった内容の指導が多く、非常に混乱させるものであった。
- Instructions in English language.
- Well defined time line.
- Technical training of laboratry skills, the Graduate School shoulf consider having a sompetent labuntry technician in every lab.
- Sometimes I want to read some books / literatures in library, but almost all the books were written in Japanese. I suggest to add some text book writtein in English. Thank you it will help foreigner to study.
- Need to know about ghe background at the experiment knowledge.

医学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- I appreciate the efforts made until nou.
- If more English-Friendly Unibersity website can be made, I would be helpful.
- The emails For international students should be more extensive, should inclede all aspects of student Procedures and should be in English.
- It is easy for me in my lab to speak English and little bit hard with other department or other students and staff, outside my lab.
- The level of English communication is generlly still low.
- Some of the faculty members can speak English flueutly , but some of them are not. Almost all the lectures were done in Japanese language, but the side were provided for me in English, it helps me a lot. Although sometimes difficult for me to communicate, but everyone here is very help full, and try to help me in many ways. So I think it's okay for now.
- The communication is good enough wthen He speaks of English between me and the teachers or professor.

その他、自由に感想をお書きください

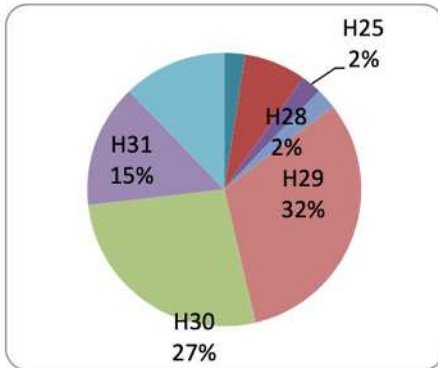
- 感謝しかありません。
- 鹿児島大学で良かったです
- I believe that assigning international students to active researchers e's Assistant Professors is more useful.

研究指導に係る学生アンケート(2021年 2月実施)

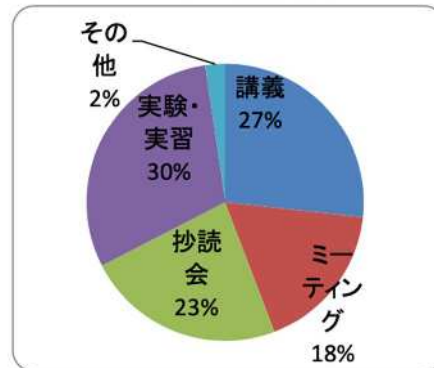
アンケート回収枚数(歯系)

41 枚(内、留学生1名)

2 入学年度はいつですか



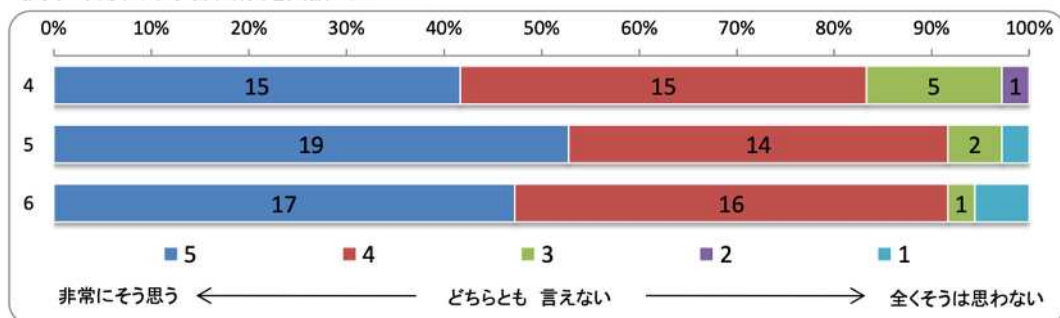
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか

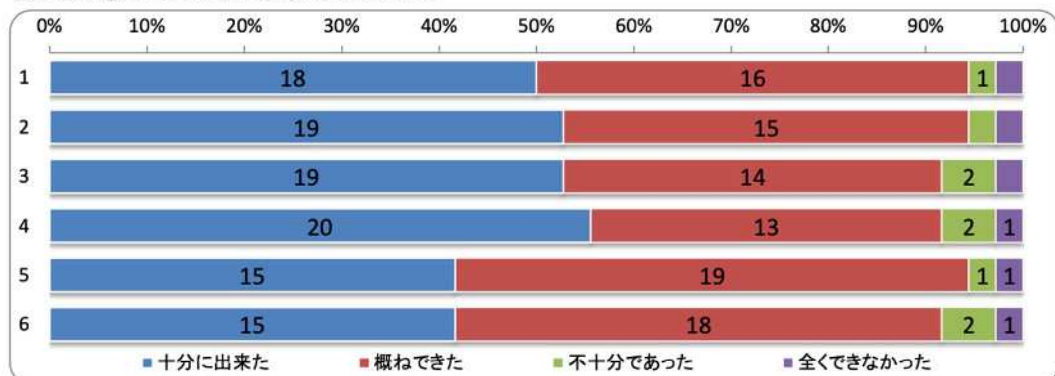
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

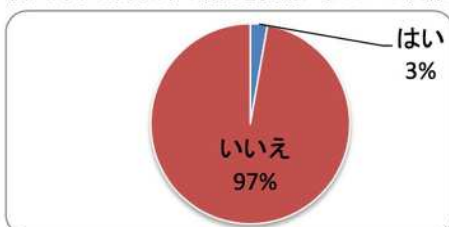
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

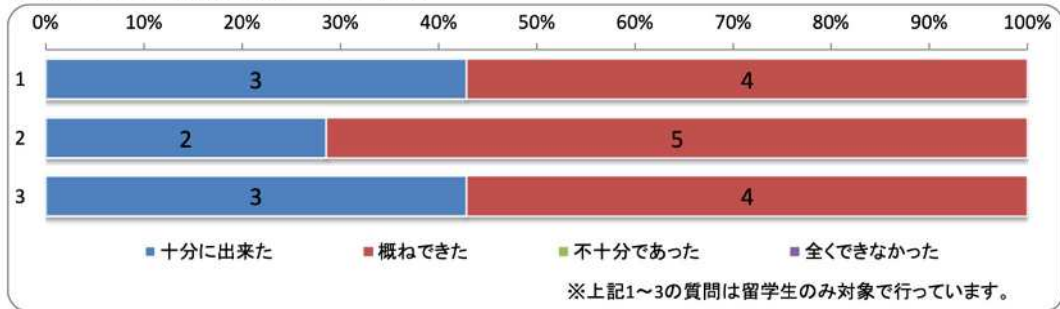


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- ・ 丁寧に教えてもらった
- ・ 歯系研究発表会に向けて準備するなかで、研究内容への理解がより深まり、モチベーションの向上につながりました。
- ・ Need to improve.
- ・ It is in standerd form but modification need.

改善すべき点をお聞かせください

- ・ 共同研のLSMIは整備不良となることが多く、周知されていないため、予約して訪れたのに使えないことがあり、臨床と平行している身としてはつらい。
- ・ 先生方が臨床に忙しく、研究や論文ができていない環境。研究専門の先生や研究手技に詳しい方がほしい。
- ・ 論文を書いたことがないのに大学院生の指導を行う教員がいる

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- ・ Need to inprove communicative English.

その他、自由に感想をお書きください

5. FD講演会：授業目的講習送信し補償金制度に関する動画視聴とアンケート

日時	2021年1月8日（木）～2月26日（木）
テーマ	授業目的講習送信し補償金制度
主催	医歯学総合研究科FD委員会
参加者	56名（研究科医学系19名、研究科歯学系19、大学病院13名、医学部4名、s事務職員1名）
概要	文化庁著作権課提供の「補償金制度に関するオンライン説明会」で使用した動画「コロナ時代における教育のデジタルイノベーションに対応した著作権制度について」（講師：文化庁著作権課長著作物流通推進室長 日比謙一郎氏）を視聴し、報告用アンケートに回答して知識の確認を行った。自由記載には多くの意見が寄せられ、動画の内容は複雑で難しい、長い、必要とするのは一部の教員との意見もあったが、制度について理解した、勉強になったとの回答も多かった。また、追加の質問もアンケートに記載があり、更なる情報提供の必要性も明らかとなった。

アンケート結果

問1. 大学等での授業で利用した著作物のコピーや資料は、その授業と関係ない他の教員と共有しても良い。

（正解：いいえ 正解率 96.4% 授業外利用はできません。）

問2. 大学での対面授業で利用する場合、その必要と認められる限度において無許可・無償で使用できる。

（正解：はい 正解率 91.1%）

問3. 対面授業の予習・復習用の資料をメール添付で送付するのは、その必要と認められる限度において無許可・無償で使用できる。

（正解：いいえ 正解率 75.0% 改正後は無許可・有償で使用できるようになりました。）

問4. 遠隔授業において著作物のコピーを配信する場合、鹿児島大学が補償金を支払った場合には、その必要と認められる限度において使用できる。

（正解：はい 正解率 92.9%）

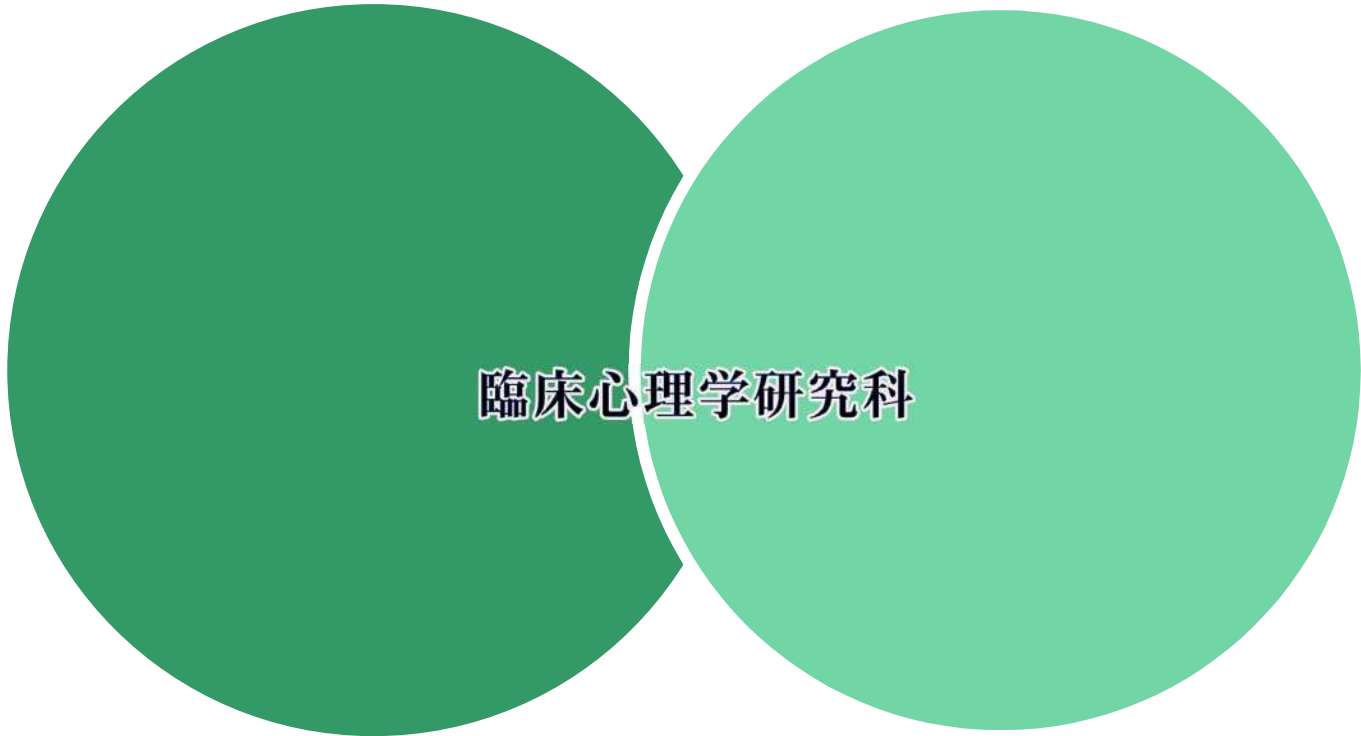
問5 諦念授業と遠隔授業を同時に行う場合は、著作物のコピーの配信はその必要と認められる限度において、無許可・有償で使用できる。

（正解：いいえ 正解率 51.8% 改正前から無許可・無償で使用可能でした。）

6. おわりに

本年度は教育・研究環境の大幅な制約、変更があったために、従来からの調査を継続し、学習や研究の状況把握と評価の重要性が増していた。幸い授業評価アンケートでは例年と同様の良好な評価が得られていた。Zoomをはじめとする新しいツールを使用するだけでなく、学習・研修の成果をより向上することが求められており、教職員のニーズに柔軟に対応するFD活動を検討していきたいと考える。

FD活動に参加、支援いただいた多くの教職員、学生の皆様に感謝いたします。



臨床心理学研究科

臨床心理学研究科 令和2年度FD活動報告 —新型コロナウイルス感染症流行下のFD—

臨床心理学研究科FD委員長 中原 睦美

1. はじめに

臨床心理学研究科では、FD活動の強化を目的に平成27年度から定例の研究科FD会議（FD研修会を含む）を教授会のある日に設定し、ほぼ毎月開催できる体制を整えた。令和2年度は、当初は、FDの観点からみた令和3年度受審予定の認証評価関係の情報共有及び研究倫理を強化した研修予定を立てた。しかしながら、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）対策のため、授業方法や形態の変更、出張を伴う研修会参加や講師招聘は困難となり、大幅な変更を余儀なくされた。それでも、前期後半には、定例となっている「学生（受講生）による授業評価アンケート」を簡略化した形で実施し、遠隔授業や代替授業に関する受講生の声を吸い上げ、FD会議で共有した。遠隔による学外講師による講演会開催も1回は開催にこぎ着けた。また、令和3年度受審予定の3回目となる臨床心理分野専門職大学院認証評価に関する評価項目の内容確認や、研究専念期間を取得した教授による東大病院CREGITS(Clinical Research Education and Interactive System)を用いた研究倫理の研修会開催など、FD活動の内容は充実していた。さらに、本学の取り組みであるベストティーチャー賞に研究科も該当することとなり、推薦方法については全学FD委員に情報提供をいただいた。また、遑つてではあるが「入学者ニーズ調査」を実施するなど、活動自体は12回を数える会議が設定され、次年度に繋がる充実となった。以下に、活動全体の概要及び新型コロナウイルス感染症流行下における特徴を具体的に報告する。

2. 新型コロナウイルス感染症流行下におけるFD活動の実際：研究科FD会議

（特筆すべき取り組み1）

臨床心理学研究科FD会議は、基本的に第3水曜日の教授会日の午後を設定している。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染予防の方針を受け、突然の授業開始延期、遠隔授業への変更、本研究科に必須の学内実習・学外実習の中止、専門職学位課程に必須の教育課程連絡協議会の開催中止などに見舞われ、FDに直結する授業自体が大幅変更となり、FD活動もかなりの変更が必要となった。以下に、令和2年度に当初予定していたFD会議及びFD研修会の日程とテーマ及び、新型コロナウイルス感染予防下において、実際に運用されたものを表2-1に示す。また、表2-2には、専任教員の参加出席率を示す。

FD会議は、中止や内容の大幅変更をしながらも、メール会議1回を含む12回開催された。うち、10回は遠隔実施となり、8回は内容も変更となった。なかでも第3回目は、学生による授業評価アンケートが実施困難なため内容を変更した。通常、授業評価アンケートは、個人情報の秘匿と回収率向上を目指して紙媒体で実施しており、本研究科の中核である学内実習・学外実習中止に伴い授業評価自体が困難となったため中止とした。定例の授業評

価アンケート検討会の前期 1 回目は中止となったが、前期分は 8 月にまとめて実施し、結果は 9 月の第 6 回に報告し、後期は従来と同じ実施方法による結果が第 8 回と第 10 回に開催され、いずれも FD 委員長による結果まとめと総括を元に共有され検討された。

研修会は、学内 3 件、学外講師 1 件の 4 件が実施された。学内研修会は、通常の審議等と重複し議題として位置づけられる。今回は、第 1 回目の「認証評価基準の理解のポイント」、第 2 回「質的研究における研究倫理—東大病院 CREGITS を用いて」、第 6 回は FD/SD 研修会（赤崎安昭教授）資料をもとに「新型コロナ禍における学生・教職員のメンタルヘルス—FD/SD 研修会報告と本研究科対応」として、FD 委員長が講師となり全教員が研修した。第 7 回は、学外講師である川野健治立命館大学教授による「質的研究における研究倫理」が開催され他部局 1 名を含む全教員が参加した。2 月に予定していた学外講師 1 件は対面実施を希望され、新型コロナウイルス感染対策のため中止となった。令和 2 年度は、実務家教員対象の研修会は実施できなかった。次年度以降の実施を予定している。

教員の参加・出席率は、令和元年に引き続き、定例会議に位置づけたことにより、出席率は高く、第 5 回と第 8 回に教員 1 名の欠席で、正確には 97.9%であるが、結果的に表計算上は 100%となった。学外講師を招聘した FD 研修会には他部局からの参加も許可し急遽であったが 1 名の参加があった。4 回開催された全学あるいは他部局企画の FD 研修会等には FD 委員長が参加し、次の FD 会議時に詳細に報告し全教員で内容を共有した。

表 2-1 令和2年度臨床心理学研究科 FD 会議予定と実際の FD 状況

第 3 回以降は全て遠隔(ZOOM)開催である。

※印は内容や日程を変更した回 内容の点線下段の青文字は FD 活動の実際を示す。

	年 月 日	内 容
第 1 回 FD 会議 (含研修会)	令和 2 年 4 月 15 日 (水) 13 時 30 分～ (対面)	1. 令和 2 年度 FD 会議日程 2. 令和 2 年度 FD 活動計画 3. 令和 2 年度 FD 活動予算要求 4. 認証評価基準の理解とポイント
第 2 回 FD 会議 (含研修会)	令和 2 年 5 月 27 日 (水) 13 時 30 分～ (対面)	1. 令和 2 年度授業評価アンケートの検討 2. 研究倫理についての講義 (講師 中原) 3. 全学 FD 委員会審議事項の共有
※3 回 FD 会議	令和 2 年 6 月 17 日 (水) 13 時 30 分～	1.令和 2 年度前期第 1 回授業評価アンケート結果報告と意見交換 ----- 1.令和 2 年度前期授業評価アンケート実施時期の再検討及びアンケート項目の検討
※第 4 回 FD 会議	令和 2 年 7 月 15 日 (水) 13 時 30 分～	1.講師招聘による FD 研修会 (研究倫理関連) ----- 1.「評価に関する FD 講演会」情報共有

		2. 前期授業評価アンケートについて
※第5回 FD会議	令和2年8月5日(水) 13時30分～	1. 令和2年度前期第2回授業評価アンケート 結果報告と意見交換 2. 教育連携協議会の情報共有
中止	中止	中止
※第6回 FD会議	令和2年9月16日(水) 13時30分～	1. 実務家教員向けFD研修会(1) 2. 令和2年度前期フォローアップセッションの 振り返りと意見交換(実習委員会との合同)
第5回FD会議		1. 令和2年度前期授業評価アンケート結果報告と意 見交換 2. 全学の大学院生アンケート結果について 3. 前期GPAについて
※第7回 FD会議	令和2年10月21日(水) 13時30分～	1. 学内個人情報保護管理等に関する研修会報 告と課題の共有(全学企画によって調整有
第6回FD会 議(FD研修会)		1. 「新型コロナ禍における学生・教職員のメンタル ヘルスーFD/SD研修会報告と本研究科の対応」
※第8回 FD会議	令和2年11月18日(水) 13時30分～	1. 令和2年度後期第1回授業評価アンケート結 果報告と意見交換
第7回FD会議 (FD研修会)	12月2日(水)15時～	1. FD研修会「質的研究における研究倫理」講師:立 命館大学教授 川野健治先生(遠隔ZOOM)
※第9回FD 会議	令和2年12月16日(水) 13時30分～	1 実務家教員向けFD研修会(2)
第8回FD会議		1. 令和2年度後期第1回授業評価アンケート結果 報告と意見交換 2. 令和2年度鹿児島大学ベストティーチャー賞につ いて

※第10回 FD会議	令和3年1月20日(水) 13時30分～	1. 学内・学外FD研修会参加報告
	令和3年2月3日(水) 13時30分～	1 FD研修会「事例研究における研究倫理」講師：愛知教育大学教授 廣瀬幸市先生(中止)
第9回FD会議	令和3年1月20日(水) 13時30分～	1.臨床心理学研究科ベストティーチャー賞について 1)全学部局の選考方向性 2)本研究科の検討点
※第11回 FD会議	令和3年2月17日(水) 13時30分～	1. 令和2年後期第2回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. 令和2年度後期フォローアップセッションの振り返りと意見交換(実習委員会合同) 3. 令和2年度FD活動の振り返りと次年度に向けての課題
第10回FD会議		1 令和2年度後期第2回授業評価アンケート結果報告と意見交換
第11回FD会議 (メール会議)	令和3年2月25日～ 3月1日	1. 学生アンケート(入学者ニーズ調査)について
第12回FD会議	令和3年3月17日(水) 13時30分～	1. 令和2年後期第2回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. 令和2年度後期フォローアップセッションの振り返りと意見交換(実習委員会合同) 3.令和3年度のFD活動計画について 1. 令和2年度FD活動の振り返りと次年度に向けての課題:2. 在籍生アンケート(入学者ニーズ調査)結果 3 学生アンケートの定例化について 4.令和2年度後期フォローアップセッションの振り返りと意見交換(実習委員会合同) 5. 令和3年度FD活動計画(案)等

表2-2 臨床心理学研究科FD会議出席率(※FD会議に複数の企画が重複する回もある)

合計参加率	100 % (専任教員 8名中 8名参加)
FD会議(審議関係)※	100 % (専任教員 8名中 8名参加)

企 画 別 参 加 率	FD 会議(授業評価アンケート 結果に関する検討 3 回)	100 %	(専任教員 8 名中 8 名 参加)
	FD 研修会(4 回)	100 %	(専任教員 8 名中 8 名 参加)
	臨床心理分野専門職大学院 認証評価基準読み合わせ	100 %	(専任教員 8 名中 8 名 参加)
	メール会議(入学者アンケート の検討)	100 %	(専任教員 8 名中 8 名 参加)

3. 授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討:新型コロナウイルス感染症下における授業工夫に対する受講生の声を中心に(特筆すべき取り組み 2)

(1) 実施対象科目と実施時期

「学生による授業評価アンケート」は、本研究科開講科目の全て(講義科目、演習科目、実習科目)を対象とし、通常は、前期は6月初旬と7月中旬の2回、後期は11月中旬と1月中旬の2回、毎年計4回のアンケートが実施され、各セメスター2回目のアンケートは、受講生に対して評価結果に対する授業改善報告を最終回には必ず実施できるようにするために最終の授業回までに(14回目を目途)実施されるような仕組みを作っている。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染対策のため、遠隔授業導入に加え、実習をはじめとする研究科に重要な授業運営が滞るなど危機的状態のなかで、遠隔授業や代替授業を駆使しての運用であった。これらの対応についての受講生の体験や声を吸い上げる目的で、前期は講義・演習・実習を総括した授業評価を行い、フィードバックを行った。後期は、12月～1月中旬以外は、対面授業が概ね可能となり、学内実習施設である心理臨床相談室活動再開、一部を除く学外実習開始となり、授業評価アンケートも例年通りに実施した。

(2) 評価項目

評価項目は、受講生自身の理解度評価や授業内容に関する評価、ならびに自由記述で行った。具体的には以下の通りである。

<講義科目>

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか。
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか。
(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 本講義科目の内容は理解できましたか。
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
5. 本講義科目の内容に満足していますか。
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本講義科目に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか。
2. 本演習科目の内容は理解できましたか。
3. 本演習科目の内容に満足していますか。
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本演習科目に対するご意見を自由に書いてください。

<実習科目>

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか。
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか。
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください。
6. 本実習科目に対するご意見を自由に書いてください。

(3) 結果

令和2年度は、新型コロナウイルス関係の影響で前期と後期で授業評価アンケートの実施方法を変更したため、量的結果及び質的結果ともに前期と後期に分けて記す。

1) 量的結果

前期は、遠隔授業や実習の代替授業に関する受講生の声を集める目的及び直前の豪雨災害に伴う実習授業や授業中止を受け、心臨臨床相談室の来談者への連絡調整等に丁寧な説明や手続きが必要となった受講生の心理的負担を考慮し、講義科目・演習科目・実習科目にまとめたアンケートを実施した。結果を表3-1～表3-3に示す。講義科目においては数値的には平均4点台であるが、それでも前年までと比較すると幾分下がっており、遠隔授業の影響があったと考えられる。演習科目での最低点1については、平均点をみると4点台を維持していることから、前期の成績に対する一部の受講生の不満が授業評価結果に影響したと考えられた。実習科目は、「1. 熱心に取り組みましたか」「2. 臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか」「3. 講義や演習で学んだことが役に立ちましたか」は、平均4.2-4.4であったが、「4. 実習体験に満足していますか」「5. 総合的に5段階で評価」の平均が3.8であった。これは、学内実習施設の心理臨床相談室閉鎖及び学外実習中止という影響によるものであり、当然の結果とも言える。教員は、代替授業として実習先教員を招聘したり、専任教員らによる領域別の講義を提供したりするなどし、一定に評価は得られたが、本研究科では実習体験を提供する重要性が改めて確認された。

後期は、第1回目の時点は、学内・学外実習が可能となった時期である。第2回目は、12月に入り新型コロナウイルス対策による心理臨床相談室閉鎖や学外実習先の一部中止措置が2回あった。後期の結果を表3-4から表3-7に示す。受講生は、各科目について授業評価を行っているため、最高・最低値も科目数によって平均値を示している。後期の特徴は、講義・演習科目は、第1回目、第2回目ともに平均は4点台半ばが増えている。とはいえ、昨年度までに比較すると若干低めであり、受講生にとっては「突然の」遠隔授業への切り替えの影響は否めない。とくに演習科目では、テキスト等が自宅にないままに遠隔授業命令となり自宅学習に大きく影響を及ぼした。類似の事態を想定しFD予算にて充たさせていただいたことは感謝している。実習科目についても数値的には、平均4点台から4点台半ばであるが、前年度までに比較すると「実習体験に満足」の最低点の平均が2点台となり、1年生は学内実習の機会が少なく、学外実習の受け入れ中止、2年生であっても学内実習の実施困難が年間通じて生じた影響によるものと考察され、前期の考察同様に、改めて臨床心理分野専門職学位課程における実習機会の提供が重要であることが考察された。

<前期> 対象は前期後期いずれも30名

表3-1. 前期講義科目における授業評価(前期は、講義科目として総括評価を実施)4科目

	第1回目		
	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5	3	4.4
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5	3	4.1
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5	3	4.3
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5	3	4.4
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5	3	4.1
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5	3	4.2

科目名：臨床心理学原論／コミュニティ心理学特論／発達障害者心理臨床論、臨床心理学入門

表 3-2 前期演習科目における授業評価(前期は、演習科目として総括評価を実施) 8 科目

	第 1 回目		
	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5	3	4.3
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5	1	4.1
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5	1	3.8
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5	1	4.2
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5	1	4.4
6. 本演習科目を総合的に 5 段階で評価してください	5	3	4.2

科目名:臨床心理査定演習Ⅰ／臨床心理面接演習Ⅰ／臨床心理関連行政論／臨床心理事例研究演習Ⅰ／総合的事例研究演習Ⅰ／学校心理臨床論／福祉心理臨床論／成人・老年期心理臨床論

表 3-3. 前期実習科目における授業評価(学内実習・学外実習科目を総括評価を実施)6 科目

	第 1 回目		
	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5	3	4.4
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5	3	4.4
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5	3	4.2
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5	2	3.8
5. 本実習科目を総合的に 5 段階で評価してください	5	3	3.8

科目名:臨床心理査定・面接実習Ⅰ／臨床心理査定・面接実習Ⅲ／臨床心理実践研究Ⅰ／臨床心理実践研究Ⅲ／臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

<後期>

表 3-4. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価(3科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.7	4.5	5.0	3.3	4.5
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.7	4.7	5.0	3.0	4.4
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.6	5.0	3.3	4.3
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.3	4.5
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.3	4.4
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.7	4.6	5.0	3.3	4.4

科目名: 臨床心理面接学原論/遊戯療法論/ストレスマネジメント論

表 3-5 後期第1～2回目の演習科目における授業評価(7科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.3	4.4
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.4	4.3	5.0	3.1	4.3
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.1	4.6	5.0	3.0	4.2
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.1	4.4
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.4	4.4
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.3	5.0	3.3	4.3

科目名: 臨床心理査定演習Ⅱ/臨床心理面接演習Ⅱ/臨床心理事例研究演習Ⅱ/総合的事例研究演習Ⅱ/医療心理臨床論/司法・矯正心理臨床論/臨床心理支援特論

表 3-6. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(4科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.5	4.4
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.4
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.5	4.5
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.4
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.5	5.0	3.5	4.5

科目名:臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ／臨床心理実践研究Ⅱ／
臨床心理実践研究Ⅳ

表 3-7. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	3.0	4.7
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	2.5	4.5
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか		(実施なし)		5.0	3.0	4.4
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	2.5	4.4
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.0	4.5

科目名:臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

2)質的結果(自由記述を中心に)

<前期授業評価アンケート結果>

ここでは、特に前期における新型コロナウイルス流行下における自由記述における遠隔授業及び代替授業を中心に結果とともに考察を加える。いずれも授業評価アンケートの自由記述欄に記載されたものである。

① 対面授業と遠隔授業について (講義科目、演習科目) ※受講生はいずれも30名

対面授業がよい	10件(講義4、演習6)
対面でも遠隔でも十分	1件(演習1)
遠隔がよかった	2件(演習2)「自分のペースで資料が読めた」
後期も対面と遠隔を組み合わせたい	2件(演習2)「(教員の)工夫がありがたい」

大半が、「対面授業がよかった」とし、一部が「遠隔授業でもよい」であった。対面授業が求められる理由は、以下の「②」と連動している。また、対面授業では可能な、何気ない受講生同士の交流が削がれることが要因の1つと考えられ、そこで確認や共有できる機会が削がれてしまっていることが想定される。逆説的には、臨床心理学という対人関係を学ぶ者としては、阻害されてしまった体験をする機会にもなったと考えられる。

② 遠隔授業の大変さ 24 件

<授業形態について> 18 件

課題が多い(特に課題提示型の授業) 5 件(講義 5)
 ビデオ疲れ・負担 4 件(講義 3, 演習 1) ⇒ 「顔出しは出欠だけにしてほしい」
 やりづらい・慣れない 2 件(演習 2)
 声が聞きづらい 1 件(講義 1)
 対面授業ならなかったはずのレポートが負担 1 件(演習)
 満足度が低い 1 件(演習 1)
 ディスカッションが少なかった 4 件(演習) ⇔ 遠隔でのディスカッションは難しい 1 件(演習)

<学習者の自身の困難さ> 6 件

学習の困難さ 2 件(講義 2)「自分で勉強するのが難しい」「各自で学習するのは難しい」
 自分の理解が不安 1 件(講義 1)
 発表内容が正しいか不安 1 件(演習 1)
 体調管理が大変 1 件(演習 1)
 対面授業と遠隔授業の切り替えが大変 1 件(演習 1)

遠隔授業の場合、よく指摘されるようにネットワーク環境が一定でない問題やその不安定性が指摘された。また、課題提示型では課題が必須とされるが、学習者にとっては「課題の多さ」が指摘された。課題提示型の要件を満たしつつ、分量等の工夫が必要かと考えられる。不慣れな中での遠隔授業のため、身体的・心理的疲れや負担感が出された。ビデオ顔出しへの負担も若干名、出された。また、全学アンケートと同じく、「自分の理解度への不安」もあった。教員の側も慣れない作業やドライアイなど身体的・心理的負担がかかっているのではないだろうか。今後に向け、遠隔授業時の顔出しの検討や遠隔授業が連続して設定されている曜日などは、休憩時間の工夫なども検討の余地と考えられる。

③ 遠隔授業への要望

配付資料等の方法を統一してほしい	2 件(講義 1, 演習 1)*	
Manaba の閲覧を期間中にしてほしい	2 件(講義 1, 演習 1)*	*同じ学生
パワポに説明がほしい	1 件(演習 1)	
対面か遠隔かの連絡を早めにしてほしい	1 件(演習)	

授業形態変更の連絡は早めが望ましいが、今期は豪雨災害や新型コロナウイルス対策による本部等からの急な通達で変更となった。今後、早い段階で緊急の事情が発生する旨の説明等が求められる。manaba の閲覧期間の延長については、可能な範囲での対応が望ましい。他方、配付資料等や連絡方法の統一については、授業担当教員の考えによるものでもあり、特に事例等を扱う場合は、守秘義務の観点から学習者の要望に全て応えることが困難である。単純に方針と統一するより、相違の意味を各授業担当者が丁寧に説明していくことが必要があり、これこそが受講生と授業担当者とのコミュニケーションに繋がる FD といえるのではないだろうか。今回は、受講生の一人が長文で複数の要求を記述している。内容を検討しつつも、実際に改善する場合場は、受講生全体とのバランスの検討が必要であろう。

④ その他の要望

レポートなどのフィードバックがほしい	1 件(講義)*	
授業の終わりを明確にしてほしい	1 件(講義)*	
課題の終わりを明確にしてほしい	1 件(講義)*	*同じ学生
授業時間内で終わってほしい	1 件(講義)	
発達の専門の先生なので体験や実践を聞きたい	1 件(講義)	

FD で一般的に指摘される項目であった。受講生全体とのバランスの検討が必要であろう。

⑤ 講義・演習科目の内容への肯定的な感想 (10 件)

資料が充実していた(講義)	意見を尊重して貰えてありがたかった(講義)
臨床心理学の知識が深まった(講義)	興味が増した(講義)
専門職としての姿勢が得られた(講義)	フィードバックがあつてよかった(演習)
論文を沢山読めた(演習)	臨床と研究の両方を学べた (演習)
勉強になりました(講義 1、演習 1)	

これらのコメントは、従来の各科目への授業評価アンケートに書かれてきたものと同様の内容である。引き続き、これらのよい点を継続していくことが大切であるといえる。

⑥ 実習科目(代替授業)

1)代替授業への肯定的な感想	17 件
教員の臨床領域の話が聞けた	10 件
学習する機会が少ない領域の話が聞けた(産業など)	4 件
代替授業へのお礼	1 件
勉強になりました	1 件
2)実習にいけなかった思い	13 件
「重点領域に行けなかった」	2 件
「実習での感覚がわかりづらい」	1 件
3)要望	
学外の先生の話も聞きたかった	1 件
回数を減らしてほしい	1 件

実習科目について、各教員及び実習先指導者による代替授業を導入した。この点については、肯定的な意見が得られた。実習委員長始めとする丁寧な企画立案及び教員の協力が実ったと考えられる。それでも、「実習にいけなかった」気持ちは当然であり、実務実践力の提供を謳う本研究科としては、実習が提供できる努力が今後も必要と考えられる。医学部医学科や保健学科等は、受け入れてくれる学外機関での実習は行い、行けない受講生には学内実習で補填し、教育学部は、通常通り教育実習を提供していた。他大学の類似専攻に加え、学内の近接領域の他部局等の情報収集を行い、検討していく必要がある。

⑦ 実習科目(ケースカンファレンスについて)

- 1) 肯定的な感想 3件
- 2) 「ケースが出来ない不安」1件
- 3) 意見要望 6件 うち同じ学生が3件
「先生の意見だけで終わってよいのか」「発表が少ない時は早めに対応してほしい」「出来ない分の代替授業とカンファレンスはどうなるのか」など
- 4) その他 : 困難を肯定的に考える姿勢 2件
「思うように行かなかった事が今後の活動に役立つと思う」
「今だからこそ学べるが多かった」など

令和2年度は、新型コロナウイルス感染対策に加え、豪雨災害などによる、突然の変更が再三、起きたが、今後も類似の事態は想定され、研究科としての方向性の策定が必要であろう。また、実習時間について勘違いをしていた受講生には、「授業としての必要な時間数」という基本的な考え方を引き続き教育の一環として教えていく必要があり、既に、9/11 実習オリエンテーション時に、実習委員長からフィードバックを兼ねた説明がなされた。

今回は、新型コロナウイルスや豪雨災害による困難を「**思うように行かなかった事が今後の活動に役立つと思う**」などの肯定的に考える姿勢が2件書かれていた。こういったレジリエンスとも言える健康的な視点を大切に受講生と共有することが、研究科全体の健康度につながるのではないかと期待される。

<後期第1回目授業評価アンケート結果>

後期第1回目授業評価アンケートでは、新型コロナウイルス感染対策については、対面授業が実施され、学内実習も可能であった時期であり、それほど多くのコメントは記述されなかった。

授業運営については、「形式」「資料」「フィードバック」等の通常重視される観点が記述されていた。事例や実践・体験などを組み込んだものは、肯定的感想が多く見られ、専門職学位課程ならではの授業の工夫が肯定的に評価されていた。

今回の試みの一つである「実践研究Ⅱ・Ⅳ」における教員が事例を発表する取り組み

は、肯定的な意見が3件あり、今後も取り組む余地があると考えられた。他方、ケースカンファレンスの授業時の「分離」については、一部とは言え、肯定的意見とそうでない意見が記述されていた。

<後期第2回目授業評価アンケート結果>

今期は、対面授業から開始したが、12月に入り突然の遠隔対応指示が通達され、共通テスト期間明けまでという長期に亘った。受講生は、院生室から必要なテキストや資料を持ち出すことが出来ないままに遠隔授業に入らざるをえなかったが、前期に比べると混乱は少なかった印象がある。これは受講生、教員ともに遠隔授業対応への覚悟や慣れもあったことが大きく、同時に、各担当教員がそれぞれに工夫して対応したことが大きかったと考えられる。とくに自由記述では、困難な状況下でも2年生は比較的実習が出来たことへの感謝が記述され、1年生では1件のみ、実習ができなかったことや実習先間での不満が書かれていたが、他の記載は実習体験できた肯定的な感想が記述されていた。

不満が起きやすい状況だからこそ、肯定的な意見等もフィードバックしていくことが全体の新型コロナウイルス対策への意識や授業改善に繋がることが期待される。

それ以外は「資料」「フィードバック」「アクティヴ・ラーニング」等に該当するものが肯定的に記述され、教員の努力の成果ともいえ、継続していただきたい点である。

FDにおける重要な観点は「個々の意見は大切に」しながらも「一部の否定的な意見に大きく左右されすぎないこと」がある。あくまで「自由記述」で「書いた学生」の声であるという限界がある。受講生の不満はもっともな面もあるが、実習委員会の尽力により、実施出来たことも多くその結果である。こういった受講生の受け止めるべき内容は受け止めつつ、実際に改善する場合には、「書かなかった学生」の思いをくみ取りながら、さらに授業改善していくことや、こういった受講生にいかに関わっていくかを研究科として共有していく姿勢が必要と考えられる。今後は類似の事態が起きることを想定し、副案を持つなど柔軟な対応が重要と考えられる。

(4) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

学生による授業評価結果の取扱いについては、令和2年度も匿名性が担保された状態で実施され、各担当教員に集計結果がフィードバックされ、各担当教員は集計結果の確認後に授業に対する自己評価と照合したうえで、改善方向及び改善策を含めた授業評価報告書の作成を行った。次いで、該当月の教授会にて授業評価アンケート結果について報告を行うことに加え、当日に開催されるFD会議において教育内容及び方法の改善について検討された。令和2年度は、自由記述欄での意見を含めた授業評価結果について、FD委員長が質的に分析した資料を作成し、全教員で受講生からの意見の意味背景を検討・共有し、今後の学生の教育ニーズに応じた授業科目の内容検討及び改善について協議するなど、ファカルティ・ディベロップメントに活かすことができた。

(5)臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッション

(改善点・特筆すべき取組み 3)

本研究科では、専門職大学院における臨床心理実習の評価方法として、平成20年度より、九州大学との共同による専門職 GP として「臨床心理実習における客観的評価の方法の構築」と題する臨床心理実習到達度チェックシステムを導入し、各セメスターにおいて臨床心理実習の客観的評価を実施してきたが、これらの評価システムは学生や教職員の負担が大きかったため、平成23年度～平成25年度の間中断された。しかしながら、臨床心理実習において、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ教員が学生に対して適切なフィードバックを行える形での教育方法の実践は、実務実習教育上、重要であることが再確認されたことから、平成26年度より臨床心理実習到達度チェックシステムの中から、学生が学内学外実習体験を指導教員と共有することを目的としたフォローアップセッションの部分が再開されることとなった。令和2年度も、より客観的な臨床心理実習評価の実現とそれを反映した教育方法の改善を目指し継続された。

なお、この試みは臨床心理実習科目の GPA 導入を視野に入れた新たな評価方法の構築可能性を検討することを目的としていたこともあり、これまでセルフモニタリングの機会として学生自身による臨床心理実習到達度チェックシートにもとづくポートフォリオの作成を義務付けていたが、こうした作業自体に負担を感じている学生もいるため、平成29年度からポートフォリオ作成については、各臨床ゼミの方針に委ねることとなった。そのため、本年度も統計的な数値化は行わず、質的な側面を重視した形のフォローアップセッションを実施し、FD会議での共有を図った。令和2年度は、前期は、前述の通り、実習自体が滞ったため中止せざるを得ず、後期の2月によりやく再開となった。結果は、FD・実習委員会合同会議にて報告され、受講生の声が共有され、改善すべき点を話し合った。

本研究科の学生たちは自分の主体的な到達度評価を行うための目標設定、例えば、「今期の目標」、「成長した点」、「課題」、「フォローアップセッションでの気づき」を自身で記入するとともに、実習終了後には学生自身による臨床心理実習到達度チェックをもとにポートフォリオとして記入することで、実習においてどのような姿勢や観点が必要かと言った実習に臨むに必要な観点を涵養するとともに、2年間の成長を自己点検する作業を行っている。このような形態による指導教員とのフォローアップセッションを通して、学生たちは相互的にその教育効果を確認し、自身の臨床力を向上させていくことが期待される。このような見地から、学生自身による臨床心理実習到達度チェックにもとづくポートフォリオ作成を再導入することの意義については、本研究科の組織的なFD活動の取組みの一環として、今後も継続的に検討を重ねていくことが重要である。

4 入学者ニーズ調査(在籍生アンケート)(特筆すべき取り組み 4)

本研究科は、臨床心理士養成に特化した専門職学位課程である。国家資格である公認心理師ができたことを契機に、改めて入学者のニーズ調査が必要と考え、遑ってではあるが、在籍生対象にアンケートを実施した。その結果、30名中27名(90%)の回答が得られた。結果として、志望・受験の理由からは「(心理士)資格取得のため」が13名(48.1%)、「専門職大学院だから」7名(25.9%)「実務や実習経験が積めるから」7名(25.9%)と本研究科の理念や方向性がよく知られていることがわかった。項目6以降は、本研究科の理念と入学生のニーズがマッチしていることが示唆され、HPや入試説明会の効果といえる。窓口対応も高評価で、広報としては圧倒的にHP等ネットワークが情報収集の手段として使われており、今後の入試広報等に繋がるものと考えられた。

回答期間:2021年2月26日(金)~3月3日(水)回答数 :27件(回答率 90%)

項目1 本研究科を志望・受験した理由をご記入ください。複数、理由を記入して構いません(回答 27)

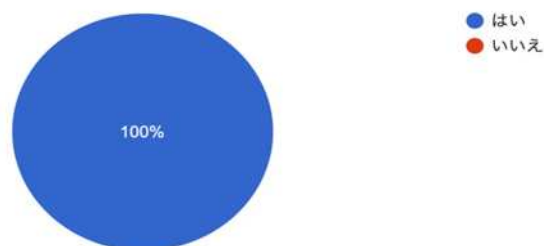
- * 資格取得 13名 うち、臨床心理士になりたいから 10名
 臨床心理士と公認心理師二資格 2名 「役に立つ心理士」1名
- * 専門職大学院だから 7名 * 実務や実習経験 7名
- * 地理的要因 3名 * 教員や分野 3名
- * その他 1名「先生の数が多い 国公立である 院生の数が多い」

項目2 本研究科をどうやって知りましたか。(回答 27)

- * HP(ネット含む)12名 * 先輩 5名 * 大学の先生 2名
- * パンフレット1名 知人1名 鹿児島大に通っていた1名 説明会1名 知っていた1名

項目3-1 入学前に本研究科のホームページは見ましたか。

項目3-1 入学前に本研究科のホームページは見ましたか。
27件の回答



項目3-2 HP には知りたい、役に立つ情報がありましたか。それはどんな項目ですか。また不足している内容があれば記述してください。(回答 27)

<役に立った>

* 教員情報 6名 * カリキュラム 5名 * 入試関係 4名 * 公認心理師対応 1名
* 「役に立った」など HP の感想 3名 * 実習先がわかった 1名

<欲しい情報>

* 実習関係(内容、実習先等)4名 * 就職先 2名 * 授業の内容 2名
* 教員の研究内容 2名 臨床ゼミの内容 1名

項目4 本研究科の資料請求等の内容や事務手続き(回答 12)

* 肯定的(スムーズだったなど) 10名
* 入試時期が遅い1名、履歴書サイズの証明写真を撮れるところがない1名

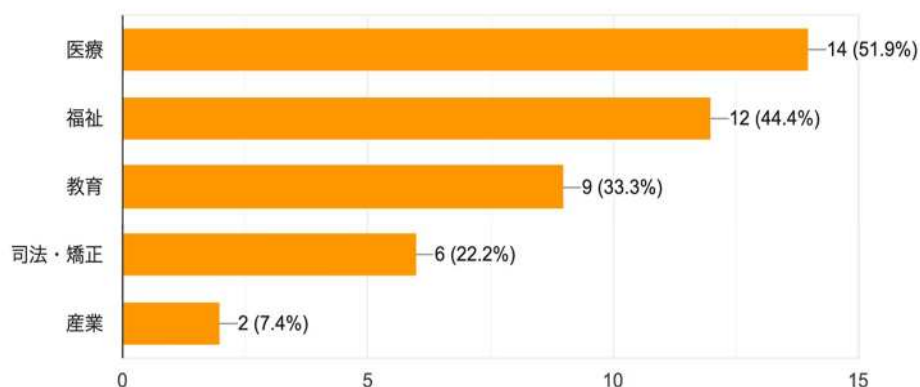
項目5 本研究科以外に大学院を受験されましたか。どこか差しさわりがなければ具体名を教えてください。また、合格通知後、本研究科を選択するにあたって、何が決めてとなりましたか。(回答 16)

* 受験していない 8名(50%)
* 九州の A 大学 8名(50%) 関西の B 学院大学 1名 東海の C 大学 1名

<決め手>

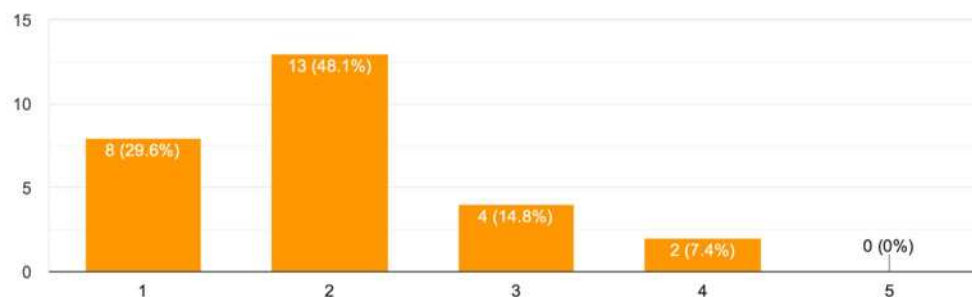
* 学費 2名、SV が無料、
* 就職・資格取得実績 1名、教員 1名、合格 1名、鹿児島に就職 1名

項目6 入学前、臨床心理士としてどのような職域に就きたいと考えていましたか(複数回答可)



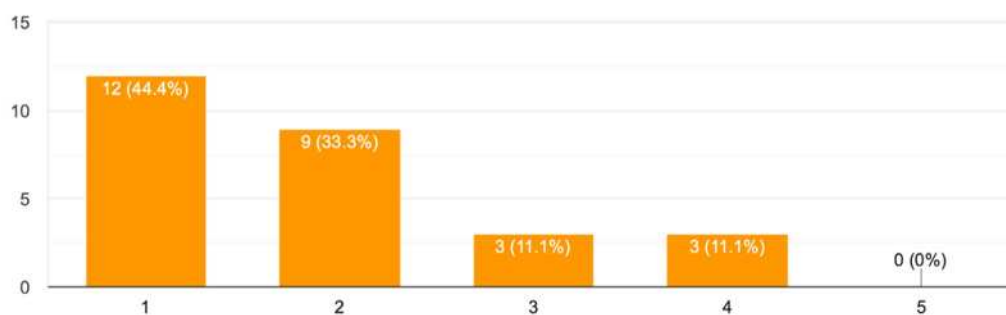
項目7 入学前、本研究科のカリキュラムは魅力あるものでしたか。(回答 27)

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない



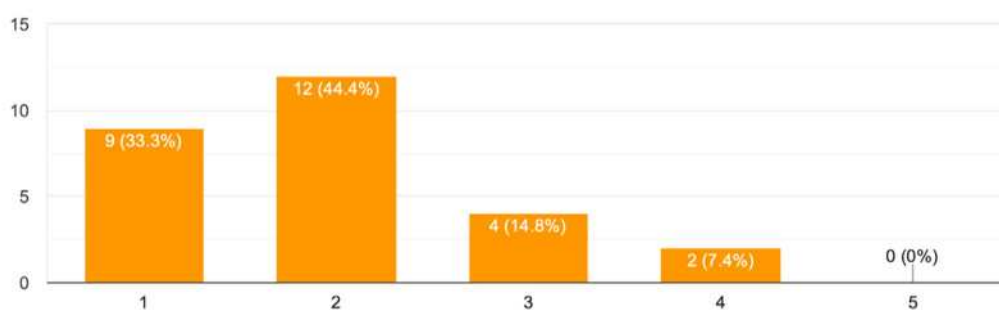
項目8 入学前、本研究科の実習(学内実習・学外実習)は魅力あるものでしたか。(27 回答)

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない

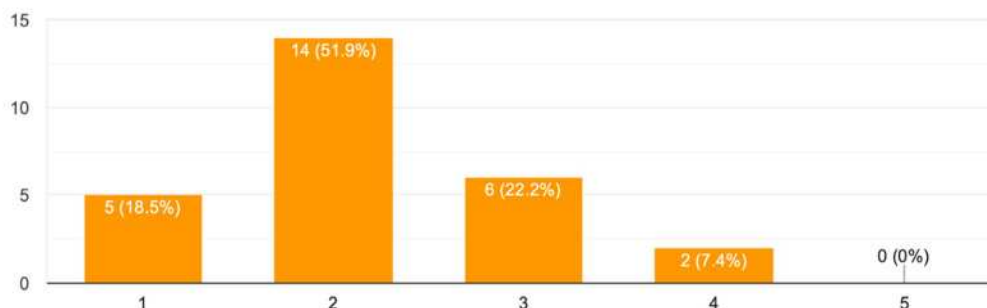


項目9 入学前、本研究科の教員(その研究領域)は魅力あるものでしたか。(27 回答)

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない



項目10 入学前、鹿児島大学のキャンパスはどのくらい魅力を感じましたか(駅からのアクセスの利便性など含む)。(27件の回答) 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない



5. 臨床心理学研究科のFD活動の特徴(改善点2)

(1) 授業評価アンケート結果を踏まえた授業改善に向けての工夫

先述したように、本研究科では「学生による授業評価アンケート」結果での意見を授業改善に活かすために、各セメスター第1回目のアンケートを7回目の授業で、第2回目のアンケートを14回目の授業において実施し、翌回の第8回目と第15回目には、受講生の意見に対するフィードバックと改善への工夫を各教員が授業内で行うことを組織的な取り組みとして実施している。令和2年度前期は実施を試みては断念することが続いたが、実習科目に関する代替授業への受講生の声を集約すべく工夫し、受講生の負担軽減をはかり、包括的な方法で1回のみ実施し、結果は前述したとおり授業改善に役立つものとなった。

このように本研究科での「学生による授業評価アンケート」は教員にとっても受講生の体験を把握し、授業改善に生かす貴重な根拠のひとつとなっていることが確認された。後期は、例年通りの実施ができたとはいえ、授業方法は対面と遠隔が混在したもので前年度との包括的な比較検討が必要であった。

再掲になるが、「学生による授業評価アンケート」の活用に関する具体的な改善策としては、アンケート結果を授業担当教員にフィードバックし、授業評価報告書を提出することだけに留めず、該当月の教授会にて全教員でアンケート結果に関する検討を行うことで、教育内容及び方法の改善の検討をタイムリーに行うことができていることが大きい。さらに、自由記述欄における受講生からの意見を含めた授業評価結果については、全教員によるFD会議だけでなく、実習委員会と合同で検討を行い、学生の教育ニーズに応じた授業科目の内容検討および改善へと繋げる努力を行っている。

(2) 臨床ゼミ指導教員によるフォローアップセッション(特筆すべき取り組み4)

臨床心理実習をより充実したものにするために、実務家教員による実習指導だけでなく、各臨床ゼミ担当教員による所属学生個人または集団を対象としたフォローアップセッションをルーティーン化した。これによって、学生の臨床実習に伴う不安が軽減され、充実した学

外及び学外実習を行えただけでなく、臨床心理士としてのアイデンティティと実践力の基盤づくりが可能となったのではないかと考えられる。

また、年度当初に主体的な到達度評価を行うための目標設定と課題を学生各自が明確にし、それをポートフォリオ化している。これによって、専門職大学院に在籍する2年間の自己成長の確認をより効果的に行うことができたものと考えられ、今後に生かしたい。

3) 教員対象の研修会の充実（改善点3）

本研究科では、学外講師によるFD研修に加え、FD委員が全学・学外で研修した内容をFD会議で共有することが定例化している。令和2年度は、出張と伴う講演や会議への参加は困難となったが表5-1に示すように、学外講師1回、研究科内講師3回という研究科のニーズにマッチした内容が研修会として4回実施された。

表5-1 臨床心理学研究科内で開催された研修会(他の議題との包括開催もある)

月日	テーマ	講師
4月15日	認証評価基準の理解のポイント	中原睦美氏(研究科教授)
5月27日	質的研究における研究倫理	中原睦美氏(研究科教授) ※資料利用については東大病院の了承を文書で交わした。
10月21日	「新型コロナ禍における学生・教職員のメンタルヘルス—FD/SD 研修会」赤崎安昭先生の講演をもとに研究科に必要な観点を提示	中原睦美氏(研究科教授) ※資料利用については赤崎安昭先生の了承を得た。
12月2日	「質的研究における研究倫理」講師:立命館大学教授	川野健治氏(立命館大学教授)

6 新型コロナウイルス感染対策下における本研究科のFD活動まとめ:まとめと今後の課題(改善点4)

FDの有用性は、年々評価が高まり、とくに令和2年度は、新型コロナウイルス感染対策下において授業方法や内容も大幅な変更が迫られた事実がある。そのため、例年以上に、授業提供している内容の質的検証の機会として、受講生の声を集約し授業改善につなげていくFD活動の重要性が確認された一年でもあった。以下に今後の課題(方向性)を記す。

(1) FD会議定例化の維持:

平成27年度より教授会日の午後と設定したことで、計画的なFD会議開催が可能となっている。この点は、今後も維持継続していきたい点である。

(2) 学生アンケート実施の定例化:

在籍生アンケートや修了生アンケートは、授業改善に向けて重要な取り組みの一つであるが、多忙な用務の中では、不定期な実施となりがちである。受講生にとっても、取り

まとめる教員にとっても適切な時期に無理なく、計画的にアンケート実施を行うことが、授業改善には重要であり、今後の就職先アンケート実施にも繋がっていくと期待される。また、今後の認証評価や機関別評価などへの貴重な情報蓄積に繋がり、それが教育改善に還元されることが期待される。

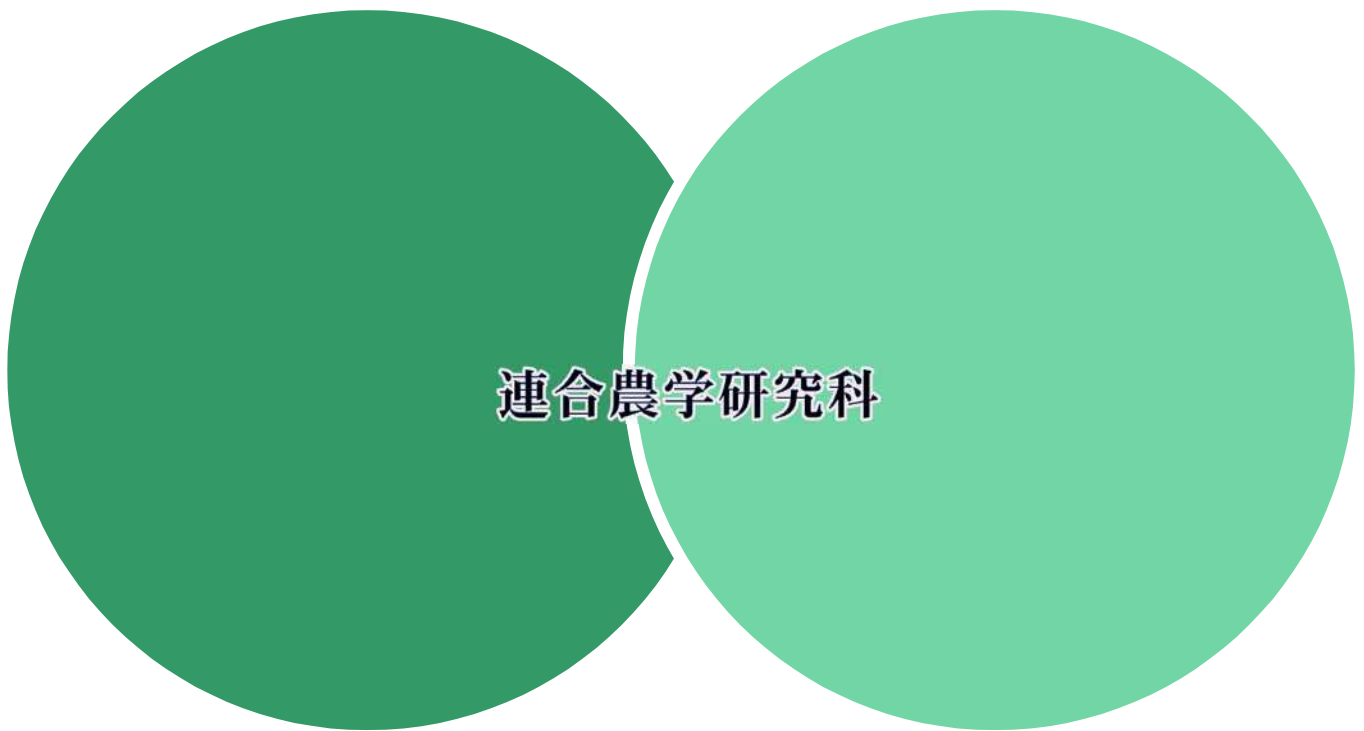
(3) 実務家教員対象のFD研修会の開催：

本研究科は、小さな部局であり実務家教員対象のFD研修会といっても、実質的には全教員参加となる。しかし、実務家教員対象として開催することで、教育研究教員にとっても再確認・再学習となることが期待され、何より、臨床心理分野専門職大学院に対して文科省から課されているタスクでもある。令和2年度は2回企画したが中止となったが、令和3年度には開催が計画されている。

(4) 授業参観の再開：

研究科設置直後は、数年ほどは開催されていたが、附設心理臨床相談室活動及びその指導等で教員は多忙のため時間割編成はスライドしており、実施困難が続いている。守秘義務の関係からは、授業公開及び授業参観は、研究科内のみとせざるをえない実状もある。令和2年度以降、退職教員の後任補充がなされなかったことでさらに教員の忙しさが加速し、授業参観設定の困難さが予測される。将来的な再開実施に向け、検討に着手していく必要がある。

本研究科におけるFD活動は、臨床心理分野専門職大学院として、高度専門職業人である臨床心理士養成を主眼とする上でも重要な活動である。大学教育にあたっては、今後もさまざまな社会変動への柔軟な対応が求められるであろう。それゆえ、受講生の体験に着目したFD活動を継続し、計画的かつ柔軟性のある授業改善への取り組みが必要と考えられる。



連合農学研究科

F D活動報告書

(令和2年度)



鹿児島大学大学院連合農学研究科

令和3年3月

大学院連合農学研究科FD活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究科（連大）は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学が連合した農林水産学系の博士課程大学院である。連大では、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的とし、構成大学が連合して多彩な教員組織と教育研究体制を整え、地域社会や世界で貢献する博士人材を養成している。また、社会人並びに留学生を積極的に受け入れており、九州・沖縄からアジア、アフリカを見据えた農林水産学の教育研究の中核となるとともに、農林水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、昭和63年（1988年）に設立されたが、平成21年（2009年）に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。令和2年4月1日現在、日本人学生57名、外国人留学生52名、計109名が在籍している。

博士の学位（農学、水産学、学術）は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成学生支援セミナーや国際農学特別講義などを通じて大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義（一般セミナー）の実施や、多地点制御遠隔講義システム（SINET）を用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。特に、SINETによる「農学共通講義（英語）」では、全国6連大から選出された教員（鹿児島連大からは2名選出）による先端研究に関する講義を英語で実施している。このセミナーでは、全国6連大の様々な地域の学生と同一の講義を共有することで、専門知識に加えて農林水産学における諸課題を俯瞰することが可能となっており、他に類を見ないユニークな教育システムとして高く評価されている。このような連大ならではの教育連携をさらに強固にするために、全国6連合農学研究科の博士課程学生の教育・研究指導委託に関する覚書を平成29年（2017年）10月に取り交わした。

本研究科では、学生1人に対し主指導教員1名、副指導教員2名の計3名による指導体制を取り入れているが、副指導教員には他の構成大学・研究科の教員を原則含めており、学生の研究指導においても「連合」する体制を構築している。また、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課すことで、学位取得へ向けた研究の進捗状況の検証を実施している。

FD活動に関しては、平成19年度に代議委員会の傘下としてFD委員会が設けられ、農学特別講義（一般セミナー）を中心とした授業アンケートや修了生・在学生アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

令和2年度の活動報告では、主に、農学特別講義（一般セミナー）、人材養成学生支援セミナーⅠ、分野別セミナー、修了生・在学生を対象としたアンケート、及びティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動について取りまとめている。

2. 農学特別講義（一般セミナー）

令和2年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義（一般セミナー）」が、令和2年11月4日（水）から11月6日（金）までの3日間開講された。開講趣旨は、本連合農学研究科に在籍する学生に本学の教育理念に基づき、幅広い専門領域の先端知識に触れるとともに、各学生によるプレゼンテーション、専攻セミナーなどを通じて発表能力、課題探求能力、創造性を養うことにある。本研究科開設以来、各構成大学の輪番制で継続実施されているが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策により初めてオンラインでの実施となった。内容は、外部から招聘した講師による講義4コマと、学生による「専攻セミナー（プレゼンテーション）」で、参加学生数は60名だった。

初日：11月4日（水）

初日は13時から受講受付ののち、13時30分から開講式が行われた。総合司会と進行は、本講義全体を通じて三好和睦副研究科長により執り行われた。開講式では、寺田竜太連合農学研究科長による挨拶と、三好副研究科長から日程と注意事項が説明された。

続いて14時から15時30分まで、東京からのWebExを利用したセミナーAが開催された。講師は東京大学大学院農学生命科学研究科の堀内裕之博士で、講義題目は「糸状菌における形態形成とシグナル伝達」であった。発酵食品の製造に欠かせない麹菌のモデル糸状菌が糸状の独特な細胞の形を環境に応じてどのように作り上げているかを中心にご自身の先端研究情報について熱心に丁寧に英語で説明していただいた。発酵食品製造にとって扱いやすい糸状菌の育種や逆に有害な糸状菌の駆除について手がかりを与える有益な情報提供であった。コーディネーターは、佐賀大学農学部 後藤正利代議委員。

二日目：11月5日（木）

前日に引き続き、9時から10時30分まで、セミナーBとして、弘前大学農学生命科学部教授、佐野輝男先生による講義「ウイロイドー最小の病原」が対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で行われた。先生は令和2年度に日本学士院賞を受賞され、定年前の最後の年にも関わらず在職大学以外で鹿児島大学大学院連合農学研究科を選び最後の講義をして戴いた。連大生としても貴重な講義となった。これまでの膨大な研究業績に基づいて、最小の病原であるウイロイドについて、素人にでも分かるように丁寧にまた情熱を込めて講義をしてくださり、受講生の多くがウイロイドの世界に引き込まれた90分間であった。初めてウイロイドについての講義を受ける国内外の学生が多かったが、熱心な質問が数多く出されたために議論も充実しており、時間が足りなくなった。質問は、会場からだけでなくオンラインでのコメントとしても多く寄せられた。コーディネーターは、佐賀大学農学部 大島一里代議委員。

続いて、10時40分から12時10分までセミナーCが実施された。宮崎大学農学部准教授、田岡洋介博士よりご講演「水産増養殖におけるプロバイオティクスの応用」をいただいた。プロバイオティクスが養殖魚介類の免疫賦活やストレス耐性の付与に寄与するメカニズム解明に関するご自身の研究に加え、生物多様性と病原性ウイルスのパンデミックとの関係、腸内細菌とヒトの神経発達障害や認知障害などとの関係など、幅広い話題提供をいただいた。参加学生は、本講演を通し、観察された結果に満足するのではなく、そのメカニズムを知ることが重要であること、一見エラーと思える結果、現象に新しい発見の可能性があることを学んだことと思われる。コーディネーターは、鹿児島大学水産学部吉川毅代議委員。

2日目の午後は13時40分から専攻セミナーの1年生プレゼンテーションが行われた。ここでも例年とは異なりWebExによる開催となった。全体を2グループに分け、Aグループは15名、Bグループは16名の報告があった。持ち時間は、発表8分、質疑応答2分の一人10分であったが、なかなか時間通りに終了する報告は少なく予定通りにはいかなかった。PPTの共有設定がうまくいかなかったり、発表時間をオーバーしたり、質問への回答が長くなったり、と理由は様々である。ただ、こうした方法による発表が初めてだった学生も少なくなかったようなので逆に良い経験になったといえるかもしれない。

セミナーの後は例年であれば懇親会あるいは関係施設見学が開催されるのだが、今年は遠隔開催の為それぞれのグループの最終発表が終われば解散であった。発表会の中身に関しては例年と比べて遜色の無いものだったが、やはり一堂に会してセミナーが実施できなかったことは、他大学に所属する学生間の交流が出来なかったという点でパンデミックによる負の影響が出たといわざるを得ない。

三日目：11月6日（金）

最終日はまず、午前10時から11時半まで、国立研究法人国際農林水産業研究センター主任研究員の辻本泰弘先生による「Exciting field research and challenge for sustainable crop production in Africa」のセミナーが実施された。アフリカでの長期間にわたる滞在から得た経験に基づくフィールド科学の魅力を存分に披露していただいた。また、社会実装を意識した数多くの開発技術についての紹介は、連大生の今後の現場研究に大いに役立つことと期待したい。コーディネーターは、鹿児島大学農学部坂上潤一代議委員。

午後は13時から16時まで、WebExを利用した2年生の専攻セミナーが行われた。生物生産科学、応用生命科学、農水圏資源環境科学の3専攻を2つのグループに分け、それぞれWebExで実施した。事前に学生から提出された要旨を元に各自の発表が行われた。オンラインのプレゼンテーションということで、接続がうまくできずに戸惑う学生もいた。進行は代議委員により行われ、各グループとも2つのセッションにわけ、10分間の休憩をはさみつつ実施された。発表は1名当たり10分の持ち時間で自己紹介、研究紹介、今後の研究などを発表し、参加学生や教員からの質問やコメントを受けた。

閉講式は三好副研究科長の司会進行により執り行われ、寺田連合農学研究科長の閉講の挨拶をもって、すべての日程を終えた。

2020年度 農学特別講義(一般セミナー)時間割(日程表)

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
11/4(水)	13:00 13:30 14:00 15:30									
					受付	開講式	セミナーA 「糸状菌における形態形成とシグナル伝達」 堀内 裕之 東京大学大学院 農学生命科学研究科			
11/5(木)	9:00 10:30 10:40 12:10 13:40 16:50									
	受付	セミナーB 「ウイロイドー最小の病原」 佐野 颯男 弘前大学 農学生命科学部	休憩	セミナーC 「水産増養殖におけるプロバイオティクスの応用」 田岡 洋介 宮崎大学農学部 海洋生物環境学科	昼食		専攻セミナー (1年生プレゼンテーション)	休憩	専攻セミナー (1年生プレゼンテーション)	
11/6(金)	9:30 10:00 11:30 13:00 16:10									
	受付		セミナーD 「フィールド研究のわくわく〜アフリカでの作物安定生産への挑戦〜」 辻本 泰弘 国際農林水産業研究センター 生産環境・畜産領域	閉講式	昼食		専攻セミナー (2年生プレゼンテーション)	休憩	専攻セミナー (2年生プレゼンテーション)	

令和2年度「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」参加学生へのアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：60名 アンケート提出者：59名 アンケート回収率：99%〕

令和2年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

・セミナーの理解度について

〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC	セミナーD
ほぼ理解できた	15名 (26%)	25名 (43%)	30名 (51%)	40名 (68%)
半分程度理解できた	38名 (64%)	32名 (54%)	29名 (49%)	19名 (32%)
理解できなかった	6名 (10%)	2名 (3%)	0名 (0%)	0名 (0%)

・セミナーの企画・運営等について

〔回答項目〕	日程（時期）	日程（日数）
良い	53名 (90%)	57名 (97%)
悪い	1名 (2%)	2名 (3%)
その他	5名 (8%)	0名 (0%)

・専攻セミナーについて

〔回答項目〕	グループの分け方
良い	55名 (93%)
改善すべき	4名 (7%)
その他	0名 (0%)

・専攻セミナーについて

〔回答項目〕	1年次 プレゼンテーション	2年次 プレゼンテーション
意義がある	43名 (73%)	52名 (88%)
少しは意義がある	15名 (25%)	6名 (10%)
その他	1名 (2%)	1名 (2%)

①セミナーの理解度について

参加者から「非常に勉強になった」、「新しい発見があり興味深かった」という意見が聞かれる一方で、「専門外のため予備知識がなく、ついていくのが大変だった」との意見もあった。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」については、90%以上の学生から「良い」との評価を得られた。

③専攻セミナーについて

専攻セミナーは、「初めてのオンラインでの開催で仕方がない面もあるが、発表時間は厳守させたほうがよいと感じた」、「今後もオンラインで開催するのであれば、ネットワーク環境差の是正や終了時間が大幅に遅れないようにするなどの工夫・対策が必要だと感じた」等の意見があった。

④セミナー全般について（学生の意見・感想）

- ・1年に一度は顔を合わせられる機会が欲しい。
- ・オンラインでの開催も有意義ではあったが対面がより望ましいと思う。
- ・中止ではなく、オンラインでの開催ができてよかったと思う。
- ・オンラインのほうが研究や論文執筆の妨げにはならない点ではよいと思った。
- ・次回もオンラインならば、2年次プレゼンテーションはポスター発表にするほうが良いと思う。
（オンラインの学会も行われているので。）

次年度の開催においては、今回のアンケート結果を踏まえて、検討していくこととした。



講義の様子



質疑応答

3. 人材養成学生支援セミナー I

「人材養成学生支援セミナー I」は、大学・研究所・企業等で活躍中の方々を招き、企業や社会でどのような人材が求められているかなど、今後の研究者・指導者としての道をひらくことを目的としており、今年度は令和2年12月16日（水）に各大学をSINETで結んで開講された。例年は各大学に講師をお招きして講義をしていただくが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、一部の講師の先生方には所属機関から講義をしていただくこととなった。セミナーは4つの講義と質疑応答からなり、その概要は以下のとおりである。

講演1 堀田治邦氏（北海道立総合研究機構 農業研究本部 花・野菜技術センター）

題目：診断から始まる農業病害虫の実用研究

本講演では、最初に過去の歴史の中で大飢饉をもたらしたジャガイモ疫病、次いで北海道における疫病対策や現在問題となっているその他のジャガイモ病害虫についてお話しいただいた。さらに診断を受けて病原を明らかにする過程や、防除技術の提案まで取り組んだ事例を紹介していただいた。以上は、生産現場と密接につながった試験研究を感じ取れる内容となった。特に研究を進めるに当たって、農業関係者との繋がりが重要であることを、示唆されたお話でもあった。最後に、道総研農業研究本部の紹介を含めて、「研究を志す若き諸君へ」という熱いメッセージを受講生に贈られた。

講演2 藤枝繁氏（鹿児島大学 南九州・南西諸島域共創機構 産学・地域共創センター 連携推進部門）

題目：地域課題解決のための研究シーズの活用

本講演では、藤枝先生のご専門である漂着物学について、海洋ゴミとそのゴミによる海洋環境汚染の改善に関するお話をいただいた。そのご研究の中で地域住民、行政、NGO、漁業者や民間企業とのネットワークを構築していく取り組みについてもご紹介いただいた。研究者コミュニティの枠を超え、多様

なバックグラウンドを持つ方々と交流を持ち協働することの意義について、実際の活動例から理解する貴重な機会となった。

講演 3 植田啓一氏（沖縄美ら島財団総合研究センター動物研究室兼水族館事業部 動物健康管理室）
 題目：水族館における獣医師の役割

本講演では、沖縄美ら海水族館で獣医師として従事されている植田先生から、水族館で行われている様々な事例について、写真や動画を用いてご紹介いただいた。画像診断機器による確定診断、外科手術の実施、人口尾びれの作成とそれを用いた理学療法の実施、マンタの水中エコー検査など、水族館における初の試みについてご講演いただいた。獣医師の立場ならではの事例を豊富に交えた内容で非常に興味深く、学生からも多くの質問が出ていた。

講演 4 谷川俊祐氏（熊本大学 発生医学研究所 腎臓発生分野）

題目：多能性幹細胞から腎臓を作る～臓器移植に依存しない治療法の開発を目指して～

本講演では、生命の維持に必須の臓器である腎臓をテーマにご講演いただいた。腎臓はほぼ再生しない臓器であるため、現在は臓器移植法が重要な人命救済法であるが、谷川先生が所属する熊本大学発生医学研究所腎臓発生分野は、世界で初めて多能性幹細胞から腎臓組織を作ること的成功しており、複雑な構造を持つ腎臓組織を作ることほどのようにして実現されたのか、さらにそれをどのように医療へ応用するかを、最新の技術と共にご紹介いただいた。連大の修了生でもある谷川先生のご講演は、後輩の学生達に非常によい刺激となった。

人材養成学生支援セミナー I 2020 日程表
 Human Resource Development Seminar I 2020

8:50	9:00	10:30	10:40	12:10	13:30	15:00	15:10	16:40
12月16日 (水)	開講挨拶	講義 1	休憩	講義 2	昼食	講義 3	休憩	講義 4
		利村 八功二 堀田 治邦 地方独立行政法人北海道立総合研究機構 農業研究本部 花・野菜技術センター専長		フジエガ シノブ 藤枝 繁 鹿児島大学 南九州・南西諸島域共創機構 産学・地域共創センター 連携推進部門特任教授		ウエガ ケイ子 植田 啓一 (一財)沖縄美ら島財団総合研究センター 動物研究室 兼 水族館事業部 動物健康管理室長		タニガリ シュンスケ 谷川 俊祐 熊本大学 発生医学研究所 腎臓発生分野講師
琉球大学		筑波大学		鹿児島大学(水)		琉球大学		鹿児島大学(水)

4. 分野別セミナー

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。令和 2 年度は、1 件の分野別セミナーが開催された。

(1) セミナー名称：応用生命科学専攻 分野別セミナー（農芸化学）

開催日時：令和 3 年 2 月 26 日

会 場：鹿児島大学農学部共通棟 204 講義室と ZOOM のハイブリッド開催

セミナー1として片山 高嶺先生（京大院生命）、セミナー2として隅田 泰生先生（鹿大院理工）をお招きして講演を開催した。次に、学生による口頭発表として佐賀、琉球、鹿児島島の 7 名の連大学生と 1 名の連大進学を希望する修士学生による口頭発表と質疑応答を行った。

著名な講師による講演を聞くことにより、より専門性の高い知識を連大学生とその指導教官に提供することができた。また、学生発表においては、口頭発表により研究成果の発表の場を提供できたと共に、連大学生の発表スキルの向上が得られた。また、より専門性の高い議論を行うことで、より詳細な技術

的なことや最新の情報を交換することができ、学位論文の作成にむけた実験により直結した情報を得ることができた。また、修士学生を参加させることで、連大への進学のもち付けになった。

5. 修了生・在學生を対象としたアンケート

例年、修了生を対象としたアンケートを実施している。

これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成24年度からは、Webによる入力方式で行っている。

さらに、平成25年度からは在學生へのアンケートを開始した。これは、FD委員会において、現在連大で学ぶ学生から一番身近な現場の声を聞くことで、より学生の声が反映されるのではないかとの見解から、実施を決定したものである。

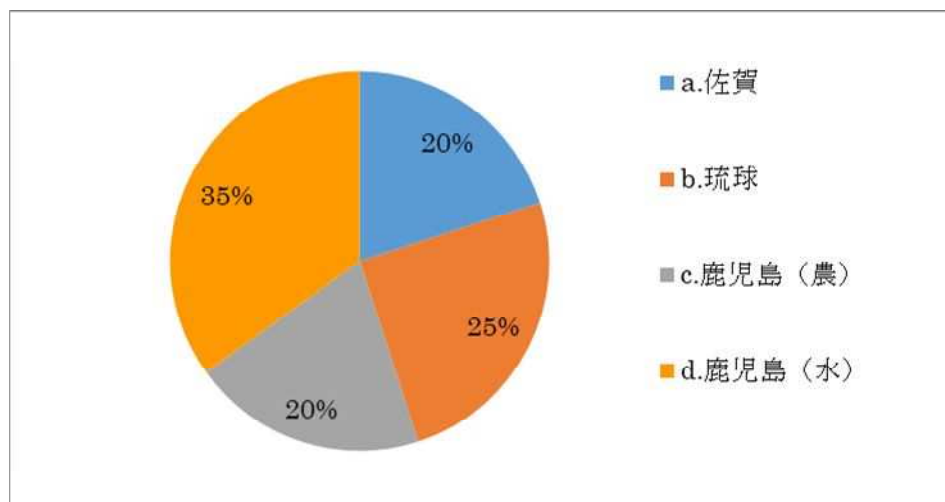
(1) 令和2年度修了生へのアンケート集計結果

令和2年9月修了生4名中、回答学生4名（回答率100%）

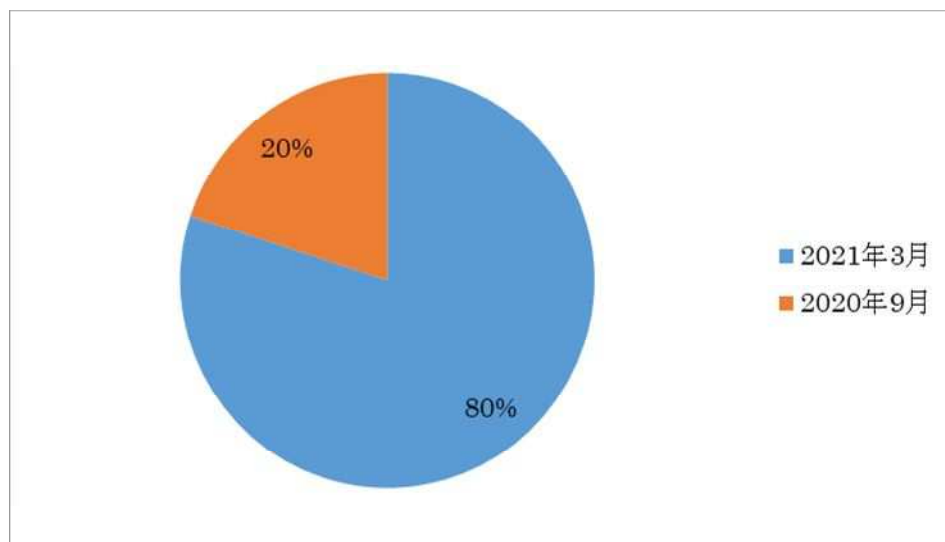
令和3年3月修了生17名中、回答学生16名（回答率94%）

(以下アンケート項目より一部抜粋)

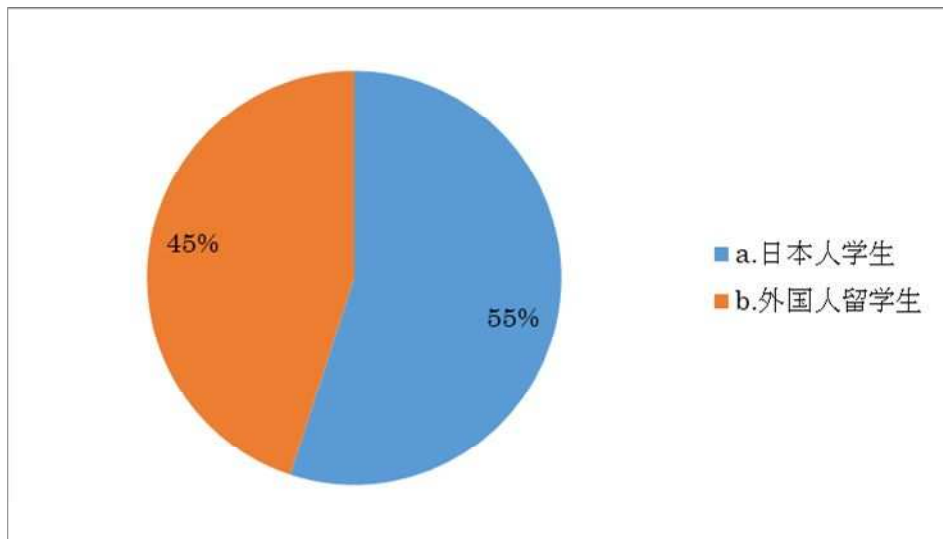
1. 所属構成大学



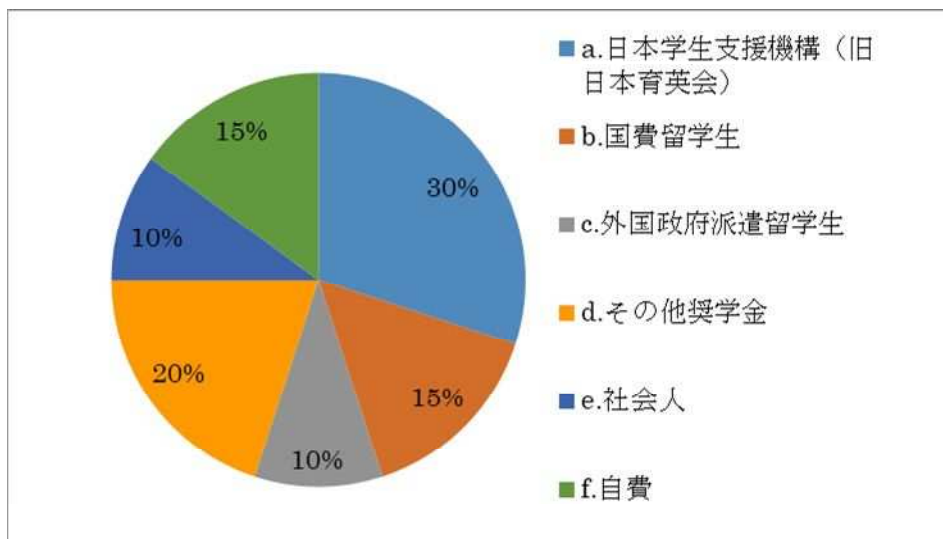
2. 修了年月



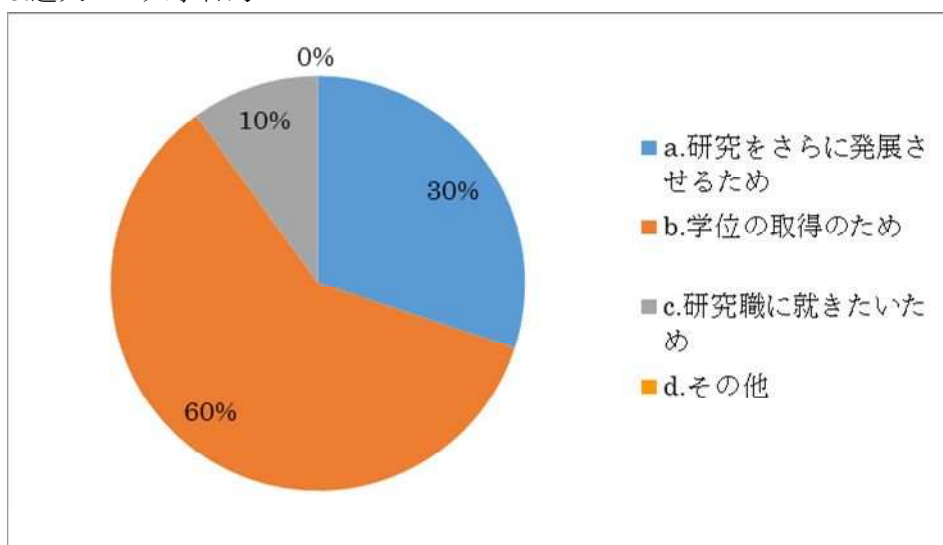
3.日本人学生あるいは外国人留学生



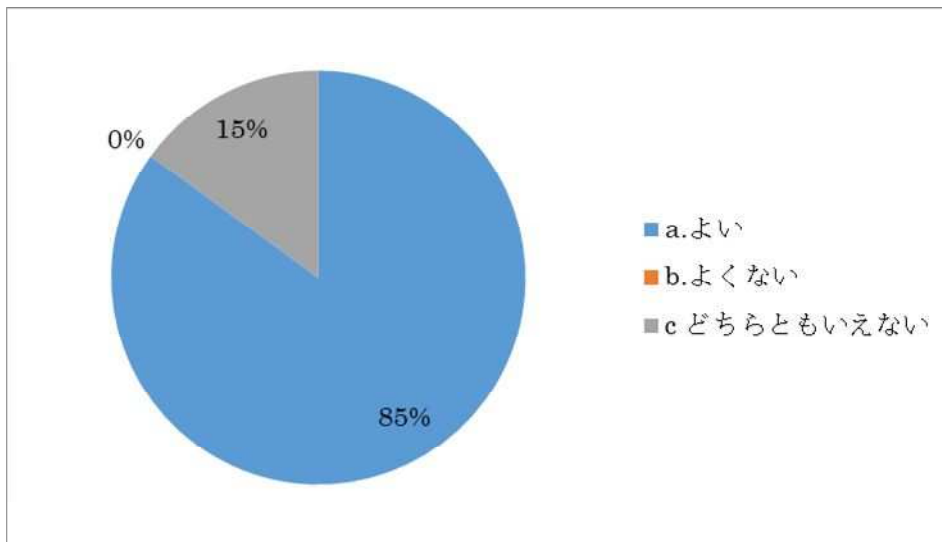
4.奨学金受給状況



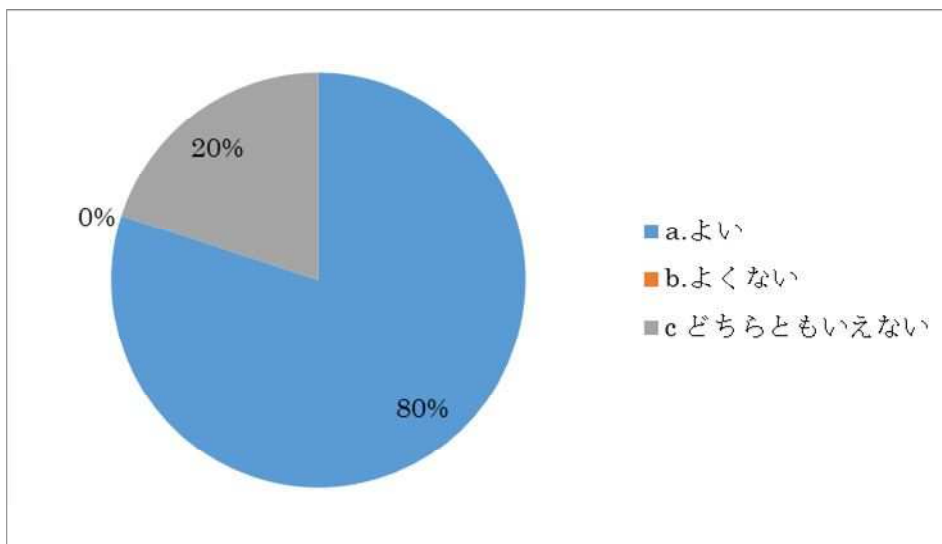
5.連大への入学目的



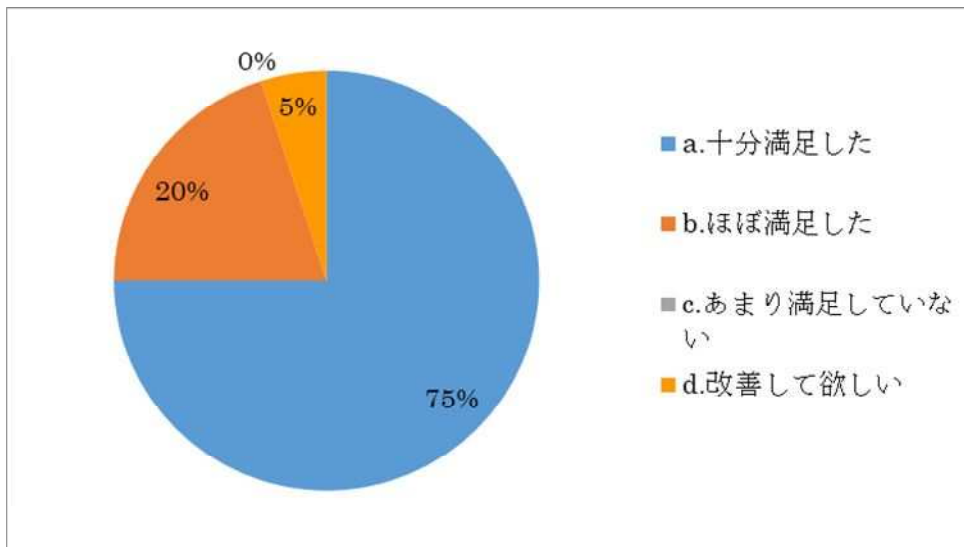
6.農学特別講義（一般セミナー）の内容・方法について



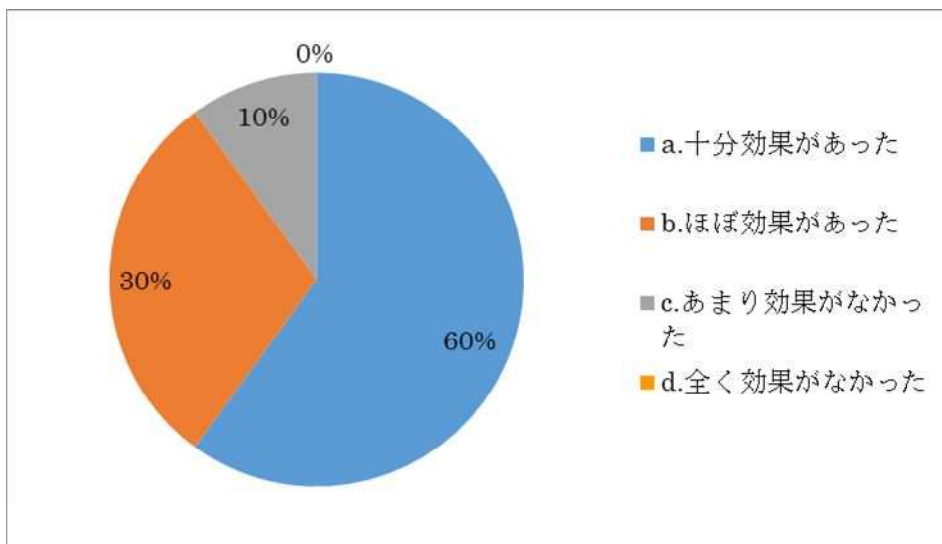
7.専攻別講義・特論の内容・方法について



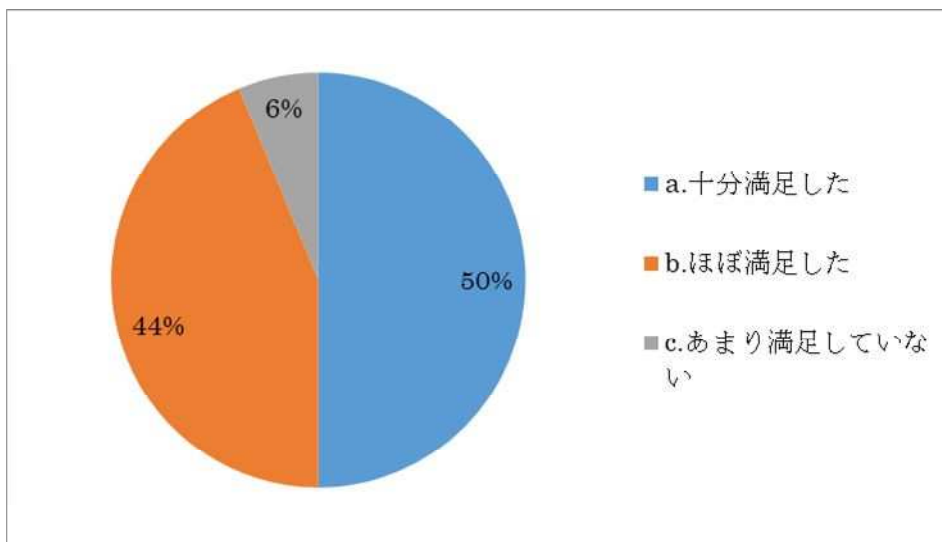
8.全体的に見て教員の指導に満足しましたか？



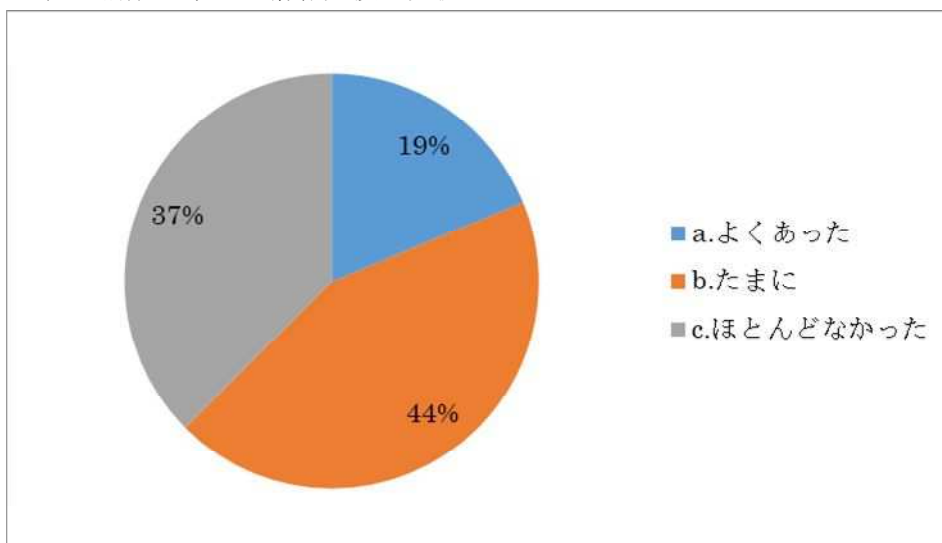
9. 中間発表はあなたの研究を進める上で効果がありましたか？



10. あなたの研究成果に満足していますか？また、得られたものがありましたか？



11. 他の構成大学とは情報交換や交流がありましたか？



アンケートの回答率は、令和2年9月修了生が100%、令和3年3月修了生が94%であり、全体では95%であった。回答率が高いことから、回答者の構成大学の割合と修了年月、日本人学生と留学生の割合は3年次在籍者の構成比とほぼ同じである。奨学金受給状況では、75%の学生が何らかの奨学金を受給しており、そのうち、国費留学生と外国政府派遣留学生の割合は25%となっている。

連合農学研究科への入学の目的は、「学位の取得のため」が60%と最も多く、次いで「研究をさらに発展させるため」が30%、「研究職に就きたいため」が10%となっている。このことから、連合農学研究科に入学する学生の目的意識は高く、学位を持った研究者になることと明確である。

連合農学研究科の講義、セミナー、専攻別講義、特論の内容や方法については、肯定的な評価が農学特別講義（一般セミナー）で85%、専攻別講義・特論で80%となっており、満足度が高いと評価できる。また、教員の指導についても肯定的な評価が95%であった。一方で学生生活については、他の大学の学生との交流や情報交換があったと回答した学生は63%にとどまった。これには、新型コロナウイルス感染症対策により対面授業の機会が減少したことが影響していると思われる。

また、中間発表会は90%の修了生が研究を進める上で有効であったと高く評価し、研究成果についても94%が肯定的な評価だった。学生満足度を今後も同水準で維持するために、令和3年度におけるFD活動の一環として反映させるようにしたい。

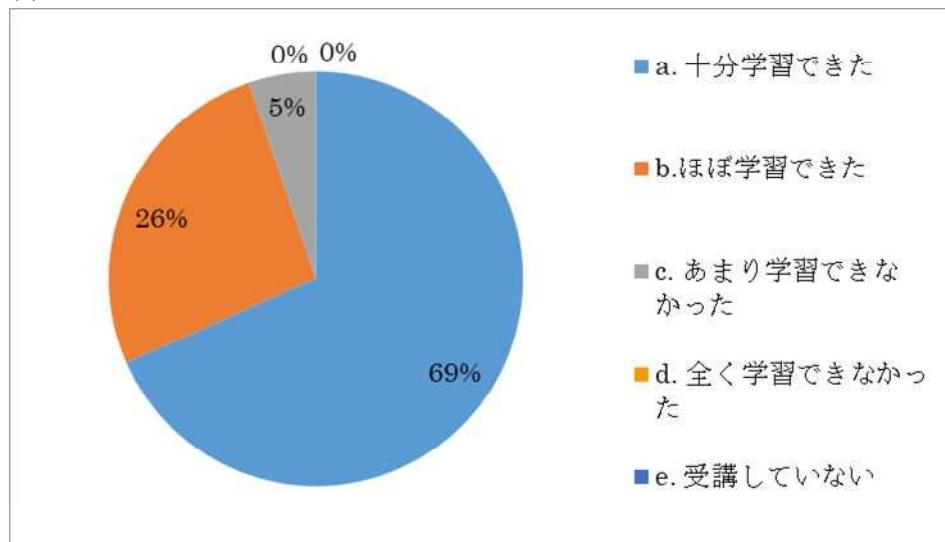
(2) 令和2年度2年生へのアンケート集計結果

対象学年（2年生）22名中、回答学生20名（回答率91%）

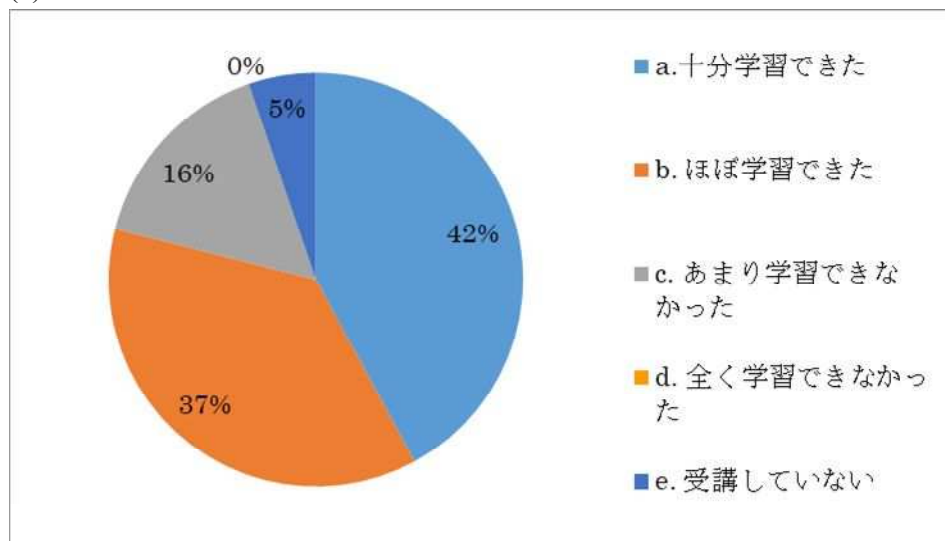
（以下アンケート項目より一部抜粋）

1.研究科共通セミナーについて、十分学習できましたか。

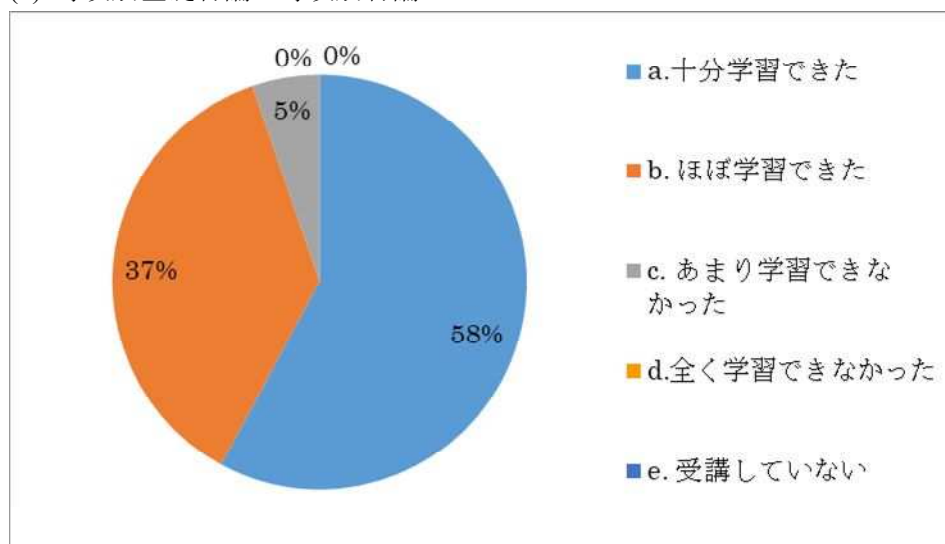
(1) 農学特別講義（一般セミナー）



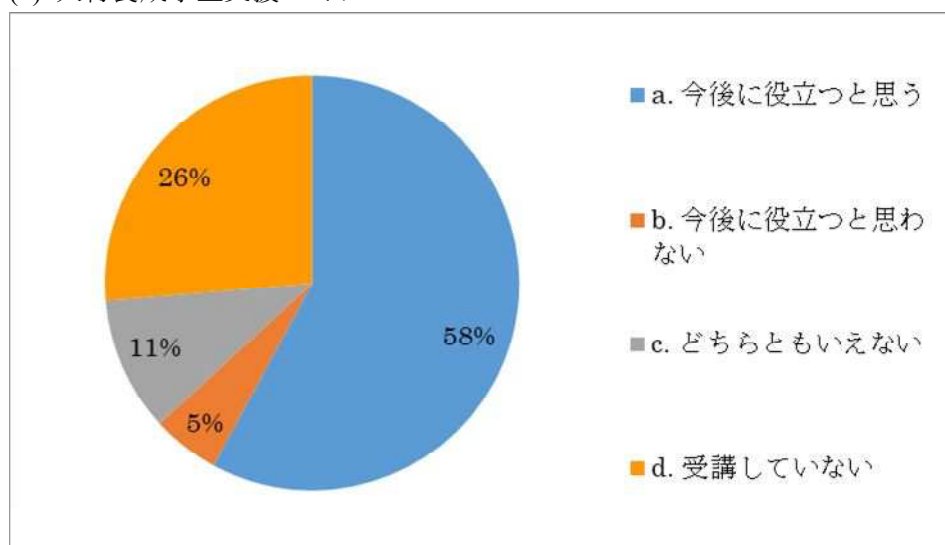
(2) 農学共通講義 I・農学共通講義 II (連合一般ゼミナール (日本語 6月・英語 11月))



(3) 専攻別基礎特論・専攻別特論

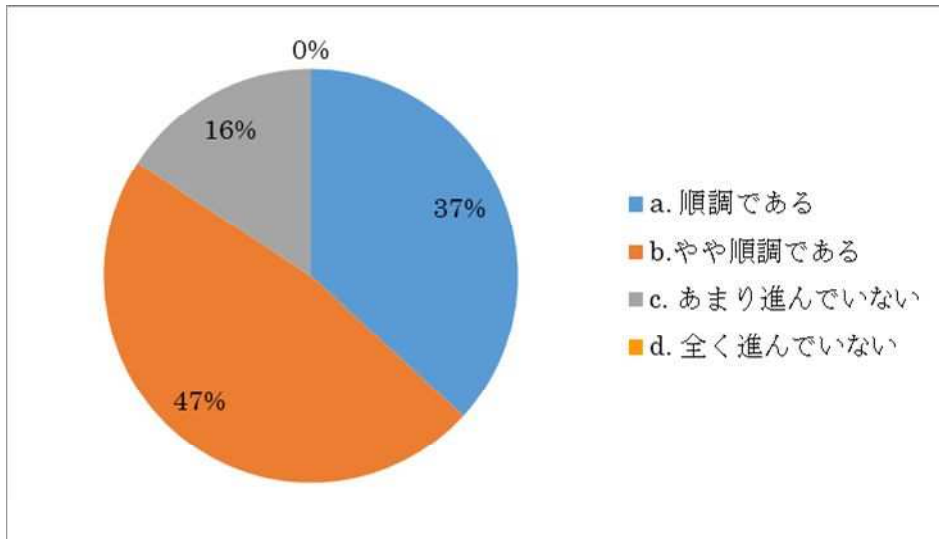


(4) 人材養成学生支援セミナー I

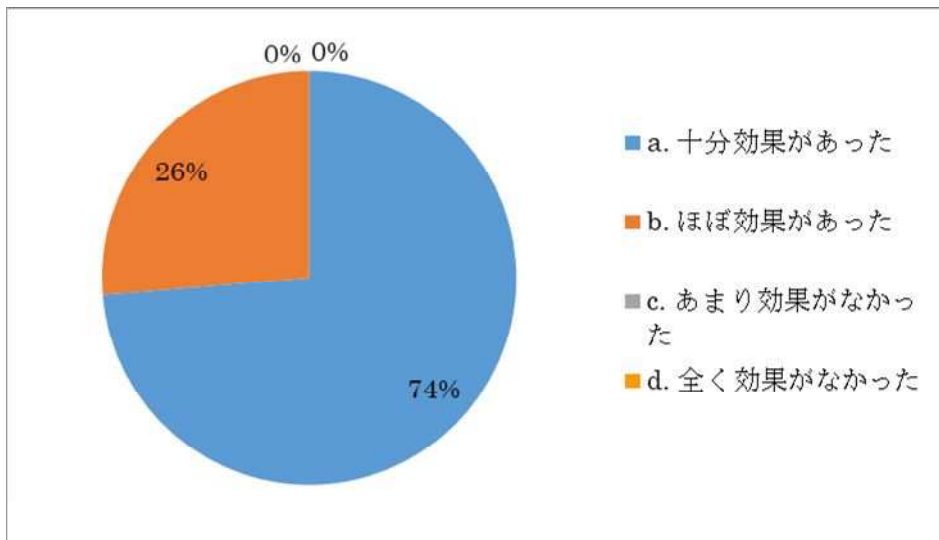


2. 研究・指導について

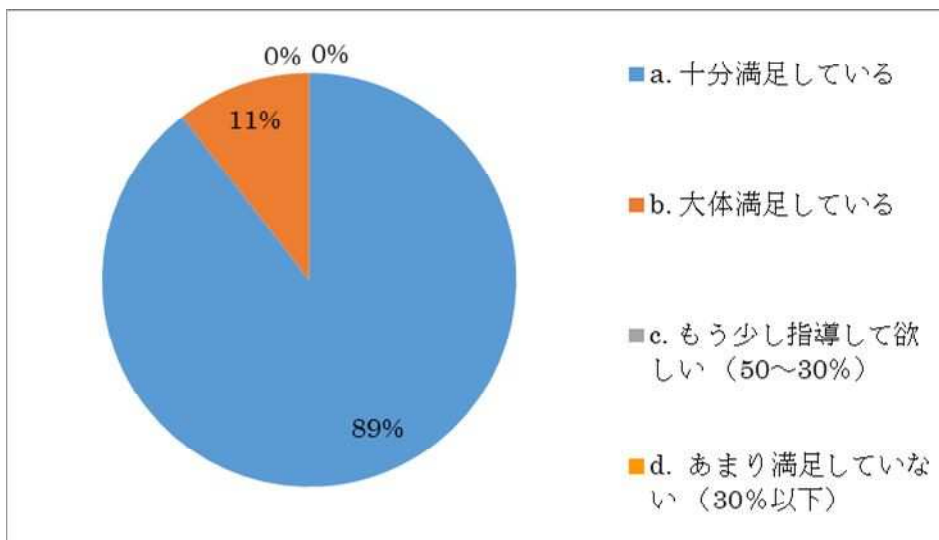
2-1. 研究の進捗状況について教えてください。



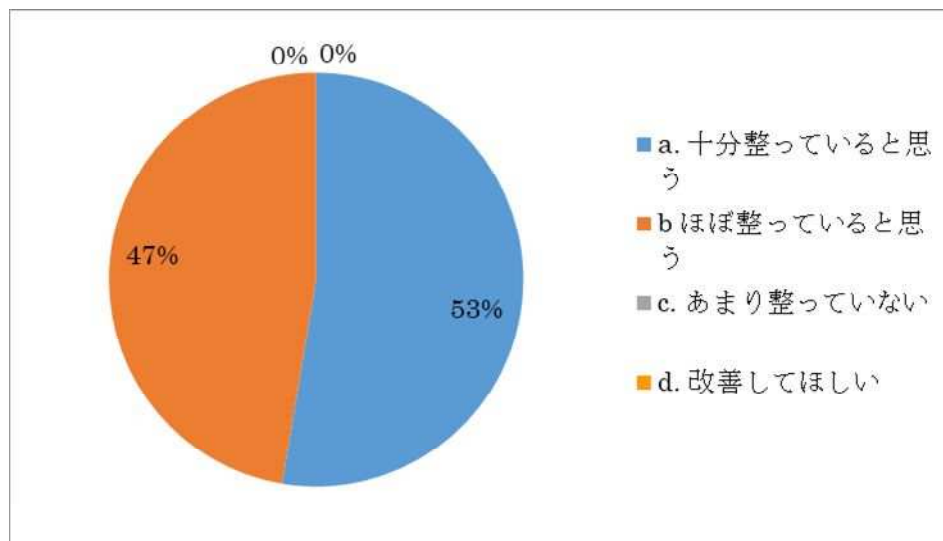
2-2. 中間報告会及び中間発表会は、あなたの研究を進める上で効果がありましたか。



2-3. 全般的に見て主指導教員及び第1副指導教員の指導に満足していますか。 (アドバイス・サポート等)



2-4. 研究設備・環境等は十分整備されていると思いますか。



在学生(2年生)へのアンケートの回答率は91%であり、修了生へのアンケートと同等の水準だった。講義やセミナーの内容については、肯定的な評価が農学特別講義(一般セミナー)で95%、農学共通講義Ⅰ・Ⅱで79%、専攻別基礎特論・専攻別特論で95%に達し、高い満足度が得られた。一方、人材養成学生支援セミナーⅠでは肯定的な評価が58%にとどまったが、受講していない学生も26%に達した。実際、同セミナーの受講者の評価は高いものの受講者数が少ないことから、開講期や周知のあり方について検討する必要があると考えられた。中間報告会及び中間発表会は、全ての修了生が研究を進める上で有効であったと高く評価した。また、すべての修了生が教員の指導に対して肯定的な評価をしており、研究の進捗状況についても肯定的な評価が84%に達した。さらに、研究設備等についてもすべての修了生が肯定的な評価をした。

今後も高い満足度を維持するために現状の見直しを行い、FD委員会を中心に改善策を検討し、FD活動の一環として反映させていきたい。これらのアンケートについては、今後も継続して実施し、年度ごとの比較も含めてデータ分析を行い、FD活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

6. ティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動

大学院生の多くは、教育研究機関に就職し、教育者となるものも多い。ティーチング・アシスタント(TA)制度は、大学院生の将来の指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施している制度である。同時に大学院学生の処遇の改善の目的もある。また、大学院生が将来指導者となり、プロジェクトを先導する機会もあるだろう。その時の経験として、リサーチ・アシスタント(RA)制度は、本研究科の構成大学が行う研究プロジェクト等に、本研究科の優れた学生を研究補助者として参画させ、研究活動の効果的推進、研究体制の充実及び若手研究者としての研究遂行能力の育成を図ることを目的としている。同時に本研究科の構成大学における学術研究の一層の推進に資する研究支援体制の充実・強化を図るだけでなく、若手研究者の養成・確保を促進するためにある。

連大においては、本年度も各構成大学でTA採用学生を対象にTA研修会を開催した。それぞれで開催された研修会で、1)鹿児島大学の教育理念とTAの心構え、2)TA業務に関わる注意事項、および3)安全衛生、等について、それぞれの代議委員から、詳細に(日本語と英語で)説明が行われた。令和2年度に連大ではティーチング・アシスタントを40名、リサーチ・アシスタントを13名採用した。例年、連大では、ティーチング・アシスタントには、アンケートシステムによる「TA活動実施報告書」を提出させている。その中で「TAは将来学生を指導する際のトレーニングとして有益でしたか?」と

いう問いに対する回答では、「とても参考になった」が60%、「まあまあ参考になった」が28%で、TA採用者の88%が「参考になった」という意見であった。

次年度においても、TAとしての心構えの徹底および技能の向上をはかり、大学院生のそれぞれの専門分野での研究の向上を目指すだけでなく、教育上の指導者としての能力向上に資するよう継続的に改善を講じていく予定である。そのため大学院生の指導教員は、より積極的に大学院生を指導・助言するように、学内周知を徹底したい。RAは、本研究科の各構成大学で実施される研究プロジェクト等の効率的推進のため、研究補助者としての役割が期待されている。RA期間は大学院生自身の研究能力を磨きながらプロジェクト運営を見ることができると言える。本研究科教員が研究代表者を務めるプロジェクト等では積極的にRAを採用し、周囲の研究科教員もRAを継続的・協調的に適切な指導を行うなど努めたい。今後も本研究科全体で、大学院生を研究者の有望な卵として、彼らの資質向上に向け、教育研究に協力して取り組み必要がある。

7. おわりに

本報告書では、農学特別講義（一般セミナー）、人材育成学生支援セミナーⅠ、分野別セミナー、修了生・在学生を対象としたアンケート、及びティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動について取りまとめた。令和2年度の農学特別講義（一般セミナー）は、当初は沖縄での開催を予定していたが、会場や対面でのプログラムがコロナウイルスの感染症対策の基準を満たすことができないことから、オンラインでの開催に変更して実施した。学生や代議委員は、各構成大学のSINET会場や所属研究室、職場、自宅等からSINETとオンライン会議システムを通じて参加し、招聘した4名の講演者の最先端の講義を英語で受講した。さらに、学会のオンライン開催を見据え、学生各自の研究のオンラインプレゼンテーションを行い、コロナ禍の時代に即したプレゼンテーション能力を向上させるとともに、多彩なバックグラウンドを持つ教員・学生との討論・意見交換を行った。初めてのオンライン開講は試行錯誤の部分も多かったが、特に大きなトラブルはなく、学生からも高い評価を得ることができた。特に、自分のPCのモニターで受講する学生にとっては、講義のスライドが会場の最前列で受講するかのごとく鮮明であり、音声も問題なく聴講することができた。このようなオンライン開講ならではの利点は、コロナ禍が収束した暁においても連大の教育システムとして積極的に活用していく部分と考える。

人材育成学生支援セミナーⅠでは、社会で幅広く活躍する学位取得者の方を招聘し、これまでの経験やフィロソフィーに関する講義を行っている。本セミナーは、学位取得後のキャリアパスの明確化の点で教育効果が高く、豊かな学識を備えた研究者や高度技術者の養成に寄与しており、民間企業も含めた幅広い職種への就職の動機づけとしても有意義である。例年は7月下旬や8月上旬に実施していたが、感染状況等を鑑みて12月に開催時期を変更し、オンライン会議システムを用いて開講した。農学一般セミナーと同様に、大きなトラブルもなく予定の内容を終了したが、学生からも高い評価を得ることができた。特に、連大で学位を取得した講演者の講義は、受講生が描く将来像と重なる部分も多く、高い共感を得た。

連大教員資格取得者研修会は平成30年度から実施しているが、令和2年度もSINETを用いて新たに資格を取得した教員に対して実施した。連大での教育に際しては、連大の研究指導体制や教育システムを十分に理解した上で実施することが求められている。研修会では、3構成大学が連合して学生の研究指導を行っていることや、主指導教員と副指導教員が密接に連絡を取りながら研究指導を行う重要性について説明し、理解を深めた。以上、連大のファカルティ・デベロップメント（FD）活動では、このようなセミナーや研修会、アンケートを通じて教員や学生の意見を吸い上げ、連大として改善できる部分については随時見直しを図っており、教育の質の向上に勤めている。今後もこのような考え方と方向性に沿って、FD活動を行っていく予定である。

令和2年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	寺田竜太	研究科長
委員	三好和睦	副研究科長
委員	大島一里	(佐賀大学)
委員	後藤正利	(佐賀大学)
委員	大田伊久雄	(琉球大学)
委員	平良英三	(琉球大学)
委員	後藤貴文	(鹿児島大学)
委員	坂上潤一	(鹿児島大学)
委員	吉川毅	(鹿児島大学)